

奇譚クラス



10
特大號

奇譚
クラス

10

定價 西四拾円



本誌躍進七十号突破記念

◆懸賞原稿募集◆

創刊七周年記念の懸賞原稿募集に際しては、多数の方々から御応募を頂き、本誌上に百花煥爛の華を競いました。本誌の躍進を祝し、再び、新人の登場を期待して、広く同好の方々からの傑作を募ります。奮って御投稿あらんことを。

賞金	規定
一席、四万円 一名	一、内容はアブノーマルな題材を扱い、本誌にふさわしいもの
二席、二万円 三名	佳作
三席、一万円 五名	本誌一カ年贈呈 十名
四席、五千円 十名	本誌半カ年贈呈 十名
	本誌三カ月贈呈 十名

- 一、創作、小説、文庫、研究、告白、体験、等形式は問わず、
- 一、枚数は二十枚より百枚迄、
- 一、必ず未発表のものたること、
- 一、締切は 九月三十日、
- 一、入選者発表は本誌十二月号誌上の予定、
- 一、銓衡は編集部演、
- 一、封筒に懸賞原稿と朱記の事、原稿の返戻御希望の方は、返券同封されたし、

曙書房編集部懸賞原稿係

●女体緊縛寫真優秀作●

各キヤビネ版 3枚1組 300円 (送料共)

中富綾子嬢 股間縛り 3態

可憐純情の乙女、中富綾子嬢の柔肌に喰い込んだ荒縄の縄目、これぞ垂涎の股しぱり。

浅野末乃嬢 さるぐつわ 3態

ニューフェイス浅野末乃嬢の豊満な姿態にかいた縄とさるぐつわ。

萩 千恵子嬢 レインコート 3態

レインコートを纏って後手に縛り上げられた美貌の萩嬢の美しい被虐の姿態。

ローソク責め 3態

責め手の厳しい手は、情容赦なく燃える蠟涙が柔肌をやく、マゾ女の苦悶の表情と被虐の美しいポーズ。

萩 千恵子嬢 海老責め 3態

ヤセ型の柔軟な姿態の千恵子嬢を二つ折りに曲げたエビ責めのポーズ、二本の足だけが宙に躍っている。

萩 千恵子嬢 腰巻 3態

腰巻マニアの方々是非この3態を味つて下さい、屈曲の多い優美な純日本的なポーズを取り揃えました。

縄帯縛りの特選

アメリカ某社の注文によりそのアイデアを活かしたエキゾチックな緊縛のポーズ清新と奇抜を兼ね備えた野心作。

後手高手小手 2面体

伊吹真佐子嬢 大鏡を利用して、高手小手の緊縛と胸にかいた縄目とを同時に一枚の画面におさめたフォトマニア待望の珍品。

萩 千恵子嬢 猪吊り 3態

両手と両足を一つに括つて吊り上げた猪吊り、こうして吊られていると、だんだんマゾ的な気持ちになつてくるわ、という萩千恵子嬢。

萩 千恵子嬢 縄帯 3態

白い肌にまといつく縄帯の白さは妖しい倒錯美をかもし出している。縄帯による緊縛感と姿態美。

☐新作 マゾ・フォト ☐

春日ルミ嬢・構成

各キヤビネ版 三枚一組 三百円

足舐 3態

A、椅子に腰掛けたルミ嬢が男の口へ足を入れてる

足蹴 3態

A、ハイヒールで頭を蹴られているところ

愛辱 3態

B、男が足を保持して舐めようとしている

人間椅子 3態

A、胸の上へ灰皿を置いて女王様の休息の椅子となつている

犬の折檻 3態

A、芸を仕込まれてるワン公

人間馬 3態

A、乗馬ズボンに乗馬靴の女王を背に拍車をかけられるところ

（首環とくさり仕）

C、さア、歩くのヨ

B、腰を加えられる C、馬を走らせる



釣り竿



椅子



ハンカチ



イタコ人形

繪り縛り
集
飛良二
案並画



三輪車



イタコ人形



イタコ人形



お風呂敷

お風呂敷



お風呂敷



ヒヨコ馬車



乳車



乳車



乳車



椅子

【十月の責絵】 菊人形今昔の責場 菊人形の女の責場は明治三十年頃の植惣にあった
 都新聞の連載小説「大和撫子」（渡辺黙禅作）の娘お雪の責場と植梅（現在の食堂今晚軒）にあ
 った尾上梅幸の皿屋敷のお菊、国技館では雪月花二段返しの内、浦里の責場であった。
 現在菊人形製作の名人とされて居るのは台東区谷中初音町首振り坂の面六号、田口俊秀氏で此人
 の作品は昨年国技館のお化大会にも井戸から縛られたお菊を出入させて斯道の好事家を喜ばせて
 居た。
 〔伊 藤 晴 雨〕





夏子さん、ぼくは、ぼくは……………



—あたし、春雄さん、きらいよ—



—坊ちゃん、どうしました？—



これは一肌ぬがずぼなるまい



秋彦さんのお使いです、どうぞ





では、これ程頼んでも



脅迫して私の気持が変わると思うの？





The End





縛り終つてルミ嬢が具合を見ているところ。

「一度私に縛らせてもらいなさい。変わった縛り方をしてみせるから」といって縛り上げた。

ルミ嬢得意の後手首縄。



ルミ嬢愛用のレースのふちをとったハンカチーフを真佐子嬢の口へ詰めているところ。

猿ぐつわ遊戯

辻村 隆

ルミ嬢は首へかけていた真新しいタオルをとると、真佐子嬢の口へ手早くかまして、ぐいと引きしぼった。

春日ルミ嬢

伊吹真佐子嬢



猿ぐつわをされた真佐子嬢がお姉さまに甘えて抱かれているところ



変形後手縛り

アメリカ雑誌のボニイの後手の縛り方からヒントを得て、こんな変った後手を写真にしてみた。二の腕の縄が手首の方へずってこない工夫をした

ら、案外実用的な面白い縛り方になるのではないか。



◎ 組 写 真 ◎ 水 際 散 花

— 浜 寺 海 水 浴 場、羽 衣 海 岸 に て —

.....モ デ ル.....萩 千 恵 子 嬢.....





——構成・辻村 隆——

薄陽が雲間を洩れる絶好の撮影日和、冷夏とはいえ、日曜日で海岸は相当な人出である。萩嬢と事前の打合せでは、群集の中でもかまわないということであったが、いざ現地へ来てみると、やはり初めの中は人目のないところを選んでほしいという注文なので、海水浴場のはずれに恰好のよい松の老木が二本、並んでいる羽衣海岸を選ぶ。

ブラジャーにパンツ、それに猿ぐつわ迄揃いのものを特に萩嬢に準備

して貰っておいた。紐は黒ビニールを編んだものと、白の絹紐の二種を用いて、堤防の芝生から初まり、海浜、水際、岩間、と順次、奥へ進む、最初のうちはどこからともなく集ってくる彌次馬の見物で萩嬢が恥しがって、一時中止、流石に見物もカメラの中へ入るのを恐れて近寄

って来ないので、萩嬢をケープの下で厳重に縛り上げておいて、水際へ投げこぼす。波をかぶって頭を上げたところを狙う。その中萩嬢も次第に慣れてきて、見物人が集ってきてても、悠々とポーズをとるようになった。こゝに掲載したのは、水際での極く一部である。



女王様の日課

洗面

女王様の洗面が終わるまで、背中に置いたコップの水をとぼしてはならない。若し少しでも水をとぼしたり等したら苛酷なお仕置が待っている。

朝の挨拶

ベッドに腰かけて朝の洋服を吸っている女王様に対しての朝の挨拶は、先ずそのおみ足を頂いて、僕としての誓いのキッスをすることである。





沓脱台

女王様のお出かけまで忠実な沓脱台はハイヒールを守っている。

足 台

配達された手紙を読み終ってしまうまで女王様の足台とな
って、おみ足を休まさせねばならない。

女王様……春日ルミ嬢

忠実な僕……小沼正三





犬の訓練

女王様の従順な飼犬として永遠に手落なく奉仕することが出来るようになるための躰が行われる。訓練の間中、首には首環がはめられている。



縄を用いな
い責め遊戯

お姉さまにならいじめられてもいい

さんくと降りそぐ真夏の太陽を真上から受けて、健康
美にあふれる肉体を相搏たしてくりひろげる青春の饗宴

春日ルミ嬢

伊吹真佐子嬢



怪異図

はぎのつゆ

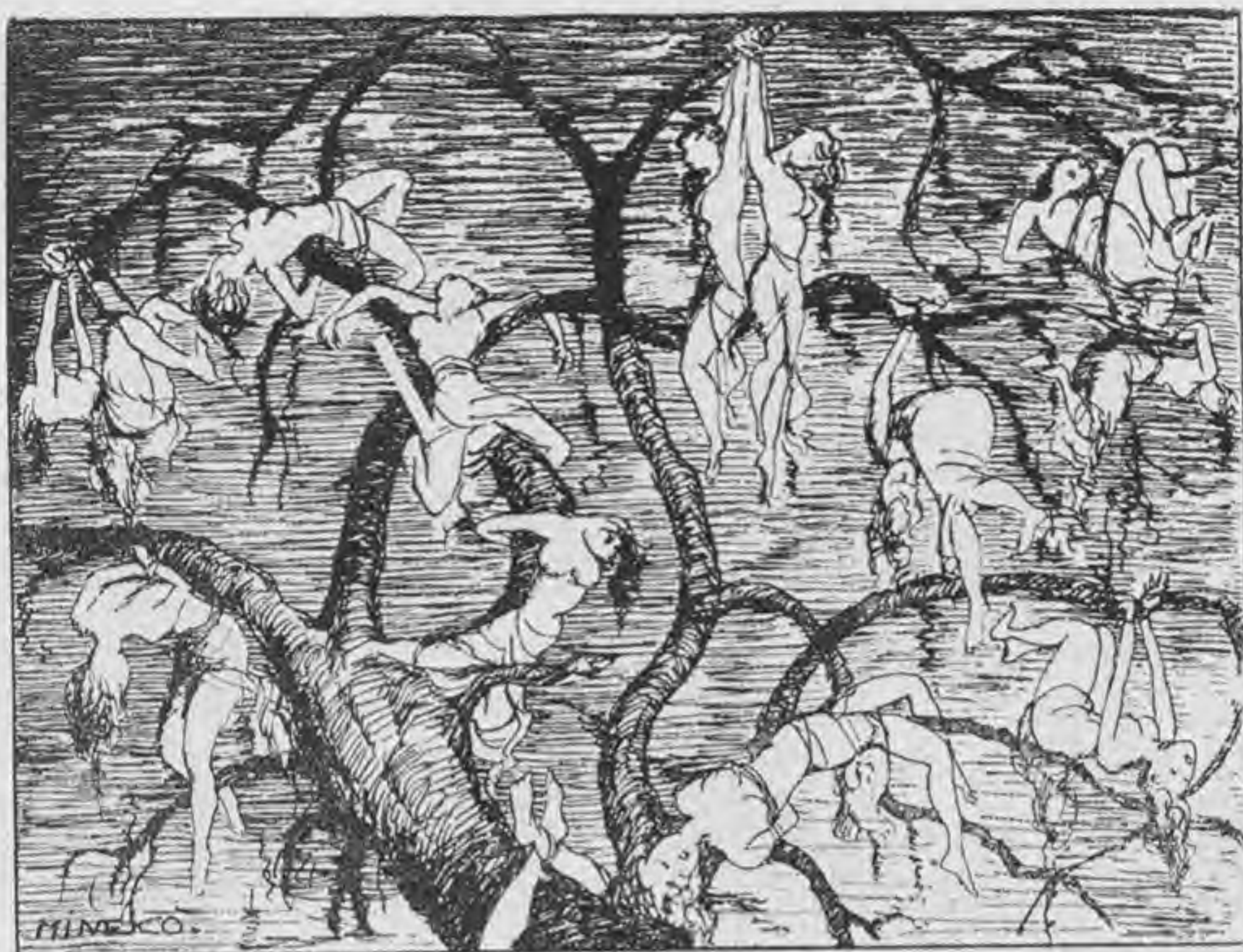


浮世繪の

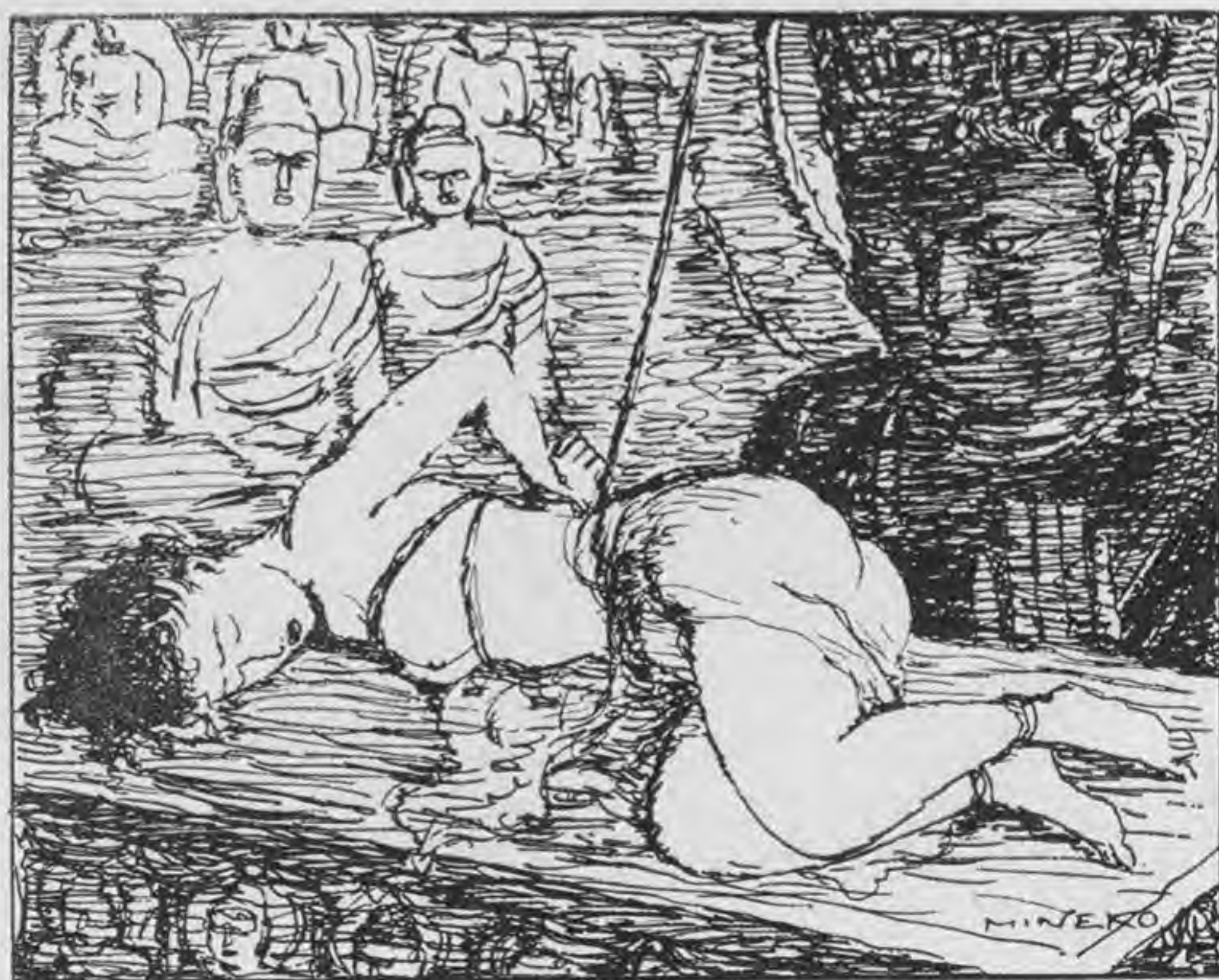
幻想



△吊るし柿▽



△お彼岸▽



(都築峰子画)

〔記念撮影〕

庭に持ち出した椅子に新妻を縛りつけて、奇妙な記念撮影が今、行われようとしている。



瀧麗子・画

……新妻遊戯秋姿……



畔亭

今月は特別号、いつも裸で縛られている麻理っぺに、たまに一べん位着物をきせてやろう。着せついでに髪も結ってやろう。いっそ可愛い舞妓はんには立てゝやろうという親心？がこの絵となった。さつこ醬や割しのぶ、花かんざしにだらりの袴麻理公喜ぶこと限りなし。
「今晚は、おゝきに。」と大はしやぎです。



久数 畔亭

文並画

戯文戯画

舞妓



かいう人やて。ふうん
好かん人やな。まあま
あ、べべがくちやくち
ややがな。かなんわ。
うちやったら泣きまっ
せ。
花見小路あたりから
こんな声が聞えそう。
祇園の舞妓はんやみ
な、きつきつ、かんに
んどっせ。



畔亭



『貴女がこのような哀れな姿にならない為に
自分を守る技術である柔道を習いましょう』

暴力への注意！





お喋り嬢への箝口具



新しい型の婦人靴

責め写真のアルバム (一)

得意のポーズ



厚狭春江嬢





責め写真のアルバム (二)

得意なポーズ



村田那美子嬢

責め写真のアルバム (三)

得意なポーズ

中富綾子嬢



川端多奈子嬢



責め写真のアルバム (四)

得意なポーズ



鞭ムチと縄ナワの幻想



杉原虹児・画

悪

夢

杉原虹児・画



絵物語「悪夢」の一場面より（二〇〇頁参照）

山頂

遙か山並を眺めて健康美を誇る若人が爽快な山の空気を身体いっぱいに浴びている



或る被虐マニアのポーズ



両手と両足首を縛って火鉢をぶら下げて放置しておくといふ流石のマニア氏も音を挙げてしまった。拷問でも仕置でもない、合意によるマニアプレイのワンカットである。



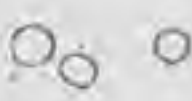
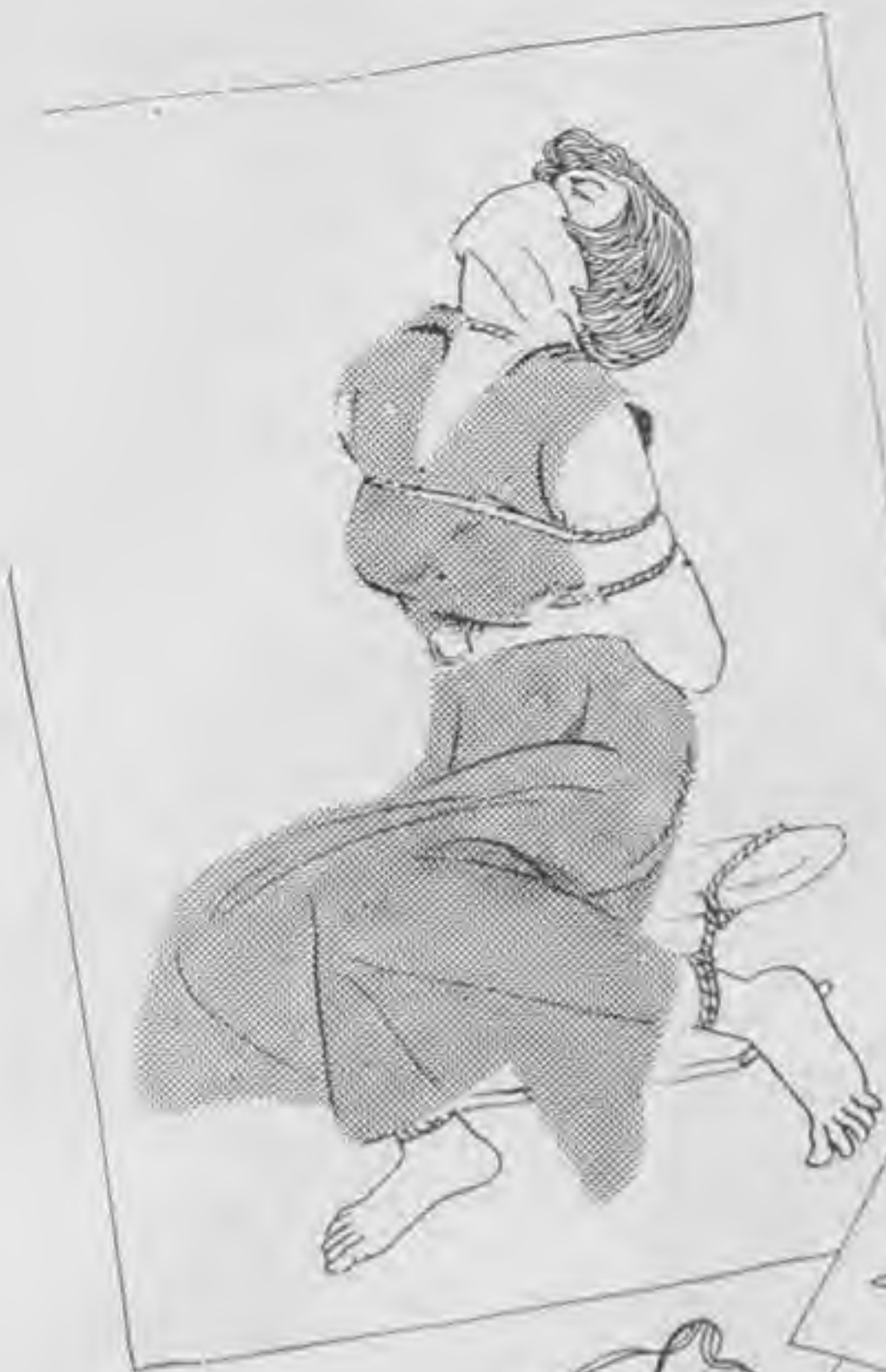
浴 後

川端多奈子嬢

浴後、浴衣で涼んでいる多奈子嬢を一寸失礼してくさりをもとって貰ったところ、可憐な彼女の表情がにんまりとよく出ている。



女性専門のお灸室





れい子縛り方教室

本月は少し変わったところで、写真をもとにして、同一のポーズに異ったコスチューム（着衣）で変った表現を試みてみました。次号には、又、写真をもとにした奇抜な趣向を考えております。（たき、れい子）





女性切腹画二題

朝和仁古画

○アパートの二階の一室、バスタオルを畳の上に敷き、パンティーの姿で短刀を左腹へ突き立て引き廻しながら、左手ではみ出した腸を掴んでいる凄愴な場面の甘美な幻想化



切腹擬態写真（短刀の切尖を突き立てたところ）

○ズロースを押し下げて、臍下を真一文字に切りひらいたところ、まだ腸は出てないが、血汐が切創の附近並に左掌に飛び散っている。原画では白肌に血の虹が美しいコントラストを示している。

◎フエチシストのページ◎

(初めてこんなページを設けました。御進言をお待ちします)

はにかみ

(腰巻を持つ女)



美しい足と手と



足をふく



圧 倒 と 屈 伏

春日ルミ嬢得意のポーズ

文化人の文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

1954年 10月号

(第八卷 第十号 通刊第七十三号)

——特別増大号——



藤 人 間

二 俣 志 津 子

(とうにんげん)

さあ？ 何と申し上げたら宜しいのでしょうか……。それは、お金の欲しいことは、今でも變りがありませんけれども、最早やそればかりとは、申せなくなったようでございます。あの方——二俣志津子様は、どこへいらっしやったか、私にはとんと見当が付きませんけれども、夜になったら帰っていらっしやるでしょう。そして、あの



Shim

方と私の異様な生活、と申しては変でしょうネ。私としましては、お金を得るために、この肉体を売った仕事でもあり、あの方には申せませんけれども、私自身のよるこびの時間でもありますの……けれど。あの方は一体、どう云うおつもりなのでございましょう。あの懶そうな、タイハイ的な容貌になり、たゞ、あの美しい眼だけが何とも云えないキラメキ——冷静とパツシヨンの交叉する変化に富んだ、恐ろしいと申せば恐ろしい、ふるいつきたいような表情になるのでございます。奇抜な責めの型や、アイデアは、きっとあの眼から生み出されるにちがひございません。

え？。あの方にお会いしたい？。あなたが？。それは無理と申すものでございます。第一に、この私すらあの方の正体をはっきり存じあげておりません。えゝえゝ、勿論、女の方です。それは、お風呂にも御一緒に入っております、いゝお身体をなさっていられるのも、この目で拝見いたしました。はあ、それでいて、あの方の正体がわからないのでございます。若しあなたがあの方に接してごらんなさいまし、あなたの身体のすべてを知りつくした夫のように、あなたを歓喜の絶頂へ連れて行って下さるでしょう。私は、幾度も、あの方を男の方ではないかしら？と、疑ったものでございます。それでふと、あの量感ボリュームのある乳房にもふれてみました。いゝえ、たしかに女の方です。それでいて男の方のテクニツクのすべてを心得ていて、男の方そのまゝに、私が失神するほど宇頂天になさるのでございます。

私も男の方を知らないではございません。幾度か、無理強いにも或る時には私からすゝんで、幾人かの男の方とも、オホゝゝ、それから先は云わせないで下さいませ。

あの方とは、赤ちやんが生れない、と云う気安さから、一つのコンプレックスは除かれましたものゝ、今では、ひよっと、妊娠するのではないか、と云う錯覚と、あの方の赤ちやんがほしい、などゝと云う切望さえ湧いてくるのでございます。そしてあの方のためなら、よしこの身が減びてもよい、とさえ思う此の頃でございませう。

いゝえ、毎夜ではございません。他にも私と同じように参る方もおられるようでございますけれども、どなたともお会いしておりません。ただ一度だけ、男の方と籐に編んで組合されて写真を撮られたことがございますけれども、その時は、全身が真赤に染るほどに恥かしゆうございました。これもあの方の望みなら、と、こらえることはこらえました。どんな責めに会うよりもつらうございませう。いゝえ、肉体的なつらさではございません。

私は、あの方をお慕い申して居るのでございます。あの方のことでしたら、いくら語っても語りあきることはありませんけれども、順序としまして私の生い立ちから申し上げます。それでその前に私のお話上げたことは、お書きになっても宜しゆうございますけれども、私をはじめ、お話の中の人々はみな現在生きて居りそれぞれの暮しをたてゝいますので、名前と場所は伏せておいていただきます。

二

私は、どここの土地から来たのかわかりません。それほど私は、幼くもありました。母が、お父様のところへ行くのよ、と、申して、私の手を引いて夜の街へ出て行きました。それもどこから出て行ったのか、よくは覚えておりませんが、今から考えますと、下宿

屋のようでもあり、安ホテルのようでもあったようです。或いはアパートであったかもしれせん。私は、いつもそこでひとりでおりました。夕暮になると電燈をつけることも出来ず、一日中敷かれてあるふとんの中に入って、しくしく泣きながら寝入ってしまうのでございますが、大変おなが空いている日も、少くありませんでした。せまい部屋には喰べる物が何も見当らないのでございます。時には見知らぬおばさんやおじさん達がパン等を持ってきて下さる事もありました。そんな時は、余計に母が居ないと云うことが悲しゅうございました。

母が毎夜どこに行っているか、幼い私に知る由もございません。また他人に何と云われようとも、淫売の意味どころか、その言葉そのものがわからないのでございます。時には朝起きてみると、見知らぬ男が母と一緒に寝ていることがございました。私はどんなにその男に対して嫉妬したことでしょう。その男から母を引離したく思ったことでしよう。しかし、それははばかりしたのでございます。何というわけは存じませんが、何となく、母と男を目ざますことさえ、はばかりしたのでございます。それで、私は、母や男が起きて身仕度をするまで寝たふりをしておったものです。男はいつもちがっておりました。夏などは、それは、母も男も本当にあられもない姿で寝ておりますことが多うございました。

母がひとりの折りは、母は優しく私を抱き寄せ、泣いてばかり居るのでございます。空寝の私の目からも涙があふれ出てまいりますと、母は私の眼に唇をあてゝ涙を吸いといったものでございます。そんな時には、母の涙が私の顔を濡らすのでございます。私は、どんなに母を哀れに思ったことでございましょう。そして、私から母を

奪う男達が、時には母をさいなむことがありますと（そんな時が多うございましたが）私も母と共に抱き合って泣いたものでございします。

悪夢のような日々でございました。悪夢のような光景でございました。私は今でもその頃のことはっきりと覚えております。

母は突然、お父様のところへ行くのと、申しまして、その部屋を出ました。そしてそれきり、再びその部屋には戻りませんでした。夜の街は賑かでの店先も、あかあかと輝いているようでした。果実店の店頭のパナナの色が鮮かで、私はそれを母にせがんだようでございます。母はそれを買いました。食堂に入り、井をとり寄せ、井のふたに御飯を分けて私に与えた母の姿は、私の小さな心をもしめつけました。ひどくつかれている様子で、今にも倒れそうに見えたのです。そして私は直感的に、まだ見たこともないお父様は、きっと恐ろしい人にちがいない、と、思いました。そして、その思いが全く正しい考えだと、次第に信じるようになり、食堂を出る頃には、歩くのさえ大儀になり、おもちゃの店で立止まったり、本屋の前で動かなくなったりして、母をさんざん手古ずらしたものでございます。

お父様は恐い。と誰に教えられたわけではございませんけれども私の心は全く頑なになり、目的が近づくにしたがって、顔さえこわばって参りました。母も、何となく私の心を察したらしく、いろ／＼となだめすかし、お父様は優しい良い人だと幾度も申しました。が、私はそのことに関してだけは、母の言葉に真実の響がないと直感し、背きはするものゝ信じようとは致しませんでした。

露地から露地へ抜け、川風の吹き抜けている小径を通り、足も、

股のつけ根もしびれるほどにつかれきった頃、やっと軒並の低い家のたち並ぶ街にたどりつきました。

母は、お風呂屋の前の、もう幕を下してしまつた小さな理髪店の戸をおず／＼と叩きました。すると人影が電燈を点け、誰もせず恰も待ち構えていたかのように戸を開けました。私はこの時、物覚えるようになって初めて理髪店と云うところに入ったのでございます。大きな鏡が幾つもある不思議な家だと思いました。何となくいかめしそうな椅子に這い上って鏡をのぞき込みたい衝動をおさえ、母の袂のかげから、出迎えた男を、そつと眺めました。眉の太い、口の大きい、眼に邪惡の光りがちらちらとする、それでいてどこことなく柔らかな表情をたえず取繕っているような男でございました。

母と私はすぐに奥の間に案内されました。酒と食事がさゝやかながらととのえられ、今思うとそれが母とこの男、大西力との結婚式のすべてでありました。男は鯨のようにお酒を飲むのでございます。お酒は少しも淀まずに、その男の咽喉を流れ込みました。私はこの時初めて、母が日本髪を結って新しい着物を着ているのに気がついたのでございます。

祝宴は終わりました。

間もなく私は、この部屋にひとりで寝かされ、不安な心をおさえながら、いつの間にか深い眠りに入っていました。

その翌日から私は床屋の佐登ちやん。と、呼ばれるようになり、近所の子供達とすぐに馴れ、仲よく遊ぶようになりました。

が、私はその大西力を、どうしても父とは呼べませんでした。母と大西とは、私に留守をさせては、よく夜になるとどこかへ出掛けるようになりました。

私は、そのような夜、近所の子供を店に呼び集め、そして、いろいろな遊びをするのでございます。お医者ごっこが一番よくされたようでございます。お医者は男の子でございます。女の子が椅子に腰掛け、男の子がその前にまわって、見るのでございます。その男はよくお医者のおまねを知つて居りまして、それを／＼けんしん／＼と、呼び、誰もいない、さびしい家にとりのこされた私は、そんなひと／＼きを、心から楽しく遊びまわる友達と交って遊んだものでございました。

三

私が小学校へ上る頃、母は子宮を取去ってしまいました。どう云う理由だか、私には知る由もございません。お腹を切つたのです。あの張りのある、なめらかな皮膚を、切つたのでございます。子供心にも私は心をいためました。

母はながく入院致しておりましたが、家へ帰ってきてからも相当ながく寝ておりました。大西は、その母に大変やさしく致しておりましたが、母はいつまでたっても元氣になりませんでした。それがもとだったのでしようか、大西は、その頃から次第に夜、家を空けるようになりました。

私は六年生になった時、人並より柄の大きい私は、店に出て、バリカンを持ち手伝うようになりました。根が器用だったのか、この仕事をすぐに覚え、大西も母も驚くほどでした。その大西が近頃では殆んど仕事もせず、夜になると家をあけるのが一層に激しくなり、たえず母といざこざがたえず毎日のようにけんかをして居りましたが、或夜、大西はとうとう家を出たまゝ帰らなくなりました。その日は、久しぶりに母と私は連れ立って芝居を見に行ったのでご

ざいます。その間の出来事で、その後、大西の消息を八方手をつくして調べましたが、杳としてわかりませんでした。

母は、そうした父を始めは大へんに憎んではいましたが、日がたつにつれ、涙を流して悲しんでいました。いつ迄も店を閉めておくわけに参りませんので、その中、母は若い職人を一人入れました。その職人は通いでございましたが、それは表面上のことで殆んど泊つて参るのでございます。

しかし、それはながくつづきませんでした。何故なら、その職人が不慮の死を遂げたからでございます。彼は、近くの川へ泳ぎに行つて溺死しておりました。発見がおそくて、川口近くの橋桁に引つかうっているのを引き揚げたときは、もう手の施しようもなかったそうでございます。

それで仕方なくまた、母は新らしい職人を、今度は住込みで雇い入れました。その新らしい職人は、なよなよした色白の優男で、母の眼を盗んでは、私の袖を引くのでございます。しかし、まだ国民学校に通っている私の袖を引いて、一体どうなると云うのでございましょう。

三十分と母の目を盗めることが出来ると思つていたのでしようか。お風呂へ行くふりをしてくとも囁きました。

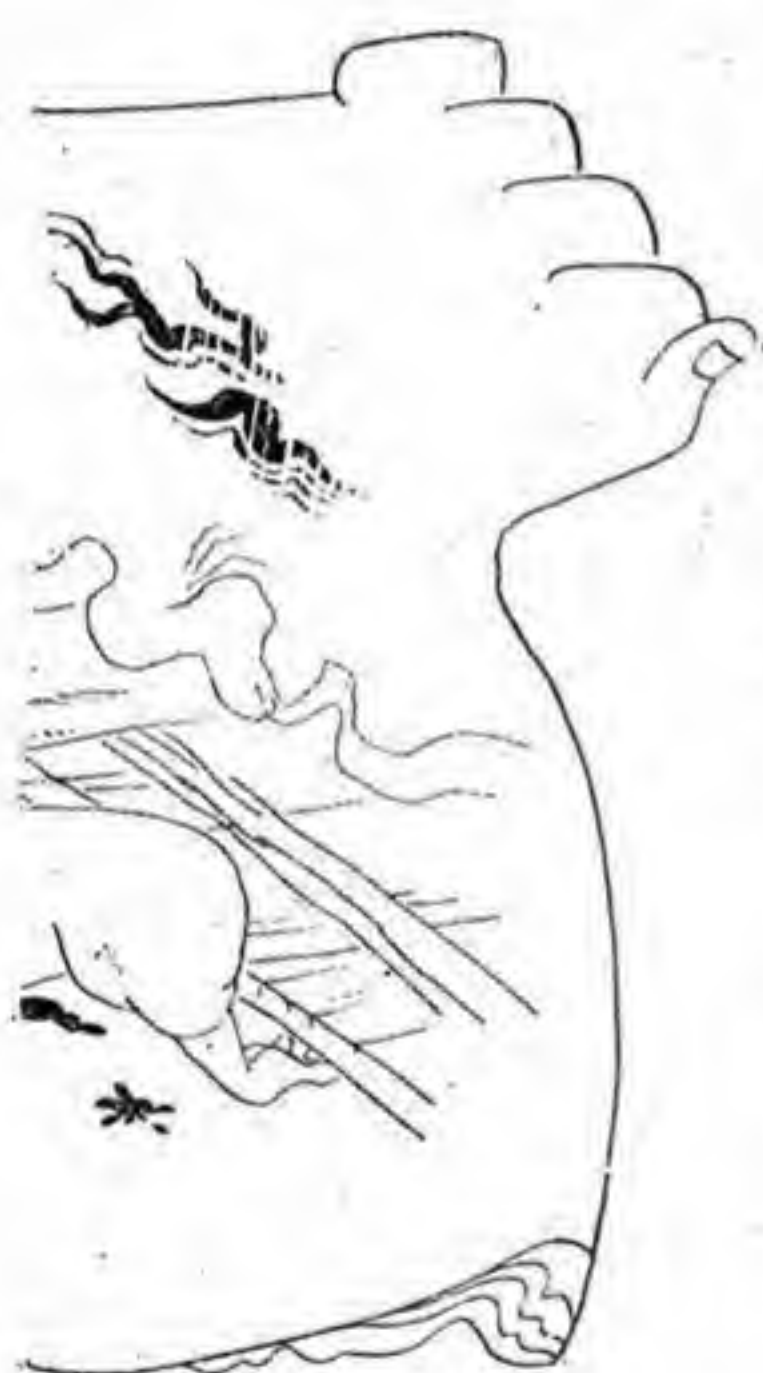
それから間もなく、その職人は店の金を盗んで逃げてしまいました。剃刀一丁を懷に渡り歩く、渡り職人の事ですから、丸々盗られ損になつ

てしまいました。職人がいなくなったので店を閉めなければならなくなり、私達母子はあてもなくこの土地を去りました。

四

私達母娘は、浜松市へやつと落付きました。母は子宮の手術をして以来、もうすっかり身体のおとろえを見せておりました。それに肉体を売つての、夜の時間を刻んでの人生は、年の減びようも早ようでございます。そのほかにこれと云つた生活手段もない私達は、借金も次第に費い果して日に日に困つて参りました。母は私に自分と同じ道をたどらせたくない。と、溜息まじりに申すのでございますが、これから先どうして生きていけば宜しいのでしよう。

母は、どんなに貧しくても、まともな生活をしたいと一生懸命、職を探しましたので、その希望がかなえられまして、通いで旅館の女中に勤めることが出来ました。母と私はお互いに励まし合い、今度こそは、まともな生き方で、母娘が平和にくらすことが出来るよう、その話ばかりするのでございました。



戦争が始まりました。そして、戦

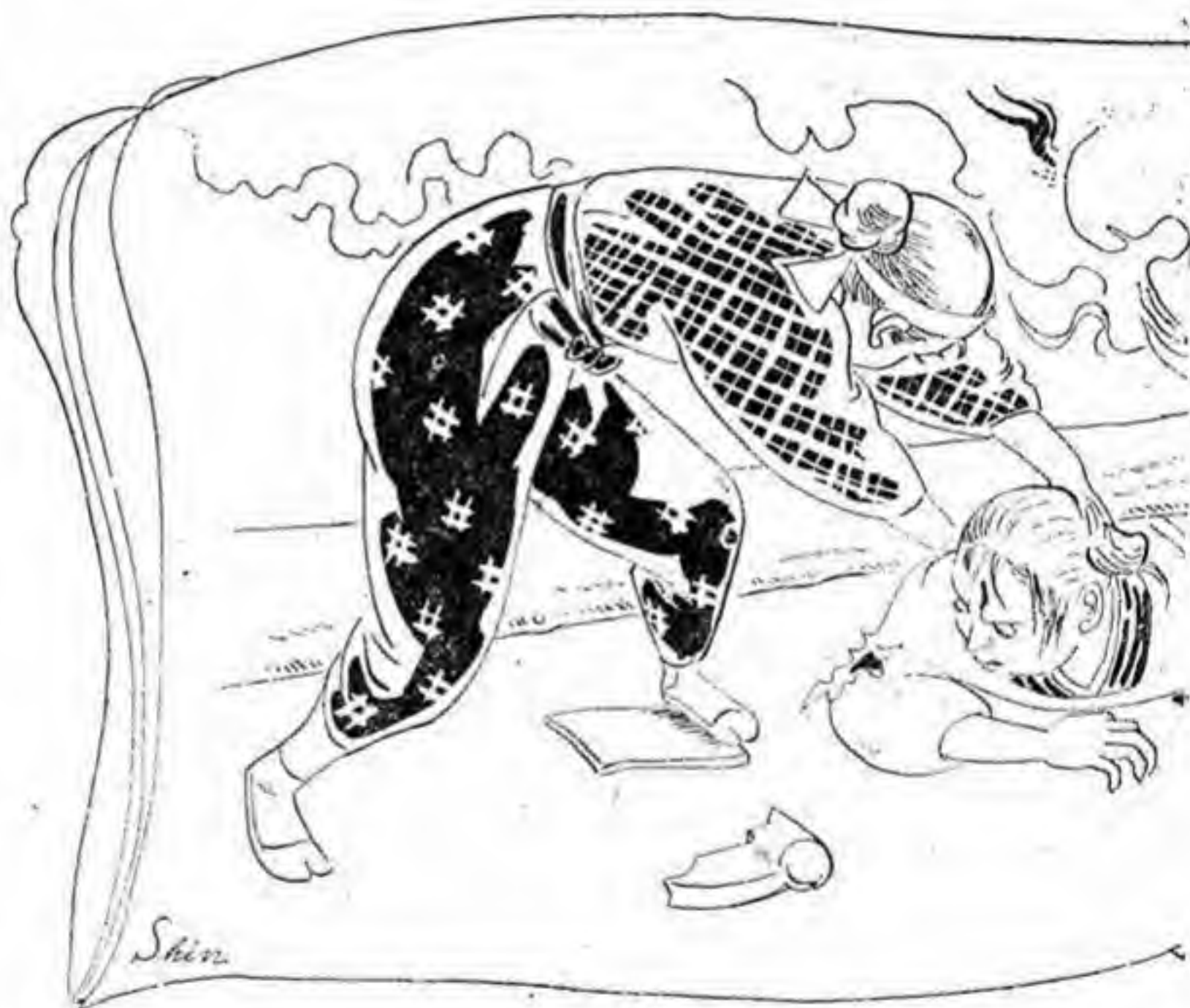
争は次第に拡大し、激しさを加え、とうとう恐ろしい世界大戦になってしまいました。学校を卒業した私は主に落下傘を作るために企業整備された紡績工場へ徴用されました。この期間が私と母の、生甲斐のあるまともな、汚濁の人生のうちに、清水が湧いているような唯一の期間でし

た。

戦争は日に日に敗色が濃くなり、そのうちに、あの恐ろしい艦砲射撃をうけたのでございます。真暗な空にぽっかりと火の玉が浮ぶと、つゞいて砲音と海鳴りがし、火の玉はぐんぐん大きくなって、私達をめぐって迫ってくるのです。私はデパートが吹き飛ばされるのを見ました。お菓子で作った建物を蹴ったように、わけもなく崩れて行くのでした。

勿論、私達は避難しておりました。

が、私は母のことが気になって、仲間の人達のところから抜け出し、火の海の街へ駆け出しました。仲間の人達は、驚いて、私を引止めようとしていましたが、いきり立っている私は、その親切な人達の手を振りきって火の海の中へ走り出していました。母のいる旅館をめざして必死にかけつけましたが、すでにその時は、母の勤めて居る旅館は殆んど燃え尽しておりました。母は家具を引出そうと、二、三の人々と立彷徨っている所へ、焼けた材木が落ちてきて、この時母は失明したのです。煙に巻き込まれて倒れた母を抱えて、私は夢中になって山手へ逃げました。



呪あれ！ おゝ、おゝ、呪あれ！

戦争を行う者に呪あれ！

戦後のインフレーションの渦中に、女の身でめしいた母を抱えて、一体私はどうして生きていたら宜しいのでしょうか。

私は盗みなぞ致しません。

他人を悪様に申したことも一度もありません。私は何一つ悪と名付けられることをした覚えはございません。母と自分が生きていたために、自分の身を売ることは、やましいことでしょうか。お教え下さい。私は盗んだ身を売るのではございません。我れと我が身を売るのでございます。私は、私達は、生きたいのでございます。

あら、あなた、もうお帰りになるのでございますか。間もなく志津子様もお帰りになります。私のつまらないお話に、おあきになったのでしやうね？ ごめんなさいね。私はまだ、織姫になってからの興味あるお話を少しもしておりません。何なら、そこをとばして、志津子様とお会いしてからのお話致しましょう。戦後、路傍にさまよっていた私達母娘を甘言で欺して強引に父親の坐についた因業な男に売られて織姫になってからのことは、いずれ機会がありました

からお話しましょう。デカメロンそのけのお話がいくらでもありますけれど……あなたは、志津子様のことがお知りになりたいのでしたね？　しかし、私が志津子様のことをお話ししても、決して書き記しませんよう。ましてや、雑誌などに発表などしませんよう。このことをかたくお約束して下さいますならば、あの方のどんなことでもお話致しますよう。あの方の、股のつけねに、目のつかないくらしいの小っちゃな可愛らしいホクロのあることを、知っているのは私だけですし……どうも、あなたは、私とのお約束を守れないらしいですね？

五

私は、僅かな前借で縛られている浜松市S町の織屋を飛び出しました。F町であんまをしているめしいた母のことも心にかゝりましたし、昼も夜も仿かされて、お給料はあまりにも少のうございました。何としてもお金を溜めて、母とつゝましい生活を致したい、そして、あの業つくな父親という名に値いしない男の絆から逃げ出したいと、お給料を、もう少し上げて下さるよう主人に願いますとすぐに肉体を要求するのでございます。そして、弄ばれて、結局はお給料は上がらないのでございます。そのほか、仲間の織姫達で、身を汚されない人は一人も居りません。といつても、決して過言ではないのでございます。戦後、民主主義の世の中になりましたも、東北から売られてくる娘さんが多うございますが、その人達の悲惨さはいくら書いても書きつくせません。

お休みはいつあるのでしよう！　外出はいつ出来るのでしよう！　そして、面会時間さえ制限されるのでございます。

私は、給料日の少し前の日から、身の廻り品を目だたないように整理しはじめました。私は、逃亡を決心したのでした。勿論同僚達にさえ、気振りにも見せませんでした。映画や物語りで脱走の場面がよくあります。それはロマンチックで、スリルに豊んでいて甘い恋物語があります。いや、恋人がなくなると仲間が必ずあります。サルトルの「奇妙な友情」の中の、ドイツのラーゲルを脱走する時も幾らかの協力者と、仲間がおります。が、私はひとりです。この広い世の中に私を助けてくれる人は一人もなかったのでございます。私は人間は結局一人でなければならぬ。と、今でも信じております。志津子様がそうです。あの方はよく、「人間はひとりだ」と、申しております。あの方の胸には、たえずアナーキな風が吹き抜けているようでございます。

その恐い様な、又一面うれしい様な逃亡の日がとうとうやって来ました。私は、織屋の、屋根裏のような部屋から、屋根へ出たのでございます。同僚には、疲れをなおすために毎日打っているビタミンBを打つふりをして魔睡薬を打っておいたのでございます。たゞ、塀にタールを塗られたことを計算に入れておきませんでしたので、しまった、と心の中で舌打ちを致しました。若しスカートが汚れた場合、往來でスカートを取替えるわけには参りませんし、部屋を出てしまったからには、躊躇するわけには参りません。ファイバー製の旧型のボストン・バックをボロ風呂敷に包んで長い紐を結びつけ、その一端に小石をくくりつけて塀の外へ投げ、思い切ってスカートを脱ぎ、塀の外にまで枝をひろげている松の木へのぼりつきやつのことで塀を越しました。タールの附着したズロースを脱ぎ捨て、スカートをばき、紐を引いてボストン・バックを引上げ、風

呂敷も紐も捨て、駅へ向つて一目散に走りしました。

東京に救いがあるとは、思いません。私は小娘かも知れません。が、東京にあこがれるほどの小娘ではございません。捨身で、何も彼も承知の上で、どんなことをしてもお金を溜めて、母とのつまましい生活をきずくために、東京へ出る決心をしたのでございます。最終二十三時十九分東京行、その列車は、私が駅へ駆けつけた時、すでにもうホームに入っておりまして。



私は走りしました。ベルが鳴っております。走りしました。階段を駆け上りました。列車はゆるく動き出そうとしております。私は、最後尾の郵便車と二等車の間のステップに飛乗りました。ホームがゆれました。人が流れ駅の柱が飛びました。私は荒い息を吐きながら、片手を上げました。

誰へともなく……心の中では母に――。

（お母さん。可哀そうなお母さん。すぐに呼びにくるワ。）

（さようなら浜松。）

（さようなら、織屋のマーラカピ
ー。）

（さようなら、織姫達。）

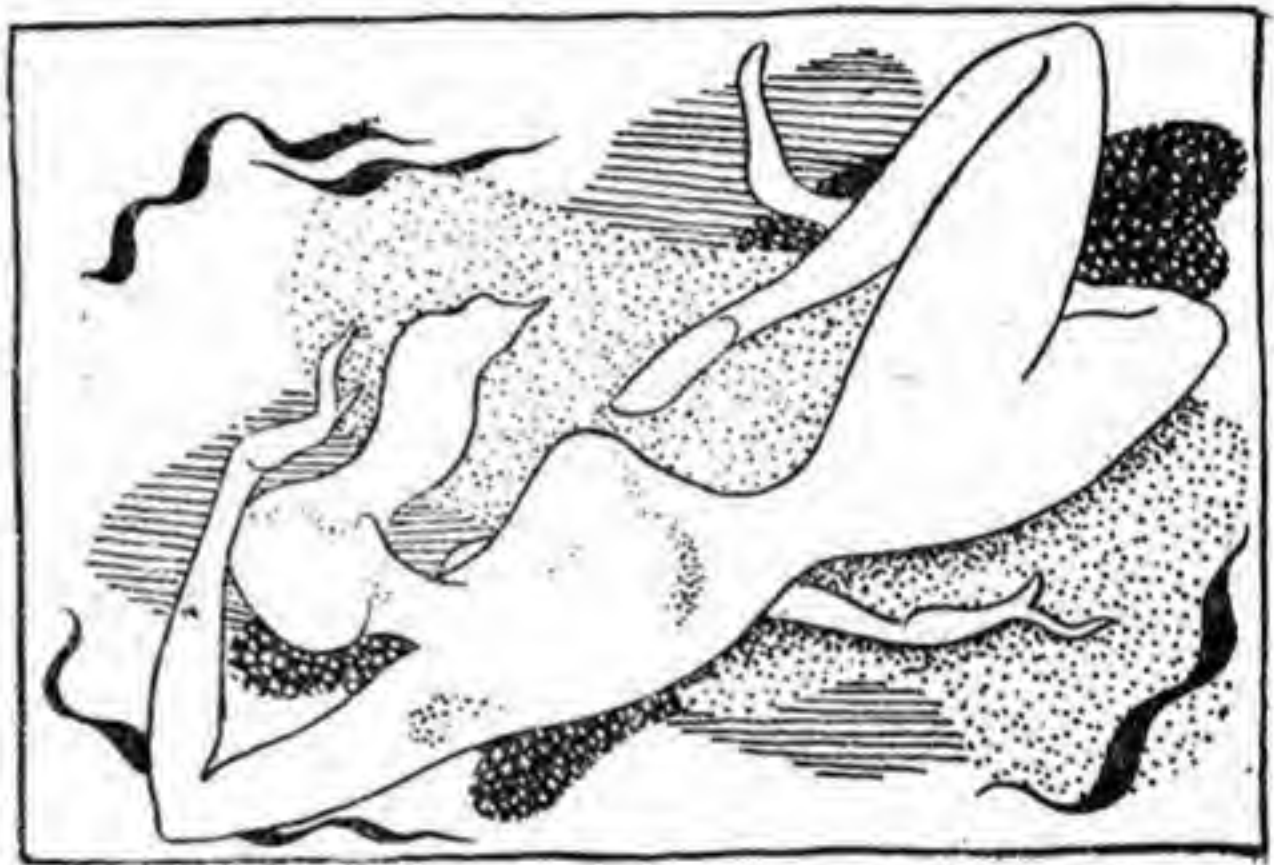
旅行は、どんな悲しみの心にも、自由と解放感を与えます。

街は次第に遠く去り、闇の中に点々と灯が流れる。風が渡る。夜は何と魅惑に豊んだ表情をしているのでございましょう。

夜風がためたく涙にぬれた私の頬をよぎり列車が次第にスピードを出してゆくのを感しました。車室へ入ろうとしてふと二等車と書いたガラス扉に初めて気がつきました。私はハンカチを敷いて其の場に坐りながら、人間の習慣が哀れで悲しくなりました。（終）

コレクション

佐次浩介



—私のスクラップノートから—

私は、毎夜ひそかに、自分のコレクションブックをとり出して、眺めることが日課のようになってしまった。すると、過去三年にわたって、私があさりつづけた、数十人の女性たちの顔や肉体が、それらのコレクションを通して、さまざまな幻想となって、浮び上がってくる。私は以前にも述べた様に、腋毛偏執

という性癖を持っているが、本質的には、立派なサジストであると自認している。その幻想の中には、決ってある種のサジスティックな場面があらわれる。勿論、数十人の女性の中には、単に腋毛を提供してくれたか、こちらから何気ない風を装って抜きとったか、とにかく、その場限りで終わってしまった数の方が、はるかに多い。

しかし、その中には、私にとって、一生忘れられない思い出となった女性も、決して少なくはなかった。

その思い出、私の秘めたる履歴書を、告白し、貧しい体験ながらも、諸兄弟のお仲間に入れていたゞきたいと思う。そして、もし誰方か、御自身の腋毛を提供して下さる方があれば、私にとってこの上もない幸福であるし、永く、私のスクラップ・ブックに記念させて頂きたいと思う。この意味でも「奇ク」は私にとって貴重な、唯一の雑誌なのである。

二

昭和二十四年、九月六日、野川徳子、十七才（仮名）

これが、私のスクラップ・ブックに記録されている女性のうち、最も年の若い少女である。当時、数え年の十七才だから、満十五年と十ヶ月、S市新制中学の三年生であった。この他、満十七才の少女は数人記録されているが、十五才台は、野川嬢唯一人で、これは私にとって、今後二度と得難い、貴重なコレクションのひとつなのである。その数も、僅か二本――。

私は、その頃、S、という東海の中都市で小さな素人劇団を主宰していた。小学生十三

名、中学生六名、その他、高校生や卒業早々の私達が数名「小鳥座」と呼ぶ児童劇団を組織したのが、その年の三月、S市主催の文化祭が行われるので劇団コンクールに参加する事となって、稽古に夢中になっていた。その日が、あと一週間後に迫り、今迄四時から七時までと決っていた稽古時間を、父兄の諒解を得て、三時から十時までに延長し、私たちの張り切りかたといったらなかった。十時までは云つても、どうしても十時半、時には十一時を過ぎる事もある。

九月六日は、いよいよコンクールの二日前で、明日は準備と休養のため一日休みと決めて、これが最後の仕上げであった。幸い日曜日なので、朝から、ぶっ続けに四回、五回と練習を重ねて行った。演し物は「アラジンと不思議なラムプ」野川徳子は、その中で薄幸のお姫様に扮していた。

御承知の様にアラビアン・ナイトより取材した童話劇で、なまけ者のアラジンが、魔法のラムプを手に入れて生れ変わり、悪魔にさらわれたお姫様を救って「良い子」になるという筋書きである。私は、この中で、演出と魔法使の悪魔を演じていた。

童話劇では、他の演劇と異り、善悪、美醜

が判然と別れている。悪魔は、徹底的に「悪」を代表しお姫さまはあくまで「美しく可哀想」でなければならぬ。そこに、私の秘められた悦びがあった。そして、この劇のクライマックスは、姫を手に入れて、我がものにするようとする悪魔と、そこにのり込んで来たアラジンとが、不思議なラムプをめぐって、大争闘を展開する、という場面で、この場面を中心に、何回となく練習が繰り返されたのは勿論である。

私が、野川徳子を横抱きにして現れ、彼女が、悲鳴をあげて逃げまどうのを、ぐいと腕をつかんで引き戻すと、ウフ、ウフ、ウフ、と笑いながら、爪を逆立て、迫ってゆくシーンは、その次にくるアラジンの出現にそなえて、出来る丈どぎつく、恐ろしく演出した。

彼女が、私の腕の中でもがく時、半袖のセーラーのつけ根から、生え初めたばかりの腋毛が、チラ／＼と見えかくれするのが、私にはたまらなかった。あの腋毛を——と何回考えた事かしれなかったが、見る眼の多い稽古場では、どうしてもそれを手に入れる口実も方法も見出せなかった。しかし、もう今晚限りで、公演が終ってしまえば、二度と手に入れる事は出来まいと思うと、どうしても今晚中

に、と、私の心は焦るのだが、結局、いつもと同じ様に、やがて十時が近づいて来た。もう皆、くたく／＼に疲れ果て、アラジンをやる立川という少年などは、汗をびっしり流して、一回立廻りの終る毎に、ハッハッと切ない息使いで坐りこんでしまう仕末だった。私は、

「今日一晩だ、頑張ろう」

と声をはげましたが、もう立ち上ってくるものも居ない。

「よし、それじゃ、皆少し休め、そして、野川さんだけこっちへ来て、僕ともう一度立廻りの練習をしよう」

彼女も、しかし皆以上に疲れ果てていた。

「先生、私も、もう少し休ませて、ね、お願い、もうとてもたまらないの」

「駄目／＼、一分でも時間が惜しいんだ。その代り、これが終わったら、しばらく休めるから、我慢して」

私は、野川の手をとり、無理矢理引き起すと、稽古場に立つた。

悪魔 さあこい、お前はもう、二度と逃げ

出す事は出来ないんだ。

姫 はなして、はなして下さい。

悪魔

ハ、ハ、ハ、離せるものか、折角苦労して手に入れたお前だ、もう逃しはしないぞ。

姫

アラジン……

悪魔

こっちへこいというのに。

姫

アラジンさま。

ト、悪魔から逃げ出そうとする、

悪魔

悪魔、それを捕えて、短刀を抜くうるさい、さあ、この短刀で、お前の、その美しい胸を一突き、ぐさりとやれば、それでおしまいだ、覚悟は好いか。

姫

助けて、助けて。

悪魔

ウフ、ウフ、ウフ……

と、そこにアラジンが駆けつけるのだが、

それから先は、私にも興味がなかった。私は皆に再び練習を始める様に命じて、野川を休ませた。もう、科白は全部暗記しているし、

演出も完了しているので、一同は機械的に、動きはじめた。

私は、しばらく、彼等の動きを見守っていたが、ふと思いついた様にして、野川徳子と呼んだ。

「一寸、外へ出よう、打ち合わせがあるから

――

野川は、上気した顔付で、私の後について外に出た。月は、なかった。暗い稽古場の横の空地で、私は、内から聞えてくるアラジンや、王様などの科白を聞き流しながら、野川と向い合った。

「君は、悪魔と向い合った時、ちっとも恐しそうに顔をしないじゃないか、声だけで助けてくれと云っても、駄目なんだぜ」

「ハイ」

「いゝか、もっと恐しそうに顔をするんだ、こうして、僕が君の腕を捕えたら……」

「いや、先生」

野川は、本能的に身を引いた。

「大丈夫だよ、芝居じゃないか、僕が、こうして腕を捕えたら、君は本気で、力一杯、振り回すんだ、いゝか、僕も力一杯やる、さあ、逃げてごらん」

「ア、嫌、嫌よ」

私の手が、彼女の胸に触れ、ともすれば、抱き締めそうにするので、野川は、本気になって、振り解こうと努めた。

「さあ、こい、こっちへくるんだ」

私は芝居とも本気ともつかず、尚も腕に力を入れた。

「あっ、助けて、嫌です……」

野川も、現実と芝居とが混同しているらしい、身体をもがくのも、何となく芝居がかりで、お姫さまを意識しているらしかった。私は、彼女の腕を握り、セーラーの袖から手をさし入れて、彼女の、薄く、細い腋毛を力一杯抜きとった。

「痛い――」

野川は叫び声を上げたが、私が、すぐに芝居気たっぷりの動作にうつったので、そのまゝ、再び姫と悪魔の関係に戻って、しばらくの間、もみ合っていた。彼女は、首を締められ、腕をねじ曲げられて、きれぐれに、

「ア、ア、アラジン……」

と叫んだ。私は酔った様に、野川のかほそい身体を抱きすくめた。演劇の名のもとに。遂には、彼女は、ほろ／＼と涙を流して、

「アラジン、アラジン……」

と叫びつづけた。

「よし、今の気持を忘れるなよ、今から、僕は、公演が終わるまで、悪魔として君に向うから、君もそのつもりで――」

私は、そう云い棄て、再び室内に戻った。その後、二日間、私は野川徳子を、精神的にも、肉体的にも責めつづけた。その故か、彼

女は、いつも私の前ではおどろくしていた。そして当日、千数百人の観客の前で、私は、野川徳子を力まかせに押えつけ、彼女が思わず本当の悲鳴を上げるのを、夢中で聞いた。彼女の腋毛が、アラビヤ風の薄いドレスの下から見えかくれするのを楽しみながら、私にはこの立廻りの数分間が、何と短く、そして愉快だった事であろうか。私は、劇が終って



から、野川徳子が、楽屋の片隅で、オイ／＼泣いているのを見た。友達が何と言っても、彼女は唯首を振るだけであった。或は、彼女自身の体内に、マゾヒストとしての芽ばえがあったのかもしれない。或は、単なる乙女の感傷であったかもしれない。その泣き声は、澄んで美しく、苦痛や悲しみのひびきは、一切含まれていなかった、むしろ、喜びにふる

えている様であった。私は泣き倒れている野川の背中を、言い知れぬ快感をもって眺めていた。こうして、私のスクラップ・ブックには、野川徳子、十七才、という文字が書きこまれたのである。

蛇足ながら「小鳥座」の「アラジンと不思議なランプ」は、S市演劇コンクールのたしか二等賞を獲得した――。

三

昭和二十五年、一月十八日、大塚和美、二十四才――

私は、自分のスクラップ・ブックに記された、この記録を見る度に、マゾとサチとは、両手の掌の様に同じ様でも全然異った性質のものではなくて、あるひとつのもの、裏と表といった、極めて密接な関係にあるのではないか、と思う。勿論、私の如き浅学の徒には学問的に、何の裏づけするものもないのだが、唯、私自身の体験から、なんとなくそんな風に思うのである。これは、沼正三先生に、判然とした両者の関係を、定義づけていたゞいたら、釈然とする事と思うが――。

その頃、私の劇団「小鳥座」は、御多分にもれず資金難で解散し、私は同じS市の軽演

劇団「青春地帯」の文芸部員として、毎日、踊り子と、ジャズと、白粉臭い雰囲気の中で暮らしていた。人口二十万程度のS市では、劇団の演し物も大変で、殆んど一週間で次の番組と組み換えられる。そのいそがしさといったらなかった。その日は、しかし正月興行で二週間のロングとなり、正月第二弾の新レヴィューの総稽古の日であったと思う。十時にハネてから、一通りの稽古や振りつけが終り、楽屋に一同ゴロ寝したのは、十二時半ごろであった。

私が最初、サチとマゾとは表裏一体ではないか、といったのは、この日、私は生れて初めて、マゾヒストとしての経験を味ったからなのである。しかも、それは、サチストであると自認する私にとっても、極めて甘美な体験であった。

相手は、谷涼子という男役のダンサーで大塚和美というのは、その本名なのである。「青春地帯」では、幹部級の役者はその隣りに専門の寮があつて、そちらに寝泊り出来るが、踊子達は、おそくなるとどうして楽屋泊りとなる。しかし、大部分は自宅があるので、実際に泊り込むのは、五人位なものであった。和美もその中の一人で、

畳を十枚程一列に敷き並べた細長い部屋に、二組に別れて寝む事になった。男は、私と、もう一人音楽部のサックス吹きが残ったのだが、おかしなもので、彼は他の三人程の踊り子と一緒に……隣の小部屋にシケ込み、おそくまで、しゃべり続けていた。結局、私たちは、この楽屋に、彼女と、もう一人深草まゆみという踊り子と、三人で横になったのである。

る。

踊り子たちとゴロ寝などは、私はなれ切っていたので、別に春本的な感覚も起らず、そのまゝ、ぐっすり眠りこんでしまった。だから、この場合、私はあくまで受動的で、和美は積極的であった。何時頃かよく解らなかつたが、私は、いきなり顔の上に、はげしい重みを感じて、無理矢理に眠りより覚されてし



まったのであった。ギョツとして、眼を開いた私の顔の上にあったものは、パジャマ姿の和美の大きなお尻と、恐ろしいまでにクロームアップされた二本の太股である。私は本能的に、腕を振って、和美の肉体を、ふり落そうとした。しかし、和美は平然と私の顔の上の腰を下し、苺を吸っているのだ。私は、鼻が、彼女のお尻に押しつぶされて息苦しくて声を出す事も気使われたので、夢中で顔を左右に振って、この息苦しさから逃れようとした。と同時に、男の習性なのか、私の腕は、前かがみにたれ下っている彼女の胸へ伸した。そして、本能的に、私の場合は、その腕が上にあがり、和美の腋窩を探るのだった。和美は、苺を口にくわえ、両手を首の後にまわして組み、一寸気どったポーズの心算で足を組んでブラ／＼させている。私はそうした苦しさの中で、夢幻の境をさまよう様に、和美の腋窩を、掌の甲でザラ／＼とこすりまわした。踊り子達は、客席で見ると、その腋窩がツル／＼して、一本の腋毛もない様に見えるが、実際は男のひげのそりあとの様に、ザラ／＼したこわい毛を持っている。当時は脱毛クリームは肌を荒らすからといって使用されず、彼女らは、三日に一度位、安全カミ

ソリの刃だけを器用に手に持って、うまく腋毛をそり落したものだ。私は、この方法で、彼女等の腋窩に触れる事が非常に楽しみであったのだが、それは後の話として、その日の和美の腋窩は、もう相当に伸びていて、指先で、ヒゲを脱ぎ取る時の様に、ピン／＼と引張って抜く事が出来る位であった。

唯これだけの事では、私がマゾとしての一面を持っているという事にはならないかもしれない。勿論私自身、本格的なマゾヒストではないと思っているが、この時の和美のお尻の重みと、その息苦しい圧迫感に、私がうつとりと夢幻の快味をむさぼった事だけは事実である。その時、私は出来る事なら、和美の足もなめ、縛られて責めを受けたいとさえ思った。しかしそうした性愛的な行動やプレイは、事情も場所もそれを許さず、私達は、終始無言でこうした珍妙な恰好のまゝ、五分近くもそのまゝでいた。

全く、和美は、どういうつもりなのか、一言も口を利かず、よく小説にある様に息使の荒くなる事もなく、唯悠々と時間をかけて一本の苺を吸い終ると、そのまゝ私の顔からお尻を上げ、ゴロリと横になると、蒲団をかぶって、向うをむいてしまった。私自身、又そ

れをとがめるわけでもなく、その後、和美に何を求めようともせず、(内心その慾望と斗ったのは事実だが)再び深い眠りに落ちこんでしまった。だから、同泊していた深草まゆみも、この事には全然気がつかなかった事と思う。

そして、翌日、和美は私の顔を見てもケロリとしていた。私も又昨夜の事を話題にする心算もなく、相変らず忙しい毎日を送っていた。私のスクラップ・ブックに、僅か五ミリの程の鋭く固い腋毛が新に追加されたのが、唯一の名残りであった。

こうした舞台人達の生活というのは、不思議なもので、決して後々うるさい問題を残さない、至極あっさりしたものである。

これが、私の、マゾとは言えないまでも、それに近い唯一の体験である。その後、ストリップに圧倒されて「青春地帯」は解散した。大塚和美は、どこへ流れて行ったのか私は全然知らない。

やがて、私も上京した――。

(この項終り)

× × ×

妖

よう

蟲

ちゅう

記

き

芳 野 眉 美

水仙の香

パー水仙のマダムが

「あの人が好きになった」と云った。

「いじめたいの」

瑠璃に、

「御褒美あげるから、紹介してちょうだい」

瑠璃は、マダムの妖しい唇の感触を、忘れてはいない。

裸にされて、抱きしめられたときの、マダムのやわらかな肌の感触、苦しいような、あ

のせつなさを、まだ忘れてはいない。

瑠璃は、処女を、マダムに捧げたものと思っ

ている。
瑠璃は、雑誌の奇妙な求人広告を、だまって見ていた。
男奴隸を求めます。

但し、少くとも一年契約のできる美青年。

最初の三日間、私の三人の女奴隸の手によ

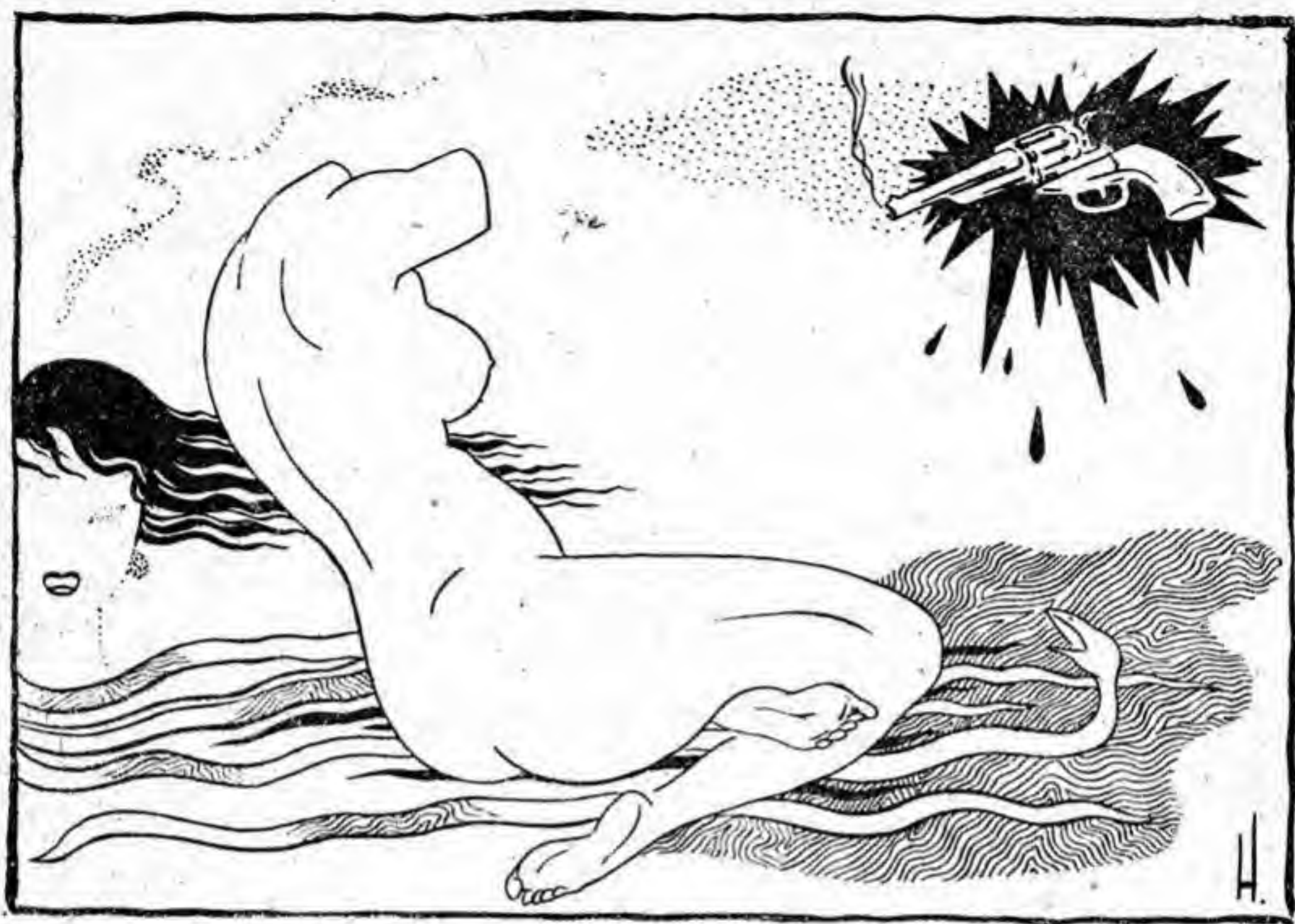
って、試験されます。
この試験に合格して、始めて、貴方は、私の奴隸として認められます。
瑠璃は、顔をあげた。
ナイトガウンをまとったマダムが、瑠璃を
招いている。
ふっくらした乳房は青くすき透っている。
血管さえ見えた。薔薇色をした乳首は、すば

マダム水仙

らしく突起していた。

それに答えるように、下では、ふくよかな

お尻が、薄いガウンをもたげていた。



あの日も――

瑠璃は、そう思う。

マダムは微笑んだ。

瑠璃を抱きしめると、

瑠璃の髪に、眉に、眼蓋

に、鼻に、耳朵に、唇

に、肩に、そして腋の下

に、接吻した。

眼に見えない吸盤でも

持っているのだろうか、

マダムの舌は魔物のよう

にびったり吸い着いた。

い、いや

くくく

瑠璃は呻く。もがく、

あかく、必死にのがれよ

うと、泣く。

やめて

アア

なんと、甘美な折檻だ

つたろう。そのまま、死

んでしまいたかった。

ふっ、と大きな嘆息を

つくと、瑠璃は、その雑

誌にはさんであつた手紙

のひとつに、目を走らせた。

マダム水仙の奴隷にしていたければ、一

年契約どころか、たとえ、私を抹殺するよう

なことがあってもかまいません。

奴隷にして下さい。

試験の拷問を受けさせて下さい。

かならず、合格します。

奴隷にして下さい。

たんに、異常性慾と、賤んではいけない。

正常と異常と、性慾に区別はない。

区別をするものは、ゆがんだ従来の因襲で

あり、道徳である。

人間は、すべて根底なものから切り離され

て、浮游している。

生活の上でも、意識の上でも、倫理の上で

も。

個人は、他人ではありえない。

そこには、孤独があるばかりだ。

孤独にとらわれた人間は、孤独から逃げる

ことは出来ない。

その落ち行く先は、発狂か、自殺である。

その人間が、肉慾に快楽を求めるのは、性

慾の為のみではない。

死の誘惑に負けない土台がほしいからだ。

孤独を感じた人間は、絶え間ない肉慾の享楽を慾望する。

肉慾の奴隷になることを哀願する。

女王の鞭に束縛されたいのだ。

新しい道德をつくらなければならない。

軽蔑され、迫害を受ける変質者に、露骨な人間が現われているのではないか。

「面白い手紙でしょう」

マダムはパリに遊んだことがあるという。

夫は、フランス文学者だった。

バー水仙のマダムになったのは、その結婚に失敗してからである。

フランス風のスタイルにマッチしたその容姿は、端麗というより、むしろ妖麗だった。

それを物語るように、眼は、痴呆的で、淫蕩的だった。

「だけど、あの人を愛したいの」

マダムは、ナイロンパンティに、瑠璃の顔をおしつけた。

あの、マダムの馥郁たる芳香が、瑠璃の顔をやわらかくつつんだ。

「紹介するわね、明日」

瑠璃は、黒い美しい瞳に、その返事をこめた。

血の音

夏夫は、用事がある、というので、女学校の体操倉庫に、瑠璃を訪ねた。

夏夫は、特攻隊くずれの屈強な男である。

柔道は、四段だといわれる。

不良仲間ではそういうことになっていた。

誰も、確かなことは知らない。

無口だ。

何事にも、無関心なその態度が、一種独特な崇拜熱になって、いつのまにか、不良仲間の首領株になっていた。

いつでも、静かな微笑をたたえている。

美しい。

不良少女たちがさわくのも無理はない。

夏夫のアパートが、不良仲間の集り場所になっていた。

瑠璃は、夏夫を促して、女学校を出た。

夏夫に言った。静かな口調である。

「水仙のマダムに、今夜、紹介する約束をしてきたんだけど、その前に、ちょっと、私につきあってね」

瑠璃は、父を知らない。

朽ちれたアパートに、母と住んでいた。

瑠璃が女学校から帰ると、いれちがいに母

は出掛ける。

朝、母の寝床が、からのこともある。

見知らぬ男と、寝ていることもある。

瑠璃は、外食券食堂で朝食をすまし、弁当を受け取って、女学校に出掛ける。

見慣れたせいかなんの感情も起らない。

そんな毎日だった。

母は、もともと肥満していたが、寝床に男を見る様になってから、ますます肥え太り、肌も美しくなった。

その豊かな臀部には、寄生虫のような生活力がひそんでいた。

淫蕩な血が、瑠璃に流れた。

瑠璃が、女学校を退学になったのは、ダンスホールで、上級生を恐喝したからである。

退学になった夜、瑠璃は家を出た。

自由を感じた。

新しい生活が始まった。

奴隷の首輪

夏夫は、マダムの奇妙な愛撫に辟易した。

その夜、寝室に案内されると、夏夫は、マダムの愛犬、ムッシュエになった。

犬の首輪をはめられると、裸にされた。

マダムは、犬だからあたりまえよ、という

顔をしている。

ダブルベッドの下に、汚れたマダムの肌着類で、臥所がつくられた。

いったん、これらの汚れ物は、火にあたためてからひいたものらしい。

パンティなり、スリッパなり、マダムのは贅をつくしているから肌ざわりはよかった。

夏夫は、その秘密の匂いに悩まされながら苦笑した。

首輪の鎖が、ベッドの足に結びつけられると、マダムはズロースを脱いで、夏夫の頭にかぶせた。

「あたたかいでしよう」

その朝、頭をこつかれて、夏夫は眼をさました。よく眠ったものだ。

目の前に、美しいふくら脛がゆれている。

「接吻おし」

夏夫は、改めて自分の境遇をさとして、ク
スッ

と笑った。

「何がおかしい」

ぴしっ。

と鞭がなった。

化粧着を柔かくまとったマダムが、
ひゅっ



ひゅっ

と乗馬用の黒い鞭をしごきながら、

「朝の散歩をしましょうね」

四這のまま、夏夫はベッドの下からひきだ
された。

首輪の鎖がはずされた。

「そのかわり、散歩用の奴隷の首輪をつける
のよ」

細い鎖がついている。直径三四厘ぐらいの
小さな輪を、人さし指でくるくるまわした。

「これ、どこにはめるか、知ってる？」

ぴしっ

鞭がなった。

「歩け」

ムツシエの生活が始まった。

盛装をこらしめて、食卓にむかったマダムが

「ムツシエ」

と呼んだ。

「テーブルの下にお入り」

体温を激しく発散させている肌が匂う。甘ずっぱいような秘密の香が、軀にしみ込んでいる香料の匂いにとけこんで、馥郁たる芳香を放っていた。

それが、ムツシエに命令をしている。

マダムは、そのまま静かに朝食を続けた。

ドライブから帰ったマダムが、

「ムツシエ」

と呼んだ。

「お食事よ」

夏夫は、便器に顔をだして、仰向けに寝かされた。

「口をあけて」

便所は総鏡張りだった。

美しい少女が案内されたとき、少女はぼつと顔をあからめた。

「ムツシエ」

マダムが呼んだ。

「このなかにお入り」

便器のなかも、鏡だった。

少女は、不思議そうに覗きこんだ。

「これが、ママの犬？」

「そうよ」

「沙万里もほしい」

「あげるよ」

「うれしい」

夏夫は、新しい主人の暖かい洗礼を受けた。

沙万里が、マダムの不興を買った。

ムツシエを可愛がりすぎる、というのである。

沙万里は、三角木馬にうつむきにまたがらせられた。

足首におもりが下げられた。

一生懸命支えている手を、マダムは邪けんに取り、うしろに廻して縛った。

そして、頭髪を紐で結び、上に引いた。沙万里の頭は上向きになって、遂に反りかえっ

た。

沙万里の肌一面に、汗がにじみ出た。

沙万里は、口を大きく開いて、苦しそうに息をはいている。

完全に露出したむっちりしたお尻が、たまらなく可愛い。

マダムの寝室には、美しいお虎子がある。

夜はマダムは、それで用をたして、ほとんど便所に行かない。

お虎子は夏夫の臥所のわきに置いてある。

マダムは、それを、

「ムツシエの飲料水」

と云っている。

頭を足でこづかされると、夏夫はお虎子を捧げる。マダムは便所が近い。

ときには、夏夫の口を、

「私の可愛いお虎子」

と云うことがある。

宇治拾遺物語や、今昔物語にある、あの有名な平仲の逸話は、あらためて書かなくても御存知の方が多いと思う。

兵衛佐平貞文が、本院左大臣時平の女房、侍従の君のお虎子の匂を嗅いで、恋しさがいよいよまさり、とうとう悩み死にした話であ

る。

侍従の君は、在原業平の孫であるという。

美しい方だったにちがいない。

この話は、谷崎潤一郎の少将滋幹の母、菊地寛の好色物語、芥川龍之介の好色、に紹介されている。

それに似た話は、同じく潤一郎の、乱菊物語、武州公秘話にもある。

少将滋幹の母、から引用してみると、

「平仲は、その宮を引き寄せて、中にある液体を少し吸って見た。と、やはり非常に濃い丁字の匂がした。平仲は又、棒ぎれに突き刺したものをちよっぴり舌に載せて見ると、苦い甘い味がした。

で、よくよく舌で味わいながら考えると、尿のように見えた液体は、丁字を煮出した汁であるらしく、糞のように見えた固形物は、野老や合薫物を甘葛の汁で練り固めて、大きな筆の鞘に入れて押し出したものらしい」

美意識の転化である。

余韻のない話、といやがる人が多い。

連想する場所の違いである。

液体を「丁字の香に似た馥郁たる匂い」とし、固形物を、「あの黒方と云う薫物―沈と丁字と、甲香と、白檀と、麝香とを練り合わ

せてつくった香の匂い」とする。

美しいではないか。

醜を美に転ずる、それだけ生活感情が豊富になると思う。

幻想の美しさかもしれない。

しかし、それでもいいのだ。

美にあこがれる心が強いのだ。

感受性のゆたかな人の方が、それだけ楽しく生きられるのではないか。

ムツシエの飲料水を見ながら、夏夫はそんなことを考えた。

蛇の泣声

瑠璃は、なんだかつまらなかった。

夏夫をマダムに紹介したのは、マダムの肉慾に負けたのだろうか。

違う、夏夫を踏みつぶしたかったからだ。

瑠璃は、夏夫に会うと、自分がくずれていくのを知っていた。

いつでも、微笑んでいる。

やりきれない。

すぐ、なんでもいい、と云う。

夏夫にある、ある透明なものの圧力に、ひしがれていく自分に気がついた。

そして、ひしがれていく自分が、次第に見

失われていくのではないか、という不安におびえた。

あの透明なものは、いったいなんだろう。云えない。

どうしても云えない。

瑠璃はもたえる。

こんなに好きなのに。

自分を失うことは、今の瑠璃にとっては、自分を抹殺することに外ならなかった。

瑠璃は、もう何も感じなくなかった。

考える、のじゃなくて、みんな感覚の問題なんだわ。感じなくてもいいことを感じる。

そして、苦しむ、感じない人の方が、よほど幸福だわ。

ドアがあいた。

瑠璃は、激しい嫉妬と虚脱を感じた。

夏夫から脱脂綿を受け取ると、瑠璃は、夏夫の目の前で、綿をちぎった。

「廊下に落ちていないか、見て来て」

便所の前にひとつ、洗面所の鏡の前にひとつ、夏夫は拾った。

部屋にもどると、

「葡萄酒」

一瞬、飲むのをためらった。

夏夫は、目をつぶった。

「飲まなきゃ、だめ」

瑠璃は、ゆっくりと、夏夫の口にそそぎかけた。

夏夫は、嘔吐をこらえて瑠璃を見つめた。

「これ、私のー」

夏夫はうなづいた。

「知っていたの」

夏夫は微笑んだ。

「じゃ、何故飲んだの」

「ルリが好きだからだよ」

「好きだって。じゃ、マダムも好きなのか」

「あれは快樂だ。ルリと違

う。めんどくさかったからさ」

その夜、夏夫は夢を見た。

降る雪のなかに、裸の女が松の木からつるされている。

うれしいような、悲しい

ような、哀願するような、

甘えるような、そんな悲鳴

を聞いたと思った。

ぽとり

ぽとり

一滴、一滴、赤い血が、冷たい大理石の床に静かに落ちていく。

まっ白な雪に、まっ赤な血は、散っていく。

目にしみる。

夏夫は、唇に、何か、にがいのものを感じて、

無意識に唇をうごかした。

(葡萄酒)

そんな声を、聞いたように思った。

(瑠璃が好きだ。好きだからこそ、いくらでも飲める。恋人のあらゆる分泌物はオクター

ルだ。汚物とはいえ、分泌物の一滴たりとも吸収したいのが、愛している証拠なのだ。俺はルリがほしい。

ルリのすべてがほしい)

瑠璃の手が、夏夫の髪をまさぐった。

その朝、二人は郊外に出た。

ひさしぶりに、マダムの奇妙な愛撫から解放されてすっきりした気持だった。

「サジスト? マゾヒスト?」

瑠璃は云った。

「どっちでもさ」

瑠璃は、わからない、といった面持で夏夫を見た。

夏夫は微笑んだ。

「なんでもいいんだよ」



「私がマダムに紹介したこと、おこっているの？」

夏夫は微笑んだ。

「なんでもいいんだよ」

瑠璃は、ただ肉慾の享樂にふけるマダムをうらやましく思った。

それよりも、何事にも無関心な夏夫は、瑠璃にとっては、絶対な存在に思えた。

無表情な顔に、いいしれぬさびしさがただよった。

マダムと、夏夫と、瑠璃は、そのどちらにもなりきれない自分を知った。

透明とは、絶対なのだ。

夏夫は、瑠璃に、透明を感じた。その冷酷な無表情さからだった。

瑠璃の無表情さは、仮面にすぎなかったのか。

無表情をつくるために、自分の行為を正当化するためには、一種残酷な行為を、あえて行うものだ。

瑠璃は、例え残酷な行為を行っても、それにおぼれることが出来たのか。

仮面の下、そういった悩みを、夏夫は理解していただろうか。

垣根のある庭で、一人の人妻が洗濯をして

いた。

脂の乗った豊満なお尻が、手の動きにつれて、心地よい一種のリズムをもって左右にゆれている。

瑠璃は、何か連想しているらしい。

「あのままで、おんぶしてみない」

垣根の前を、一台の自転車が走り過ぎた。

夏夫は、人妻の背中を離れると、垣根にもたれている瑠璃に、微笑んだ。

瑠璃は、つまらなそうだった。

その夜、破局が、不意に訪れた。

瑠璃が、バー水仙のマダムを、射殺したのである。

「水仙に行ったら、ピストルの売買をやっていたの。一人の外人が、私にいろいろと教えてくれて、実弾までこめたの。そしたら、マダムの胸に、どうしてもピストルが引っかかるの」

瑠璃は息をとめた。

「気がついたら、マダムは死んでいたわ」

この場合、マダムは、絶対であったのかもしれない。

絶対でなくても、瑠璃には、絶対に近いもの、だったはずだ。

この無意識の衝動は、こうとしか説明がつかない。

夏夫がいたら、夏夫を殺していただろう。

その前に、愛の意識で、自分をとりもどしたかもしれないが。

ある温泉地の旅館に、二人は宿った。

「一人にさせて」

夜具が、別々の部屋にひかれた。

夏夫は、夢にうなされた。

星月夜に、天女が飛んでいる。

その天女が、すっ、と枕元に舞い降りた。裸だった。

羽衣も、華髪もなかった。

微笑むと、夏夫のかたわらに、ふわり、とはいった。

夏夫は、見たような顔だと思った。

そのとき、はっ、と息をのんだ。

ルリだ。

やさしく、微笑んでいた。

夏夫は、よく見ようと思った。

が、肢体がひとつもうごかない。

きりきり縛られているようである。

肢体に幾重にもまきついた妙な輪が、ゆっくりと、強く、しめられていく。

一本、一本、の非常に細い鋭い不思議な線

が、にぶい光沢を放ちながら、肉に、ぐい、ぐい、とくいこんでくる。

うう

ううう

胸にまきついた一本の白い線が、ふと鎌首をもたげた。

蛇だ。

まっ赤な舌が、しゅう、しゅう、とはきだされる赤い炎のなかに、燃えている。

突然、激痛を下腹部に感じた。

ウッ

白蛇の赤い炎に焼かれた夏夫の肢体は、かっ、かっ、と燃え、汗が、じり、じり、とにじみでた。

白蛇のまっ赤な舌は、すっ、すっ、と夏夫の唇にはいこみ、夏夫の舌にからみついて、息をとめた。

夏夫の下腹部にまきついた白蛇の尾は、あれくるう波のように、激しく、うごめき、しめつけた。

アア

アアア

白蛇はもだえた。

泣いているようだった。

夏夫は、がぼっ、と起き上った。

まっ白なものが、

ふわっ

と飛んでいったように思えた。

瑠璃の部屋に通じる唐紙の、閉め残されたわずかな隙間から、

する

するする

と、一本の、細い、赤い腰紐がうごいて、消えた。

(終)

私は本年三十才になる独身の男子ですが、特別に女性の「腕」に関心をもって居る者です。何れ長い告白を書きたいと存じますが、今日はたゞ編集者及び読者の目をもっと此の世に現われざるもの「腕」に向けてほしい一念で筆をとったのです。奇譚クラブを一覧しても成程興奮の対象として「足」「鼻」「臍

窩」「腹部」等の記事が載っては居ります。然しバックナンバーの目次を見ても、こと「腕」に関する記事の一篇も無いのを私は不思議とも、又淋しくも思います。私は子供の頃から、そして現在に到ってます／＼そうですが、若い女性の「腕」に限りない興奮を覚えるのです。私は異常なのでし

絵と写真のアイデアを募る

本誌に発表する口絵やサジマゾ切腹等や代理部の分譲写真、或はアルバム、画帳、等について、こういった構図やポーズ、又は趣向で作成してほしいといった御希望がございましたら、何卒御遠慮なく編集部宛御申越し下さい。貴方の考案されたアイデアによって、誌上を飾り、又は分譲品中に加えたいと思います。採用の分、並に優秀なる企画に対しましては写真又は画稿を差し上げます。詳細なる説明の外、必ず略画若しくは説明図を添えて下さるよう御願ひ致します。

(企画係)

ようか。「腕」と云っても肩から先全部の事です。殊に「二の腕」と、肘関節部のあたりは最大の興奮地帯です。肩からの丸やかな曲線がこの腕に移行し、その屈側と伸側は夫々微妙でなだらかな線を描いて関節をよぎり、前腕を次第に細くなって手首の細みに流れてゆく。この曲線は誠に芸術品の極致といえま

しよう。「腕」を真横から見るとよし、真後からもよし、又内側から見てもよしで、何処と云って見にくい視角はありません。

「この腕」には僅かに箸の様に細い上腕骨が一本、それを取り巻いてしなやかな筋肉が附着し、その外表にはピチ／＼とはち切れそうな白絹の様な皮膚が、血のほとばしりと肉の躍動を辛うじて喰い止めて居るかの様です。

私はすんなりと伸びきった若い女性の「腕」を想像したゞけで、異様な興奮を覚えるのです。最近の街頭では、半袖の女性の「腕」に私の目が固定されて居るのは勿論です。想像したり見たりするだけ

でこうなのに、まして肩から手首へ、手首から肩へと「腕」をさすったり、「この腕」を思いきり握りしめたり、両手で真赤になる迄両腕をもみくちやにしたりしたら、それこそ無限の恍惚境と云ったところです。

女性である以上、その美の特徴はやはり女性特有のかよわさになければなりません。

「たくましき大腿」とか「豊満な臀部」とか

女性の「腕狂崇」について



森 卓 志

には、私は女性らしさを感じません。又、「下品さ」とか「見にくさ」などもどうも私は好みません。それで人の騒ぎ勝ちな乳房とか、腹とか、陰部なんかは興味の外にあるのです。かよわさと上品さの代表が女の「腕」なのです。

すんなりとした「腕」は、ほんの私達の片手で握るにも恰好の太さですし、逆にとってヘシ折る事さえ出来そうじやありません

か。誠に「腕」こそ女性にとって最も美しく、最も気高く、最もかよわく、男性にとって最も興奮を覚えさせる部分であると、私は信じて居ります。こう云う目に入れても痛くない程可愛い「腕」を思いきり縄で縛ったり、鞭打ちしたり、針で刺したり、あらゆる方法で責めてみたい衝動にかられる事が一再ではありません。

かくの如き「腕」に関する同好諸君の奮起を望みます。大いにこの分野を開拓しようじやありませんか。

「腕」に関してのサド的男性よ、マゾ的男性よ、名乗りを挙げられよ。

編集子は「腕」について、今後編集上の予定なり御計画なりがおりでしようか。又世に腕狂崇なるものもあると聞きますが、それ等の実体等につき、誌上でお答え願えたら幸甚と存じます。

【編集部註】「腕」に限らず変った狂崇の投稿については掲載の準備をしております。

あるマゾヒストの手帖から

沼 正 三

第六十六 「美男奴隸」

舟橋聖一の小説である。講談社版の現代小説全集第二期中に横溝正史の「女王蜂」などと並んで一冊を占めている。標題が気に入ったので早速買って来て一読したが、期待は裏切られた。

主人公須磨慶四は、小さい時から女にもてて仕様のない美青年だが柔弱である。姉梅子に過失から顔面に傷を作らせ、それが心の負担になっている。化粧品会社のマネキン・ガールみはるから思いをよせられるが、これが顔に怪我してから悪女の深情で、遂には彼を犯罪者にしてしまう。行き詰って心中したり、隣りの宗子と姦通して、その夫の和二郎から半殺しにされて、足蹴にされたり痰を吐きかけられたり、……とにかく懦弱なため人生航路を誤るのであって、女に対して主体性を持たないだらしない男である。そこで、心中から助かってから反省して、自分は今迄「女性の奴隸」に過ぎなかったと告白する。

然し「美男奴隸」という素晴らしい標題からいうと、どうしても

この作品は羊頭狗肉のそしりを免れない。成程大学迄出ていながら美貌を売物にカフェーの男給仕になるのはマゾヒスティックでないとはいえない。警察の追及を脱れつつ、人の妾になっている姉の許に忍んでゆき、旦那と姉とが一緒に入っている風呂に薪を入れるよう命ぜられる屈辱的場面も、たしかにマゾヒスティックな味わいがある。

けれどもそういう二三の場面を除外すれば他にこれという場面はないし、次々の女性関係も要するに、意志が弱く、積極性がないというだけのことで、「奴隸」というのは比喩的にも当たっていない。たしかに「美男」はえがかれている。むしろ「美男」だけがえがかれている。けれど「奴隸」はえがかれていないのである。

要するに、(舟橋文学理解のためというなら話は別であるが)、マゾヒストとしては、この小説は読む必要のないものである。あまにもマゾヒスト好みのする標題であるから、読者諸君の中、たまされる方の少しでも少いようにと注意しておく。

因みに、舟橋自身この題名には執着があったと見えて、一時「読

物朝日」とかいふ雑誌に、同題名の小説を連載していたが、廃刊になって、尻切れトンボで終ってしまった。その小説は、芸者屋に成人した美青年を主人公とするもので、右の全集に入った本項の小説とは異なるものであった。

舟橋小説には別にバギスミス(小姓志望)の見地から取扱うべきものがある。「破れた花詩集」や「雪夫人絵図」に見えるところの、年長の美女に対する少年の奴隸的愛慕である。これについてはいずれ項を改めて論ずることにしよう。

第六十七 「鞭を鳴らす女」

前項のついでに、もう一つ羊頭狗肉の作品をあげよう。岸田国士の「鞭を鳴らす女」である。題名から想像するとマゾヒスト好みの支配的女性を描いたように思えるし、小見出しにも「男の貞操」「女王の口笛」「貞操と答」など一寸食指の動くものがある。

陸軍少将の令嬢で乗馬のできるひとが出てくる。名は紀伊子、その乗馬服姿の描写は次のとおりだ。

黒地の背広に同色のベレー、鹿革の短袴ズボンとエナメル・キッドの長靴は先ず型通りに違いない。そへこもって来て、白革の手袋をはめた両手に節竹の鞭をぎゅっと反らした姿は、天晴れ亜米利加仕



立の当世「おとこ娘」だ。白リンネルのワイシャツに、青磁のリボンがひらめき、胸のポケットからこれも同色のハンケチが溢れているなどは流石に物柔かで、しかも笑うたびに、踵を揃え、そして肩を前へすぼめる恰好は、誰を真似てか、なかなかしおらしい風情だ。そうかと思うと、また、大股に歩き出しながら拍子を取るように鞭をびゅうびゅう鳴らすのである。

彼女を遂に射止める主人公椿礼三は、同じ作者の「暖流」の主

人公日正と同じタイプでもう少し柄の悪い無頼紳士、才智と勇氣と要するに実力丈で世を渡ってゆこうという男である。彼が彼女に唇を求める場面がある。三鷹の禪寺にランデヴーした時で、紀伊子はここ迄騎馬で遠乗りして来るのだが、唇を求められて激しく拒み、乗馬用の鞭を振上げて、力まかせに男の頬を打ち、馬を繋いだ場所に去る。ここが題名の由来であろう。

然しこういう一見新しい、激しい気性の女性も、結局は椿という主人公の男性に降伏して、一生を夫に托し、人身売買の嫌疑を避けて海外に高飛する彼についてゆく、弱い女性になってしまうのである。羊頭に食欲を感じたマゾヒストは狗肉に失望せざるを得ない。私は思想的風俗小説としてのこの作品自体の価値を云為するのではない。「鞭を鳴らす女」という題名のハッタリがききすぎていることを指摘したのである。

尤も上流階級を扱う関係で、微視的マゾヒズム眼を以て読めば外にも感興をもよおす所はないではない。例えば紀伊子の学友である佐久間子爵夫人が、椿が子爵家の家庭教師だったことを紀伊子と噂して、

「そりや、家庭教師にだって、いろんなのがあつたわ。あたしが、実家^ミでついていた人なんか、苦学生^ミのくせに威張^ミってるの。癪だからお辞儀^ミもしてやらなかったわ。でもあの人^ミはあゝいう人ね、さくばら^ミんていうのかしら……」

この子爵夫人の令嬢時代の嬌慢さがそぞろに偲ばれる口ぶり、「苦学生^ミのくせに……」の一句に特権階級の意識が露出している。(私はこんな令嬢の家庭教師になりたいと思う。軽蔑されてる方がこの場合楽しい。)

又、これはサディスト向きのことになるが、紀伊子の兄である澄田大尉のフランス留学中の愛人ラビエル嬢が大尉のあとを追って日本にやってくる。日本で他の女性と正式の結婚するので、ラビエル嬢の処置に困った大尉が椿に頼むと、彼はこの金髪美人をうまく手なずけた上、外人の仲間に売渡し、彼女は結局上海の市場で処分されるのだが、この間に読者は想像の幾頁を挿入することができる。(しかし記述自体にサディストを喜ばせる所はもとより少しもない) そういういくつかの点を考えに入れた上でも、なおこの小説を、その題名につられて読む必要はない。といい切つて恐らく誤りはないであろう。

なおこの作品の中で「半処女」というフランス小説が扱われる。これについて問題があるが、これは別項で書くことにしよう。

第六十八 「道遠からん」

次の主題に移る前に、右の岸田国士についても一項費しておこう。先頃死んだが、この人は元来が劇作家で、この方でも一つ取上げておきたい作品があるから。「道遠からん」別名「海女の女王」はこうして選ばれた」という戦後発表の四幕の戯曲。雑誌「人間」に載り、増補して創元社から出ている。

内容紹介には、二十五年秋の文学座公演の時のパンフレットに手頃な解説があるから、その一部を写しておこう。

ここは、原始のおもかげをそのまゝつたえたようなところと、近代文明の到りついたところとを、あらゆる点でまぜ合せた、ある時代のある地方の漁村です。ここでは、家庭においても、社会においても、生活の主導権はすべて女性の手に握られています。



男性に男らしさがなく、女性に女らしさが無いのはそのせいに違
いありません。

女警官の威勢におびえたり、女同士の喧嘩にはらはしたりす
るにつけても、男達は男達の解放について、男性の自由と幸福に
ついて、考えざるを得なくなります。

村の経済力を支えているもの、従って、村の世論を形造るもの
は、イワとリキとを指導者とする海女達です。男を遊ばせて食わ

せておくことが、彼女等の誇りです。男性
の社会的地位の向上などという問題は、ど
うも彼女達には余り気の進まない問題らし
い。それより県と新聞社の主催する海女コ
ンクールの方が、彼女等の血を湧きたたせ
たのはむしろ当然です。

いったいこれは男がわるいのでしょうか
それとも女がわるいのでしょうか。

しかし、いくら奇妙な世の中でも、男が
男であり、女が女である以上、その間に愛
情が生れるのは、これまた当然至極の成行
です。若い美しい海女タケと、一寸やくざ
な色男ナミとの恋愛もさることながら、そ
れぞれ女房や子供や亭主にしぼられている
校長ガクとイワの夫シゲとの恋愛の苦しさ
は、また、ひとしおです。ランデヴウの現
場を夫ロクに見つけた校長は、とっさの
機智で切り抜けますが……

詳しい筋書を紹介するつもりはないので、以下省略する。私が紹
介したかったのは、ここで設定された状況である。徹底的な女性支
配である。「村会議員に男を出そう」「え？ まだ少し早かないか
い」などと女性達が語り合う社会像である。開幕第一場にそうい
う寄生虫的存在たる男性達の会話している場面がある。その一人の
手に握られているのは「男性公論」……

諷刺喜劇として、世相批判としてのこの作品がどの程度に評価さ

れるか、それはここでは論じない。マゾヒストとしての感想だけを述べる、こういう男女性の社会的地位逆転による諷刺を狙う意図からすれば、海女の漁村を持つてくることはあまり成功でない。現実の海女の中途半端な女性優位が状況の仮設に際して雑音になるからである。そこで、例えば帰宅したイワは自分で食事の支度をして夫に食わせる。というように、家事まで女性が引受けて、男には唯遊ばせる。というふうなことになる。これは、マゾヒストとしては、どうも物足らぬ点で、やはり、女性が一家を支える以上、家にある男が家事に従事するように設定して欲しかった。結局海女の漁村を舞台とせぬ方が諷刺的意図はよく出たのではないか、と考えられるのである。

がともあれ、こういう作品があるということは、岸田国士が（前項の小説に「鞭を鳴らす女」という標題をつけていることや、別に「女人湯仰」という戯曲のあることなども考え合せた上で）やはりマゾヒズムに親近性を感じる精神的素因を持合せていることを示すと見て、ほんゝ誤りはないであろう。

上演では杉村春子がイワになって肉体を露出したが、貧弱であつた。

第六十九 馬上の令嬢

前々項の作品を羊頭狗肉と評したが、とに角、「令嬢が男を乗馬鞭で打つ」という場面があるので、マゾヒストとしてもその点は認めてやらねばならぬ。

こういう場面は外にも随分ありそうな気がする。菊池寛の「真珠夫人」以後、通俗現代小説は、昭和初年の爛熟した資本主義文化の

生んだ上流特権階級の女性達を幾人ともなく女主人公にして来た。その中には「馬上の令嬢」や「乗馬鞭を揮う貴婦人」の主題も決して少くなかった筈である。今手許にないが、加藤武雄の「珊瑚の鞭」などは、開巻劈頭から乗馬中の令嬢が出て来る。彼女は男性に対しても嬌慢そのもの、試験官見たいに愛人達の態度、容貌、頭脳、愛情を採点したりするところが描かれている。しかし鞭で男を打つ箇所は今思い出せない。というのは、私がこれら通俗小説を戦前耽読した時には、私はまだマゾヒストではなかったので、現在のマゾヒストの眼で読めば感銘強い筈のところも、それほど印象深く感じなかったし、復員後は、それらを再検討する余暇を持ってないからである。

一つだけ憶えているのは、吉屋信子の「双鏡」である。彼女の初期の作品で、文章はごく稚ない。栃木の女子刑務所を出所した美少女が、瓜二つの双生児の姉の身代りになって富豪令嬢の仮面をつけ、モンテ・クリスト見たいに、かって自分を苦しめた男に復讐するという架空感の濃いストーリーである。

この中に一場面がある。新らしくヒロインの崇拜者となった貴公子が、軽井沢なるヒロインの別荘へ向う途中で、やはり良家の令嬢である昨日までの愛人が馬に乗ってやってくるのに行き逢う。彼女は彼の愛心を知って、自尊心を傷けられ、別れのことばと共に、馬上から、彼の顔を鞭で、頬に赤いみみずばれを残して、駆せ去ってしまう。この場面は、後に描かれるヒロインの手によるもっと恐ろしい復讐の前触れとして、「女の復讐とは？」という主題の一環として描かれているのだが、とにかく「馬上の令嬢」主題からは逸することができない。

外にも牧逸馬、三上於菟吉、小島政二郎、久米正雄……これら作家の諸作を見ればまだまだある筈だ。いずれは再検討して、更にこの「手帖」の稿に拾い上げたいと思うが、とりあえず、読者諸君にして、思いあたる作品を御存じの方があれば、どしどし指摘していただきたいものである。

第七十 恋人に鞭を贈ろう

「馬上の令嬢」というテーマで思い出すのはバルザックの「モDEST・ミニヨン」である。その大詰め場面が大狩猟会なのである。

バルザックのものはすべて筋が複雑で、この小説もここで筋書を紹介することはあきらめておくが、とにかく、モDESTという地方貴族の令嬢を廻って、大詩人カナリ、その秘書エルネスト、及びデルーヴィル公爵の三人が恋の争奪戦を演じ、はじめはカナリが優勢であるが、結局一番不利な条件だったエルネスト青年が、ブツチャ（次項参照）の助けを得て、恋と名誉を得、ラ・バステイ・ドラ・ブリエル子爵となるのである。

王室参加大狩猟会がデルーヴィル家の領地で催され、貴婦人達もすべて馬に乗って狩りに参加する。モDESTは乗馬はうまいのだが、自分の乗馬鞭に似合う鞭がないことを前からこぼしている。当時の貴婦人にとっては、乗馬鞭が一つのアクセサリとして考えられていたのである。エルネストは財布をはたいて七千フラン出してパリで一番立派な鞭を買う。握りは黄金に狐獺の絵を彫刻したもので、ルビーが附いている。この鞭を彼はモDESTにプレゼントするのである。



これが私には甚だ感興を惹くところだ。帽子を贈った、指輪を贈

K.S.

った、というのとは違う。鞭を贈るのである。鞭は支配の道具である。それを恋人に贈ることは、彼女に対して、自分を支配してくれという意志表示ではないだろうか。それは結婚の申込であると同時に、「もし結婚して貰えれば、夫として妻たる貴女に絶対服従します。私を馬のようにこの鞭で支配して下さい。」という申出ではないであろうか。

それはあまりにもマゾヒスト好みの読み方だというのか。よろしい、バルザックに語らせよう。

モデストははじめエルネストに気がない。だから、その鞭を使おうとしない。ところが、ある事情から、彼の愛を受入れる気になると、早速この鞭を携えるようになる。「暗緑色のカシミヤ織の見事な婦人乗馬服を着、緑色のヴェールの附いた可愛い帽子を冠って、鹿皮手袋をつけ、ズボンのレースをひらひらさせた足にはビロードの長靴を穿いた」モデストが、その鞭を握った馬上姿をバルザックは情熱的に描写している。ジョーリウ公爵夫人が鞭に目をつけて、これを賞める。すると彼女は、贈主であるエルネストに聞えるような声で、そして彼にいたずらばい眼差を投げながら答える。

「これを未来の夫たる人から贈られたとすれば、随分変わった贈物でございましょう——そうじやございせん？」
それに対してモーフリニューズ公爵夫人が口を挿んでいう。

「私だったら、それを自分の権利の宣言だと思えますわ」

.....
かように未来の妻に鞭を贈ることが、夫を支配する妻の権



利を認めるのを意味することは、作中の人物も、従ってバルザックも承知しているところであるのだ。

マゾヒスト諸君、恋人に、妻に、鞭を贈ろう。それに何か添えてね。

第七十一 飼犬志願

モデストはかくて、馬として乗馬鞭で扱われることを欲する男を夫にしたわけなのであるが、この「馬」がかなり譬喩的な意味でいわれているのに反し、もっと現実的に「犬」として扱える男をも、彼女は崇拜者の中にもっていた。それがビュッチャである。第五十五項で紹介した哀れなアルジェリ人の手紙の中に、ビュッチャと已れを比較した箇所があったのを憶えている読者もあろう。

彼はせむしで侏儒である。七才の時から人の憐れみの下に生きて来た哀れむべき私生児である。彼はモデストを気が狂うほど愛している。しかしそれは虫けらが星を慕うような片恋で、彼女にとっては彼は全く結婚の相手として念頭に上らない。女を愛しているだけではその求愛者たり得ない。女と結婚する資格をもってなければ求愛者たる資格はない。だからこの醜い不具がいくら自分を愛しようが、モデストにとっては彼は求愛者でない。作者のバルザックすらそう扱うのである。「モデスト・ミニヨン」の副題は三人の求愛者であって、前記の三人だけが求愛者の仲間に加えられており、ビュッチャは求愛者と認められていない。彼は一人前の男として扱われていないのである。

彼は自ら彼女の番犬となることを申出る。

「用心深い犬を飼うように、私を使って見て下さい。私はあなたに服従し、あなたを守ります。然し吠えはしませんし、あなたを批判したりはしません……哀れなビュッチャは何も欲しがりません。骨だっても」

「じゃ、あたし、あんたを試しに使って見よう……」

こうして、彼は彼女から飼犬として受け入れられる。そして全篇を通じて忠犬として行動する。エルネストが恋に成功するのも、ビュッチャが色々なことを嘆き出してくれたからなのである。モデストも、そういうものとしてのビュッチャは可愛がっており、その活躍には非常に感謝しているのである。ビュッチャは、譬喩的にだけでなく、本当に犬見たいな行動をする。モデストの母であるミニヨン夫人の鼻をかんだハンカチが、スカートの上から床に落ちれば、命ぜられなくとも、部屋の隅からそれを拾うために走って行くし、小石を拾うような恰好をして、モデストの靴の先に接吻したりする。それをしてるのは醜いせむしの侏儒なのだ。そういう家畜的行動に似つかわしい外貌をもっていることの幸福というものか。飼犬が結婚したからとて彼女の側にいらなくなるわけではない。ビュッチャはあらかじめモデストに申出る。モデストの選んだ夫は「あなたと同じように、ジャン・ビュッチャを召使いにすることができます」と。彼はモデストの子供の家庭教師となつて、彼女の側にいるつもりなのだ。「王様の召使い達がチユイルリ宮殿で暮すように、私はこれからモデスト様のお側で暮したい。私にロシア皇帝にならないかといわれたって、私は断ろう。私は太陽を愛し過ぎているから」と。読者諸君、あのアルジェリ人が何故ビュッチャの名を挙げたか、これでお分りになったであらう。

〔註〕 八一頁に挿入の絵は、清水昆画の文学座公演の時のパンフレットの表紙

少年の禪美こんびに就て

山口 幸一

丹唇皓齒の美少年が禪一本になった肢体はこの上なく美しいものである。昔と言っても大正頃迄の少年は、殆んど全部が常時六尺禪を着用していた。

外国から猿股が入ってきたのは、最初日本

の女性に用いさせる為であったが、それを日本の男性が取ってはいってしまったのである。外国の男性はワイシャツを禪の代用として用いる事は衆知の事実で、パンツを用いる場合には、下にサッポーターというゴム製の禪を

着用する。

ある徴兵官の記録に、大正年代の青少年は亀頭の露出している者が七〇%あったが、昭和年代には三〇%よりなく、他は包茎であった、とある。

これは、大正明治時代は十二、三才から六尺禪を常時用いたが、昭和に入ってから殆んど猿股となっていたためである。即ち、昔の少年は十二、三才頃から禪を締める事によって、包茎の自然療法を行わせられて居たのである。

又、食物に於ても、日本人が麦飯、漬物等量が多く栄養価の少ないものを多量に摂取すれば、必ず胃拡張や胃下垂に陥りやすくなるので、その為の予防にも日本人と禪というものは密接な関係があるのである。外国人の如く、量少くカロリーの高いものを摂取する者と同じには考えられないのである。

だから日本の少年は、ことに労働により腹部筋肉を使う事の少ない都会の少年や、上流家庭の少年は、十三、四才頃からパンツをやめて、必ず禪を着用させる事が好ましいのである。少年は初め恥しがったり、気持悪がったりするが、二六時中着用させれば二ヶ月位で却ってパンツより気持が良くなり、以後は

そのまゝ愛用するようになる。

十五、六才の良家の少年で、小さい時から六尺禪を常用している子を知っているが、少しも嫌がって居ない。私も中学校の二年生の時から六尺禪をさせられ、初めは非常に嫌だと思ったが、一ヶ月位たつと却って外すと氣持が悪く感じた事を知っている。やはり親から何とはなしにさせられて、其後ずっと続いている子が多いから、初めは嫌がっても強制的にさせて馴らさなければならぬ。

生地は白の晒木綿が良く、十三才以下は長さは六尺あれば良いが、十五才以上は七尺にして、充分巾を広く腹が締まる様にさせなければならぬ。

次に、文献に現われた少年の禪美について言及する。昭和の初頃の単行本に、福富氏著の『禪』という本がある。

主として江戸文学の洒落本などから引用した挿絵が多く禪を滑稽に取扱っている。

その中で、禪を日本人特有の着衣であるとし（但し、熱帯地方の野蛮人は別として）、温帯に住む文明人だけを対象として、禪美を讚美し、宜しく日本人は少年の頃から禪を愛用し、同胞手をつないで民族の発展に邁進すべきであると強調している。

その本の中に記載してある俳句に、

『宮様の禪姿も時世なり』とあるが、これは少年貴族が海水浴場で禪一本の姿で、衆人環視の中に裸身を曝す場面をうたったものである。

又、昭和初め頃の『少年世界』や『日本少年』という雑誌には、高島華宵氏画く所の美少年の禪姿の絵が数多く掲載されていた。

それらの少年小説の筋書は一々覚えていないが、女にしても良い様な美少年が禪姿で緊縛されたり、舟から海に投込まれたり、相撲で投げられたりしている絵が沢山あった。

又、時代小説の中でも少年の切腹姿や斬込姿があったが、何よりも先ずその少年の禪に注目させられた。

同じ頃の『少年世界』に出ていた小説で一寸異色ある小説があったので左に略記する。

『ボーイスカウトの少年達が、日光か何処かでキャンプをしている。そこに外国人の少年達がやって来て、やはり近所にキャンプをする。外国少年の一人が、日本少年の一番少年な者をいじめた事から喧嘩になる。日本少年の隊長は勇雄という名の十五才の美少年である。外国少年の頭は勇雄の優しい容貌を見てなめてかゝり、隊長同志の格闘で雌雄を決し

ようと無理にいどんで来る。

勇雄も責任を感じ仕方なく格闘を承諾させられる。外国少年はパンツ一つの裸体に隆々たる筋肉を見せて、拳闘の構えで迫って来る。勇雄はシャツを脱ぎズボンを取り、真っ裸に白い六尺禪一本の姿で日の丸の鉢巻をしめ、柔道の構えである。この場合勇雄は格闘する為にわざ／＼禪を締め込んだのではなくて、不断から六尺を常に締めていた。その頃の少年は十人の中三人位は禪を用いていたのである。勝負はあっけなく済んで、女のような美少年の勇雄の空気投にかゝって、外国少年は強たか大地に打ちつけられ起き上れない。

外国少年は乱暴をあやまって日本少年と仲直りをする。外国少年が勇雄を取り巻いて、不思議そうに勝利の理由を聞く、勇雄は『僕達日本の少年は、四六時中六尺禪を締めていゝ。勝利の秘訣はこの六尺禪だよ』と言いなから、腰に廻した禪をたゞいて微笑する。』

という小説である。挿絵も非常に美しく画いてあり、少年時代の筆者はあかずにこの小説に読みふけたものだった。

この小説は少年に禪を常用させる事を大胆に奨励した、極めて異色ある作品であると思つてゐる。

又、上司小剣氏の『妾垣』という小説の中に、十六才の少年が祭典の花車を曳きに出る時、父親から強制的に緋縮緬の禪を締めさせられた。その時緋縮緬の肌にくれた感覚によって、強烈な性的刺激を受けた告白が述べられてゐる。この事については、後に禪のマゾ的感覚の項に於て述べる事とする。

次に、歴史的に現われた少年の禪美を取扱ったと思われるものについて言及すると、
「加藤清正は城中の広間で多くの美小姓を集め、色種々の下帯を締めさせ、相撲をとらせてこれを賞美した」

「織田信長も小姓達の相撲を奨励し、自らもその仲間に入って楽しんだ」
「佐々盛政は小姓を禪一本の裸体にして、寒中庭で責めた」

「薄田隼人が少年時代、小姓として初めて殿中に伽に泊る夜、緋縮緬の下帯を締めて行った」



「赤穂浪士が切腹をする時、大石主税、矢頭右衛門七等の年少者には特に赤い下帯を賜った」

その他、まだ数えればあるが省略する。
次に少年の禪美を現わすものに、「博多山笠」がある。七月一日より博多櫛田神社の祭

礼の花車を曳く少年達は全部赤へこ禪をかけ、ハッピ姿にて町を練り歩くのである。

大概の町の祭りは今では少年はパンツ姿になったが、博多や小倉では今でも皆禪を締めさせる。

稲垣足穂氏は少年美について数々のエッセイ風の創作を発表されたが、キアルマタ（パンツの極めて短いものでパンツと禪の中間ともいうべきもの）の魅力について書かれた。又、電車通を馳けて行くマラソン練習の白いパンツ姿の少年美について、言及されている。これはパンツの下にはいるサッポーターや、禪を想定して初めて肯けると思う

次に禪のマゾ的効果を分析してみよう。禪は男性特有の着衣であり、それを着ける事により、男性としての自覚を強調されるのである。だから女性的少年にとっては禪を締めた時に、自分が男性としての義務、即ち兵役、戦争、格闘、相撲等に身を曝さなければなら

ないという事を意識し、マゾヒスティックに感ずるのである。又、緊縛という面から考察すると、禪は典型的な股間縛りであり、その触感と共にマゾヒスティックな感情を発するのである。又、触感について言及すれば、アイヌス及び前立腺に対する禪の触感は、浣腸や鶏姦等に類似する刺激を与えるので、ソドミアやウールニングとも関係がある。

殊に相撲の禪を締めた場合は、その物理的触感の強さと共に当然、次に起るべき激しい格闘と、投げられた場合のマゾ的感觉を連想する事により、一層その効果を強めるのである。禪のマゾ的效果を裏返しすれば、サディスティックな効果となり、マゾとサドは一体であるからサディスティックな対象となっている少年を自己の虚像と考えれば、マゾヒストとしての感情を味う事が出来るのである。

次に禪の考現学的考察を述べる事とする。

但し、これは水泳、競技、相撲等スポーツの用具として一時的に用いるものを除き、着衣として常時寝る時も外さずに着けている場合のみに限る。

Aは十才の時、お祭りの時に初めて禪を締めてその異状な感覚を知った。十三才の時よ

り常時六尺禪を用いた。色は黒モスリンにて水泳の場合用いたものを、二六時中締めていた。

Bは中学校一年の十二才の時から白い六尺禪を締めた。これは初め母親から禪をしなさいと言われて締め始めた。

Cは十六才、工員で十三才より黒い六尺禪を着けている。これは同じ寮の友達の真似をして使い始めた。

Dは尋常六年十二才より越中禪をしつけている。禪は白い晒布の前後に紐を通したもので、母が作って締めさせた。

戦時中、昭和十八年十九年頃は、十五、六才の中学生の中、大体パンツ二〇%、猿股一〇%、越中禪六〇%、六尺禪一〇%、位の割合で白い紐付の禪をした少年が多かった。

最近にては九州地方にて同じく十五、六才の少年を対象として推定すると、パンツ七〇%、猿股一〇%、越中禪一五%、六尺禪五%位である。

東京、大阪等の都会の少年層にては、パンツ八五%、猿股一〇%、越中禪四%、六尺禪一%、位で常時六尺禪を常時使用している少年は極めて少い。もしそういう少年を御存じの読者があったら誌上に発表して頂きたいと

思う。

次に海岸地方の中学生を対象として考えると、鹿児島県串木野地方、北海道小樽地方にては現在にても、串木野地方はパンツ四〇%、猿股一〇%、越中禪四〇%、六尺禪一〇%、位の比率を示している。小樽附近は、パンツ四〇%、猿股五%、越中禪二五%、六尺禪三〇%、位である。

此の中で越中禪と称する中に水泳用の紐の着いたマウシを含む事とする。

少年で禪を常用する者が少くなったのは戦後からであって、古いものに対する無反省な軽視思想の影響であり、一時相撲が衰微したのと同様であろう。

最近、漸く反省の段階迄落付きを取り戻して来た。人種的、体質的に最も適合せる衣服は何世代にもわたって経験されたものであって、これを短時日に無用意に変更する事は出来ない。

日本の少年は宜しく常日頃、巾広い六尺禪を下腹にきりりと締め込んで、それに早く馴れる様にして頂きたい。

二千年の歴史を貫く、日本の美というものは、そう簡単に変更されぬであろう。

非小説

性液

(九)

伊藤晴雨

「エッ、君子が女じゃあないんでゴワスカ」
 「フッフッフ、君も役者じゃあないか、ナン
 ボ一銭蒸気の中で〃船中毎度お八ヶ間敷う御
 座いますが」と二〇枚五銭のインチキ絵はが
 きを叩き売って居て、それから大阪へ行つて
 五郎の弟子になって五九郎という名を貰った
 一夜漬けの役者にしたって君子のかぶって居
 るかつらに気がつかんというのは迂闊だよ。
 ワッハッハッハ、」

阿呆らしいこっちゃん
 「一番人の好いかおるを金子洋文さんの細君
 にやっちまったなんざあ大出来だったか君子
 に一杯喰わされたなんざア上手の手から水が
 洩ったんだね」
 「ほしたらあの君子が女でなかったらえゝ女
 形でござすナア」
 「君は知るまいがあの君子はね、横浜の不良
 少年で磯子や程ヶ谷辺りのドサ廻りの女形な
 んだ。此頃低地贄だの宇佐小路立徳などとい
 う文士連中にあの方の好きな連中が殖えたの

でね、機を見るに敏なる此店の支配人がね横
 浜から連れて来て文士連のサービスをさせて
 居るという事を知って居るんだ。どうだ僕の
 炯眼に驚いたか」

「さよか、そらエライコツチャ、そやったら
 わてエ、考えがおます、あの君子役者にして
 わての芝居に出て貰いよったらエライ文士方
 の先生の名で脚本かいて貰いますワ」

「相変らず猜い事を考えて居るんだな、総理
 大臣の花環を飾って浅草の見物を瞞着するの
 より罪が深いぞ」

「そな事いわんでおいておくれやすな、わて
 よういわんワ」

「オイ君子、一寸此処へ来いよ」

竹破先生は君子を呼んで額の処へ一寸手を
 かけた。ハッと思うと君子の前髪を掴んで持
 ち上げた。羽二重が少し飛び出して見えた。

「ソレ見ろ、君子の正体はこれだ」

「アレ、先生いけませんよ。化けの皮が剥げ
 ちまうワよ」

「まだいゝだろう、お馴染連の来る時間じゃ
 あないからな」

君子が島田のかつらを直して居る時、ドヤ
 くと二、三人這入って来たのは噂をして居
 た文士連中で此頃流行のルパシカを着て居る

連中である。五九郎や竹玻先生の方をジロリと眺めて二階の階段を昇って消えて了った。「一寸失礼致しますワ、今すぐ参りますからね。」

君子と呼ばれて居る仮装女給は本名を石原美津夫といって横浜の新派の女形で二ヶ月程前から此店へ住み込んで人気ものになって居るのである。

「竹玻先生、ワテえゝ事思い附きましたんやナア先生、今講談社から発行しやはった人肉の市〃ちう本がおまっしゃろ、エライ評判やというこっちゃおまへんか、あれをワテの経営しとる浅草の観音劇場でやりよったらよろしいやろと思ひまんネン」

「そりやあいゝ思ひ附きた、君の目のつけ処はエライよ、いゝ考えた。併し版權料が高いだろうよ」

「なんぼ高うても大事おまへん、芝居は脚本料を惜しみよったらでけしませんよってナ」「エライ、文展の彫刻の豊太閤をかって秀吉を以って任じて居る丈けあっていゝ度胸だ」「そやよって、ワテ先生にお願いがおますのや」

「何だい、君の願いならロクな事じゃあなからう」

「お手の筋どすな、まあ早いトコ云いまほか其〃人肉の市〃いうたら女を縛って責めて、それから……」

五九郎は竹玻先生の耳へ口をあてゝボソ／＼何かいった。竹玻先生は笑い乍ら、

「フムフム、そりや面白いだろう、己れも此頃は日の出に浪斗りかいて居るので少し飽き飽きして来た。一つ舞台装置という奴をかいで見るかな」

「是非お願い致しやす、先生の装置やつたら大道具にウンと掛ける事にいたしやすサカイ」

「大山鳴動鼠一匹か、まあいゝやライオンの飲み友達だ。一つ大いにやろう」

二人がビールの満を引いた居る処へ紺緋の筒袖に小倉の袴を穿いた若い男が這入って来て、隅ツコのテーブルに崩れる様に腰を下してジョッキを一杯前に置いて懷中からノートを取り出して鉛筆で書いては消し書いては消して居る。女給連は〃例に依ってだ〃という顔をして傍へ行こうともしない。

「オイ五九郎、君は一寸此処を外してくれ給え」

「へエ……もう時間でおますよって帰りますサ。先生、今の事何分お願いします。」

「よし引受けた」

五九郎は禿げた頭をペコンと下げて出て行った。

「オイ、石川君どうした。ヒドク淋し相だなア、こっちへ来給え、久し振りに飲もう」

石川と呼ばれた青年はオズ／＼竹玻先生の前へ来た。

「オイ桜（女給の名）此人はね、石川啄木といてね、今東京朝日で短歌の選者をして居る人なんだ。時々来るかい、君。」

啄木といわれた青年は淋し相な顔をして懷中からノートを出して竹玻先生に示し乍ら

「詩人なんてツマランもんですなあ、一生懸命になっても僕の月給は二四円なんですよ先生、泣きたくなる事がありますよ。我れ乍らつく／＼自分の手を見る事がありますよ。小石川の家から滝山町の本社迄通う電車賃が無くて歩く事がチョイ／＼ありますかね」

「ソリヤ骨が折れるだろう、併し君の才能は相当認められて居るじゃあないかね」

「駄目ですよ、石川啄木選なんて名前斗りです。先生はいゝですね、日の出に浪をかいて居て豪奢な生活が出来るんですから凄いですよ。此間聞きましたよ、美術部の記者に……先生が京都へ行かれて祇園の芸妓を買わ

れた時の話を……横山大観さんの女を先生が取って何万円かの大金を大観さんの前へ叩きつけたという噂でした、ホントウですか先生、羨ましいですよ先生、詩人は恵まれないものです。知己を百年の後にまつなんて事は理想論です。現在に於てすら知己を得られないものが百年の後に知己を得た処で何にもなりませんね、先生」

啄木は袖で涙を拭いた。情熱の詩人は注がれたビールを飲んで、

「一杯八銭のビールのジョッキで二時間も一つ椅子にネバツて居る事は悪いかも知れませんが私には自分の家へ帰る事がトテモ淋しいのです。先生には柳橋にお妾さんがありましよう、私には貧しい家庭がある斗りです。詩を作るより田を作れでいっそ故郷の岩手県の浪民村を思い出して、



あの岩手山の姿が眼に浮んでならないんです」

茂木習古描く処の半裸体の天女も愚痴と涙に泣き濡れた啄木の眼には何石山の秋の月であった、一杯八銭の大ジョッキすら十分に飲む事の出来なかった当時の啄木が今生きて居て、啄木の研究「なんかという書物を出版して、顔をして居る人間を見たら何と云うだろうと、筆者は啄木と取り替した事のある丈けに彼の不運を悲しむのである。

竹坡先生と啄木の二人がソミリとして来たので、取巻きの女給連も稍暗雲低迷という形勢になって来た時、汚れた腐ったネンネコで当才になった位の赤ン坊を背負った蓬頭垢面の男が額縁に入れない洋画を二枚下げて這入って来た竹坡先生の前に恭々しく頭を下げて一枚の名刺を出した名刺には上野山清貢と印刷し

てあった。

「私は女房に死なれて此子供を置いて行かれましたもので困って居ります。此絵を買って頂けないでしょうか、いくらでもいいです。此子供のミルクを買ってやる金さえありやいいです。」

上野山清貢といえは二科会の前身ヒューザン会の一員(?)で異端の画家として知られて居た。当時の文壇に名を知られて居た本間久雄の弟の本間國雄や村山智義などが少し認められて来た頃で、上野山清貢の名が当時第一流の文芸新聞として銀座の一丁目にあった頃其文芸批評欄を賑わした頃の事であったから竹坡先生が驚いたのも無理はなかった。

「君があゝ此頃話題に上った上野山君かい、そうかそれはお気の毒だ。併しどうして君、自分の作品を自分で売って歩かなければならない程困って居るんですかね」

「ハイ名前と実質とは併わない物で御座います。私達の芸術はまだ認められてないんです。マチスもゴーガンもそういう時代があったんでは無いでしょうか、先生僕は今背中にいる子供と二人餓死一步手前迄追いつめられて居るんです。先生恥を忍びます、先生に画を買って頂きたいんです。併し筆は一

本なり箸は二本なり、衆寡敵せずといふましたが全くその通りです。どうか此絵を買って下さい、そうすれば今日一日僕と子供と二人助かるん御座います」

縷々として尽きざる上野山君の言葉に竹坡先生は黙って懷中から百円札を二枚出して「じゃあこれでミルクを買ってくれ給え、いつ迄も有りと思うな親と金、ないと思うな運と借金サ、僕の弟の國親が故郷の富山の町で大道へ座って一枚一銭で画をかい居たのを小堀鞆首先生に拾われて東京へ来たお蔭で僕も東京へ来て今じゃあこうやって浪に日の出を一日に二百枚宛製造して安樂に暮しては居るものゝ天下は廻り持ちでどんな境遇になろうとも判らない、相身互身だよ」

上野山君が二百円貰って帰ろうとする時ドアを開けて這入って来たのは読売新聞の美術批評家の関如来という男で、酔歩漫散として握り太のステッキを突き、羊羹色の羽織を着て、下駄斗りは不似合なものを履いて居る。「上野山、またやってるな、ナニ尾竹に金を貰った、ハ、ハ、ハ、泣き言を並べて銀座を片っぱしから歩いているのが芸術家らしいな、変な顔をするなよ、どっちが上だか判らん様な風景画をかいて売ろうとする方が間違

って居るんだ。オイ尾竹君、こんな男にやる銭があったら已れに少し借せ、ナニ沢山なかったっていゝ、昨夜は横山に烏森をおごらせてやったんだ。若い芸妓を七人斗り一晩で片付けちまったんで少し疲れた。明日は晦日で米屋の払いに困るんだ。五百円かしてくれ給え、五百円でいゝ」

美術批評家の関如来は、新聞という公器を利用して画家、彫刻家、其他の美術家から金を貰い着物を貰い羽織を貰い帯を貰い袴を貰う、社から貰う月給は残らず飲んでしまいい美術家連中からタニと云われて居る男で晩年小石川病院で不目出度く死んだ男である。

本誌とKK通信の

バック・ナンバー在庫

奇譚クラブ並にKK通信の旧号は左記の通り在庫しておりますから、未入手の方々は直接発行所宛御申込み下さい。

○本誌、昭和二十七年、十月号、十一月号(一部送共九十円)昭和二十八年新年号より昭和二十九年九月号迄、各月号共在庫(一部送共百円)六冊分以上まとめて御申込みの方へは景品贈呈

○KK通信、第十号より第二十二号迄在庫(一部送共二十円、六回分送共百円)

續・被虐哀歓

眞金鍛次郎

本日、編集部より続きを書いて送れとの便りが来ましたので、又とりとめのない事を書いて見ようと思います。前の続きをという事ですか、それを書くとき長くなりますし、くどくどと前の事を繰返す様で面白くありませんので、それは後日にゆずる事にして、今回は別の事を書く事にしました。

前にも書きました通り、身体全体が毀されてしまった様な気がして動く事すら出来なかったのが、内出血の痕もなくなり、縄ですりむけた手首や胸などの痂もすっかりむけて、奇麗に癒ってしまつたのは、それから半月あまり経つた後でした。立つ事も坐る事も出来なかつた私が、こうも早く元通りに成つた事

を喜びました。というよりも、あれ程ひどかつたのがこうも早く回復したという事が、一種の奇蹟の様に感ぜられてならなかつたのです。人間の強さというものにつくづく驚いた位です。

それから私の官能は、自分でも驚く程變つてしまいました。今迄は誰かゝやられていたりすると、泣き叫ぶ声などにも恐ろしくなつて、がた／＼ふるえながら部屋に小さくなつていたものですが、それからというものは、部屋の前迄行つて透間から覗いて見たりする様になりました。どうした訳か、私の件以来廊下よりも主として空部屋ばかりが利用される様になつたのです。自由奔放な責め方が出

来たからに違いありません。

覗き見るといふ事は楽しい事でした。二人共私が引戸の穴から見ている事も気づかず、夢中で竹刀や得意の赤房のついた細い竹の笞を振り廻している事が珍らしくなかつたのです。責められてゐる者は全身汗だくとなり、足の指先迄の字にひん曲げて苦痛を耐えながら、少しでも笞を避けようとしてあがいてゐる様子などを見ると、胸の動悸が自分でもはっきりと聞える位でした。もう一度あんな風にやられてみたい、出来れば身替りに責められたい、という衝動にかられるのです。大声で唖鳴りながら竹刀が大きく振りおろされて、鈍い音が聞えると同時に、肝臓を引きつ

られる様な悲鳴をあげてもがく姿などを見ると、事更たまらなくなつて来ます。

然し、戸を開けて入って行くなどという事は勿論出来ません。まして未だ二十才前の私でしたので、何かもう一度悪い事をして罰を受けるという勇氣(笑わないで下さい。こういうところに勇氣という言葉を使つても)など湧いて来る訳ありません。生唾を呑みながら一心に覗いて見ているより外に方法がなかったのです。色々な醜い恰好をしてもがくところなどを見ると、自分もあんな姿で泣き叫んだのだらうかと考えたりして、部屋にかえって消灯の後で隣に氣を配りながら、そうしたぶざまなポーズなどを真似たりしながら遅くまで起きていたりするのです。

そんな訳ですから、あんな酷い事をされながら、寮長などを恨む氣持などは毛頭なく、むしろ、もう一度息詰る程激しく責めて貰いたいという氣持の方が、強烈に仿っていたのです。

それからの私は、休みの日などを利用しては麻縄を携えて山深く分け入り、足首を縄で縛って木に吊しあげたり、大腿部を紫色に変わるまで撲つたりして自分を責めて見たのですが、そのたびに不満の氣持を抱きながら暗く

なる頃ぐったりとして帰つて来るのです。なんとかしてあの時の様な絶頂感を味う事が出来ないものだらうかと、色々研究して、自分で上手に手足を縛る事も出来る様になり、猿轡なども嵌めて見たりしたのですが、どうしてもあの時のような、夢幻の世界に入る事は出来ませんでした。

それからの私は、前後の見境もなくアブの世界へ突き進んで行きました。それでも人に知られる事は流石に恥しく、風呂敷に麻縄や使い古した靴下や、汚れたタオルなどを用意して、人に見られない様に心を配りながら、山深く分け入り、技振りの良い木や適當な場所などを探して歩くのです。良い場所が見付かると、着ているものを全部脱いでしまします。涼しい風が肌を撫でて行くのは、何んとも云えぬ良い氣持でした。

先ず、用意して来た四米位の麻縄を膝の高さに木に縛り、一方の端を引っぱれば締まるように輪にして、出来るだけ木から遠く離れました。次に靴下を口に入れ、タオルを四ツにたゝんで其の上に当てると、別の一米位の紐で幾重にも縛り、鼻から呼吸するのも困難な程、鼻の頭にもかけて変形する程緊く締めつけました。こうすると、胸を大きくはず

ませて息を吸わなければならず、頭がガンガン鳴り出して、フラ／＼して立っていられない位です。小量より入つて来ない空氣を無理に吸い込もうとする努力の爲、出すまいとしても呻き声が出てしまいます。涙をぼろ／＼と流し、よろめきながら両手を後に廻して麻縄の輪に入れ、次にその縄を担ぐようにしてさがると、締められた両手は水平以上に肩の方へあがって来ます。四米程もある麻縄ですから、全身に巻きつけて木の所迄着くには、両肩、胸、二の腕、腹、大腿部、膝と縦横にかゝり、静脈が青くふくれあがって、とても立っては居られません。

それでも、どこにでも無暗に転ぶと木の枝や竹などがあり、怪我でもすると大変です。で氣をつけて転ぼうとするのですが、それも意のまゝにならず、結局はぶざまな恰好で倒れてしまいます。顔などを厭という程打つても、泥だらけになつても、どうする事も出来ないのです。その頃はもう、苦しい呼吸と緊縛のため顔全体が充血して腫れあがつたように感ぜられ、涙や汗のためにぐっしりと濡れているのですから、一度泥などがつくとも無茶苦茶に汚れてしまうのです。声を出すまいとしても、犬の遠吠のような呻き声を知らず

知らずのうちに
出して慟哭している
のです。そのまゝ
一時間以上もうっ
とりとして泣き続
けていた事もあり
激しい発作の頂点
からさめて、急激
な本当の苦痛が襲
って来た時、起き
ようとしても仲々
起きられず、仕方
なく転がりながら
やっとう手を自由
にしたこともあり
ます。

Sin



然し、どんなに自分を責めて見ても、あの時の夢のような恍惚とした世界に入る事は出来なかったのです。寝ている時以外、私の頭の中は空を切って打ち降される竹刀や笞が、身体に絡まるたびに起る激しい苦痛への執着があるばかりでした。

そんな訳で、私の自虐性は日と共に深まってゆくばかりでした。いや、深まってゆくのではなくて、如何に激しく自分を責めて見て

も、あの時のような絶頂感を味う事が出来な
いたために、益々焦立っていたのでしよう。然
しどんなに責めて見ても、氣絶する迄自分を
責めるなどということは、到底出来るものでは
ありません。

近頃になって私は、変った事を考案して実
行しました。こんな事を書けば氣狂いだとい
うかも知れませんが、馬鹿げた作り話だと一
笑にふすかも知れません。然し、こゝに書い

てある事はみんな本当です。私が実際に行っ
ている時、見られるのは好みませんが？ こ
れを読んで嘘だという人があれば、私はその
人を憾みと思います。何故と聞くなら申しあ
げます。私はこうした自虐遊戯を唯一の楽し
みとして生きているのですから。若し、現在
の私にこうした楽しみがなかったなら、どん
なに生甲斐のないものかと考えただけでも耐
えられなくなる位です。

さて、話を前に戻して、新しく考案した遊戯を申しあげることになりました。最初これを行ったのは雨の降った夜でした。昼のうちに場所や、そこまで行く道路などを具さに調べておくのです。雨の降る最中を、裸の死刑囚ががんじがらめに縛られて、素足のまゝ刑場へ引いて行かれ、絞首刑にされるというストーリーを組立てました。死刑囚は勿論、私です。素足で歩いてても良い様に釘やガラスのかけらなどを拾ったり、場所を撰んだりしておいて夜を待つのです。

その日は日中から雨が降っていました。勿論、雨が降っているというのが絶対の条件なのですが、何故と聞かれても後で解る事ですのでこゝでは申しあげません。傘をさして釘やガラスを拾って歩く私を、奇異な目で見ながら行き交う人などがあると、心の中を見られたような気がして両頬に血が走るのを意識しながら、止める気など毛頭なく刑場へと向いました。

絞首刑の行われる所は、半里程離れた旭ヶ丘と決めました。こゝは私の居る町が一目で眺められる程の高台で、土地の功労者を祭った記念碑があり、春と秋の二回盛大なお祭がある為、休憩小屋などが建っておりますが、

普通の日には人も居ないので最も好適な場所なのです。然し、私の最も気にいったのは頂上まで登る二百段余りある階段なのです。

その階段は、八尺位の丸太棒を横に置いて支えのため両側に杭が打っており、角度が急です。頂上までは両側に鬱蒼と大木が茂っており、昼尚暗きとはこんなのをいうのでしょうか、見るからに淋しい所です。二百段あまりの階段を登りつめた道は左に折れて、両側にサラ／＼と鳴る熊笹の音を聞きながら、細い道を曲がり曲がって一町あまり行くと、一方を切り下げた崖道に出ます。見あげれば、今にも落ちて来るかと思われるような岩が無數に突き出ており、一方は目も眩む程の遙か下を谷川が白い泡を立てています。振り返れば、今来た道が見えぬ位彎曲した道をしばらく行くと、やっと刑場に最も適当な小屋が見えて来ます。

二間に四間の白樺丸太を切って組んだ風流なもので、天井は太い梁がむき出しに掛かって、柱縛り、逆吊しという／＼の形を行うことが出来、四方は一間置きに柱だけで視界を遮るものではなく、町が一望に眺められる様になっており、土間には私の必要な荒筥まで揃

っております。

行きや帰りに釘やガラスのかけらなどを注意して、昼のうちに調査を済ませた私は、雨傘の滴を払う暇もなく、必要な物を買ひに出かけたのです。

其の夜、雨は激しく降り続いていました。夕食を済ますと自室に入り、家人に気づかれぬように気を配りながら、いそ／＼と仕度にかゝりました。押入から麻縄や木綿紐を出して、体の各所を縛るのに適当な長さに切ったり、大きなナイロンの風呂敷にパンを二つと古い靴下やタオルを包んだり、別に麻縄を二本用意したりして、時間の来るのを待つのです。時計が十時をまわると雨で客もないと見え、あちこちの店屋は雨戸を降ろし始めました。窓からそれを覗い、もう大丈夫だと思つたのでそろ／＼支度にかゝりました。

醬油をコップに半分と、酒を二杯呑んでから全裸となり、胸、腹、股間、尻の割れ目、大腿部と、幾重にも嚴重に縄をかけ、上から黒いシャツとズボンをつけました。(念のため書き添えますが、雨で相当の体温が取られますので、酒の量は適量よりやや多い位が良いようです。快よい酔と責めの醍醐味とが合併して、筆舌に現せぬ夢幻の世界に入る事請

合いです。尚、醬油ですが、これを呑んでおくといふ雨の中を裸でいても、絶対に風邪をひく事はありません。

それだけの用意をする間にも、身体各所に巻いた縄の痛みがツキン／＼と襲って来るのでした。雑巾バケツに水を一杯入れて、入口の横の方に下駄と一緒に置くと、庇の下に立って素足のまゝあたりの様子を窺い、人影のない事を確かめて雨の中に飛び出しました。

雑巾バケツと下駄は、帰って来てから足を洗って入る用に用意しただけでした。雨はどしや降りて誰も通っていないのが、私には何よりの幸いでした。予定のコースを歩きながら、シャツとズボンを余り濡れないうちに脱ぐと、ナイロンの風呂敷に入れ、出した麻縄を小脇にかゝえると、ヒタ／＼と足音をたてながら刑場に向って歩いて行くのです。首に風呂敷を下げると、裸で全身に縄のかゝった奇妙な恰好が出来あがります。雨は容赦なく全身をしとどに叩き、顔は勿論、全身に雫が伝わるのが小気味良く感ぜられます。ヒタ／＼と歩きながら私は別の麻縄を使って、首縄、後手と上手に縛りました。

想像して見て下さい。雨の降る中を自分の体を縛り、ナイロンの風呂敷を首にぶらさげ

て、全裸で歩いている私の姿を……。誰が常人と思うでしょうか、もし誰かこの姿を見た時、瞬間どんな事を考えるでしょうか。他人に見られるのを恐れる半面、こんなことを楽しく考えながら刑場に向って歩み続けるのです。その頃から、私の頭の中には縄尻を持つて小突きながら私を刑場へ追い立て、行く男の幻影が浮んで来るのです。昔の絵などにあるように数人の奴が槍を持っていたり、罪状を書いた立札を持っていたり、陣笠で大小を差した武士だったりするのです。

まだ足は縛ってありませんので、私の足どりは割合にしっかりと、一歩々と刑場へ歩を進んで行きます。首縄、全身にかゝった縄の痛み、びっしょりと濡れた全裸の感触、それらの一切が総合されて、多分に自虐の楽しみと受刑者の喜びを味わいながら。

首にまわした縄が適当に呼吸を圧迫し、喘ぎ／＼私は引き立てられて行きます。時々泥水のたまりへわざと突き飛ばされ、じゃぶじゃぶとはだして水の中を歩かなければなりません。書き落しましたが、刑場にかゝる手前に小さな橋がかゝっています。橋の袂まで来ると幻の役人が言います。

「お前にとってこの橋は、幽冥相隔つ事にな

ろう。格別の御慈悲に依り、暫時休息を与えらる。今のうち十分に名残りを惜しんでおくがよい」

雨の夜空を電気の煌々と彩る町の方に向って、私はベタリと両膝を揃えて土下座するのです。こゝまで来ると醬油と酒が腹の中で混合して、適当な酔いが全身を駆け巡り、ボカボカと熱ぼったい裸体は雨のため心持良く冷されて、何ともいられない気持ちに成って来ます。酒と縄の相乗作用に依って、妄想と現実が頭の中で交叉し、しまいにどっちが現実が解らない位に恍惚となって、そのまゝ町の方の空を眺めながら雨と縄の味を楽しんでいるのです。やがて手の縄を静かに解くとズボンなどが濡れないように注意しながら、ナイロン風呂敷をあけて持って来たパンを食い始めます。死刑囚は最後に色々と御馳走を食わせるという事をよく聞いて居ましたので、その雰囲気を楽しむためです。食い終ると橋の袂に立ってあたりに人の居ないのを確かめて、愈々死刑囚として嚴重に縄をかけます。一本は腿の附根を二巻きして、両端に各々足首に巻くのですが、この時にはくの字形でしか歩けないようにしっかりと縛りつけます。靴下とタオルで猿轡をして再びナイロン風呂敷は首

に下げ、手は後で縛ります。これらは立っゝいては困難ですので欄干に凭掛りながらやるのですが、不自由な身をくねりながらです。で、出来あがるまでは相当な時間がかかるものと思つて下さい。出来あがつた時は相当に苦しく立っているのがやっとな位です。

こんな時、町の方へ向つて大声で「助けて

下さい」と何度も叫んでみます。どんなに声を張りあげても、呻き声となつて雨に消されてしまいます。尤も、人に聞えないのが何よりの幸いなのですが……。こうして足をくりの字に曲げ、風呂敷を首によろめきながら橋を渡ると、愈々待望の階段にかゝります。

くどくどと廻りくどいようですが、前にも



出来ませんので其の努力は大変なものです。一段あがれば右を向き、一段あがれば左と繰返すうちに、膝の力が抜けて尻餅をつきそうになります。然し非常に急勾配なため、下手に転んだりしようものなら何処まで転つてしまふか知れませんが、坐るなどということは勿論出来ません。頭の上に覆い被さ

書きました通り股の附根に麻縄が嚴重にかゝっているため、正面を向いて片足をあげる事は出来ませんので、右か左に向きを変えなければなりません。右を向いた時は左の足の踵を尻の方へ向けてあげ次の階段に爪先をかけます。そして全身の力を左足に集中して伸ばすとやっとな段目に片足がかゝるのです。力を集中するといつてもくの字形より伸ばすことが

た木の枝葉から落ちる雨滴は、全身をしとに濡らして、鼻を覆ったタオルは勿論のこと、口の中の靴下さえ唾液でべと／＼しています。

一段あがれば右を向き、又一段登っては左を向きして其の度毎にグブ／＼

と湿り気をおびた呻き声を出して力まなければなりません。悲壮の極みとはこんな時に使う言葉でしょうか……倒れそうになるのをやっと泳えながら、二、三度は休んだと思いますが、兎も角も、漸くにして登り終えた時は、私は最早一步も進めない位疲労していました。

両足は異様な動作のため、激しいけだるさと苦痛に苛まれ、すっかり力が弛んでしまったのです。べったりとその場に身を投げ出して、只激しく息づくばかりでした。強く大地を叩く大粒の雨は、泥を跳ね返して全身を彩っていた事でしよう。顔は勿論、全身に跳ね返るしぶきで、暗い中でもそれを意識することが出来たのですから。

雨と飛沫に身を晒して、どの位呻いていた事でしょう。ふと私は我れにかえりました。首にぶら下げてあったナイロン風呂敷が、胸の下で平たくなっているのに気づいたからです。これを濡らすと大変だと思いました。家

に入る時怪しまれる恐れがあります。大急ぎで起きようとしたが、仲々思うように起きられません。両足を出来るだけ開き、安定を保つと上半身を顎で支え、その顎を思いきって強く膝の方へ引きずるのです。顔全体が



Sin

泥だらけになります、氣にしているは何時迄経っても起きられるものではありません。幾度か横に転り、息づいては又起きあがろうとして足掻くのですが、それらの動作はみな夢心地でやっていたことを銘記して下さい。

漸く起きあがると、再び奇妙な前進を続け、漸く小屋まで辿りついた時は、愈々来たという安心感と激しい疲労のため、ぐったりと土間に身を投げだしてしまいました。家を出る時呑んで来た酒と醤油の効果は、雨を避けて小屋の中に身を横たえた時急激に現われて来ました。身体中が火の様に火照り出したのです。寝たまゝであちへ転がりこちへ転がりして縄を解くと、猿轡のタオルを手にして、小屋の横にある水呑場へ行って見ました。水呑場はコンクリートの槽を土中に埋めて、竹筒で湧水をとるようにしてあります。水槽に全身を入れて奇麗に洗い、麻縄や古靴下などもついでに洗いました。

荒庭の上にどっかと坐ると、水浴の清潔な身に、又新たなサタンの血が騒ぐのです。庭を適当な場所へ敷き替え、煌々と電燈の煌めく町に向って柱を背にして立つと、愈々私の体内の悪魔に最後の止めを刺すべく、いそいそと仕度に取りかかりました。梁に麻縄をか

け、首にタオルを巻きました。上体を折り曲げて足首や膝を柱に縛る時は、腰を柱にしっかりと縛った後でなければ身体が前にのめってしまいます。この方法は相当に苦心して考えたものでした。首を締める時梁にかけた麻縄の一方を引かばなりませんので、両手だけは自由にしておく必要があります。タオルを首に巻いたのは縄で擦り剥けたりするのを防ぐためです。又町に向って縛ったのは、首を締めて意識が薄らぎ気絶状態となる際、電気の光がどのように網膜に映るかを確かめようとしたからです。然しこの方法は明らかに陋策でした。その後幾度かこの遊戯を試みたのですが、総て皆うやむやとして確証を掴む事は出来なかったのです。

ある時は時計を前にしてタイムを計りながら、紐で首を締めて見た事があります。又ある時は、鏡の前で気絶する瞬間の容貌を具さに捕えようとして試みた事もありますが、すべてが皆失敗に帰したのです。首を締めた時は、一切の思考力は消えてしまうものなのでしょうか。只、鏡の前で試みた時は、意外な顔になるのだけは判然と知ることが出来ました。目は想像以上に赤く充血して、心持ちとび出したようになり、額や鼻筋には太い血管

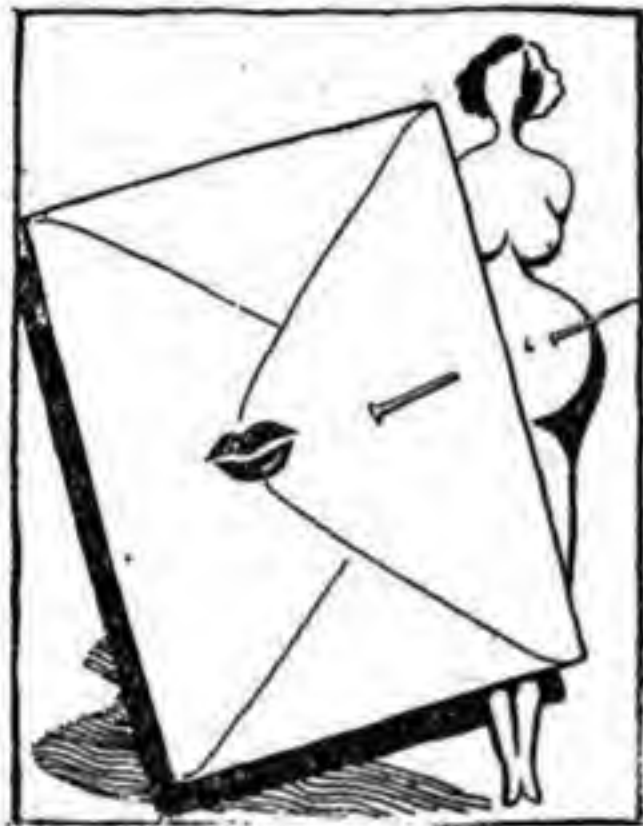
が浮きあがり、顔全体が赤く腫れたようになって舌先は口から食み出し、見るも無惨な容貌に変わっていたのだけは、今でも記憶にこびりついています。

扱、絞首刑のことですが、自分で首を締めても、血液が頭にゆかなくなればある時間を過ぎると、ひとりで手に掴んだ縄を放してしまいますので、絶対に危険なことではありません。只、この時注意しなければならぬのは、首に巻いた縄を引っぱっても必要以上に搾られないように結んでおくことです。両手に麻縄の一端を巻きつけて思いきり強く引っぱるのですが、この時息をしてみても呼吸がわずかでも出来るようならば、更に強く引っぱります。そのまゝ手を弛めずにいると、時を経ずして激しい痙攣が全身を襲い、目は焦点を失って夜空を彩る電気の光も朦朧として来ます。すると、以前に私刑を受けて気絶した時に味ったような喜悦に浸り、全身が波打つのです。

然し、これはタイムを取ることが出来ませんので、時間的な事は書くわけにまいりませんが、少なくとも相当な時間を経なければ正常な意識に立ち直らないような気がします。気がついた時の恰好は、腰から下は柱に縛り

吾妻先生への

公開状



羽村京子

つけてあるため、顔が膝につく位まで上体を曲げ、両手もだらりとたれて鼻からはきまつて粘液が出ています。呼吸が全然出来ないように首を締めるのですから相当に苦しく、あつたことあります。締めている最中には絶対に入つて来ない空気を、無理に吸い込もうとする異様な努力のため、肩から胸、下腹にかけて身体全体が大きく波打つのです。それがとうとう耐えられなくなって離れたのですからたまつたものではありません。自分でも驚く程の悲鳴をあげてしまいました。粘つた粘液が悲鳴と混合して出て来ました。その

時夥しい血が口から出たのです。悲鳴を誰かに聞かれたのではなからうかという不安と、原因不明の血を見たための恐怖とで、あの時はいさゝか慌てました。然し、誰にも聞かれずに済みましたし、血も何かの拍子に舌を噛んだらしく、間もなく止り一先ず安心しましたが、それから必ず猿轡を嵌めて行つていきます。

話がとんだ脇道に外れましたので、又小屋に戻しましょう。ぶざまな恰好で垂れ下っていましたが、意識が蘇えると身を起して再び手探りで麻縄の端を探します。締めては垂れ下がり、気づいては締めするうちに、しまい

には縄の端を求めて探ぐる両手さえ思うように動かせぬ程、意識が朦朧として来ます。そして身をがっくりと垂れて、うっとり夢の世界をさまよっているのです。こんな風にこの小屋は私の独壇場と化し、私はこゝで雨の夜半をさながら一個の痴体と化すのです。

(この項終り)

【編集部註】真金鍛次郎氏の赤裸々な告白はその文献的な価値を失わぬため、一、二の誤字を訂正した外、殆ど原文のまゝ掲載しました。編集部の意図は決して同好者の方々にこゝに書いてある事を模倣せよというのではありません。告白者がこの文を書かれた真意もそこにはないことは明らかであります。念の為一言お断りしておきます。

吾妻先生。

私は先生と勿論一面識もございませんし、先生が毎号「奇譚クラブ」誌上に御発表になるものを通じて先生という方を知っている外に、何一つ先生について知っているわけではございません。それがこうして、先生にお手紙をお書きするのは、私も先生の一ファンとして先生にお手紙を差し上げたいという単なるファンの心理からでございます。私も「奇ク」誌上に拙ないものを発表するようになりましてから、私に対するファン・レターとい

うようなものを一、二受け取った覚えはございますが、今日は私は先生のファンとして、しかも若い女性のファンとして、ファン・レターを差し上げるのでございます。ですから最初に「先生」とお呼び申し上げたのも、このような気持ちから致しましたことで、続けてこの様なお呼びの仕方をするをお許し下さいませ。

先生は、既に「奇ク」誌上に、数え切れない程の作品を御発表になっていらっしゃると思います。それは先生の深く広い御学識を反映して多方面にわたり、貴重な珍しい資料に基づくものでございますが、先生が今年になってからお書き始めになりました「感情教育」は恐らく先生自身の御体験に基づき、これまで作品を通して間接に、部分的にしかうかゞい知ることの出来なかった先生のお人柄——豊かな逞しいヒューマニズムを余すところなく展開しております点で、私の最も推奨するところでございます。社会主義者として、社会への断乎たる憤りを持たれる先生。そして殊に、奥様への深く優しい思いやり、「感情教育」の主人公はそのまま先生であるように思われるのです。そして私には、先生が四十を過ぎた分別盛りの、自由で進歩的な思想と、

深い教養と広い学識とを持った、すばらしく物分りのいい「オジサン」——失礼かしら——という感じで浮び上って来るのです。先生といつか論争をなさった沼さんなど、きつと若くて才気かんばつた学識の高い方だろうと思えますけれども、何か若い女にはこわいみたいで、先生のようにファン・レターでも差し上げようかという親しみが起ってまいりません。もっとも、沼さんはマゾヒストでいらっしゃるから、その方で親しみが湧かないのかも知れませんが、でも、沼さんが気を悪くなさるといけませんから附け加えますと、私は沼さんのものは毎号面白く拝見していますし、高橋鉄氏のように誇大な自己宣伝ばかりなさる方とは区別しているつもりです。でも、先生は、本当に親しみのもてる優しい方のように思います。若い女でも安心して甘えられる方のような気がいたします。それとももっと気むずかしくて、羽村京子なんて嫌だとおっしゃるかしら。

先生はきっと、一昨年の「狂い咲くカンナ」に始まる私の一連の告白をお読みのことでございましょう。そして先生は、ご自分とは随分毛色の変った「変った女」として私を考え、

はこんな変った女もいるのか。という風に。私もそれがつらいような、恥かしいような気がします。でも、私もやはり先生の小説の中の由紀さんと同じように、夫と一緒に成長して行こうとする、もう既に赤ん坊が一人あって、毎日の忙しい家事に追いまわされている一人の平凡な主婦なのです。そして、これも由紀さんと同じように、夫に愛されている我儘な妻——自由な妻なのです。私達の場合には、むしろ反対に、妻の「悪癖」に夫が協力してくれているのかも知れませんが、私達もまた、度合ははるかに激しいかも知れませんが、倒錯の甘美な陶醉を夫婦生活の中にもちこみ、それを後生大事に守り抜いて行こうとしているのです。ですから、多くの点で「感情教育」の考え方には共鳴いたします。先生にしてみれば「狂い咲くカンナ」でも、「京子の生活と意見から」でも、始めから終いまで「肛門」「肛門」で、何て嫌な奴だと思いにあったかも知れませんが、勿論、私は自分の好みが極めて特異なものだということをよく知っているつもりですから、敢て他の方に無理に分っていたかどうか考えてはおりません。でも、一言だけ言わせていただきますなら、勿論「奇ク」を通してだけしか知ら

ないので、ちよい／＼同傾向の方が現れるようになりまして。二、三の例だけでは分りませんが、大体アプレ・ゲールの若い方、私と同年輩又はそれ以下の方で、男性の方が女性よりも多く、その男性の中にはソドミーやマゾの方がかなり入っているのではないかと思います。それにしても、倒錯の場合には多かれ少なかれ同じようですが、私くらい自分の傾向の特異性、自分と同じ方の少ないことを慨かなければならない者も少ないと思います。そのことで、私の傾向を他人に押つけることをすっかり断念させてしまったと同時に、私の告白を逆に、ひどく露出的な、押しつけがましいものにしたのではないかと思ひます。私が自分の二つの傾向として自覚しているものゝ両方共がそうなのです。

第一の傾向——「臓腑への郷愁」と、嘗て私が称んだものについては、昨年の四月号に信太蓉子さんが、私への共鳴を公然と言明して「開花の契機」を書かれてから、多くの切腹ものが発表されましたけれども、そしてその中には時折「臓腑への郷愁」があらわれておりますけれども、多くは文字通り「切腹願望」に過ぎないもので、私の立場から言うと多くの点で物足りないものが残ります。今日

は先生を退屈させてしまって申しわけありませんから、細く書きませんが、私は「切腹願望」に置いてけぼりをくって、恨めしがっているような形です。第二の、私にとってもっとも本来的な傾向——「肛門」大腸への執着」についてと同様です。これは第一のものより少しおくれて、昨年八月号に「アーヌスへの讃歌」が発表され、筆者の住田弘志さんの傾向はむしろ孤立してしまつて、浣腸ものが昨今誌上をにぎわしています。いろいろなものが書かれたうちで、断片的に私に近い点もありましたが、大部分は単なる「浣腸願望」にとどまり、私に特有な「大腸充満」の刺戟への嗜好は殆んど見られないのが残念です。たゞこれは「切腹もの」が既に一まわり出つくしたのに対して、目下ぞくぞく出はじめているようですから、私も便乗して大いに宣伝したいのですが、生憎赤ん坊の世話で閑がございません。

先生には余りご興味なさそうなことを、自分のことばかりくどくどと申し上げてしまいました。でも、先生のズボン(?) についても、それがもとで沼さんとの思いがけぬ論争となりましたが、そのズボンだって、先生は随分独自の感じ方をしていらっしゃるのでは

ないのでしょうかしら。一般に服装研究は先生独特のもので、私も大変面白く拝見しております。私も「浣腸研究」をして、先生が服装の分野でやっていらっしゃるような、すぐれたものが出来たら本当にすばらしいと思うのですが、先生のように長年にわたって資料を集め、長年にわたって沢山の書物を読んで始めていいものが書けるので、本当に大変なことだと思ひます。それに浣腸と言うと、先ずお医者さんの学問が必要ですから、お医者さんに書いていただければいいようなものですが、やはりそれだけでも駄目で、その方の傾向を持った者でないと面白いものは出来ないでしょう。私にとっては、先生のご態度はいろんな点で参考にさせていたゞけると存じます。突然のぶしつけなお手紙で御迷惑をおかけ致しました。お許し下さいませ。かしこ。追伸——すっかり忘れてしまつておりました。あとになって大変申しわけございませんが、先生の奥様——きつと由紀さんのようなすばらしい奥様ですわ——によりしくお伝え下さいませ。それから「奇ク」誌上での御活躍をお祈りいたします。先生の「服装の利用」の中では、腹部をしめつけられるからでしょう、コルセットのところを一番興味深く拝見いたしました。では本当に、さようなら。

Das Grausame Weib

Dr. Yohannes R. Birlinger

△ 残虐なる女性達 △

— 1901年刊行の独文絵入単行本より —

森 本 愛 造・訳

之以降本章に於ては、私は敘述を簡略にする為に、眼を独乙帝国の植民地にのみ向けてゆくが、之は同時にすべての近代植民地に於て之と同様の日常生活が営まれつゝけた事を意味している。殊に独乙植民地に於ては、法律的に一定の限度内に於ける限り、女性達は召使や奴隸的な人々に鞭や其の他の拷問具による懲戒が可能であつたし、同時にこの事は女性の肉体的懲戒に対する烈しい慾求に点火する結果を招来したのであつた。特に独乙領アフリカ (Deutsche Afrika) に於て原住民に対して、家庭内か警察に於てか、何れにしても肉体的懲戒が法律的に大巾に認められて居た為、多少でも其の素質の在る婦人達にとつて、その本能を性的鞭打愛好者の域まで拡大し、發展させるのに最適であつた。

之に対する証明は至つて簡単である。其は大抵の独領植民地の夫人達の口から直接に我々の耳に入ってくるし、彼女達の旅行記の大部分は其の事に言及して居るからである。

アフリカで如何に女性の支配権が展開して行つたかについて、女性の執筆に依る次の諸文献の引用によって証明してみようと思う。

(著者註) 以下の文献は左の通りである。

Briefe eines deutschen Mädchens aus

Süd-Wert; Berlin 1912

「南西アフリカ植民地からの独乙女性の書簡集」一九一二年柏林版)

クララ・ブロックマン (Clara Brockman)

は黒人に対する鞭打刑の賛成者である。一九八九年の独乙国首相の指令の中「女性を鞭打つてはならない」の項は不当なものです。之は只、男性の特殊な我儘から、又は同情心からの産物にすぎない。若い男女を警察へ送つて二五回鞭打たす事は簡単だし、一番効果的な事ですから。」

マリア・カーロフの書物からの報告。

(著者註) 右は次の文献による。

Wo Sonst der Fuß des Krieges trat, Farmerleben in Südwest nach dem Kriege, Berlin, 1909.

「戦は終わった」——戦後に於ける南西アフリカ独乙植民地の農業生活について、一九〇九年柏林版)

「コロネリウス船長 (Kapitän Cornelius.)

は丘の上に家を建てました。そうして、厳しい裁判官としてグロート人達 (Groot leuten) に協力させて職務を見ていました。彼の妻であるマグダレーネ (Magdalene(a)) は彼のすべての生活を支配して居ましたので、彼女

は全て意のままに、彼女の経済と、下僕とを馴致したのでした。マグダレーネは理想的な態度で下僕達に接していました。彼女は鞭に依る秩序を充分に知っている賢明な女性の中の一人でした。いつも彼女は口癖のように云っております。

「私の云う事をきかないものは食事の代りに革鞭よ。」

全く革鞭は、訓練されて居ない原住民に対して最も効果的な統御の方法でした。

私の義兄は召使のイザーク (Isack.) をすぐに兵營へ引渡しました。きつと二、三日中に士官達が刑を決めてくれるでしょう。實際後になって、イザークはもっと忖く様に何十回かの鞭打と教戒とを賣って帰ってきました。

マルガレエテ・フォン・エッケンブレックヒル (Margarethe von Eckenbrecher.) の著作の中にも、植民地婦人の鞭打刑に対する見方についての興味ある説明がある。彼女は自分自身の独乙領東アフリカ (Deutsch-Ost Afrika) と独乙領西南アフリカ (Deutsch-Südwestafrika) との経験に基づいて書いている。

(著者註= Im dichten Pori, Reiseund

Jagdfilder aus Deutsch Ost Afrika, Berlin 1912 「ポリ近郊」—独領東アフリカの旅行及狩の風俗—一九一二年柏林版)

「原住民達は甚だしく非道德的でした。彼等はいつも賭をしました。熱中すると何も残らなくなるまで何でも賭けて終うのでした。この為に私達のサファリー (Safari) (訳者註「遠征」の意) の時にはカルタ遊びは有名な、二五回の鞭打の刑によって禁止されるのでした。

しかし、彼等が余りに賭に熱心だったので私達は先ず其の見せしめを見せつけねばなりませんでした。概して今度の旅行では土民との関係はうまく行っていました。鞭打の刑は四ヶ月半の間に僅か四回しか有りませんでした。最初に刑をうけたのは一人の人夫で、彼は私達一行を快くうけ入れた或村でゴザを一枚盗んだのでした。彼は必死になって否定していました。遂に彼の荷物の中から問題のゴザが発見されました。彼は問題なく一五回の鞭打をうけました。

次は一人の男がカルタ遊びで二五回、その次は一人の男が、平隠裡に道を歩いて居た一人の女に対して侮辱的な言辞を弄した科で二

五回、次には同じ男が不平を云い、云う事を聞かなかった理由で二五回、打たれたのでした。その時、彼は私の良人に向って「打って下さい。いくら打たれてもよいのですが、私を追い出さないで下さい。貴方は私の父(訳者註「この「父」の言葉は原文では Vater でなく Baba という語を用いている。で、私は貴方の子供です」まあ、何という汚い子供でしょう!」

同一の著者によって述べられた河馬狩の状況については次の通りである。

「私達は最上の質の河馬皮を数枚得る事が出来たので満足しました。物慣れたヴァニアムヴェツィ人 (Wanyamwezi) はこの皮から効果のいい河馬鞭 (Nilpferdpeitschen) を作ります。(訳者註「Nilpferdpeitsche」はライオンや虎に対して用いる最も残酷な鞭である。) 同じく独乙領西南アフリカでの記録によると、

「良人の留守中私は召使達の統御に氣を使わねばなりませんでした。一番困ったのは私を手真似や足真似を使わないではホツテントット語 (Hottentotten) やヘンロ語 (Herero) を使う事が出来なかった事でした。その為、

召使達の間で誤解や、私への不柔順が現われて来ました。召使達の不従順な態度に対しては何時も、私は一寸の容赦もなく乗馬用の鞭 (Reitgerete) を用いなければなりませんでした。〃

ヘンロ族の暴動に際しても、彼女は多くの鞭刑の目撃者であった。〃一月二三日の真夜中頃、彼等は七人のスパイを連れて来ました。コルネリウス提督 (Cornelius) の命令で行われた鞭打の拷問によって、夜中に兵營のすぐ向い側にある豚舎から全部の豚を盗んでゆく為にやって来た事を白状しました。彼等の中で一人を除いては全くだらしのない者達でしたので、皆で協議した末、各々二五回ずつ鞭で打ってから逃してやりました。

最後の一人は仲々の曲者でオマルール (Om aruuru) の監獄から脱走して来たのでしたが、彼が全裸にされて鞭打台につれて来られたとき、私は彼の生殖器の上に幾つも皮鞭の痕を発見しました。忍んでくる途中、カッフェル族 (Kaffer) によって痛い目に遭わされたのでしよう。その痛みの為に彼は鞭打の終らない中に気絶してしまいました。そこで、皆は彼を引きずって馬小屋の中へ抛り込んでしまいました。〃

シャルロッテ・デッペ (Charlotte Deppe) は次の様な報告をしている。彼女とその良人は東アフリカ植民地の参事官として働いていた。

(著者註=Charlotte Deppe und Ludwig

Deppe; Vm Ostafrika, Erinnerungen.

Dresden; 1925 (シャルロッテ・デッペ及

ルドヴィヒ・デッペ共著「東アフリカ回想

録」一九二五年、ドレスデン版)

〃或る晩の事でした。私達はお腹を空かして家へ帰って来ました。ところが遠くからいつも見える家の灯が見えないのです。家へついてみると真暗らなので、私は大きな声で召使達の名前を次々に呼びました。ユーマ! ムトート! アベディ! ハミーシ! (Hei Yuma! Mtoto! Abedi! Hamisi!)

所が誰も出て来ません。建物は全く誰一人居ない様に静まりかえっていました。私達の家は市外の一軒家でしたのに鍵もかゝっていません。

しかし、翌朝になって謎が解けました。若者達は仕事上の意見の相違から、一致して仕事を休んだのでした。彼等は規則では当然ボーマ (Bohna) (訳者註「区裁判所」に当る) で一五回の鞭打をうけるべきでしたが

私の良人の生半可な同情の為に、私のウリアスの手紙 (訳者註「此状持参の者を殺害されたし」の殺人依頼状、此の場合は「此状持参の者を河馬鞭にて二五回打たれたし」の鞭打依頼状の意味) を持ったまま召使の一人ユーマは逃亡してしまいました。〃男は自らの運命を自ら開く〃という格言はユーマに対して正に至言だったわけです。〃

此の機会に若干、黒人に対する懲戒 (鞭打刑) の効果について知る事は強ち無駄でもないだろう。ヴォルデマール・シュツエ氏 (Woldemar Stütze) の報告によると革製編鞭 (Cwhite) の効用は左の通りである。シュツエ氏は医師である事を付記しておく。一〇〜二〇打の後では打たれた部分の皮膚は軟化する。その為新しい条痕は次々に積重ねられてゆく。

(著者註「右の引用は Schwarz Gegen Weib; Berlin 1908「女性への残虐」一九〇八年伯林版) 医師オルテンベルグ (Ortenberg) はその著「或る医師の手記」 (Feldzugsskizzen aus Südwert afrika, Berlin 1907) の中で、酒に対して極度に強かった或る原住民の女の鞭打に対する頑固な強さについて書いている。

マグダレーナ・プリンス (Magdalene Prince.) はその著「独領東アフリカに於ける一婦人」(Eine Deutsche Frau im Inneren Von Deutsch-Ostafrika) (著者註「伯林版一九〇五年刊行」) に於て次の通り述べて居る。これは彼女の二八九六——七年の経験である。

「本日、カークラ (Chakula) を盗んだ人夫達の最初の懲戒刑が公開された。」

他の部分で同じ女性は次の様に述べている「私がこの書物をしている間良人はシャウリ (Schauri) (訳者註「審判」) をやって居ます。私は其を見るのが大変好きです。いつも黒人達は大グサな身振りでごまかそうとするのです。事件は多く泥棒の事件でした。」更に説明して

或る男が私の名をかたって、此土地でカークラを取り立てています。彼等は直ぐ捕まて、カークラは所有主に返され、一人ずつ二五回鞭が当てられました。きつとこの二五回の鞭は彼等によく効いた事でしよう。

この二〇人もの土民商人の鞭打の泣き声は大変な忍耐を必要とする程ひどいものでした。

リディア・ヘブケン (Lydia Höpker.) の

「郷土と生活」——西南アフリカに於ける一夫婦の記録 (Um Scholle und Leben Schicksale einer deutschen Farmerin in Südwestafrika.) の中で次の様に述べている。

「毎日警官がやってきて不服従の者はシャムブーク (Shambuk.) へ連れて行かれて打たれるのでした。」

又次の引用は他地方のものである。

「豚番人ナウケ (Nauke) は若かったので、ヨーゼフ (Yosef) の妻達の一人を寝取ってしまった。ヨーゼフは怒ってナウケを私のところへ連れて来ました。二〇マルクの罰金。処がナウケには払えないのです。そこで一〇マルクと鞭打刑、鞭打はヨーゼフがなす事。これで皆満足しました。」

この国が英国によって支配される様になると、英国は鞭打刑を禁止した。そこで、鞭刑に対する慾望を感じて居た彼女は次の様に書いています。

「原住民達は惨めでした。彼等は不柔順でだらしなくなってきました。而も私達は此の状態に対して何も成す事が出来ないのです。」

新らしい統治は黒人達に白人達と同様の権利を付与したので、一人の原住民が反抗的な

ったり、不平を唱えても私達は今迄の様に最も効果の有る方法で懲戒する訳にはゆかなくなつて、何と「人間並に」彼等を「告発」しなければならぬ事になりました。」

マリイ・パウリーネ・トルベッケ (Marie Pauline Thorbecke.) も亦黒人達が云付けに従わない時に、彼等を道理に従わせる為の唯一の、最善の方法であると考えている。

彼等は「もう歩けません」と云い出した黒人に対して「警察で、二五回位打って貰わなければならぬの？」という言葉によって前進を続けさせる事が出来たと述べて居る。同じく彼女がカメルン (Kamerun) の市内にある警察に滞在して居たとき、彼女はその法廷で屢々法的な権利について、黒人達に説明する場面に出会したが、同時に屢々彼等に対する笞刑にも同席した事を書いて居る。

女性の手記になる之等の記述は勿論、自分の経験の中から特に印象的であつた事柄について述べられていふと考へてもよい筈である。しかし、この資料から判断すると、こうした事に対する「素人」には驚くべき事実——即ち、彼女達が、機会ある度に肉体的刑罰を親覽し、時として、自ら手を下して之の実施

に当たったという事——が結論的に云えるのである。鞭打刑の適用の法的な又実際の不適不適についてはこゝでは追究する必要はないと思われる。それ故、今迄に引用した諸例については、如何なる点についても非難されないと思う。私にとっては如何なる事象も只、心理上の問題としてのみ取上げるのが目的である。

幾多の事例が雄弁に語る様に白人の女性が法的な、又は社会的な一切の非難が除去された状態におかれた時、此の性（訳者『女性は弱いもの、という一般的概念に対して用いられている』）は本来の性的加虐願望に満足を与え、種々な形で具体化を示すものである事は疑う余地のない事であろう。

（以上第二章完）

【訳者補遺】

以上で本書の中で最も長い章である「*Frau als Sklavenhalterin*」が終ったわけであるが、こゝで未だ本書は四分の一にも満たない頁数しか費して居ない。

私は当初に断った様に、本書の完全な翻譯を希んでいるので、之は本書の一切の伏字なしの、又如何に些細な点についても省略のない移植であると考へて頂き度い。

勿論、独乙語と日本語の語系の相違から、甚だしく理論的な云い廻しについては、文章の切断や接続を行っているが、原著の意図はむしろ鮮明になったと云えよう。併し乍ら訳者は独乙語の専門家ではないので、或は誤訳

代理部月報（今月の新版）

◎沅陽三態 第二集◎

キヤビネ版 三枚一組 三百円

大好評の第一集に引続き新趣向をこらした珍らしい沅陽フオトの傑作

◎杉美美嬢股間縛り三態◎

キヤビネ版 三枚一組 特価三百円

御注文により焼増した昨年十二月号の口絵に掲載した杉嬢の柔肌に喰い込む緊縛感

◎モデル三人得意のポーズ◎

キヤビネ版 三枚一組 三百円

代表的な三人の美貌モデルの競艶三態

◇伊吹真佐子嬢股間縛り三態◇

キヤビネ版 三枚一組 三百円

分譲品として特別に撮影した他のモデル嬢とは一風変わったマゾヒスト伊吹嬢の悦虐ポーズ

◇萩千恵子嬢股間縛り三態◇

を生じて居るかも知れないので、万一、その様な点を発見された場合、又日本語としての意味の不充分な点等、一切の欠点について発見されたときは何卒御教示の程をお願いしたい。

キヤビネ版 三枚一組 三百円

乳房を出すのさえ恥しがる淑やかなお嬢さん、千恵子嬢を特に観念させた股しぼり

◇伊吹真佐子嬢悦虐集◇

手札型 五枚一組 二百円

第二の川端多奈子として豊麗な肉体をもとにマゾヒスチックな雰囲気をも十分に盛り上げた真佐子嬢の悦虐の姿態の中から特に強烈なものを選んだ。

◇沅陽三態、第一集◇

キヤビネ版 三枚一組 三百円

一旦誌上に発表するや注文殺到、沅陽マニアは勿論の事、縛りマニアも挙つて待望の沅陽フオト、見る者皆絶讃！

◇切腹写真 立腹◇

微粒面厚手印画紙焼付

キヤビネ版 三枚一組 三百円

光沢薄手印画紙焼付

手札型 三枚一組 二百円

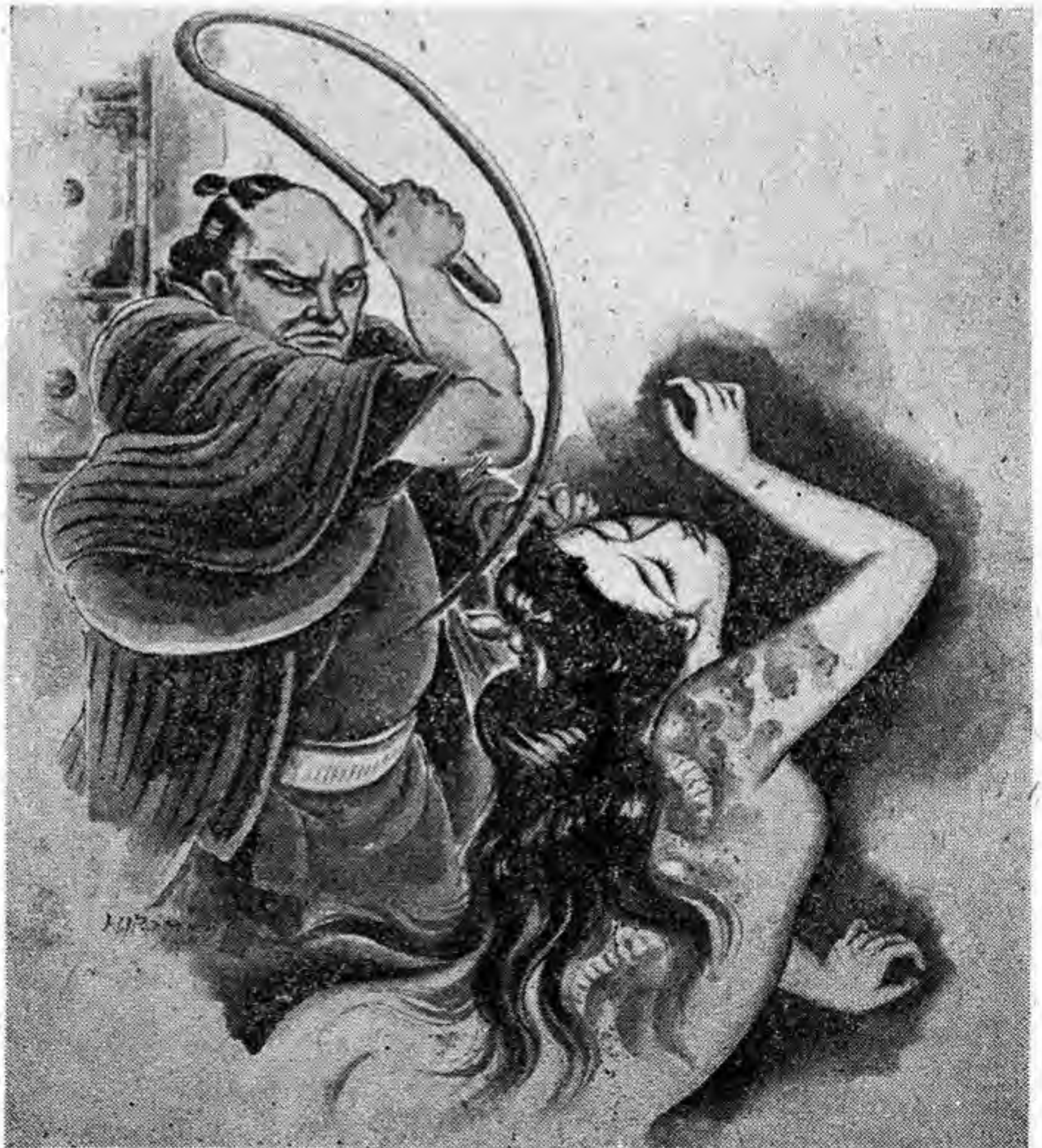
ひ ふう いれ ずみ こう だん
悲 風 刺 青 巷 談

抵抗の鞭

「馬鹿野郎、何をボンヤリしてやがるんだ！」

岩 廣 志

HIROMICHI 画



頭の上から霹靂の如く降った罵声に、今、得も云われぬ歓楽の中に、恍惚と臉をとじかけていた宇吉は、鉄鎚の一撃を喰ったようにハッと大きく眼を見開いた。

「あれ程、日頃云っておいたのが手めえには判らねえのか。人に助けて貰っておいて、仕事をなまけやアがると、唯じゃア置かねえぞ！」

威嚇を含んだ鋭い声でいった阿島屋万造の右手に振上げられた一本の革鞭が、宇吉の頭上にヒュッと激しく空気を震わせた。

「す、すいません、親方」

宇吉は脅えるように微かに肩先を震わせたが、慌てて針を手にとり、改めて、自分の膝の所に伏している全裸の女の肌をじっと見守った。

文久元年、初春の夜の空気は、まだ肌に寒く、自分だけ火鉢を脇に抱え込んだ阿島屋万造の目は、女の肌から、その上に構えられた宇吉の針先へ冷く注がれた。

「いいか、此いつはおめえも見て判っているだろうが、初玉なんだ。ソツのねえよう、手ッ取り早く彫り上げねえと、明日の仕事にさしつかえるぜ」

「へえ」

「さア、愚図々々していねえで、すぐ始めねえ」

ピシヤリと畳の上に鞭が鳴ると、宇吉は追ったてられるように、豆筆を左手に、右手の針をブスリと女の尻の上にたてた。

続いて、瞬く間に二針三針――

「ううムム」

此の時、今まで気絶して身動きもなかった女が、針の痛みを我を戻したのか、突如として、宇吉をはね返して体を起した。

「いけねえ親方、早いとこ押えておくんない。女にシタバタ動かれちゃア、ロクな刺青はできやアしませんや」

「畜生、フザケタ阿魔だ！」

呻くような声と一緒に、万造の手の鞭が、女の頭上に輪を描いたと思うと、次の瞬間には、腹から背へ、音をたてて絡みついた。

青畳を敷きつめた八畳程の土蔵の密室を照らす、行灯の灯が大きく揺れて、

「うーツ」

鋭い苦悶の呻きをあげた女の体が、エビのように体を反らせたと見ると、崩れるように宇吉の膝許へ倒れ込んだ。

「な、何をするんだ親方？」

女の背へ斜めに走った赤いシモトの痕を見ると、初めて宇吉の顔に激しい影が動いた。

「何んだと、宇吉？」

「御覧なさい親方、改めてこんな事を云わなくとも、親方自身が一番良く知っていなさる筈だが、刺青師が一番大事なものは、墨でも針でもねえ。唯、女の肌だ。親方だってそうでしょう、傷物になった女の体に、どんな素晴らしい刺青をした所で、売物に出したら、半値の価値もなくなるでしょう。斯うした玉が、海を越えて、何処の国へ売りとばされるか、あッしは知りませんが、折角高え銭を出してセリ落して来た玉を、傷物にしちゃア、親方の損ばかりか、あッしは仕事に気乗りがしなくなりますぜ」

「いや、こいつは俺とした事が、気付かねえ事をしてしまった。まア宇吉、気を悪くしねえでくれ」

万造は一瞬、太い眉の間に、カッと怒気を漲らせたが、何を思っ

てか、ずるそうな笑いを泛かべて、なだめるように云った。
「なアに、おめえのその気持を忘れた訳じゃアねえが、あんまり此

の阿魔がシタバタしやがるんで、つい、カッとしちまったんだ」

「ですが、親方——」

「まア一服やって、気を落付けてから始めてくれ。なアに、こんな痕は、傷にやアならねえよ。一日も経てば消えてなくなる。ホラよ——」

万造は火鉢の傍から、印伝の革の煙草入れと、銀延べのキセルを宇吉の前に投げやった

「す、すいません、親方——」

宇吉は急に気弱くなったように、ペコンと頭を下げると、針と豆筆を置いて、急いで煙草入れとキセルを引寄せた。

銀延べのキセルに煙草をつめて、火を点じると、宇吉はガツガツと、むさぼるように吸い続けた。ヤニがじくじくとキセルの中で不快な音をたてて、激しい異臭が宇吉の唇から吐き出される煙の中から、閉め切った部屋の中に拡がっていった。

万造は眉をひそめて——しかし、満足そうに宇吉の様子を横目で見つめたが、

「おい、もういいだろう。さア早速始めてもらおうか。此の女が済めば、後に今一人、赤玉があるんだぜ」

「へえ」

宇吉煙草入はれと、キセルを万造の方へ押返して、再び針を取ったが、

「しかし親方、毎度云うようだが、此れを一ツ気に彫り上げるのは、少し可哀そうじゃアありませんか。体一面彫る刺青は、普通なら二年も三年もかけて彫らなきゃア、相手の体が持たねえとされているんだ」

「そんな事は、おめえに言われるまでもねえ、俺だってチャント知っている。だがなア宇吉、俺達の商売には、そんな、なまじっかな情や泪は用はねえんだ」

「そいつはそうだが——」

「つまらねえ仏心は、俺達仲間のあいだには通用しねんだ。また女がシタバタしねえうちに、さっさと仕事を片付けて貰おうか。玉がシタバタすりやア、仕事にならねえおめえの商売だろう。」

「へえ」

宇吉は覚悟を決めたように、女の背の上にかがみ込んだ。

咲き開いた牡丹に、蛇のからみついた凄艶な図が、朱と藍で、女の白い肉の上に、ブスブス描かれてゆく。

女は死んだように動かなかった。

宇吉の額には、玉の汗が泛かんで、両眼は真赤に充血していた。阿島屋万造は、しわぶきもなく、宇吉の針先を見つめている。

どの位時間が経過したか、宇吉が初めて、ホッと息をついて顔を起した。

「親方、仕上りました」

「出来たか——」

万造はいざり寄って、女の体一面に彫られた怪奇な図をじっと見つめていたが、

「うめえ！、流石はおめえだ。これだけ達者に彫る刺青師は、江戸にもそうザラには居ねえぜ。此の呼吸ついでに、今一ツ、赤玉を頼むぜ」

鞭を片手に、万造は無造作に、死んだようにガックリとなつて、女の体を引抱えて立上った。

「まだやるんですか、親方——」

「こっちの船出があと五日に迫ってるんだ。後の赤玉を今夜の中に仕上げてしまつて、明日は少し上玉をセリ落して来なくちゃア、こっちの懐勘定がおつつかねえ」

万造は云い捨てて、女を抱えて次の六畳の間へ入って行った。女を下へ置くと、隅の畳を一枚引はがした。更に床板を三、四枚はがすと、其処にボツカリと暗い穴が口を開いて、深い土の臭いが、空気の流れに混って漂ってくる。

万造は再び女を抱えると、その穴から地下の一室へ導いている梯子を用心深く踏んで降りて行った。

あゝ、其処は何んと巧妙な、しかも広い地下室であろうか。有明けの行灯が板の四壁を照らして、死の如き静寂が、風のそよぎも感じさせなかった。

しかも、行灯の灯影をすかして、室の奥に眼をやれば、其処には三尺間口の鉄格子の檻が、コの字形に十ならんでいて、その八つの檻には、身に糸も纏っていない女人の群像が、声すらもなく、じつとうなだれているのだ。

いやそればかりか、六人の女の肌には、見るからにして面を反けさせるような刺青がされてある。

万造は抱えていた女を、空いている檻の中へ押込んで錠を下すと、他の檻から一人の女を引摺り出した。万造の云った、赤玉と云うのは此の女であろう。既に男を知っているらしい女の乳首が僅かに黒ずんで、グツと左右に大きく張り出した臀部。

幾十人となく女の裸体をあつかって来ている万造には、女の裸体に接しても、毛程の慾情も湧かぬらしい。唯、女の雪肌を染めて、

異国へ売りとばす胸算用だけが、唯一つの楽しみとなって息づいているだけだ。

万造は無言でグツと女の体へ手を掛けた。今まで、関東、関西を網羅した、麻布の大人肉市場から、せり落して来た女の、運命の支配にまかせる儘の無抵抗な姿に馴れきっている万造には、それらの女の凡てが、蠟細工の人形にすぎなかったのだ。

無造作に引つ抱えて歩き出そうとした時であった。今まで万造のするが儘にまかせていた女が、いきなり万造の腕へ噛みついたのだ。

「あッッッ！」

万造は思わず叫びを上げて、その手を振払ったが、女の必死の歯の力は離れればこそ、反って逆効果を現して、彼の腕の肉は、血潮をドツと吹かせて、女の口中に噛み取られていた。

「畜生！ ふざけた事をしやアがったな、阿魔！」

万造は激痛に、左の腕をブルブル震わせた。冷酷無惨な血が、激怒となって、脳天に吹き上ってくると、思慮も分別も打算もなく唯一匹の野獣と化して、右手の革鞭がうなりを生じて、女の肩から乳房へ絡みついた。

「アッッ！」

女の開いた唇から、万造の腕から噛み切った肉が落ちて、鋭い悲鳴と共に、女の体がよろよろとよろめいた。

「此の阿魔ア、叩き殺してくれろ！」

ほえるような怒声と共に、万造の手の鞭が再び女の肌に激しく音をたてた。

女は自分の胸を抱くようにしてよろめいたが、その儘、身動きも

なく、其の場へ俯伏してしまった。

「此の阿魔め、どうしたら肚の虫がおさまるんだ」

万造の昂奮は極天に達していた。

血のしたたる腕の痛みも感じぬらしく、狂暴な眼で、部屋の一隅を眺めやったが、柱の釘に掛けられてある麻縄を発見すると、それはずし取って来て、女の右足と左足を別々に縛って、そのおのこの一端を、梯子と檻の鉄格子に結えつけた。

女は既に気を失っているのである。

「やい、俺にさからったら、どんな事になるか、良く見ておくがい」

まだ雪肌を保っている一人の女の檻の中へ、万造はわめくように声を掛けると、結えられて両足を大きく開いた女の太股へ、ヒュツと鞭を振下した。

刺青をされた女達も、まだ雪肌の女も、余りの凄さに、顔を覆って俯伏していた。

続いて万造の鞭が空気に吠えて、女の肌からサツと血潮がにじみだして来た。

人肉市場

麻布飯倉片町なまこやの海鼠屋は、海産物問屋で鳴らしている店ではあるが、その実、物品の動きは左程でないにもかかわらず店構えの豪盛さと、人の出入りの激しさは、世間の一部の者から不審の目で見られていた。

それもその筈、此の海鼠屋こそ、関東、関西全域に亘って触手を延ばし、その根城となっている大人肉市場だったのである。

堅固な奥の一室は三十畳程の広さで、此処へ集ってくる密貿易の徒輩が、海鼠屋が全国から漁って来た女をせり落すのだ。せり落された女達は、それぞれの分域にわけられて、遠く海外へ売られて行くのである。

今日も、夜をきして、此の恐るべき大人肉市場が海鼠屋で開かれていた。集った人間はざっと三十人程。

異国風の机の上に、大福帳をひろげた番頭が、

「さて、いよいよこれから始めます。今夜の玉は、みんなデザツと十人。思いきり上等の値で踏んぎって貰いませんか、手離すことの出来ない上玉が、中で三人。では早速お見せ致しましょう。まず、最初は、赤玉の一番——」

番頭の呼び出しの声がかかると、傍の垂れ幕を分けて、男の荒々しい手に突出されるように、一人の女が番頭の前へよろめき出た。

「さア良く見て下さい。赤玉とは云え、並の赤玉とは訳が違ふ。少しも荒れの見えぬ赤玉中の上等だ。さア、値をつける方はありませんかな？」

「十両……」

最初の声が、三十人程の人数の中からかかると、

「十五両！」

「二十両！」

一時に騒然となって、やがて、その女は三十両で誰とも知れぬ男の手に渡ってしまった。赤玉の二番三番と物品でもせり落すように、七番まで忽ちのうちにせり落されて、

「さて、いよいよ今度は取って置きの中玉の番です。まず中玉の一番——此れは先回より充分の値がつかず、今回まで持越した中玉中

の逸品です。今回は是非、どなたかに落して頂かなければなりません」

調子に乗ってしゃべりたてる番頭の横へ、男の手に突出されて来た一人の娘。

「あいっだ、宇吉、良く見てみる。俺が今日まで手がけて来た女の中で、あの女程綺麗な肌をしている女は、かって一人としてねえ。海鼠屋の吹ッ掛けが百五十両だ。ほかの女に比べて、法外の値だけに、誰もそれ以上の値で落す者もなかったが、俺アあの時余ッ程落そうかとは思ひ乍ら、金が足りねえばかりに、出装張りもならねえで引上げたが、今夜は二百両でも、二百五十両でも落すつもりだ。どうだ、刺青師のおめえの目で見て、どう感じる？」

玉買いの人数の中にあつて、阿島屋万造は、宇吉の耳に囁いた。

「俺ばかりが、玉の品定めをするのは本意でねえ。明日の晩は、おめえにも品定めをして貰つて、極上の玉を落して来よう！」

そう万造に誘われて、初めて人肉市場にのぞんで見た宇吉であつた。

既に男を知っている女を赤玉と呼び、ズブの素人娘を初玉と呼ぶのだが、此の初玉、赤玉と呼ばれる女達は、疲弊した僻村から、三両、五両の金で騙されて、此の世にも恐ろしい人肉市場へ運ばれてくるのである。

「結局、おめえが手掛ける玉だ。おめえが気に喰わねえってなら話は別だが、あの玉は顔と云い、肌といい、型といい、決して首を横に振るような玉じゃアねえと思うんだがなア」

「へえ」

万造にささやかれて、宇吉は前の人を掻き分けるように、初玉と呼ばれる女の姿をじっと見つめた。

宇吉の
眼が妖し
い光りを
帯びて、
ぎらぎら
と輝やい
た。それ
はまるで
憑かれた
ものの様
な眼つき
だった。



体一面に刺青されて、遠く異国へ売りとばされるとは夢にも知らず、唯此れからどんな所へ務めさせられるのか？ と、単純な不安な戦きに立った女の、それは何んと均整のとれた姿であろう。雪白の肌に、処女らしい脂肪の光沢が漲って、やや張った下腹部。腕を伏せたような両の乳房。桜色の乳首。宇吉の眼は、喰入るように女の肌に注がれた。

幾人。いや幾十人、女の肌を、此の手が指先が撫でさすって来た事か。しかし、其処に立った女のように均整のとれた、美しい女の肌は、宇吉の指先に一人として触れて来なかったのだ。

あの肌に此の指先が触れた時の感じ——刺青師宇吉の心は、此の隣れな贅への同情を越えて、唯、激しい昂奮に震えた。

足から下腹部へ、胸へ、首へ、そして顔へ——宇吉の目は、女の肉体を下から上へとなめるように眺めて行ったが、

「アッ！」

危くほとばしりそうになった叫びを呑んで、ギョツとしたように目を見張った。

——お千代！

（いや、心の迷いだ。そんな事のある筈がない。妹のお千代が、此んな所へ売られてくる筈がない！）

だが、何んと、その妹のお千代に生写しであろう。

九年前の懐旧をひもとけば——。

美濃国下田の僻村の水飲み百姓に育った宇吉が、百姓を嫌って家出したのが十九の秋であった。鋏持つすべより知らぬ宇吉の歩む世間は冷く、二十の秋まで丸一年、目当も目的もなく、旅から旅へと渡り歩いた。

その翌年の晩春のことである。京都柳谷の街で、はからずも拾い上げてくれたのが、京阪一帯に響いた名刺青師猿兵衛であった。苦雪八年。彼の天才的なひらめきは、師猿兵衛をはるかにしのいで、とりわけ、猟奇的な図柄に墨を入れるのは、絶対他の追隨を許さなかったのだ。

「親方、京ばかりが仕事場ではありません。一と思いに江戸へ出て、今一度修業して来て見とうございます」

これが宇吉の偽らぬ念願だった。猿兵衛に改めて頼むと、

「よく其処へ気がついた。江戸へ出てしっかり修業してこい」
快く承知してくれたのみか、路用の金と云って十両の大金もくれた。

江戸へ向うのに、東海道を通らず、中仙道を撰んだのも、途中、故郷美濃の下田へ立寄って、不孝をかけた詫びをするつもりで宇吉だった。

永井肥前守の加納の城下から、セキ、下田と九里八丁の丁場を、何年振りかに父母や妹に会える喜びを抱いて、とぶようにして来て見れば、その父母は、妹を連れて、家も畑も人手に渡し、何処かへ去って行ったという近所の者の悲しい話である。

生きていれば、かならず何処かで会える——。その考えを頼みの綱に、下田から青山大膳亮の城下、遠山美濃守の城下、加州侶あずかりの高山の城下へと、沿道を撰んでは入ったが、初秋の冷たい雨が降りはじめた夕暮刻である。

降りやまぬ雨に、つい逗留するうち、土地の顔利きに刺青を頼まれ、僅か一晚のうちに、その背中一面に女龍男龍を彫りあげたが、其処で覚えたのが、当時、津軽と呼ばれる、魔薬阿片入りの煙草で

あった。

高山の城下を発つ時、大袈裟に貰った津軽を喫し乍ら、江戸へ下って来たが、それと気が付いてやめようとした時は、既に彼の肉体は完全に魔薬の強大な力にむしばまれていたのである。

津軽は何処にもある物ではなく密貿易の徒輩の手から、少量ずつ運ばれるもので、結局、魔薬の力に縛られて、今の阿島屋万造の許から去る事も出来ず、宇吉の悲惨な生活がはじめられたのだ。

故郷美濃の下田を逐電する時、妹のお千代は十であつたから生きていれば、十九の娘盛りになっている筈だ。

(このお千代! いや、そんな馬鹿なことが——)

宇吉は苦々しく心の中で否定したが、

「おいどうする。おめえの眼で見て、あの玉はどうなんだ?」

万造の声にハッとして、

「親方、あれだけの玉は、ちよつとやソツとでは手にはいらねえ。

思いきって落しておくんない!」

思わずそう叫んでしまった。

「よし、いゝとも。おめえの臍さえ決りやア、此っちの臍は決つてゐるんだ。その代り、あの女には、おめえの一世一代の傑作を彫つて貰わなくちやアならねえぜ」

満足そうな万造の聲が、

「二百両!」

多勢のざわめきの中を、高らかに突っ走った。

幻想の絆

宇吉の知るところでも、阿島屋万造の乾分は可成りの数に上って

いる。勿論此れ等の乾分は、直接万造の家に起居している訳ではな

く、刺青をした女を、品川から、遠くは長崎辺りへ送る時にそれ〴〵の役割に任じて活動するのであるが、起居を共にしているのは

僅か二人で、此の二人の乾分も滅多なことでは宇吉の仕事場——女に刺青をする部屋や、女達を幽閉しておく一室には入れなかった。

宇吉の仕事は夜と決っている。昼の中は、気が散っていけないと云う理由と、何時どんな所から、此の兇悪無惨な行いが暴露されるか知れないと云う、万造の鋭い警戒心からでもあつたのだ。

上等な初玉をせり落して来た満足感に、常と違つて御気嫌のよかつた万造は、夕暮れてから、乾分はもとより、宇吉にも何も云わ

ず、フラリと外へ出かけて行つた。

宇吉は何時もの仕事場である土蔵の一室に坐して、黙念と腕を組んでいた、

万造はまだ戻らなかつたが、外はスツカリ暮れて、明り取りのない此の一室は、まるで深更のように静まりかえつて、行燈の灯影が、まるで物の化のように宇吉の影を映していた。

(間違つてもお千代でないように——)

よごれを知らぬ雪の肌に見るも無惨な墨を入れられて、異国へ売られてゆく女達を思うと、宇吉は、己が罪の深さに、今更乍ら慄然とするのだ。

あの初玉の妹に似た娘は、此の土蔵の地下室の檻の中に投げ込まれて、やがて、あの肌へ死に勝る苦痛の墨針をさゝれるのだ。そして、他の女達と共に、永遠に日本を去らせられねばならないのだ。

万一、あの娘が、妹のお千代であつたとしたら——。

(いや、思うまい。そんな事のある筈がない!)

宇吉は激しく首を振った。

何事も考えず、問わず、語らず唯万造の命令の儘、仕事を続けてゆかなければならない宇吉であった。

一日も早く、此の悪業から身を引こうと悶え苦しんだことは、どれ程あったであろう。しかし、阿片の魔物のような力は、宇吉を握って離さなかったのだ。

今夜もたゞ、津軽を求める為に、何も思わず、あの女と、今一人の女の肌に、凄艶な図柄を刻めばいいのだ、宇吉は続けざまに頭を振って立上ったが、その顔は蠅のように蒼ざめていた。

思うまい！ 考えまい！ と思えば思う程、女の顔が、姿が、姓の千代となつて、宇吉の胸を痛めるのである。

(そうだ、やはりあの女から事情を訊いて見よう)

見捨て去ろうとした決断は崩れて、宇吉は思わず注意深く辺りへ目をやった。

此の土蔵へ向つて来る足音もなく、辺りはしんと静り返っている。機会は今である。万造が戻れば、その機会は失われてしまうのだ。

宇吉は手に持ったキセルをほうり出すと、心せく様子で次の間の六畳へはいっていった。

隅の畳を一枚はがして、床板をはくと、冷い風がヒヤリと顔を撫でる。宇吉は音をたてぬように地下へ降りて行った。

別に明り取りの窓とてない此の地下室は、昼となく夜となく行灯が灯っている。その行灯を片手に近寄ると、

「わたしをどうしようと云うのです。帰して——お願い、帰して下さい！」

檻にしがみついた女の恐怖の眼が、宇吉の眼の中へとび込んで来た。

一糸纏わぬ全裸の処女——此処へ投げ込まれる時に、万造から衣類は剥奪されたのであろう。

何故、刺青をする間以外にも、斯うして女達を全裸にしておくか——？

——たとえ、一日でも二日でも、風にあてた皮膚は、刺青の墨に変化がない。——と云う万造の言葉ではあったが、そんな理論は宇吉には納得がゆかなかつた。しかし、そうと信じきっている万造に、反抗の論をまじえたとして、それがどのような効果があろう。

「黙って、万造の意の儘にまかせておけばいいのだ」

争うことの愚を知って、無言の儘見守つて来た宇吉なのだ。

「お願いです、私を此処から出して下さい。もし——」

檻の間から手を差延べて、娘は哀願の声を振しほった。

此の女ばかりではない。他の九人の女達も、此処へ入れられた当初、同じように、どれだけ哀願したか。だが救い出す氣力もなく、唯、冷く背を向けるよりほかはなかった宇吉だったが、

「しッ、静かにするんだ！」

ハッとして女の叫びを制した。如何なる叫び声も、決して此の地下室の外部へ洩れる筈はなかったが、万造の咎めを怖れる本能的な動作だった。

(似ている！ お千代にソックリだ。いや、やっぱりお千代かも知れない！)

じつと娘の顔を見つめた宇吉の胸は、早鐘をつくように騒いだ。娘盛りを、輝くばかりに美しくなった変化はあつても、見られる

ことの出来ない幼な顔。

「おめえの名は何んと云うんだ？」

宇吉の声は、せき込んで震えた。

「利代と云います。——私を救けて下さい」

「利代？ 千代の間違いじゃねえのか？」

「いえ、利代です」

「年は幾ッだ？」

「十九です。何故そんな事を訊くんです。ね、お願い、私を此処から出して下さい」

「十九！ 本当だな。十九なんだな！」

「——」

「生れは何処だ？ 美濃の下田って所じゃアねえのか？」

「違います。房州の生れです」

「お父っあんや、お母さんは何と云うのだ」

「そんな事を訊いてどうするのです」

「お父っあんは由造、お母さんはおりきとは云わなかったか？」

「違います、違います。何故そんな事をお訊きになるんです？」

何時の間にか行灯を其処へ置いて、宇吉は娘の手を握りしめていた。

「隠しちゃいけねえ。おめえの名はお千代で、美濃の生れだな」

「違います、嘘ではありません。私は利代、房州の生れです」

「待っている、今此処をあけてやる。逃げるんだ。此処は恐ろしい悪魔の巣だ」

娘——利代の言葉には、宇吉は耳も貸さなかった。

地上の部屋へかかった梯子の昇り口の柱の釘にブラさがっている

鍵を取りに走り寄ったが、途端ギクツと立止まった。

「おい宇吉、おめえ、まさか俺を裏切るんじやアあるめえなア」

何時の間に降りて来たのか、阿島屋万造の囁みつくような峻しい顔が、物の陰影を受けて、物凄ましく寄ってきた。

「違う親方、裏切る訳じやアねえが、俺が一生一度の頼みだ。此の女に刺青するのだけは勘弁しておくんなさい」

宇吉はたじ／＼と背後へさがった。

「此処をあけて逃がしてやる。逃げるんだ、此処は恐ろしい悪魔の巣だと、手めえ云ったな！」

「親方——」

「一旦俺を裏切った奴が、無事で娼婆へ出られると思うと、見当が違うぞ。お上の法をくぐって商売する俺達の間じやア、なまじっかな義理や情はねえんだ！」

「そいつは判っている。判っているが、此の女だけは——」

「やかましい！ 刺青師は手めえ一人っきり居ねえ訳じやアねえ、此の広い世間にはゴロゴロしているんだ、手めえなんかが居なくても、今夜の仕事に魔胡つく俺じやアねえ。目が醒めるまで、当分此処で涼んでいやアがれ！」

呻きに似た怒声と共に、万造の右手の革鞭が、ヒュツと空気を震わせて、宇吉の頭上へ落ちてきた。

だが、それよりも速く——云いかえれば、此れが本能的な動作とでも云うのであろう。もとより、かかる俊敏な動きのとれる筈のない宇吉の体が、革鞭の触れるよりも速く、万造の体へブツつかっていった。

「アッ！」

万造は梯子段に背中を叩きつけて、弾むように床の上にプツ倒れた。

宇吉は夢中だった。思わず其処にあるものを引ッ掴んだ。短い竹の柄のついた箒の穂のほうだった。

「野郎、やりやアがったな！」

怒気と苦痛で、悪鬼のような形相に変わった万造が、起上ろうとするその顔面へ

「くそッ！」

力まかせに振下すと、さしもの青竹の柄も三ツに割れて、万造は惹き込まれるような呻き声をあげて、再び床の上に倒れて動かなくなってしまった。

箒の柄の一撃は、万造の鼻骨を砕いて、その先端はコメカミの皮肉を劈き、あふれ出る血潮は、見る間に万造の顔を真っ赤に染めつくしてゆく。

「し、死んだのでは——？」

宇吉はよろ／＼と二、三步よろめいたが、辛くも踏み止まると、呆然自失した如く、万造の姿を見下して暫く立尽した。

「俺ア、とう／＼人殺しをしてしまった！」

しかし、宇吉の心の中には、自責も悔恨もなかった。

（此れでいいんだ。此れで此の女達が救われるのだ！）

やがて宇吉は、柱の釘から、鍵をはずし取ると、一ツ一ツ、檻の錠をはずした。

「逃げる！ 早く逃げるんだ！」

ワッ！ と云う喚声を上げて、八人の女は行灯を蹴倒し、な



だれを打って梯子の方へ走り寄って行ったが、

「逃げて下さい、あなたも——」

八人の女のほうは見返りもせず、利代は宇吉の傍へ駆け寄ってきた。

「馬鹿！ 俺にかまわず早く逃げる。見つかったら、もうおしまいだ。早く逃げろと云ったら——」

「逃げます。逃げますけれど、救かる時はみんな一緒になくてはなりません。その人も救けてやって下さい」

利代の指差す八番目の檻の中。其処には、立上る気力もないらしい女が、ガックリと俯伏せに倒れた女であった。

「よし、此の女は俺が背負ってゆく。おめえは先へ逃げるんだ」

宇吉は檻の中から女の体を引摺りだすと、片腕を自分の肩へ廻し、細い胴体を抱えて立上った。

女達が逃げる際蹴倒した行灯の火は、床に流れた油の上を通って、その舌先は羽目板をなめはじめている。

「判ったろうな、世間には此んな怖ろしい所もあるんだと云う事が、人の甘口に乗っちゃアいけねえ。いいか、決して人の甘口に乗るんじやアねえぜ」

漸くの思いで土蔵の口へ逃がれ出た時、宇吉は力なえたのか、へたく／＼と女と共に膝を折ってしまった。

「今暫くです。頑張ってください。此処で又あのような怖ろしい人達の手に掴まってしまうたら最後です。木、頑張ってください！」

利代は泣くように叫んで、宇吉の腕を掴んで引立たせようとした。「俺にかまわず、おめえこそ早く逃げるんだ。——いや、一と言云っておくが、一ツ刻も早くお父っつあんやおっ母さんの所へ戻って

貧乏でもいいから仲良く暮すんだ」

「お父っつあんも、おっ母さんも死にました」

「死んだ？ 何時のことだ、それは」

「二年前です」

「そうか、そうだったのか。それじやアおめえには、兄が一人居た筈だったなア」

「いえ、姉さんは居りましたが、兄は居りません」

「いや、居る。宇吉と云うヤクザな兄が。だが、そいつも死んだ。あきらめるんだ。そんな事考えずに強くしっかり世の中を渡るんだ」

「さ、話は後でゆっくりきます。一緒に逃げて——」

「いけねえ。たとえ悪い男でも、俺ア人間一人殺しているんだ。自首して出るんだ」

「私も一緒に行きます。殺したわけではありません。あの人は、物のはずみで、あゝなったのです」

「おめえには此の女を頼むぜ。手当さえしてやりやア、此の儘死んでしまうとは思えねえ。俺ア今少し此処に頑張って、おめえ達が無事に逃がれるまで見張っている。幸いまだ此処の乾分の奴等は嗅ぎつけねえが、嗅ぎつけられたらおしまいだ。さ、此の女を頼むぜ」

宇吉は無理に、利代の背に女を凭せかけた。

「私も、此の女を何処かへ頼んだら、すぐに番所へ駆けつけます」

「いけねえ。番所へなどは、おめえのような娘の行く所じやアねえ。いいか、決して行っちゃアいけねえぜ。今までの事は、みんな夢なんだ」

「はい」

「達者で暮すんだぜ」

女を背負って、よろめき乍ら闇の彼方へ去ってゆく利代の後姿を見送る宇吉の目に、初めて訳のわからぬ涙が湧き上って、そのボヤケタ網膜の中へ、父母の顔と、今去って行ったばかりの利代の顔が

——妹の千代と信じきった娘の顔が、重り合って、泛かび上って来た。土蔵の中の火は、宿命的な罪業の空気を、真ッ赤な舌先になめて、次第に拡がっていった。

(終)

講談調のマゾの構想

田村 実

マゾヒズム物の講談調で、左記筋書の様なものはどうだろうか。

一、豊満美麗な勇婦(腰元でサディスト)に瘦身非力な武士(マゾヒストに非ず)が懸想する。それでその武士が、その腰元の閨に、しのび込んで手籠めにしようとするが、逆に腰元に仰向けに押え付けられ、尻の下に組敷かれる。女は男の胸板の真上に馬乗りに跨り肥った太腿を拡げて、男の両手を膝頭の下に踏みしめて、全身の重味をかけて長い間、組敷く。

二、数日後の夜、湯上りで腰巻一枚で化粧している腰元に、再び挑むが、又組敷かれ、両手を遅い膝の下に踏み押えられ、身動きも出来ず長時間にわたって組敷かれる。そして更に胸の上にドツカと腰かけられ、息の根のとまる程の重味を感じて苦しむ。最後にうつ伏しに、ひっくり返され背中を肥った膝をかけて乗り、両手を後にねじ上げられ亀の子の様に、組敷かれたまゝ縛られる。更に、両足首を縛られ、両手、両足を背中で結び合されてしまう、芋虫程にも動けぬ武士の目の前で

腰元は、立膝をしながら化粧にとりかかり、その化粧を済ませてから、武士を縛ったまゝ廊下に投げだし、そして寝てしまう、
三、翌朝、紅いしごきで縛られているその武士を、大勢の腰元達が見て笑う。一腰元に組敷かれた武士の噂を聞いた姫が、腰元と武士を呼んで糾明する。腰元は、武士が淫らなことをするから、こうして組敷き、こうして縛ったと、跨る真似等をしながら詳細に語ってその武士を辱しめる。武士は、酒に酔っていたから、組敷かれたので正気では負けぬと言訳する。姫は「では正気で勝負して見や」と道場で腰元と、武士を組打させる。鉢巻にたすき、裾をからげた腰元は、見事に武士を投げ倒し、胸板の上へ馬乗りに跨り、得意の型でグイ／＼組敷く。腰元は「さあ、動けるか」「降参したか」「降参する迄、こうしてやる、早くペソをかきながら降参する顔がみたい。」等散々、武士を辱しめ、長い

間組敷く、武士はとうとう、豊満の股の下に潰されて、その腰元に降参する。腰元は、尚武士の胸へ跨ったまゝ、懐剣を鞘毎取り出し「敵討ちなら、この通りとゞめを刺されます」と云いながら已の下になっている武士の咽喉を懐剣の鞘で、グリグリえぐる真似をして立ちあがる。姫は、その武士に罰として、馬になって道場を三回廻れと命じる。腰元は、武士を馬にして乗り廻すが、一回も廻らぬ中に武士はへたばってしまふ。更に腰元はうつ伏せにのびた武士の、両手を逆手に背中へ廻し、その上へ膝を揃えてドシンと坐り、武士の鬚をつかんで顔を引き上げ、両膝の下にその顔を踏み敷き乍ら「女の座布団になった男の顔を御覧遊ばせ」と笑う。姫君は「虚言を吐いた武士、妾も組敷いてこらしめ度い、そなた、組敷き方を教えてたもれ」と腰元に云う。腰元は、それでその武士を、稽古台にして姫に組敷き方を教える。武士は、今度、裾をまくった姫君に馬乗りになり、両手を膝の下に敷かれて、散々にもて遊ばれる。最後に、姫と腰元の二人に胸と腹の上に跨られたり、腰かけられたり、ひどい目に会った上やと許される。

四、姫に放逐された武士は、家宝物を奪って

逃げる。姫はそれを知って、その腰元に馬で追いかけて捕える様命ずる。腰元は、お家の一大事ばかりと、裸馬に跨ってその後を追いかける。街はずれで直ちに、取り押えた腰元は、例の通り組敷いて縛り上げ、馬の背に仰向けにギリギリと縛りつける。そして腰元はその胸の上にドツカリ跨り、武士を鞍代りにして城に帰る。馬のかける度に、武士は馬の背と、腰元の尻との間に圧迫されて、息の止まるほどの苦しみを味う。

五、腰元は、姫から武士と、真剣勝負の上、討果す様命じられる。裾を高々とからげ、その身仕度も勇しく、武士と真剣勝負するが、たちまちに、武士の刀を打ち落し投げ倒す。武士は、観念しきれずもがきまわるので、腰元は、十六貫余りの全身をもって押えつけて咽喉をめぐらして、とゞめを刺してしまふ。

以上の様な筋書で、鉄火な女侠客、勇婦を主人公にした小説がいくつある。

その他に、掲載されたき事項。

(A) 勇婦五態 (さし絵又は、写真と簡単な解説)

(イ) 娘仇討ち (矢来の中の仇討場で、豊満な娘が仇の胸へ跨り、仇の両手を膝の下に敷いて、両手で刀を持ちとゞめを刺している。仇

は娘の左右一直線に踏み上げた大腿の付根の下から、わずかに首と咽喉を出して、組敷かれ乍ら、齒を喰いしほり異様な目の色を見せている仇を、刺している。)

(ロ) 小町娘泥棒を捕える。(小町娘が泥棒のえり首に膝頭をかけて、グイと背中の上に乗る両手を、後手に縛り上げていく。)

(ハ) 女侠客暴徒を組敷く(鉄火場で、女侠客、衆人環視の中で、暴徒を組敷く。暴徒は女侠客にピッタリ胸に跨られ、咽喉に短刀をつきつけられている。)

(ニ) 芸妓の仇討ち(咽喉にとゞめを刺してうち果した仇の胸の真上に、横に腰かけた芸妓が刀の血のりを懐紙で拭いている。)

(ホ) 腰元痴漢をこらしめる(寝所で長襦袢一枚の腰元が、夜ばいして来た痴漢をとり押え胸の上に跨り、太腿を思いきり抜けてその痴漢の、両手を部厚い膝の下に組敷いている。腰元は、両手を抜けて太腿にかけ胸をはって誇らかに、組敷いた痴漢を見下している。)

(註) マゾヒスティックな構想としては外に加宮敏一氏のマゾ・バレー「魔の白鳥」も出色のものでした。KK通信第二十二号にもマゾのアイデアを発表してあります。

和装女体の緊縛と

女装の緊縛

岸 本 青 柳

「ああッ、痛いッ、勘忍してヨッ！」

「ソナナにきつく縛っちゃいやッ！」

こんな悲鳴は、土曜日の晩には、殆んど毎週のように繰り返された「縛られた女」の口から洩れる秘密の出来ごとであり、縛り遊戯であった。婚前交際一ケ年の間に、許婚のお花の師匠だった縫子と私とが、自宅の二階で演じた、縛られた女の実験研究であった。縫子は当時二十三才、色白で髪は濃く背は普通よりも高く、少し肥り気味などちらかと言えは従順な、おっとりとした旧家育ちの処女であった。彼女は県立高等女学校を終えても、小学校時代からセッセと通っていた未生流生

花師匠六角弥生さんの許で、一生懸命に腕を磨いたお蔭で、今では二十人余りの良家の娘さんに、毎日挿花を教授していた。勿論私とは正式の結婚するまでは、真実に深い穢れのない文字通りに、純真な精神的な交際を続けていたのであった。許婚の橋渡しはその土地の資産家であり、県会議員や其の他種々の公職にあった、祇園政信という好々爺さんで後に、このお爺さんが月下氷人となったのであるが、男女の交際には相当厳格な教訓をされたことを、未だに記憶に残っている。

このような雰囲気の中に包まれていた縫子は、独り居の私の宅へ来る毎に、お手のもの、

折々のお花や、手作りのお菓子などを手土産に持って来て呉れた。縫子は始めの内は、両親や弟らと共に連れ立って、よく遊びに来たのだったが、半歳も経ってからは両親の許しを得て、毎週末には必ず自分一人で、私の宅を訪ねて来るのであった。

縫子唯だ一人で訪れて来た最初の頃は、私は縫子の趣味や、将来への希望や、結婚後の家庭建設など、それからそれへと話題を投げかけてよく話し合ったもので、私も亦、私の抱懷を忌憚なく打ち明け、楽しくも甘酸っぱい結婚前の語らいが続いた。

彼女が一人で訪れるようになってから一ヶ月ほど経ったかと思う時分だった。話題は映画の話から時代劇に移った時「縛られた女」の出て来る映画見物や観劇の相談が出た。それから暫くの後、当時流行っていた、「燃ゆる渦巻」「修羅八荒」などの映画見物に出掛けたり、金閣寺の雪姫の出る時代劇を観劇したり、講談本(円本)を読み合ったりして縫子に自然に縛られた女の美しさを知らせることに努めたのであった。

このように躍起となって、責めの実験を試みようとする私の意志に反して、縫子は矢張り縛られる試験台にされるのを、強硬に反対

し続けたのであった。それを性懲りもなく私は、縛られた美しい女の写真や、昔の版画や自分の画いた色彩画を幾度となく見せては、一度ぐらいいは、縛られてもよからう位いまで心境の変化を来たすように、勧めたものだったが、依然として縫子は縛られるのを真から好きではなかったようだった。

こんな風で二、三ヶ月余りも、映画や観劇や絵画で、予備教育を施したので、もうこの辺でウンと色よい返事をするだろうと考えて、その歳の秋の暮れごろ、私はこう言っ
て縫子の真意を試めし
て見た。

「この次に来る時、麻縄と日本手拭を買って来てくれないか」

「ソナナものなんか、何にするの？」

「何でもよいから買って来て下さい」

「もし妾を縛るんだった

らいやよッ」

こんな押問答を交わした末、縫子は帰って行ったが、多分駄目だろうと思つて、半ば諦めて、次ぎの行動に移る手段方法を考へていた、ところが次の土曜日の晩、何時よりも多少早目に、私の宅を訪れて来た縫子は、相

女装の男が山中で縛らる



も交らず、美しい生花とお菓子を包んだ端ッ反の風呂敷包を、私の前にソツと置いて、

「ハイ、御注文の御大事な品物！」

と微笑ながら改めて別の包みを差出した。

私は只だ無言でそれを受取った。縫子は炊事場へ起つて行つて、瓦斯でお茶をわかして、

二人分のお茶を、弁慶塗のお盆に乗せて、汲んで来た。二人は何日もながらお茶を呑みながら世間話をしたのであったが、彼女の買ってきた麻縄と日本手拭が気になつて仕方がなかった。縫子は今晚は少し用事があるというので、早く帰り度いと言つていたが、私は唯だ縫子を縛り度いのみの氣持に駆られていた。

私は堪らなくなつて来たので、縫子が帰り仕度をする為めに、少し膝を立ちかけた隙を見はからつて彼女の背後へ廻るなり、肉づきよい白い両

手を後に振じ上げて、今縫子を買って来た麻縄で高手小手に縛り上げた。縫子はびっくりして、あゝゝゝと微かな声を洩らし紅潮した顔に洗面作って、口を「へ」の字に曲げ、小肥りの身体を微かに、揺ぶって苦痛の色を現わしたのであったが、それには遠慮会釈もなく、蝶々に結った黒髪を引ツ張ったり、掻き廻わしたりした揚句、二、三度足蹴にして、畳の上に転がしては、縫子の苦痛の姿態を、全身緊張味を漂わせて、凝視していた。その場面に接して、始めて私の希望の叶ったのを衷心から歎び、且つ縫子自分のものだという感を強めたのであった。



和装して庭園で後ろ手に縛られた姿態（青柳写真集の内から）

時、中秋、着物、黒襟濃茶色の格子縞給衣、紅裏、帯、紫地に白い抜ききの格子、腰巻、紅色、長襦袢、緋縮緬の花模様、帯揚げ、紅、白、髪、かづら崩し、

し、そんな眼付きで私を睨んでいた。何とも言えぬ縫子の体臭が私の鼻に入ってくる、白粉の香、口紅の香、髪に香それらが絡み合った香りは、四畳半の茶室一杯に拡がって来る。

この時の縫子は、縫子好みの黒襟のかけた中柄よりも少し粗い格子縞の、淡茶色の紅裏の付けた給衣に、淡黄色の亀甲紋を染め抜いた黒縞子の帯を締めていたが、二、三度転がされて、自然に髪が乱れ

緋縮緬の花模様の長縞絆の裳も乱れ、赤い腰巻も捌けて雪よりも白い、太腿がチラ／＼覗かせていた。こうした美しい姿態を、机の上の常置していた、独逸製のカメラで手早く、パチリ／＼と三四枚撮影してから、始めて縫子の縄目を解いた。この時間は約半時間くらいであつただろうと思つてゐる。縫子はホット溜息を吐いて、両手の手頸に残っている縄目の跡を見せながら、私の膝へ泣き崩れながら、

「あんまりだわ、こんなに縄の跡が付いて、髪が壊れて、どうしよう！」

と恨み言を繰り返すのであったが私を取りあわなないので、乱れた着物を直し、壊れた髪も手鏡に映して元通りになでつけ、顔もお化粧し直して、何時ものように、ニコ／＼顔で帰って行った。四、五日の後、この写真を中版に焼き増し、縫子の再来を待っていたが、縫子はその後三週間あまりも姿を見せなかった。縫子は後ろ手に緊縛され、虐待されたのを余程骨身にこたえたようで、また虐待の宴を演ぜられては？との恐怖心からか、他に用件でもあったのかは知らないが、梨の礫で何の音沙汰もなかった。

漸く一カ月目ぐらいに、今度は可愛いらしい妹を伴って、朗らかな顔で訪ねて来た。が勿論先般の話には少しも触れないで、二、三十分位雑談して帰って行った。その後十日余りも経って、夕方訪れて来た時は、唯一人だったので、始めて縫子が縛られた姿態の写真を見せると、頗る嬉しうであった。私は急ぎの用件で側の机で手紙を書いている間に、縫子は自分の後ろ手に縛られた二、三枚の写真を畳の上に並べて、自分の両手を後ろに廻して、起ったり座ったり、身体を燃じ向けたり、いろ／＼と姿態をつくっていた。多分縛られた瞬間の気分を味っていたのである

うと察して、私の希望の実現に一步近づいて来たことを心秘かに微笑んだ。

「ソナナに見詰めちゃいヤッ！」

半ば甘えるように笑いながらトボけていたが、其の裏、縫子自身は、縛られた姿が、余程お気に召したのであらうと、私は善意に独り解釈を下したのである。茲まで仕込めば、もう大丈夫、精神的養成が肉体的実演から、縫子も縛られることを、歡び且つ期待するようになるのも遠くはない、私も骨折り甲斐があったと、その成功を祝福せずには居られなかった。

その後一週間経過してから私は、縫子の着物一切を貸して貰うよう頼んで見た。すると縫子は

「妾の着物を質屋に持って行くんじやあないでしょうね」

など、冗談を言いながら、紅、白粉、香水も添えて、その翌々晩わざ／＼持ってきて呉れた。それから毎晩私は、縫子の着物を着、白粉を付け、友人の骨董屋から買って来た「女のかづら」を冠り、完全に女装して「縛られた女」の独演を試みた。両手を後ろ手に縛ったり、柱に両脚を縛り付けたり、裏庭の置物の梁に別の太い縄をかけ、後ろ手に縛った

身体を、踏台の上って、吊り下げたり、種々雑多な姿態を作って、責めの体験研究に耽っていた。室内では、特別大きな鏡台に、縛った姿態を映しては、桃源境に陶醉するのであった。それでも身体には、何の異常も変化もなく、翌朝は早くから勤めに出た。この体験を約一ヶ月も続けていた或る晩、訪ねて来た縫子に、女装した私を縛って呉れと頼んで見た。

縫子は始めは少し躊躇していたようだったが、私の再三の要求に漸く応じて呉れた。そして思い切って、女装した私の両手を後ろ手に、高手小手に縛り上げ、おまけに古手拭で猿轡まではめて、座敷簀で、散々殴って貰った。その瞬間の気持は何とも言えない、夢を見ていたような爽快な気持ちだった。こんな良い気持ちは、その体験を経た者でなければ到底他の人々には解るものではあるまい。

その時の感想に就いて、縫子はこう言う、「妾が縛られた時は、始めはそうでもなかったがだん／＼縄が肉に食い込んで強い痛味を感じるようになって来ると、半ば自暴自棄になって、モット強く縛れ、モットと酷く強く責めて欲しいという気持ちに駆られます。」と素直に真実心を吐露するのであった。こ

教

師

青 葉 楨

れとは反対に、私が女装して縫子に縛らせた時の、感想は如何でしたかと聞いて見ると、「妾の着物を着せて妾に似合ったように女装した貴方を、後ろ手に縛り猿轡までして責めて上げた時の妾の気持ちは、何とも言えない気持ちになります、でも貴方を責めるのは可哀想になります」

と感想を語るのであった。こうした実演が続けられ、其の翌年の晩春、正式に結婚してから、矢張りこの責めの実験研究は怠らず

に続けられ、益々進境の域に突入して行った。遂には室内では趣味も興味も薄らいで来たので、庭園の泉水の辺りや附近の山林に赴いて縫子を其処の松の樹に縛ったり、吊り下げたり、また私が女装しては縫子に縛らせたり、いろ／＼趣向を変えた姿態を、写真に撮ったり、絵に画いたりして、二人が欣悦の生活を送って来たが、私は縫子を裸体にして責めの実験を行ったことは未だ一度もない、裸体には実感が起らない。それよりも変った着物、

帯に興味を注いでいる。だから裸体写真や絵画には趣味がないのである。だから寒中でも、真夏の昼間でも責めの実験には、紅裏の付けた給や綿入れの、袂の長い黒襟のかゝった基盤縞、格子縞、粗い縦縞に細い横筋の入ったいろ／＼の着物に、緋の長襦袢、赤い腰巻、昼夜帯か黒縹子帯かを用いる。髪は「かづら」の何れでも良いが、幕末時代の江戸下町風の娘風俗のその儘の粋な奥床しい姿態を好んで用いるのである。

で、それを難詰されるのに決っています。私は、出来ることならそのまゝ逃げ出したい気持で一杯でした。

私が中学校四年に在学中の事です。四年生と云っても、病気で一年休学しましたから、年齢は満十七才になっていました。

深田先生は、下士官上りの体操教師です。

夏休みも終り、二学期が始まってまもない日の放課後。下校しようとして靴を穿いていた私は、掃除当番で残っていた級友の一人から深田先生が呼んでいる、と告げられました。私は思わずドキリとしました。呼びつけられる理由は判っているのです。前日の六時間目の体操の時間が、身体検査になっていたのを昼頃気分が悪くなり早引けしたのですが、担当の深田先生には無断のまゝ帰って了的たの

抜け上った額の下に、よく光る禿鷹のような眼をもち、確く結ばれた大きな唇は、何か動物的な残忍さを漂わせていました。その授業は残虐に近い程苛酷で、一時間の中に怒号やビンタの音の飛ばない日は無いといった有様です。その為に深田先生は学校中から恐れられ嫌われていました。でも、私の場合は少し違っていました。恐しくはありましたが、その反面、深田先生を好もしく思う気持ちも否定出来ませんでした。軍人らしさのぬけない粗

操 体

暴な男として、何時か強く牽きつけられるようになっていたのです。視線が合ったときでも脚が憐むようなのに、その一方では、彼の体臭を嗅ぎたい、裸体を見たいと念じ、果はもっと淫らな妄想さえ逞しくしていた私だったのです。

不安な胸を押えて、職員室へ這入っていくと、机に向って書きものしていた深田先生は顔を上げると酷しい調子で、

「オイ、青葉。お前、昨日は何うしたんだ」「ハイ。気分が悪くなったので早引けしまし

た」

「だがお前。身体検査の事は知らなかった訳じゃなかろう。早引けするならするで、何故俺に断わらなかったんだ」

「——知らなかったんです」

「何、知らなかったと？ それじゃお前、朝礼で俺が云ったのを聞いていなかったんだな！」

「はい——申訳ありません……」

私はもう駄目だと思いました。次の瞬間には激しい勢いで飛んで来るに違いないピンタを覚悟して、身体中を固くすると頬に全神経を集めていました。

突然、ガタンと椅子が大きな音を立てました。私はビクツとして閉じていた臉を開きました。見ると、深田先生は身体検査表を手にして立っています。

「来い！」

そう一言云うと、巾の広い肩を揺するようにする癖のある歩き方で、深田先生は大股に先へ立って室を出て行きます。私も急いで後を追いましたが、病人のように足がフラ／＼していました。

放課後なので校内はガランとしています。長い廊下をコの字形に曲って、南校舎の西の

一番端が、物象室に附属した準備室で、そこに秤や何かも置いてあるのです。準備室の前へ来ると、深田先生はポケットから鍵束を出して扉を開け、私が這入るのを待って、ガチャリと錠を下しました。スリ硝子の窓一面にカツと西陽が照って、閉めきった室内は息苦しい程の暑さでした。

「サテと、じゃ先ず、体重測定から始めるか——」

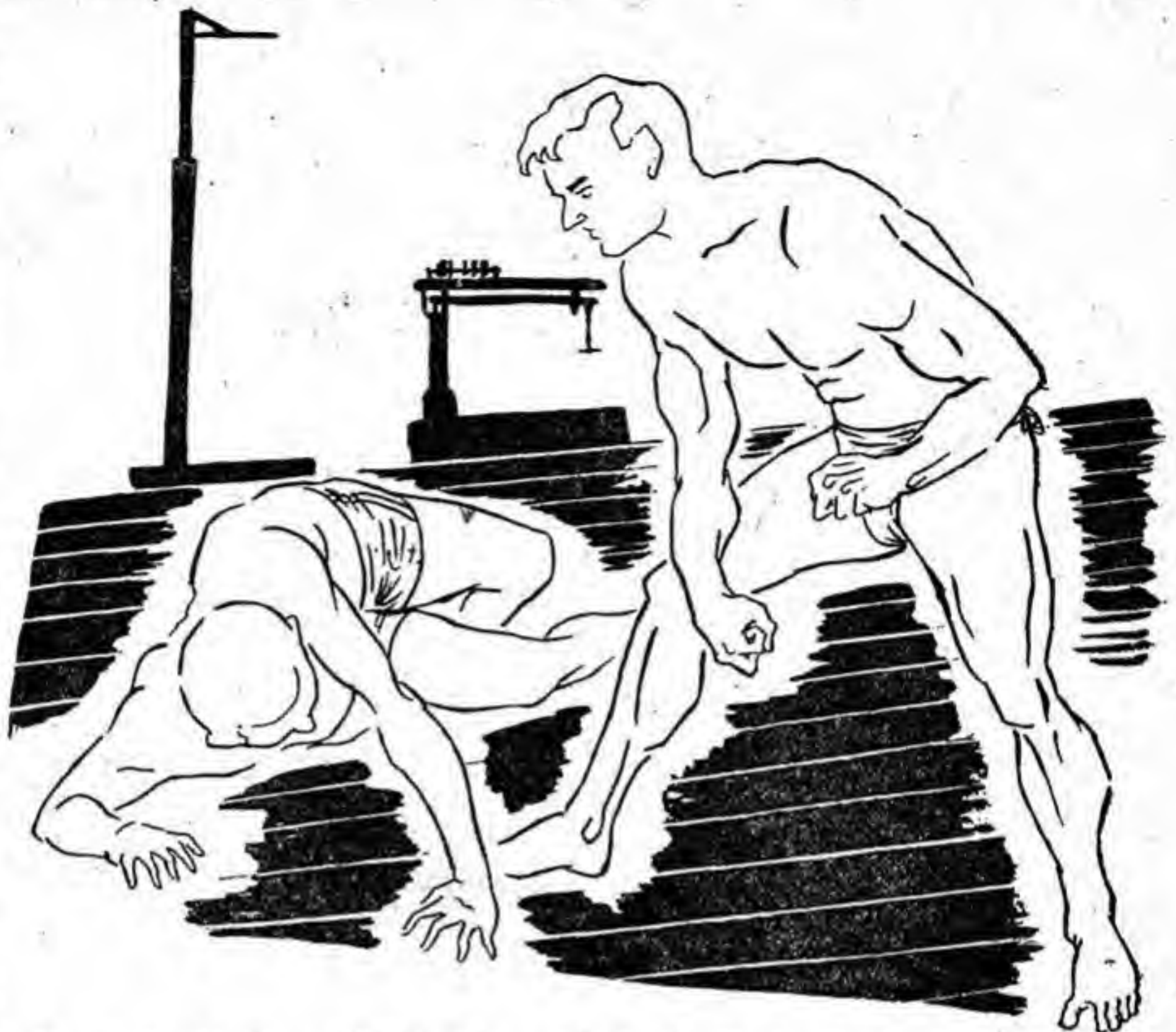
深田先生は、戸棚の隅からゴロ／＼と旧式な台秤を引っ張り出しました。もう怒ってはいない様子です。

手早く金釦の制服を脱ぎパンツ一枚になった私が、秤へ上ろうとしますと、

「待った。今日は特別に軍隊式だ。そいつも脱って真ッ裸になれ！」

と云って、深田先生は赤黒い唇の端を歪めました。

私は当惑の余り、泣き出しそうになりました。私は男のくせに、人一倍恥かしがりでした。母親にさえ肌を見せるのが嫌さに風呂へもコッソリと一人で入りました。夏外出から帰って汗を拭くときも、人の見ていない処でなければ出来ませんでした。今パンツ一枚でいるのさえ恥かしくてたまらないのに、それ



を脱らされるのは、私にとって死にも勝る辱めです。併し先生の言葉は逆うことの赦され

の姿勢をとるんだ。もっと上体を起して、両手を真直に伸す」

ない命令です。私

は、観念して向う

むきになるとパン

ツを脱り去りまし

た。羞恥に頬がカ

ツ／＼と火照って

来るのを覚えなが

ら、（深田先生に

だけなら見られて

もいゝ——）と云

う気が心の何処か

で起っていました

そしてそれは一

種の快感となつて

私の五官を微かに

顫わせました。

私は、手を前に

当て面を伏せて秤

の台へ上りまし

た。

「オイ、何だその

恰好は。台へ上っ

たら『氣ヲツケ』

そうドヤしつける深田先生の声は、でも、

変に熱つぽく感じられました。私は『氣ヲツ

ケ』の姿勢をとりました。台が足の下でガチ

／＼と音をたてます。全身に痛い程、相手の

視線を感じ、胸が苦しく、瞳の焦点がボヤけ

て、脚が台から浮いてしまうようでした。

「よし」

と云う太い声にハッと我に返った私は、よ

ろめきながら床へ下りると、急に新しい羞恥

に襲われたように、氣忙しく下着をつけまし

た。

「そうだ。俺もひとつ測ってみるかナ。オイ

青葉。お前やって呉れるか」

突然思い付いたようにそう云うと、深田先

生は白い歯を出してニヤツと笑いました。

全く予期しない事だったし、すぐに先生の

裸身が想像されて、私は胸がドキ／＼して来

ました。

深田先生は、持前の荒っぽい動作で、見て

いるまに、ワイシャツもズボンもかなぐり捨て、最後にきわめて無造作に申又を脱ぎまし

た。私は眼が眩むようでした。嗜みが無いと、

は知りつゝも、先生の逞しい肉体を噴めない

ではいられませんでした。

「オイ、いくらある？」

促されて狼狽した私の指は、ブル／＼顫えてなか／＼思うように測れません。

「ハイ——六〇——六五キロです——」

「六五キロか——少し痩せたかな」

先生は、脱ぎ散らしたズボンのポケットから煙草を出して火を点けると、

「エ、ト、じゃあ続けるか。次は身長だ」

と云って裸のまゝ壁の方へ歩いていきます

「先生ッ！」

その後姿へ向って、私は突然叫んでしまったのです。

「何だ——？」と振り返った深田先生の軀へぶつけるように私は叫び続けました。

「僕は——僕は先刻嘘を云いました。身体検査の事は知っていたんです。知っていたながら先生には黙って帰ってしまったんです。先生僕が——僕が悪いんです！ 殴って下さい！ 僕を殴って……！ 先生のお気の済むようになすって下さい……！」

胸の中では熱い火の塊がグル／＼廻っているようでした。人並外れて内気な私の、何処にそんな勇気があったか、自分ながら不思議でした。

シツと私を睨めていた深田先生の眼に、憤怒と情慾の入混った光が漂い始めました。

次の瞬間、私の脆弱な体はいきなり床に突倒され、狂暴な力で忽ちシャツもパンツもむしりとられました。そして息つく間もないように殴られ蹴られながら、見上げた熱い瞳に、泣声を上げてのたうち廻りました。

やがて、スツと消えるように西陽が落ちて私の転がっている机の陰が薄暗くなっているのに気がつききました。

二

私が初めて深田先生のものになった日から三日目の午後。職員便所の裏で私は先生からソツと耳うちされたのです。「今夜は俺が宿直だ。八時頃やって来い。いゝか、わかったな——」私の胸は妖しく戦きました、夜になるのが何んなに長かった事か——。時計が七時を打つと、私はもうじつとしていられませんでした。友達の外へ行くと母に告げて家を出ました。学校の前へ来て腕時計を見ると未だ七時半です。少し早いとは思いましたが、私の足はもう自然と宿直室の方へ向いていました。

「おう、早かったな。サ、這入れ——」

丸首シャツにステテコ姿の深田先生は、手をとるようにして私を中へ入れると、窓を閉めカーテンを引きました。私は急に切なくな

り、「先生……！」と云うと広い胸に抱きついていきました。

深田先生はうまそうに煙草をふかすのでした。私は先生の膝にもたれながら甘えるように、

「——先生。今夜は僕を縛って、うんと責めて……」

「そうだ。縛るのもいゝが、今夜はもっと面白い事をしよう」

「もっと面白い事って——？」

「ウ、ウン。それは今にわかるさ……」

先生はそう云うとニヤニヤして、吸差しを灰皿へ振りつけ、

「サア、それじゃ行くかな——」

と立上るのです。

「何処へ行くんですか——？」

「俺について来ればわかるさ」

深田先生は戸を開けるとサツサと外へ出て行きます。私は流石に一寸驚いて、

「先生。此んな恰好で、僕……」

「誰も見てやしないよ。もう九時だ——」

先生は廊下から校庭へ出ました。

私は不安と期待にワクワクしながら、先生にピッタリと寄添いました。跣足の蹠に土の冷たさがヒイヤリと浸みます。

構堂の横を通抜けた時、ツト立止った先生は、黙ったまゝ勢よく放尿を始めました。その瞬間、私はそれ迄考えてさえいなかった事を、自分でも殆ど無意識の中に行動に移してしまつたのです。強い臭気をもつた生微温い液体が、私の全身を快く濡していきます。私は地面に身を投出したまゝ、眼を閉じて、痺れるような快感に酔っていました。

暫くすると、深田先生は静かに私を抱き起して「——青葉。お前は本当に可愛い、奴だ」と云いながら強く抱き締めて呉れました。

まもなく、先生に連れられて来た処は、満々と水を湛えたプールだったので。その黒々とした油のような水を見た時、私は何かしら微かな恐怖を覚えました。私は海や湖、又池やプール等を見ると、一種の恐怖を感じるので。それは私が、



幼い頃から病弱で、泳ぎというものを全然知らないからでした。学校でも体操の時間が水泳だと、決つて欠課していました。ですからプールへは未だ一度も入った事は有りませんでした。

（一体何をするんだろうー？）
そう思うと、私の鼓動は急に高くなつて来

ました。

「青葉。お前、泳げなかつたナ——？」

深田先生は、薄笑いを浮かべながらそうわかりきつた事を訊くのです。

「はい……」

私は小さな声で答えました。

「ハム、お前願えているのか——」

「イ、イムエ……」

「青葉。お前、此の俺が好きか？」

「好きです……」

「愛しているんだナ？」

「愛しています……」

「それなら、俺の云う事を何でもきけるか？」

「はい……」

「ようし。じゃア、飛び込んでみる」

「……」

「おい。飛び込んでみると云つたら——」

「ハ、はい……」

私は哀願するように、先生の顔を見上げました。先生の顔には、残忍

な感情が不気味な限を作っています。

「——お前。先刻俺の事好きだと云ったのは嘘なのか？」

「いゝえ、嘘じゃありません！」

「なら飛び込んでみる！」

「はい。飛び込みます！……」

私はやっと覚悟を決めてプールの縁に立ちましたが、深く溺んだ水を見ると、スーッと身体ごと引込まれていくような恐ろしさにもう脚が凍んでしまうのです。飛び込んだら溺れる事はわかっています。溺死——それは死の恐怖です。併し私はもう絶対絶命です。

「おい——！」

焦立ったように云う先生の手が私の肩にかかりました。その途端、私の体は本能的にその手をすり抜けて逃げ出していました。

「おい、待て——！」

プールの周囲をグルグル廻る、奇妙な恐ろしい鬼ごっこが始まりました。

でも忽ちの中に私は捕ってしまいました。

死物狂いで藻掻く私を、先生は易々と抱上げると、はずみをつけてプールへ放り投げたのです。私の悲鳴はすぐ水の中へ消えました。私は自分の体が一旦水の底へ沈んでから、すぐ又浮び上ったのを知ると、後はもう夢中で

両手をバタバタと藻掻かせました。

それは随分長い時間に感じましたが、実際は三〇秒位だったかも知れません。

私は深田先生に助け上げられ、濡れた身体をやさしく抱かれました。

「恐かったか——青葉——ウム？」

「——エ、とても……僕、死ぬかと思いました……」

「そうか。ヨシヨシ、可哀想にナ……」

先生はそう云って、暫く私の裸身を愛撫していました。

「——青葉。もう一度、お前を投げ込むと云ったら何うする……？」

「も、もう嫌です——勘弁して下さい——」

私は思わず泣声を出しました。先生の眼はもうキラキラと光って来ます。

そうして私は又も水中へ放り込まれたので

す。先生は、今度は仲々助けてくれません。

身体は次第に疲れ、呼吸は苦しく、度々ガブツと水を吞みます。

「——せ、先生——タ、助けて——先生、ク

苦しい——助けて、助けて——！」

そう叫んでも、それは声になったか何うかわかりません。私は何時のまにか気を失っていたのです。

我に返った時、私は宿直室の布団の中に、寝かせられていました。

「気がついたかい……」

「はい……」

「今夜は泊ってけよ。ナ——」

「エ、でも——」

「家なら心配いらぬ。友達の家へ行くって出て来たと云ったろ。だから先刻電話しといた。晩くなったから泊っていくって。青葉。今夜は俺と一緒に寝よう……。いゝだろ……」

「はい……」

私は深田先生の逞しい胸に顔を埋めると、後から後からと流れる涙に、濃い胸毛を濡らしていったのです。
(おわり)

【読者通信】をお寄せ下さい。誌面の拡張に伴い読者の声を大幅に掲載したいと思っております。従来寄せられました、切腹通信、浣腸通信、そどもや通信の外サド・マゾは勿論の事女装マニア、レスボス、フェチズム、身体各部の狂崇、等々について、他人には話せぬような事柄でもKKグループの間では、誰にも気がねする事なく、愉快に話し合う事が出来ます。

き
も
の
シ
リ
ー
ズ

「初見世バイト」

白金紅次

駄菓子屋の二階を借りていた私達夫婦は、

その後うどん屋の離れを借りることになって
まがりなりにも世帯らしい部屋に落ちつくこ
とになったが、まだく工員風情じや見越の
松処か、ふすまの破れから秋風が沁み渡る貧
乏暮らし……しかし今度は少し工場に近くて
それに、海——と云っても河のどぶか潮のあ
くたが、ピチャ／＼押し返す河岸が眼の前に
見えて、態のいゝ別荘気分である。

生暖い四月の風が吹いて、工場は天長節で
休みだ。杉本が珍らしく菜っ葉服を脱いで、
上っ張りにビクをさげ、下駄ばきでやつて来
た。気分転換に釣は結構だが、少々間が伸び
過ぎて退屈だ。たまの休みは女房の尻をはし

よった後姿を眺めて、煙草でも吹かしていた

いもんだと思ったが、同僚つき合いで洲崎の
突鼻に出掛けた。腹はすかず今考えても羨し
いのんびりした世の中である。その帰えり途
杉本が特徴ある赤っ鼻を一段とふくらませて
「おい、今度いゝ店が出来たぜ、造作もいゝ
んだが頼まれちゃったよ……」

「よせよ、こないだのような事は断るぜ、あ
とでこっちが迷惑するからなあ……」

「ハッハッ……まあいゝじやないか、どうせ
お敏ちゃんあいてるんだから……いや今度は
用心する」

「何んだい、今度の話っていうのは……」
「いや……大したことじやないんだが……悪

いからよそう……」

「おい／＼、また馬鹿に神妙になったね、い
ゝから話して見るよ、時と場合によっちゃ聞
いてもいゝぜ……」

何回か近所の娘う子を追い廻わしても、一
向実のつかない杉本の髯っ面に夕陽があたっ
て、ゴリラのように毛深い指先きで女の子を
握ったら、握られた方がたまげるだろう。そ
の指先きで頭を掻き／＼、

「いやあー主人と云う奴がねエ、とっても熱
心なんだ。熱心なのはまあいゝとしてほら店
が出来ても品物が無いんだとさ……少したら
んって」

「じや、どこからでも狩り集めたらいいだろ



う、いくらでも転ってるぜ」
「それが無いんだとさ……弱っているんだ、まさか花輪だけでいらっしやいて云う訳けにやいかんしさ。第一頼まれちゃった方が、あんまり大っぴらに……やって見ないかなんて云えるかい……」

話の内容は判ったが、そんなに困るんならちよんの間お借ししましょうと云う生易しい代物じゃない。けれども三拝九拝して、兄貴さえ承知すりや責任は充分俺れが持つ、と云う杉本はあてにはならないとしても、女で勤まる商売をまさか男でやる訳には行くまい、

第一当人の女房の敏江が世帯を持って以来私の脱線振りにとんと手を焼いている始末だから、

「嫌やあーね、またあなたの病気が出ちゃったわ……」

とすげなく断られちゃったら万事お終いの助である。今度はデパート人形処の騒ぎじゃない、活き／＼と動く人形だ。いくら手の屈かないきものが着られるにしても条件によっちゃ飛んでもないことになる……

しかし半分茶目っ気でスリルを味う醍醐味も、また格別だろうと独りぎめした私はその足で話の店に出掛け早速主人に逢ってみた。

「いやあー、どうも、そりや有難い、なんしろこゝじや初めての開業だし、衣裳は七人分揃ろっちゃいるが、今ん処肝心の女の子が揃りいませんでね、弱っていた処ですよ。なに、ちっとも御心配要りませんよ、

私が……って云やあ変にきこえるが、あなたがちよくちよく眼を張っていられりや大丈夫ですよ。じやお頼みしませうか、詳しいことはまたあとで……」

六十余りの出腹らをゆすぶって話をつける主人にいさゝか安心した私は、開店日と時間

だけを聞いて帰った。

一日二日経って工場から帰ると、私は飛行機から飛び降りたがパラシュートが開らなかったとか、上野の西郷さんの顔の真ん中にはいくつ紙つぶてが当たってる……なんて下らない話をした後、首筋に残っている白粉のあとを眺め乍ら、

「ね……面白い話しがまだあるよ……」

「……………」

敏江は例の小町笑くぼを浮かべながら、茶枕を展らべる。

「きれいな花輪だけだ……人形がいらないだよ……」

「あら、また人形が出ちゃった。貴方のお人形は人一倍こってるから、もう閉口……」

「そうじゃないんだ、たゞ店に坐ってりやいゝんだ、食いぶちつけてお給金が十円、やってみないか……」

「だって、またおしめだの後手なんて、とっても窮屈で痛くって……うどんやのお仲（女中）さんでも頼んで見たら……」

敏江の予防線は要塞堅固でなか／＼陥落しなかったが、ともかく、もと／＼貴方が好きだったから一緒になったのよ、と云う処で折り合がついたが、生きた人形よりか繰る人形

主の方が、気が落ちつけず、柄にもなく、そも／＼肉体的交渉とは何んぞやなど、とそこから近辺の婦人雑誌をやたらにめくってみたものである。まあそんなことは今に及んでも始まらない話だが、ともかく前以て敏江と見聞する必要があるので、開店の前の晩、恥ずかしいから嫌だと云うのをなだめすかせて連れていった。今でこそ基本的人権がどうのこうの、男女同権で、互いに侵犯しちやいけないのッて、全く自由な有難い世の中になって了ったが、当時は東雲のストライキの余燼がくすぶっていて、ミルクホールがまだのれんを張り、結構繁昌していた頃だったから、斯うした世界——講釈師が喋る一枚看板、浮き河竹の沈む場所が夜ともなればまるで別世界のようにな花を咲かせ、若人の心の憂さばらし否、チヨンガーに取っては枕と共に脂粉の中に夢を結ぶことが天下公然と許るされていたのである。

「じゃ五時頃勢揃いして下さいね……なあにほんの客寄せですよ、貴女だったらほん物に見えますよ、なんだ、かんだは店の方でやりますから……まあ一晩お仲間入りして御覧なさいよ、為になりますよ、将来のためにさ」と主人は、如才なく反面意味あり気に笑っ

て敏江の肩をたゝいた。私は一応店の者と云う身分で出入りすることに決まり、まさかの時には敏江を抱いて了えばいゝと考えて日の暮れるのを待った。店の戸がまだ開いていないのを幸い、木の香も新しいてすりに寄っかゝって、初見世風景を見るのもいゝ気なものである。

「こゝは吉原見たいにキッチンと坐ったり、写真だけで客は来ませんよ。風呂から上りたての処から願いますよ、いゝですか、斯うやって鏡台に向って……おい／＼坐り方がまずいなあ、ベタンと坐って、そう、鏡の顔は客の方にむけて……間違っても自分の顔を見るんじゃない、お前さんの浴衣で膝っ小僧まで覆っちゃ駄目じゃないか……恥づかしい柄でもない癖に、そう／＼そう来なくっちゃ……客は逃げちやうぜ……破けてる？ そんな筈はないんだが……お絲／＼も一つ蹴出しを持って来て呉れツ……」

忙しく立廻る主人の白いステテコが、芝居の演出と云つちや大げさだが心憎い程すぎがない。

「腰巻をはめる時にや斯うやって……少し身体を斜めにしてお尻の処を一寸見せる。そして浴衣を片っ方の方から脱いで、長襦袢を片

っ方から着替える。いゝね、これだってまともにお客さんにお尻を向けちや失礼になる。なんでも斜めくんにすりやいゝんだ、そして長繻絆のまゝで最後の顔の仕上げをする。こんな時でも片膝を崩すと色気が出るんだ、恥かしい？ そんなことで……いやこりや失礼、こちらさんまあ辛抱して下さいよ。あなたも同んなじ家の娘だから……旦那さんもあそこから見てござる。アハハッく」

百燭光の電燈が二個ついて表の戸があけられ、水を打たれて夜目にも白く塩の山が築かれると、俄然一切の森羅万象が生々と活気を帯び、昼間は鼻にもひっつかないどぶ河までが朦朧と美々しく脂肪の中に包まれていく……。

私はこゝまで場面を展開して来た以上、この時の情景を詳しく読者に報告する義務があるかも知れない。だが永井荷風氏のあらわす「濯東綺譚」のように一目瞭然それと判る雰囲気は、当世公然と筆を執るべく余りに自由憲法は次第に封建的に、平たく申せば取締りが厳しくなりつゝあるから、極めて客観的にニースフラシユ的にまとまらない数駒を綴ることに止めて置く。

或る娘は注文された姿で鏡に向って、パタ

く顔をたゝ

いている。桔

梗模様の白地

の浴衣を透か

して見えるビ

ンクの色は、

締めた湯文字

の色に相違な

かるうが、

「あら帯締め

がないわ」

とかがんで

探す裾が割れ

紅中白のチラ

リズム……髪

を束ねて風呂

上り、涼みを

取る間も惜し

そうに紐を解

きはごす赤い

物。

「その帯取ってよ」

「こんな裾よけ汚れりやしないか知ら……」

「あらあなたのお腹出てんのね……」

「ねえ、どう肥えてるでしょう……」

高き小足の
まきめ折腰……

アハハッ
こりや冗談だが……



「まだ初めてよ……ほんと」

「長繻絆の袖丈とっても変だわ」

こうしてあゝして、あゝしてこうして……

交互に履き替える足袋の白さよ裾まわし、行

きつ戻りつ、戻りつ行つて背負いあげたお太鼓さすつてニンマリ笑う。

「美代ちゃんその紙取って……」

で、招きの猫がニヤンとも云わず棚から見降ろし職場を眺める。げにうるわしき職場かなである。かつて京は祇園の名花が大挙して上京した時、その楽屋風景に坐して三日許り眼を廻わした友人の表情も斯くありなん……

その内とっぷり暮れて、表の通りが次第に賑やかになって来た。独りくわえ煙草で入って、チロリと見て出て行くハンチング、そばや小僧がのれんの端にそば台を持ち上げて、ちよいと中を窺うものや……

「お月様さえ泥田の中へ落ちて……行く身の……と都々逸まじりで、お盛ん／＼とひやかして行く芸人衆と、いやもうお賑やかなものである。すると突然降つて湧いたように、

「なあんだ、この店かい、開店早々景品付つて云うのは……」

何処で飲んだが酔っぱらつて、足取りも怪しい三人連れの男が「松喜」と印してある布のれんをパッとのはねのけて、威勢よく飛び込んで来た。

「ほほう、大分いるね。どれが一番別嬪だッひいふうみーよいいと、あの柱の蔭にいる

のは何んちう名前だ、え？ 笑子ツて、いい名じやないか、あれにきめる、亭主ツあとでいゝだろう」

と指で円い輪をつくつて見せる。

「一寸お待ち下さい。へへッ毎度有難うございます。それが一寸あの娘にはもうお約束のお客様がありましてなあ、外の娘で如何なものでしょう？ 相済みませんです……明晩なら間違いない、へッへッ／＼」

びっくりした敏江が、斜めに坐った膝から真赤な蹴出しをヒラリと出したまんま、シャソとなつて、眼尻が立ったのも無理はなからう。笑子と云うのは当の敏江の河竹の名であつたからである。

「先客があるツて……冗談云うない、開業早々、いや開店早々、まだ宵の口にや入らネエんだぞ、それでも、もう口あけがあつたのかい？ 何処のどいつだ、顔が見えていや、おい亭主ツわしやなあ、こう見えても、日本橋はさる呉服問屋の番頭様だぞ、じや上らなけやいゝんだらう、お顔の一つお声の一つ位は聞かして貰おうじやないか、えゝ亭主、どうだツ……」

「へい／＼、今日の処は誠におあいにく様でどうぞお声だけはかけてやって下さいまし。

さあ笑ちゃんこゝへ来ておぶうでも差上げなさい……」

てすりの壁に掛かっているこれもまた招き猫の画草紙見たいな物を眺めていた私は、やれ／＼と胸を撫で降ろして素知らぬ顔で表に出て、すぐ裏口から入り、帖場の蔭から店先を監視しなければならぬ。手数のかゝる初見世興行ではある。

「うむ、仲々の別嬪じやのう、着物は水色地に紅葉の模様、裾は……と波の浮き出し一越縮緬。これ……旦那さんのおぼしめしかい、え？ そうだろう、ウンと云えよ。わしやなあ、こう見えても呉服屋の番頭だ、眼は至極肥えてるけん、帯は黒縹子に椿の刺子か、こつて梓じやネエか、締めた帯揚げ鹿の子の紋り、朱の丸打の帯メとはどう見ても安くはネエ、さあその下を拝見したいね、恥かし、冗談云うない、上り度いのは山々なれど先客あつてはお先きがつかえるって情けねえ番頭様だ。めくるよツ……」

何しろ、店先きで酒の力を借つてるとは云え、情景が一転して色つぼくなつて来たので不安な私は主人に眼くばせをする。主人はまあ私にお任せなさいよと云わん許りだ。

「ほほう、下は……下着は燃え立つ紅色地縮

代理部月報

伊藤晴雨著

『美人乱舞』

戦前出版された翁の快著「美人乱舞」中現代に不向きなものを省き、これに書き卸しの原稿の外「女三十六景」の優秀作を加えた晴雨翁傑作集の定本であります。
好事家のお申込みをお待ちします。

定価 四百円（送料二十円）

緋に、小桜小紋の長襦袢、いようっ仇っばいぜ、そのまた下は……と」

「いけませんわ、およしになって……」

と敏江は両の手を膝にあて、力一杯その暴客の手から逃れようとする。

「アハッハッ、姐さんの膝小僧から赤い蹴出しを剥ぎ取ろう……とは……これっぼっちもござんせんよってだ。誰に任せよかこの縮緬の、赤が眼に沁む初枕っていの知ってるかい。知らないだろう。顔は秋田のうりぎね……でもよ、一肌ぬいだら田の草取り……姐さんって云うのは、ええ？ 笑ちゃんだろ。ええ。おい、そうだろう、生れは何処だい、九州？ えらく御遠方の処からはるばる御苦労さんです。ほんとにあすの晩はいい

かい必らず……きつと、お顔見たさにお声を聞きたさに……て、判ったかい、判ったら今晩はもうお別れた。亭主ッ、日本橋の番頭忘れるんじやネエぞ、知らぬ存ぜぬとぬかしやがったら、可哀いそうだがこゝに坐ってるお笑ちゃんがごつてり泣くんだ。何故にこなさんはこのように……て荒縄でよ、高手小手の責め折檻……アハッハッこりや冗談だが……じやあばよ。あー酔いがさめちやった、友も居らずにひとりぼっちの飲み直おし……か」

私はほっとして、こんな社会がひやかす側と、ひやかされる側とでこんなにも違うものかと、判ったような判らないような心地で亭主と長火鉢を囲んで茶を飲んだ。

「昔は——と、いや今の御時世でもこんな商

売してますと、妙な客が飛び込むもんですよ。仙台におりました時には女の子の着物から長襦袢、蹴出しから足袋までごっそりやられて相手になつた女の子は素裸のまま後手に縛られて押入れに放り込まれて朝まで気がつかなくなつたんですよ。困つたもんです。いやこん晩はえらく御迷惑をおかけしました。どうぞお引取りを……と云いたいが、刻も刻だし店の方はこれっから……と云う処ですから、離れのお部屋を準備しました。たまにはいいでしょう、気分を新らたにしてお寝みになるのも……アハッアハッ」

離れは離れでも、破れ障子の間から夜風が吹き込むのと違って、客ならぬ亭主が亭主の女房をバイトのお蔭で姐さんと呼んだのは、生れてこれが初めてであつた……。

◎新作・マゾ・フォトについて◎

春日ルミ嬢構成にかゝるマゾ・フォトは各種の趣向のものを撮影してあります。すでに分譲広告した六種のフォト購入済の方は、代理部宛御照会次第、在庫品につきお返事いたします。尚、今後、種々のマゾ・フォトの撮影を企画しておりますので、御希望の詳細をお申込下されば、出来るだけ、皆さまの趣向をとり入れて実施したく、春日ルミ嬢も、広範囲の方々の希望を満たしたいと云っておられますので、御遠慮なくお申出下さい。

夏^{なつ}子^こ抄^{しょう}

「罪ある女」の日記――

櫻 井 京 一 郎

五月三日（土曜日）

夫のいない週末。たぶん来週末。志賀は金融の仕事で関西を旅行中なのだ。今夜、母のところへ泊りに行くかと思っただが、ふと思いとどまる。妹は「おめかけさんのお金なんか」といって私のお小使いを受取ろうとしなかった。私はすこしも怒ってなんかいない。興奮のあまりユリ子に手を振りあげてしまったことを、死ぬほど恥しく思っているのだ。ユリ子と顔を合せるのは心が重い。私の自殺が失敗して、病院の一室に生き恥をさらしていたとき、ユリ子は二度も見舞いにきてくれたが、私は会わなかった。私の枕もとには志賀がいた。私は、母を、妹を、一切の過去を捨て、志賀と二人き

りのあの不思議な愛慾の生活にひたりきりたいと、切に願った。身も心もあらゆる私の自由も、すべてを志賀に捧げよう。……だが、ただひとつ、私は独立したい、私ははたらいで自分のたべるだけのことは自分で解決したい。これが、最後のぎりぎりの線に残された私の「人間」があげる叫びなのだ。

……だが、この一週間、私は足を棒にして探し廻ったが、おいそれと適当なつとめ口はみつからなかった。もちろん、志賀にたのめばどんな条件の良い所でもすぐに世話してくるだろうが、このことだけは志賀に参与してほしくないのだ。志賀は結婚しよう、といってくれた。だが、もうおそかった、私は妻になれる女ではなくなってしまっていた。私はもうおめかけではない、一号でも、二号でもな

い。そう、愛人なのだ。愛人！なんという不思議な言葉だろう？
女はこの言葉のためには、肉身もみずからの生涯の幸福をも惜みなく捨て去ることができる。

もう十時過ぎ。ラチオのダイヤルを廻したが、気が重くすぐ止めてしまう。——志賀はどうしているだろう？もし今夜志賀がきているとすれば、今頃私は、……そうそう、いやなことを思い出した。明日の朝あたりからあれがはじまるかもしれない。寝るまえに用心しておかなければ、……ユリ子は米国製のを使っていたわけ、私は黒いのでゴムのきついのが好き……だが、あのたまらない匂いには情けなくなる、指先からも、胸もとからも、吐く息からさえ血の匂いがする。以前はそんなことはなかったけれど。……私はまた幾日もごはんがたべられなくなるんだ……。

五月六日（火曜日）

なつかしい××商事のクリーム色のビル。私は応接室で待っていた。Mはいつも親切だ。私は志賀と一しよに幾度身に恥しい秘密を包んでMと会ったことだろう。スカートの下に肌着のないむきだしの肌を縛られたまゝで、あの汚れたマスクをかけたまゝで、もっとひどいことまで、……私はMのやさしい眼が気になって考えていることの半分も話せなかった。でもMはよく理解してくれ、就職の世話を約束した。これでほっとした。私ははたらくのだ。一週間、なにもかも忘れて昔のように仕事に熱中することができた。そして週末にはすべてをかなぐりすて、志賀と二人だけの時間を過す。そうだ、私は自分をはっきり二つの人格に分けなければ。昼の私と夜の私——いやちがう、人間の女と動物の雌。むずかしいことだ。私に

できるかしら？だが志賀も約束してくれた。どんなに苦しくともたたかわなければ——これが二人の宿命なのだ。私がこんな日記をつける決心をしたのも、私自身を客観的に観察できる余裕を心の隅に残しておきたいからなのだ。

帰りの電車の中でなつかしいひとに会う。女学校時代の親友の橘さんだ。新宿で降りて喫茶店に入る。はじめは当りさわりのない思ひ出話。互いに触れたくない傷跡をもつ女同士の会話は空々しいものだ。ふと、彼女が首をかしげている、「あなた、いま、あれなの？」「どうしてわかる？」「私にだって鼻がある以上——」私は苦笑した。二の句がつけなかった。トイレへ立つ。出てから石鹸で何度も指先を洗う。それをきっかけにそこを出た。約束があるとかで、武蔵野館の前で別れた。私はとうとうかくしきれずに今の住所を教えてしまった。あのひとは訪ねてくるにちがいない。家で二人きりになるだろう。いま私の胸はなぜかどきどき高鳴っているのだ

五月八日（木曜日）

神戸から志賀の速達。まだ十日ほど帰れないが、当地で君の喜びそうなものを手に入れたと書いてある。私の喜ぶもの……きつと責め道具にきまつてる。志賀はなにか新しい方法を思いつくと、きつと前もって手紙でそれを予告してくるのが常なのだ。土曜日がくるまで、私はあれこれと空想で頭をいっぱいにしていなければならぬ。これからはつつしんでもらおう、私ははたらくのだから。……でも、今度のは、なにかしら？恥しいことに私の胸は不安と期待でこんなにふくれてしまう——お乳を締めるバンド、手足を自由な形に拡げてくくりつけられる組立式の金属のパイプ、自転車のサ

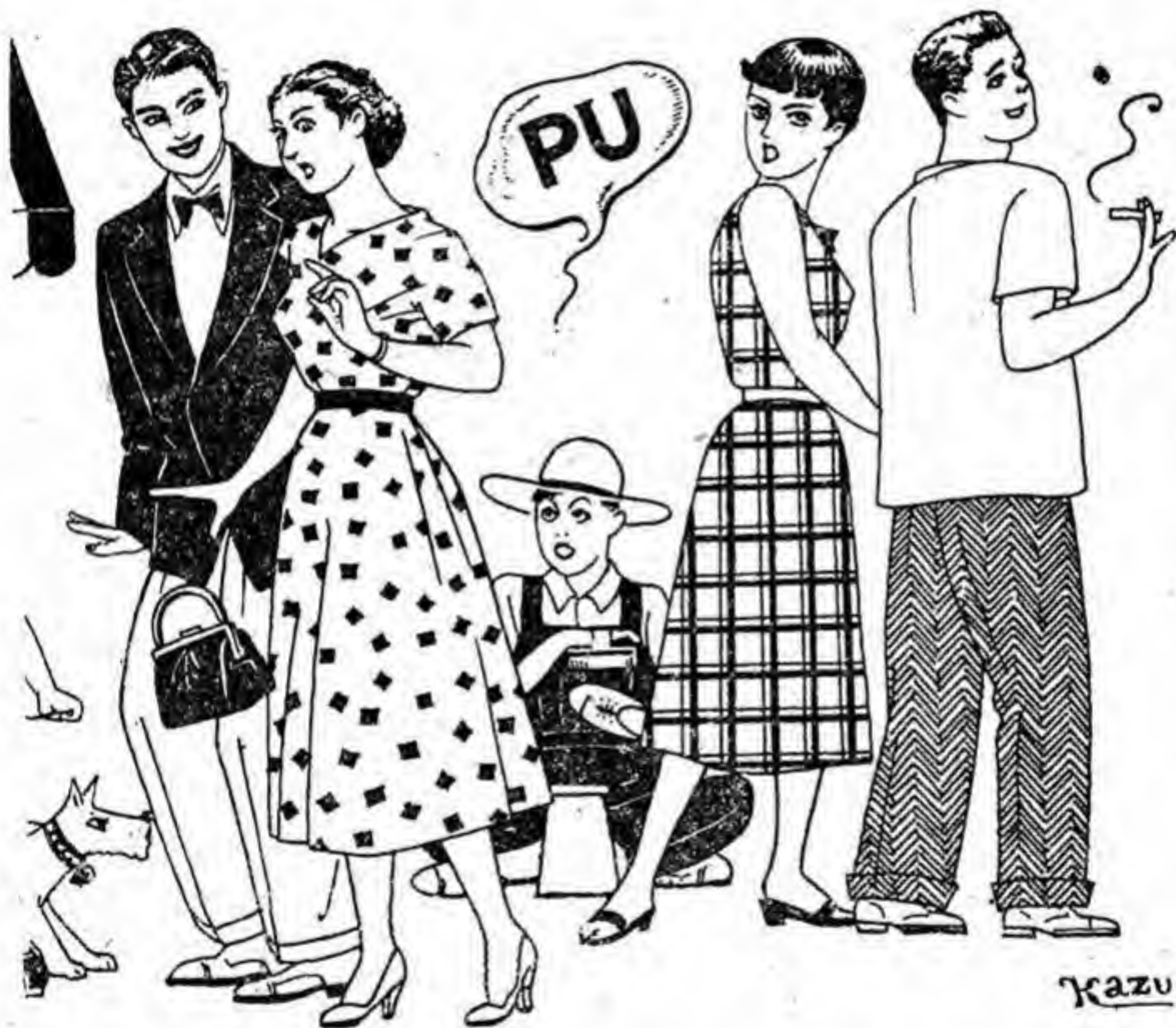
ドル。お尻で鳴らす呼子笛、その他、説明もできないような責め道具がここ三月ばかりの間にタンスのひきだしに半分ほどたまってしまった。昨夜も私はなかば無意識のうちにそのひとつをとり出して自分のからだをもてあそんだ。今朝眼をさましたとき、寝床のなかに両足首を縛られ、股の間にも縄をかけられた私のからだを発見して、私は死ぬほどびっくりした。強盗？ しばらくはそのわけがのみこめなかった。昨夜夢中でしぼった結び目は、解くのに一苦労だった。私はあの夢遊病というのになにかかっているのかしら？ おそろしいことだ。はやくはたらかしたい、そしてへとへとにつかれて何も考えずにぐっすり眠りたい。あしたあたりMからいい報せがあるといいけれど。……

五月九日（金曜日）

「二号さんのお宅みたいね」

とうとう橘さんが訪ねてきた

あのひとは私の顔を見るなりそ



ういった。だまって苦笑する。私の苦笑も板についたものだ。あのひとは無遠慮にじろじろ部屋の中を見廻す。全く男の匂いのないこ

の家なのだ。だが、私は心が決っていた。強いてきかれたら打開けるつもりだった。熱いお茶をいれて、おみやげのものをなきたべながら話す。橘さんは私より一っ年上だから今年は満で二十四、五だろう。くっきりと鼻筋の通った顔に、屈たくのなさ笑顔が美しい。――昔、女学校の芝生ではじめて私を抱いてくれたとき、テニスのショート・パンツ姿の自分が心もとなく恥しかった。橘さんは、そんなことはけろりと忘れてしまったよう。そう、お互いに成熟して結婚している二人の女の間に、今更少女じみたどんな感傷があるか？ 一人で胸を騒がせていた私がどうかしているのだ。私は一寸した失望と恥しさで我にもなく顔をあかくした。「なにを思い出したの？ あかくなったりして」

私はかくす気もなかった。

「むかしのこと」

「そう——」

あのひとはまじめな顔をつくり、そっと私の手をとった。電流を通されたように私は、びくっとした。

「ハ、ハ、……」不意にあのひとはおなかをかゝえて笑いだした。

「ゆかいね、あなたって。私、また好きになっちゃう」私はうつむいてからだをくねらせた。女の友達にまでしなを見せる私。ふれなば落ちんというあのかつこうだ。

彼女について、決して忘れることのできない思い出がある。彼女には十五ほど年上の叔母があって、昔、左翼運動をやっていたある青年とはげしい恋愛をした。当時京浜地区の一带の兵器工場にアジビラが運び込まれた事件があって、彼女はそのレボの容疑で検挙され、やがて釈放された時には、すっかり体をこわして廃人同様になってしまっていたそうさ。いつも明るい性格の橘さんが、その頃の思い出を私に聞かしてくれた時には、興奮のために声も震えがちだった。「叔母は、裸でこんなかつこうにされたのよ」あのひとはいきなり勉強椅子にかけたまゝ大きく脚をひろげて、両腕をうしろに廻してみせた。(まさか……) 私には信じられなかった。あのひとはほうきの柄を両手に握り「ほら、こんなことをされたのよ！」と自分の下腹をぐいぐいと突く恰好をしてみせた「やめて！うそよ、うそだわ、そんなこと……」あのひとは涙で眼をぎらぎら光らせて、あえぐようにその動作をつづけていた。まくれあがったスカ―



「うちの叔母のこと？——死んだわよ」他人ごとのようにぼつりという。

「まあ、……そうだったの？ いつ頃？」私は好奇心にうちかつことができなかった。

「もう四、五年になるわ。結婚して赤ちゃんができちゃったの。あんなからだじゃ無事にうめるはずがないわ」

「ご主人は、例の左翼運動のかたでしょう？」私は橘さんのアルバムでその人の写真を見たことがある。眼鏡の底に智的な瞳の輝いている美しい青年の印象がおぼろげに残っている。

「ちがうわ。あのひとは終戦間ぎわに刑務所で死んだわ」

「……………」

私は深い感動に包まれた。血縁こそないが私の身近な範囲にもそんな犠牲者がいたのだ。私には左翼理論はよく理解できないけれど、一つの理想のため、みずからはもちろん、恋する人をまで犠牲にして悔いない活動家達のひたむきな精神が無性に尊ばれた。キリストも、中世の殉教者も、現代の革命家も、その理想のために喜んであらゆる責め苦を堪えぬいたのだ。

——私は責め苦の経験にこそことかゝらないが、一ばん大切な理想

トの内側に目にしみるような下着の清潔さがやるせなかった。そして、私は眼をそらすことができなかった。……

その叔母というひとが、今年四十才ほどにはなるはずだ。

「叔母さまは、お元気？」

をもっていない。それどころか、理由なく責められて私の肉体はそれに喜びの反応をさえ示すのだ。私は、一夜町でひろった見知らぬ男に、自分のからだを縛らせた経験さえあるではないか。……

いま、一人でこれを書いていると頭が痛い。吐気さえもよおして、私のからだは下の方からくさってゆくような気持。——あんなという生活だろう。……土曜から日曜にかけて燃えあがる私のマソヒズムは、次の一週間、ひとりぼっちで白昼の光に堪えねばならないのだ。

明日からでもはたきたい。いっそ、女工でも、商店の売子でもいい、へとへとにつかれて夜はぐっすり眠れるような仕事がほしい……。

五月十一日（日曜日）

今夜もまた、夢にまで現れる痛かゆい幻想が私を苦しめる。

私は寝床を出てそっとダンスをあける。奇妙な型をした道具が子供のおもちや箱のようにごたごた重り合っている。革やゴムの匂いにまじってかすかな私の体臭。私はひものついた呼子笛を手にする——はじめてこの笛の用途を知らされた時の恥しさが、昨日のことのようによみがえってくる——志賀は、私のお尻にこの人差ゆびほどの笛を挿入したまゝ、私を銀座へ散歩につれて行った。私はもの心ついてこのかた、人前でそんな行儀のわるい粗相はしたことがないのに、こうされると、括約筋が開いたまゝなので、直腸内の空気は一寸した圧迫で文字通り筒抜けに体外へ出てしまうのだ。日劇前の電車通りを小走りで横断するとき、私はスカートの中でとうとうカン高い笛の音をたてしまった……。

いったい志賀は、なぜあんなに私を恥しめるのだろうか。二人きりでなら、私はどんなにひどく責められても厭いはしない。だが、あの白昼人中でのそれとない恥しめにはいつまでたってもなれることができないのだ。

私は金属のパイプを十字につないで畳の上に置き、その中心に一本を垂直に立てた。その上に自転車のサドルをはめ込むと、丁度私の胸の高さになる。私は下ばきを脱ぎ、サドルの上にガーターを当て、椅子を踏台にしてその上にまたがった。パイプのつなぎ目がゆるいのでサドルは前後にぐらぐらゆれる。こうして、手も足もしばられたまゝ、スリルを味わされる責めが私は一ばん好きだ……。

それなのに、志賀はほんのおしるしていどにしかこういう方法を用いない。もっぱら私のからだに手のこんだいたずらをして他人の中へ連れ出すのだ。そして死ぬほどの恥しさを堪えている私の様子をぬすみ見ては、あの美しいとさえいえる端正な顔に快心の微笑を浮べるのだ……私が自殺をはかってそれに抗議したとき、志賀は涙を浮べて私に誓った、「これからは自分自身を変えてゆくことに努力するつもりだ」……今、私は再び死の抗議をしなければならぬのか？……

しかし、……あゝ私は何を書いているのだろうか？ 私から放れたペンだけが走っている。私は誓ったではないか、自らを観察するために純粋に客観的な態度でこの日記をつけることを。冷静に事実をふりかえってみなければ……。

たとえばあの呼子笛をはじめて身につけた時のことは？——そう私達は永い間床の中でじっと待った。じっとあおむいている私は、

Kazu



これから「ママア」と泣くフランス人形のようにであった。三十分ほどして、ふとんの中に、可愛らしい笛の音を聞いたとき、私はやゝ意外だった。わずかに下腹部が軽くなるような気がしただけで、常のような排出の自覚はなかった。「やあ、成功した！」志賀はあたかも手術の結果を見守っていた外科医のような口調でそうつぶやくと、私のまぶたにそっと唇を押しつけた。私は恥しさに頬を染めな

がらも、志賀と顔を見合せて、ほのぼのと笑ってしまった。そして私はその笛をいま独りでためしてさえいるではないか？そう、私は自分のからだの、私でさえ気のつかなかった恥しい秘密を志賀に完膚なきまでにあばかれることに、いつのまにか喜びを覚えるようになっていた。——だがしかし、母や妹やまた見知らぬ通りすがりの人々にまでなぜその秘密を知らねばならないのだろう？いやだ

私を恥しめるのは志賀でなければならぬのだ。あの、のろわれた一夜、上野の連込み宿で私はあれほどの絶望を味ったではないか？そう、私は志賀にたのんでみよう。あのっらい散歩だけは許してくれるように——もう夜中の二時だ。サドルとパイプを片づけて眠らなければ……

五月十二日（月曜日）

うす暗くなって、買物からもとると、カギのかかった玄関の前にユリ子が立っていた。私は一瞬はっとして足をとめたが、妹のしよんぼりした後姿に胸がこみあげてきて、思わず走り寄って後からしっかり肩を抱きすくめてしまった。ユリ子は泣き笑いのような表情で私を見上げた「ごめんなさい……待たせてしまっ

て

「こんなにおそくきて、ごめんなさいね」

と、二人ともほとんど同時に無意味な言葉を口にしたが、お互いにそのへごめんなさいには無限の感情をこめたつもりだった。

茶の間に通ったとき、二人ともすっかり仲直りしてしまっていた。今夜は楽しかった。久しぶりで心をこめたお料理をこしらえ、ユリ子のおとくいなお芝居の話に時を忘れた。

「あれから、すぐ、アルバイトやめちやったの」ユリ子はふと恥しそうにそういった。私は例の苦笑がでて、

「私、もうじき就職するのよ。だって、ひまで困るんですもの……それならばあなたにお小使いあげる資格があるでしょう？」

ユリ子は外国の女優のようにちよっと肩をすくめながら、可愛らしい歯を見せて笑い、それから黙っておじぎをした。

私は水のようにすがすがしかった。——ただ、もう十時近くだというのに、私はどうしてもユリ子に泊って行けとは云い出せなかった。私の寝室には、志賀とのさまざまな思い出が線香のけむりのようにたちこめているのだ。……私はユリ子を駅まで見送り、男同志のようにかたい握手をして別れた。

今夜はぐっすり眠れるだろう。

五月十三日（火曜日）

私にはやっぱり志賀が憎い！

夢の中の志賀は、実際のそれよりもっとたくみな身ごなしで私を扱った。私は身もだえして、恥しいほど苦しんだ。ゆうべ、あれほど安らかに眠りについた私なのに、志賀はもう、私の意識よりも

身近なところで私の自由を、私の肉体をしっかりとうえてしまっている……もしかすると、私がはたらいたところでこのことは少しも変わらないのではなからうか？自分をはっきり二つの人格として割り切ることに、これはあるいは男にだけ可能なことで、女には不可能なことではあるまいか？

私には志賀が憎い！ 忘れることができたならどんなにいいだろう……あるいは志賀が……そう、死んでくれたら！

私はなぜ今日はこんなに興奮しているのだろうか？ 私はつかれてしまったのだ、することもなく終日家にじっとしているおめかけの生活に。そう私は愛人なんかじゃない、おめかけだ。私は病院のベッドで志賀にささやいたではないか「ほんとうは私、そのほうが嬉しいの……」

就職する？私が？ ごじようだんを！ こんな能なしの、すけべいなおめかけさんなんかどこに使ってくれるものずきがいるものか。Mだって、ていよく私を追いかえたんだ。恥しい！ いままでそれに気づかなかったなんて、私としたことが、いい気なもんだ……ユリ子だって心ではどう思っているかわかるものか、あの子は昔からお芝居がうまいんだ、なにしろ女優のタマゴなんだから。アルバイトだなんでもうまいこといって、やっぱり志賀とグルになって私を恥しめていたのにちがいない。あの子は私よりもずっときれいで頭もいい、もう志賀と婚約しているにちがいない。そうなれば私は妹の夫の二号だ。

五月十八日（日曜日）

午後なに気なく姿見の前に坐って、念入りにお化粧をする。ほん

とに久しぶりのこと。ユリ子は私より美人だけれど、まだ私ほど、女としての魅力をもっていない。かるく頬紅をさした私の顔はたいていのひとが見とれてしまうほどにあどけない。△可愛い女▽のオレンカのように。たいていの男は心で叫ぶのだ、（なんて可愛い女だろう！）そして、（この女をいじめてやったらどんなに気持ちいいだろう！）と。無理もない、私自身でさえそう思うのだから。最初の頃、志賀は私にひどいことをして泣かせてはその後でこうさゝやいたものだ。

「ほんとうは夏子がわるいんだよ。だって、夏子はあんまり可愛すぎるんだもの……」

あんまり可愛い仔猫を見ると誰でもちよっといじめてみたくなる。私はひとの情にすがって生きてゆくために可愛らしく生れついた仔猫とおなじだ。志賀の云うとおり、私はやっぱりおめかけとして生れついたのだ。頭の悪い、世間知らずの私は、愛人なんていう柄ではない。かりに志賀の手から逃れることができたとしても、私には第二の志賀が心要になるだろう。そう、私は△可愛い女▽のオレンカなのだ……

私が姿見に見惚れながら、そんな思いにふけっていると、玄関が開いて橘さんの声がした。私は思わず顔をほころばせてしまった。自分をもっとも美しい姿でいる時、ひとの来訪をうけるということ、は女にとって一ばんうれしいことだ。

「おめかしして、お出かけ？」

「たいくつしたから、映画でもと思って……」

私は嘘をついた。「でももういいの、あなたが来てくれたから」
あいにくお茶菓子がきれていた。

「私、髪をとかすから、ちよっと姿見かしてね」

というあのひとの言葉に「どうぞ」と返事を投げておいて、下通りのお菓子屋へ走って行った。十分ほどしてもどったとき、橘さんの態度がなにかそわそわと落着かない様子なのに気がついたが、私は別に気にもとめなかった。

お茶をのみながら、しばらくとりとめもない世間話に時を過ぎたが、ふとあのひとは口調をあらためて私の眼をのぞき込むようにして云った。

「あなたいま、本当に幸福なの？」

「幸福って、……自分じやわからないけれど、まあふつうだと思っ
ているわ……」

私はどきまぎして、また苦笑をした。

「そう——」

あのひとは深いため息をついて、それ以上は問いつめようとしなかった。こんどは私の方から何もかも打開きたい衝動にかられた。

「知ってる？ 私、ほんとうは二号なのよ……」

「知ってたわ、最初から」

「まあ、どうしてなの？」

「それは、だって、あなたの顔を見ればわかるわ……あなたは女学生
の頃からそんな顔してたもの」

「あら、いったいどんな顔でしょう？」

「誰でもいいからはやく来て、あたしを可愛がってちょうだい、は
やくあたしをもみくちやにして……」

「まあ失礼な！」

「遠い夢を見続けているような眼、いつも接吻を待ちかまえている

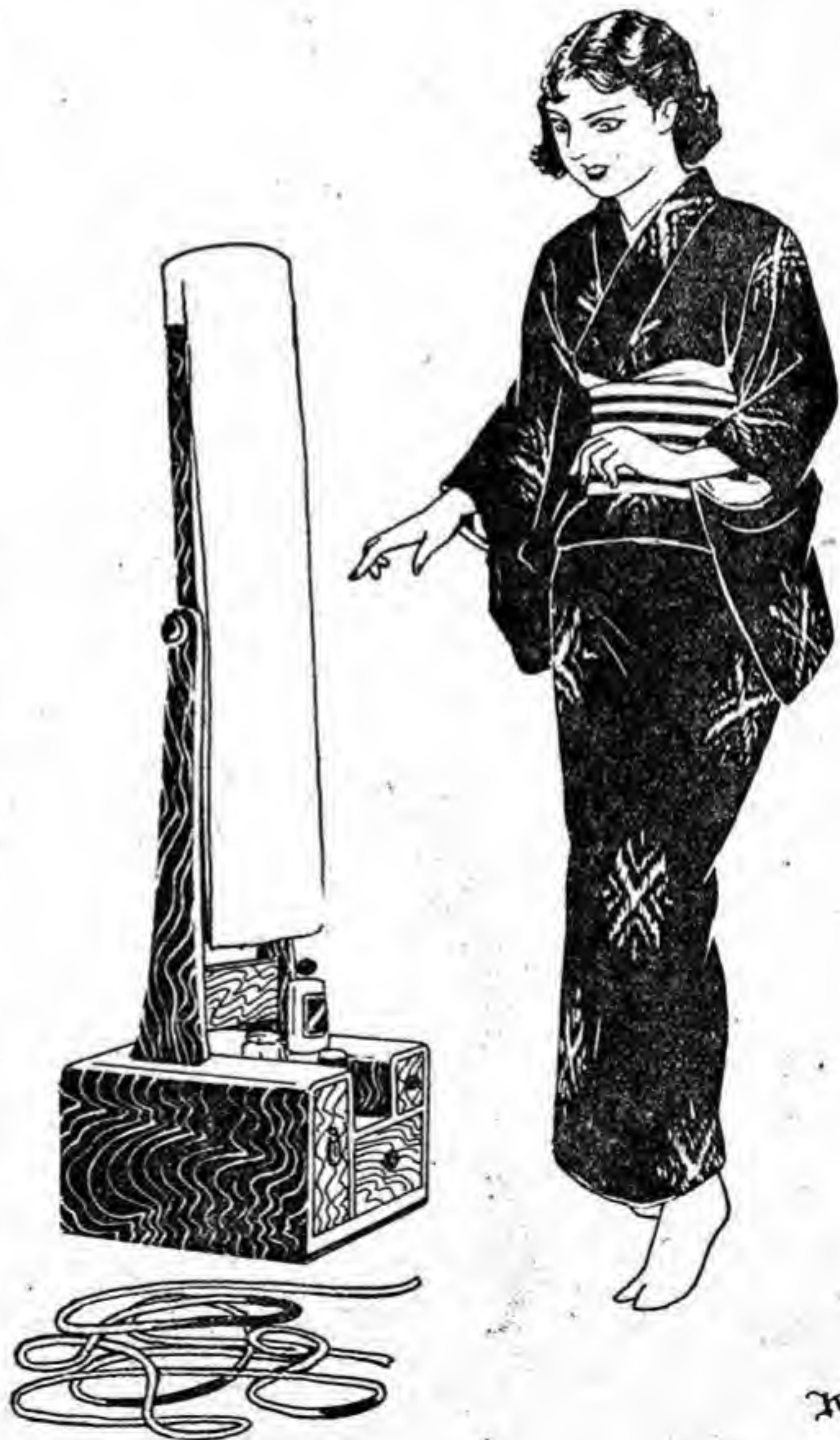
ようにぬれている唇、誰だってあなたを見たらぬかみそくさい奥さんにしてしまうなんて思ってもよらないでしょうよ。きっとあなたの御主人も人形のようにあなたを大事にしてらっしゃるんでよう？」

私は黙ってしまった。やっぱりそうなのか、だが私は、人形のようにではなく仔猫のようにいじめられながら愛されているのだ。――橘さんはじっとぬれたような瞳で私を見つめていた。その瞳が私の視野の中にかすんで、べつのそれが重った。あのまなざしだ。夢にまで現われて私の肉体を、私の意識の自由までをざんこくな仕方束縛してしまうやるせない男の、そう、志賀のまなざしなのだ……私はいいい知れぬ哀しみに沈んでしまった。橘さんが早く帰ってくれればと、それだけを願った。

「死んだ叔母のことね……」

「え？」

駅まで送って行った私に、あのひとは改札口のところでそうさやいた。



「あの叔母が、誰と結婚したのかおしえてあげましょうか？」

「……………」

「自分を拷問した、……………特高課の刑事とよ」

あっ、と私は息をのんだ。

「びっくりした？……………じゃ、さようなら」

あのひとはさっと改札口を入ってしまった。理想と恋する人のた

めに喜んで苦痛にたえたのだとばかり思っていたそのひとも、それではやっぱり……夕暮れの町をとぼとぼ家の方向に引かえしながら、私には女の生理が無性に悲しまれた。

——家にかえって、寢室のふすまをあけたとき、とっぜん私はあつことに思いついて、はっとした。私は姿見の前へ走り寄った。しまった！ 忘れていたのだ！ はたして私がおそれたように鏡台の横には一丈ほどの細引がまるめて置いてあった。しまった！ 昨夜私はこれを使い、そのまゝこゝに置き忘れたのだ。それにはひと目でそれとわかる汚れさえついているのに！ 私はタンスのひきだしにとびついた。あゝ、それは苦もなくあいた。カギをかけ忘れたのだ。しまった！ これで、あのひとの奇妙な口ぶりやあのまなざしの意味がすべてよめた。あのひとはさっき私のるすに、髪をとかしにこゝへ入ったとき、私の生活に不審を抱いてこの部屋をしらべてみたのだ！ 血のついた細引だけなら、まだなんといってもごまかせよう、だがこのひきだしには、もうべんかひの余地のない、一目でそれとわかる責道具が入れているのだ……私はばかだ、なんとこの間抜けな女だろう！ ——私は部屋の真中に突伏して髪をかきむしった。

夜中の二時。あれから私はおろおろ身も世もあらぬばかりに苦しんだ。橘さんを殺して自分も死のうとさえ思いつめた。だが、今、私は冷静だ。こんな日記がつけられるほど落着いている。そう、あのひとは女学校のととは違った仕方私を愛するようになるだろう。私は本能的にあのまなざしの意味を知っている。あのひとは私を思いきりいじめてみたいのだ、たゞ、今まで自分でそれに気がつ

かなかただけなのだ。私が志賀以外の男のひとにからだを許すことなどあり得ないことだけれども、あのひとは女だもの……いいわ、私はあのひとの好きなようにされてあげる、あの女学校の更衣室でからだ中に接吻されたときのよう、ぐったりと身をまかせて……

あのひとは近いうちに訪ねてくるだろう、私は今までよりも、もっと可愛らしく振舞おう、その時、私は志賀が私を縛って楽しむ時の様子をくわしく話してやろう、あのひとはしらばっくれて眉をかめるだろう、私は血のついたあの細引を持出してこよう、私は椅子にかけたまゝ両手を後に廻して誘惑しよう、あのひとは興味なさそうに私の手を縛るだろう、あのひと自身が昔そうして見せてくれたように両脚をひろげて椅子の足に縛りつけられるだろう。その時私は目にしみるような清潔な下着をつけていなければ、そう、忘れずにたやすく胸のはだけるブラウスを着ていよう、私のお乳が全くあのひとの手にゆだねられるように、私は接吻されるだろう、けれども私はそれを拒ばもう。あのひとに私をいじめる口実を作らせるために、私は鼻をつまみ苦しげにあどけない唇をひらこう、甘い接吻のあとではまだなにかを入れてほしいかのように私はまあるく口をあいていよう、あのひとはその口にさるぐつわをかませることを思いつくだろう、喉がつまって私は涙を流すだろう、あのひとは指で私の涙をふいてくれながらこうさゝやくだろう、（こんなことをされるのね？ どう、苦しい？ もうやめてあげましょうか？）私はたえ入るような悩ましい眼でじっとあのひとを見上げよう、あのひとは思うだろう、（なんて可愛い眼！ もっともっといじめてやりたい！）なにしろ私はあのひとにさからわねばいけない、私はまたさるぐつわをされて……もういいわ、最初の日はこれく

らいで。あのひとは毎週かよってくるにちがいない、志賀とかち合
わないうようによく打合せなければ。浮気？ そう、奇妙な浮気。で
も志賀がわるいのだわ。こんなに私を独りぼっちにしておくのわか
ら……。

五月十九日（月曜日）

きのうのことは、なんだか夢のような気がする。橘さんが私の秘
密を知ったなんて、私の被害妄想かもしれない。あのひとが他人の
家を勝手にかきまわすなんてあり得ないことなのだ。私は神経衰弱
なのだろうか……だが、もしかすると本当なのかも知れない、あの
愁しげなまなざしだけは夢ではないのだ。私はどうしたらいいのだ
ろう？ あゝ、もう何も考えまい、どっちでも同じことだ……。

しかしこれは何故だろう、私はいつの頃からか仕事をさがすこと
をやめてしまった。Mから返事のないのを幸にして一日中家でぼん
やりとつまらない妄想にふけっている私なのだ。私はMを信頼して
いるのだろうか、それとも私にはもう伪く意志がないのだろうか？
ついこの間まで、偽くことにあれほどの希望を抱いていた自分の気
持が、遠い昔のことのように思い出される。教育も生活能力もない
たゞ可愛いだけの女の常として、私は現在のおめかけの位置に安住
していたのだろうか？ 思えば今から一年前、妻のある身の志賀
に幼い恋ごろころを燃したとき、私はどんなにつらくとも一生志賀の
愛人でいようと、あれほど固く心にちかっただけ……。

私は疲れてしまった、疲れて！ まるで安静室の狂人のように自
らの影を追うことに疲れはててしまった……もう何も考えまい、
同じことなのだ、いまさらなにもかも私の手にはあまることばかり

なのだ！ この日記もすでに最初の意義を失ってしまった。私は二、
三日ぐっすり眠って過したい。いや、私は旅に出よう、あすの朝お
きぬけに、小さなトランクを一つだけ持って。先月志賀のくれたお
金と私の貯金を合せば、つゝましい旅ならば一ヶ月は続けられよ
う。そうだ、暗いうちに東京駅へ、いや上野駅にしよう、そこから
すぐ出る列車に乗って私は窓を開けよう、さわやかな初夏の朝風が
私の頬をなぶるだろう、明けそめる東京の空にしばらくの別れを告
げながら私は涙ぐむだろうか、それとも、にっこり笑ってしまうだ
ろうか、それから私はつゝましく膝の上にトランクを置いて安らか
な寝息をたてるだろう、そう、私の寝顔は可愛いことだろう。

（完）

〔読者通信〕

私は当年二十三才の青年で某
官庁に勤めております。仕事は
三人組で行うもので相手の人も
私と同年輩の青年ですが、幸い
にも貴誌の愛読者なのです。そ
うして三人が打ち解けてゆかう
ちに、面白いことに、三人共流
陽マニアであることがわかった
のです（実は私だけだと思つて
いたのですが）偶然三人共、同
じ傾向の持主であることは珍し
い事と思います。若く美しい女
性に対して流陽を施してみたい
という願望なのです。例えば「
高圧流陽」「我が少年時代の犯
罪」の最後記事山田芳枝さんの

「流陽願望」の記事、又、羽村京
子さんの記事九月号にも「露出願
望の少女の告白」と題して一文が
載つており特に八九頁の画は今迄
貴誌に載つた流陽に関する画の中
で最も僕れていると思います、こ
の画を見た瞬間、思わずはつとし
た位です。一教師がイチジク流陽
を取り上げ美少女に対して正に流
陽を行われんとする有様が大変よ
く表れております。とはいえ、
この少女は自分から好んで流陽を
受けようとしているのですから、
私達から見れば興味半減という所
です。実際は美少女が恥しいのを
無理になだめて流陽する所がよい
のです

（I・M生）

雄^{ナル}花^{キッソス}の微笑^{ほゝえみ}

〔我 囲 わ れ 記〕

幹 次 郎

まだ、六月も半ばを過ぎていないと云うのに、その年は慌てもものの豆台風がしきりと日本を訪問した。その日も夕方から吹き出した風は次第に雨勢をも加え、ラジオの予報通りに家々の窓硝子を騒々しく叩いた。益々募って来る風雨の中を僕はN予備校から早退してアパートへ急いだ。確かに来ている筈のピエールと計画的に招いた毛利氏との、嵐の夜のスリルに満ちたお見合を想像し乍ら。

ここしばらくまるで僕を忘れた様に姿を見せない毛利氏に対し、少なからぬ不安と疑惑を抱いていた。も早氏は、僕を倦いて来たのではなからうか、と云う。如何にピエールとの生活に満足しきっているとは云え、今更

氏に体よく捨てられると云うのも僕の自尊心が許さない。そこで思いめぐらした僕の計画と云うのは、是非逢いたいからと云って招び寄せた毛利氏と、僕の帰りを待ち侘びて僕のベットに横たわっているピエールとを対面させることにあった。

部屋には灯りが点いていなかった。

毛利氏はまだ来ていないのだろうか、それにしてもピエールはどうしたのだろうか、ひょっとすると既に二人の会談が済み、互に此処を去ったのでは……等と思ひ乍ら傘をすぼめ、ぐっしょりになったレインコートを廊下で脱ごうとした時、何か部屋の中で物音がした。おや、と思つて耳をそばだてると、意外

にも中から話声が聞える。小さな二人の会話が……。居る、ちゃんと二人共室内にいるのだ。それなのに……灯もつけないで一体何をしているのだろうか。早くも嫉妬を混えた猜疑が、僕の動悸をすりばんの様に打たせた。僕は鍵穴に眼を当てて息を殺した。だが、悲しい哉鍵穴からの視野が狭い上に、室内は暗くて殆んど何も見えない。しかし只一つ僕の眼に映じたものがある。それはカーテンの透間から時折さし込むスパークの閃光に浮き上った毛利氏のズボン……。きちんとした折り目を崩してベットの足元へずり落ちていた。それに依つて……。それらに依つて二人の行為を想像するのは無理だろうか。灯を消した部



屋、二人の小さな声、脱ぎ捨てられたズボンこれだけの資料からこの場合他の解釈をせよと云うのは、却って云う方が無理ではなからうか。複雑な感情のまゝに溢れて来る泪を泳え、僕は階段を降り、再び嵐の街へ出た。しばらく歩いてからふとアパートの方をふり返ると、窓を伝って流れる雨滴の縞模様が見え、部屋には煌々と灯が点いていた。僕は傘をすぼめて腕へかけ、頭からしとど降る雨を受けて踵を返した。それは己が心の平静さを装うためと、頬にこぼした泪のあとを奇麗に洗い去るためであった。

ドアをノックすると

すぐ開けて呉れた。又少し瘠せているが、頬に紅潮を見せた毛利氏だった。

「遅いじゃないか、随分待ったぜ」

と云ってピエールは僕のナイトガウンを羽織って出て来た。僕が為すがままに任せていると二人で上から下まですっかり着換えさせて呉れた。僕は疲れた振りを装ってベットへもぐり込んだ。ベットにはまだほのかな温もりがあった。毛利氏は一瞬ギクッとした様だったが、ピエールは一向に平気で、煙草の煙の中からこちらを向いて笑っていた。まるで今先刻犯した秘密を此の場で暴露してしまふような危険がその微笑の中に感じられた。黙っていてくれた方がいい、僕はそう思った。毛利氏の謹厳な口髭に対して、ミキサーがゴボゴボと音を立てて廻っている間、息詰る様な沈黙が続いた。冷たい果^{フルーツ}汁が僕の喉を一気に通り過ぎ様とした時、毛利氏が先ず口を開いた。

「蘭次郎君、この人だね、いつか海で知り合ったと云う人は」

「ええ」僕はコップをもて遊び乍ら答えた。

「どう云う積りで私に逢わせたの？」

「僕が逢いたいって云ったんです」

僕に代ってピエールが応えた。

「いつからこんなに親しくしているの？」
「……少し前から」ピエールをうかがいつつ僕は答えた。

「嘘を云いなさい。私は義尚から聞いて知っている」

それから氏は、ピエールに向って鋭く続けた。

「私が此処を訪れる回数が少なくなって来たのを知って、君は図々しくも泊り込んでいた事すらあったと云うではないか」

ピエールは壁の鏡に映っている自分に向けてしきりに煙を浴びせていた。

「君、曾我君！ 今夜もここへ泊る積りで来たのかね」

ピエールはくるりと振り返って無邪気な表情で頷いた。

「お断わりする、ここは蘭次郎君の部屋でもあり、私の部屋でもあるのだ。何て云ったかは知らぬが、蘭次郎君の一存では許しかねる事もあるから、よく承知して置いて貰いたい。それに生憎く、今夜は是非私と同食し度いと云う蘭次郎君の希望もあるのでね」

「パパ……」驚いて僕は口を挟んだ。

「君は黙っていい給え。曾我君、君は私が責任を持ってこの子を母親から預っているのを知

っているだろうね。私は亡き親友の身代りになってこの子を愛している。今この子がパパといったのを聞いたのかい。この子は大切な父性愛に欠けていたのだ。そこで私は……」

「毛利さん、あなたが父性愛の積りなら、僕は兄弟愛の積りだったのですよ」
この言葉のやりとりには僕は至上の幸福を感じていた。

「ふん、兄弟愛……。子供はね、君、兄弟なんかいなくても父と母さえあれば立派に育つんだよ。それに君の様な毛色の違った兄弟を蘭次郎君だって心から望みはしないよ。え、そうだろう、蘭次郎君」

——だが僕の頭の中は少からず混乱していた。僕の視野にある二人の男の心理が一向に解せなかったからだ。初めは夫々後暗さを隠すお芝居だろうかとも思っていたが、事態が進むにつれて、そうでない事が明らかになった。……お互いに重ね合った唇の濡めりがまだ乾きもしないうちに、その唇でお互いに罵り合うなんて！ 完全なる精神と肉体の分離。こんな所にソドミヤの心理の謎が秘められているのではなからうか——。

僕が返事をしないで呆然^{はんぜん}と毛利氏の顔を見つめていると、氏は僕の手から空になったコ

ップを取上げ、口髭をびくびく震わせて続けた。

「蘭次郎君、私は君に曾我君の事を聞いた時から云っただろう。『そんな不良と交際してはいけない』って。君はまだ若輩の身で何も知らないだろうが、私位の年になると第一印象で直ぐ相手がどんな人間であるかって云うことを見抜き得るんだ。靈感って云うか……」

急に咳き込んで一寸言葉を切った毛利氏は今度ピエールの方に向き直って云った。

「私はね、君が蘭次郎君にやって呉れたアドレシンの紙片をライターで燃してしまったんだよ。毒草は双葉のうちに刈り取る為^{ため}にね」
「よく存じています。彼から聞きました」
「ほう、そいつは好都合だ。もう何も云う必要はない。開きかけた花が実を結ばないうちに彼の前から姿を消して頂きたい。少ないだろうけど、これ。タクシー代位はあるだろう」

毛利氏は内ポケットから部厚い紙入れを出してピエールの側のテーブルの上へ置いた。

「手切金ですか、それとも先程の……？」

僕は飛び出して行ってピエールの身体中に接吻を送りたい衝動にかられた。毛利氏は言

葉を詰らせて僕の方を見た。不意にビエールの顔が高らかに笑った。僕もそれに応じる様に笑った。毛利氏も遂に誘われて笑い出した。夫々複雑な感情を含めて。ビエールは笑い乍ら毛利氏の紙入れから千円札を数枚引き出して自分の胸へ納めた。

「頂いておきます、花のお代として」

抑えきれなくなった僕はビジャマのまま飛び出してビエールの首っ玉に噛りついた。

「曾我君、両方の意味で……」

毛利氏は間へ入って二人をひきはなし、紙入れをビエールのポケットへ振じ込んだ。

「それはどうも。僕は遠慮をしない主義ですから」

「パパ、曾我さんの家は塀なんだよ。今頃からこんな嵐の中を帰えれないじゃないか」

「いや大丈夫。たんまりチップをはずんでやりやどんな時だってタクシーは出すよ」

「そうだと、曾我君の云う通りだ。曾我君電話を掛けましょうか」

「いえ結構です。僕はどう云うものか空いた車を探すのが好きでしてね。手を上げるとそれに吸い寄せられる様にやって来るでしょう。中には美男子な運ちゃんもいますよ。じっとバックミラーを見つめてやるんです。そ

したら運ちゃんもチラチラとミラーに写る僕の顔をうかがうでしょう、いつの間にか二人の視線がミラーの上で強く結ばれ、そして……」

「電柱にでも衝突するのが落ちだろう。さすがにフランス系だけあって小断が上手だね。

ハハハ……」

ビエールは、僕の鼻先を軽く吸って「アデュー」を云った。いつもの帰り際と少しも変わらないので僕は嬉しく思った。

その夜毛利氏は初めて僕の部屋へ泊った。

僕はビエールを追い帰えした氏に少々腹立ちもしたが、近頃本当に「衣かたしき、一人かも寝む」のわびしさに耐え得なくなっていたので、別に厭な顔もせず毛利氏と同衾した。

それに予定していたビエールとの遊びがお流れになってしまったので、心に残る情欲が吐口を求めて渦まいていた。こう云った場合の心理や行為が正常でない事は確かだ。普通の人には解り兼ねるかもしれない。しかし同じソドミヤならよく解ってくれる事だろう。

嵐も去って快晴の翌朝、新聞を見ていた毛利氏は突然嬉しそうにそれを高くかざして僕の眼の前へ突き出した。僕は氏の指先に載っている小さな記事を読んで呆然とした。其処

には嵐の夜の、数え切れない大小事故に挟んで、有りふれた自動車事故が記されていた。大和川附近の十六号線でスリップしたタクシーに、不幸にもビエールが乗り合わせていたのである。土堤際の樹木をへし折って、龜の子返しに転倒したタクシーの中で、ビエールは相当な重傷を負ったらしい。

あんなに身軽だったビエールが……。僕は昨夜の全てをまざまざと想い出した。何もかも毛利氏の責任である様にも思った。しかしそれを責める前に大変なことが起ったのである。洗面所へ顔を洗いに出了た毛利氏が間もなく隣室の小母さんに救けられて部屋へ戻って来た。歯磨粉をピンク色に染めた液体が顎を伝って白いワイシャツの胸に流れていた。小慧しい小母さんだったので洗面所の血は直ぐ流し清めてくれたらしいが、後で聞くと相当量の咯血であつたらしい。

僕は一刻も早くサナトリウムへ入る様奨めたが、氏は頑として応じないどころか、その話だけは止めて呉れと、不相応にも泣かんばかりに懇願するのだった。それは結核に対する氏の認識不足からでは無かった。僕から離れて孤独なサナトリウム生活が耐えられなかったのだ。病状を報らせると僕が厭がって氏

を避けはしないだろうかと思慮し、今迄隠していたと云う。だがそうかと云ってこのまま放っておくわけにも行かず、奥さんとも相談して無理矢理に入院させた時は、もうかなり侵されており、重患者として個室へ入れられた。附添に僕を選んで氏は療棟医にひどく叱られた。でなくてさえ僕達の年頃は最も感染し易いのだから。

そんな訳でバタバタしていたものだからピエールを見舞おうと思っても儘ならず、半月ばかり無音に過ぎた。やっとサナトリウムに落ちついた毛利氏から解放され、慌てて堺の市民病院へかけつけた時、既に略治のままピエールは退院しており、居住地も全く不明になっていた。外科医の話では、ピエールのあの美しい眼の一つは再び開かれなかったらしい。その上、右の足首に大きなひきつりが出来、ひどい跛になっているそうだ。

ああ、ピエール！ 何と云うみじめさ！

何て惨い運命の神！ 若し神と云うものが本当に存在するのなら、何故あの様に完成された美の破壊を許すのだろう。美しいものに対して昔から神は冷酷だ、そして強度に嫉妬深い、といった某作家の言葉も頷けないではない。美しい人は絶えず数奇な運命に弄遊ばれ



不運のまま薄命に散って行く。僕は三国ヶ丘の彼の下宿をたずねたが、そこに彼は居なかった。可哀そうなピエール、仏国から父の国に憧れ單身渡日した彼に近在には一人の身寄とていない。本町の勤先にも彼はあれっきり姿を見せなかったそうだ。本当に何の手掛りもなく、まるで地上から煙の如くかき消えてしまったかの様だった。誇りかな彼のナル

シズムが一瞬にして不具に変貌してしまった己れを、二度と他人の眼に映らせたくなかったのだろう。美しい過去のピエールのまま、世人の想い出に生きたかったのだろう。しかし僕の心は決して彼の変貌を見ても変ったり等しない、そう思ったがそれを彼に伝える術もなく、何事にも悔恨を残して日が月が重なって行った。

ディズム

丸 恵

一方、サナトリウムの毛利氏は見舞の度毎に容態が悪化して行った。一週間に一度の割合で僕は見舞に行っていたが、たまたま氏は無茶な要求をするので次第に十日に一度、半月に一度と訪問の回数を減らしていった。氏は瘦細った手で僕の………する。それだけならいいがあのガフキー十号と云う無数菌の出ている口で………をさせると云うのだった。僕はその病菌感染の恐れにも増して、氏の根強くまだ残存している性欲の執拗さに身震いした。だが初めてチアノーゼも現れると云う危篤状態の発作が起った頃より氏は急激に衰弱し、只僕の顔を見ているだけで満足した。僕も枯木とみまがう手を握っていつもの微笑を投げかけるばかりだった。そ

して丁度半年位経った或る冬の日、三度目の発作で遂に毛利氏は永遠の旅に出てしまったのである。僕は氏が息を引取る前に、無言で差し出したトーマス・マンの「ヴェニスに死す」を抱き、氏の棺に寄り添って歩いた。去る時は何もかも一度に去ってしまう。ピエールと毛利氏を失った僕が体得したものは只是だけだった様な気がする。去った人の為に泣いたとて何になろう、そう思って何の良心の咎めも感じなかった僕から、この本は改めて美しい泪を僕の眼から誘い出した。「お前はそんな風に笑ってはならぬのだ。いかね、誰にだってそんな風に笑ってはならぬのだよ」

これは毛利氏が臨終の時に僕に云い度かつ

私がその中国人の女性から、女の肉体に潜むサディズムを知らされてからもう二年近くになります、今でも時々あの当時の事を思い出しては懐かし、人知れず妖しい幻想の中で悩ましい幾夜を送って居ります。そのRと云う女性は、やはり中国人のバイヤーの二号だか零号夫人だかで、二人で逢って居てもあまり商売の事等は話題になりませんでした、仲々その道では切れ者らしい事

た言葉に違いない。

僕はそっと鏡の中の自分に向って微笑みかけた。この微笑が……。その時、部屋の扉がノック無しに開かれて、新しき友、K劇団の研究生狭山が入って来た。はっと思った瞬間僕は無意識に狭山へ向って微笑みかけていた。ピエールを不具にし、毛利氏を殺したその微笑で。

附記 ピエール（これは仮名だが君は思

い当るだろう）若し残る片目でこの文章を読む機会があったなら、何をさて置いても真先に僕の部屋へ飛んで来る様に。いつでも君を迎える用意が出来ているのだから。

（R・M）

は、それとなくわかりました。

上背もあり、よく発達した乳房や腰部にポリウムが有って肉体美の持主でした。知人の洋品店を手伝い乍ら気楽な生活をして居た私とふとした事から知り合って、すぐ私を男妾の様にしてしまい、さまざまな肉体遊戯が始まったのです。一週間に二、三度逢っては防音装置の行き届いたホテルの一室で、アブノーマルな情慾の虜になって居たわけです。

を避けはしないだろうかと思慮し、今迄隠していたと云う。だがそうかと云ってこのまま放っておくわけにも行かず、奥さんとも相談して無理矢理に入院させた時は、もうかなり侵されており、重患者として個室へ入れられた。附添に僕を選んで氏は療棟医にひどく叱られた。でなくてさえ僕達の年頃は最も感染し易いのだから。

そんな訳でバタバタしていたものだからピエールを見舞おうと思っても儘ならず、半月ばかり無音に過ぎた。やっとサナトリウムに落ちついた毛利氏から解放され、慌てて堺の市民病院へかけつけた時、既に略治のままピエールは退院しており、居住地も全く不明になっていた。外科医の話では、ピエールのあの美しい眼の一つは再び開かれなかったらしい。その上、右の足首に大きなひきつりが出来、ひどい跛になっているそうだ。

ああ、ピエール！ 何と云うみじめさ！ 何て惨い運命の神！ 若し神と云うものが本当に存在するのなら、何故あの様に完成された美の破壊を許すのだろう。美しいものに対して昔から神は冷酷だ、そして強度に嫉妬深い、といった某作家の言葉も頷けないではない。美しい人は絶えず数奇な運命に弄遊ばれ



不運のまま薄命に散って行く。僕は三国ヶ丘の彼の下宿をたずねたが、そこに彼は居なかった。可哀そうなピエール、仏国から父の国に憧れ單身渡日した彼に近在には一人の身寄とていない。本町の勤先にも彼はあれっきり姿を見せなかったそうだ。本当に何の手掛りもなく、まるで地上から煙の如くかき消えてしまったかの様だった。誇りかな彼のナル

シズムが一瞬にして不具に変貌してしまっただけを、二度と他人の眼に映らせたくなかったのだろう。美しい過去のピエールのまま、世人の想い出に生きたかったのだろう。しかし僕の心は決して彼の変貌を見ても変ったり等しない、そう思ったがそれを彼に伝える術もなく、何事にも悔恨を残して日が月が重なって行った。

ディズム

丸 恵

一方、サナトリウムの毛利氏は見舞の度毎に容態が悪化して行った。一週間に一度の割合で僕は見舞に行っていたが、たまたま氏は無茶な要求をするので次第に十日に一度、半月に一度と訪問の回数を減らしていった。氏は瘦細った手で僕の………する。それだけならいいがあのガフキー十号と云う無数菌の出ている口で………をさせると云うのだった。僕はその病菌感染の恐れにも増して、氏の根強くまだ残存している性欲の執拗さに身震いした。だが初めてチアノーゼも現れると云う危篤状態の発作が起った頃より氏は急激に衰弱し、只僕の顔を見ているだけで満足した。僕も枯木とみまがう手を握っていつもの微笑を投げかけるばかりだった。そ

して丁度半年位経った或る冬の日、三度目の発作で遂に毛利氏は永遠の旅に出てしまったのである。僕は氏が息を引取る前に、無言で差し出したトーマス・マンの「ヴェニスに死す」を抱き、氏の棺に寄り添って歩いた。去る時は何もかも一度に去ってしまう。ピエールと毛利氏を失った僕が体得したものは只是だけだった様な気がする。去った人の為に泣いたとて何になろう、そう思って何の良心の咎めも感じなかった僕から、この本は改めて美しい泪を僕の眼から誘い出した。「お前はそんな風に笑ってはならぬのだ。いなかね、誰にだってそんな風に笑ってはならぬのだよ」

これは毛利氏が臨終の時に僕に云い度かつ

私がその中国人の女性から、女の肉体に潜むサディズムを知らされてからもう二年近くになります、今でも時々あの当時の事を思い出しては懐かし、人知れず妖しい幻想の中で悩ましい幾夜を送って居ります。

そのRと云う女性は、やはり中国人のバイヤーの二号だか零号夫人だかで、二人で逢って居てもあまり商売の事等は話題になりませんでした、仲々その道では切れ者らしい事

た言葉に違いない。

僕はそっと鏡の中の自分に向って微笑みかけた。この微笑が……。その時、部屋の扉がノック無しに開かれて、新しき友、K劇団の研究生狭山が入って来た。はっと思った瞬間僕は無意識に狭山へ向って微笑みかけていた。ピエールを不具にし、毛利氏を殺したその微笑で。

附記 ピエール（これは仮名だが君は思

い当るだろう）若し残る片目でこの文章を読む機会があったなら、何をさて置いても真先に僕の部屋へ飛んで来る様に。いつでも君を迎える用意が出来ているのだから。

(R・M)

は、それとなくわかりました。

上背もあり、よく発達した乳房や腰部にポリウムが有って肉体美の持主でした。知人の洋品店を手伝い乍ら気楽な生活をして居た私とふとした事から知り合って、すぐ私を男妾の様にしてしまい、さまざまな肉体遊戯が始まったのです。一週間に二、三度逢っては防音装置の行き届いたホテルの一室で、アブノーマルな情慾の虜になって居たわけです。

中国女性のサ

そのマダムの御主人は精力的な事業家らしく香港、台湾、星港等を往復し乍ら多忙な生活を送って居り、マダムは代理人として日本に來ては流暢な日本語で自分だけの自由な生活を楽しんで居たのです。

一体に中国人の女性は肌が綺麗で滑らかな事はよく知られて居りますが、又無毛の女性の多い事も有名であり、その人も手足のムダ毛は勿論、その他の体毛も殆ど発見出来ません。それで居て肉体は充分に成熟して居て、

特に美人型の方というわけではありませんが、三十女らしいポリウムのある肉体の魅力は露出された足を眺めて居るだけでも云うに云われぬ性的吸引力があるのです。最初の一、二回は女の巧妙なリードで濃厚な接吻と抱擁、やがて彼女特有の嗜虐的な遊戯が始められたのです。

最近かなり流行っているよく本などに書か

れて居るた

と残酷に男

を奴隷に扱

うのとは違

う、徹底し

たものなの

です。以前

にも外のマ

ダムと、そ

う云う体験

も有るには

有るのです

が、私自身

否応無しに

肉体的にも

心理的にも

彼女程強い



受動的刺戟を与えられた事はありませんでした。或る時、仰向けにされた一人の男を二人の女が責めて居る影絵を見せて呉れましたが普通の責め方ではまるで興味を持てないこの様なのが私の理想だと云うのです。

昔から年下の若い男を好きな様にもて遊ぶ「人形遊び」と云うのが有りますが、彼女も私を相手に肉体的危険など及ぼさず、そ

った点には極めて細心の注意を払い乍ら行う洗練されたサディストと云えます。だから、よくアブノーマルな女上位の描写で、男を寒いのに無理に裸にして犬の様に首輪をはめたり、足舐めを要求したり、身体中、所構わず鞭打したり、たゞ残忍に傷をつける様な事は好まないし、私も又幾ら彼女からマゾヒストに仕込まれたといってもそんな拷問は受けたくありません。そんな事はアブ・ストリーの中か、若くは一人でする奔放な妄想の中で楽しむ事だと思っています。

彼女とは、どれだけアブノーマルな行為をして居ても、よく私の健康にも注意してくれますから、その点安心でした。次の日はぐっすり寝かして呉れ、疲れが早く取れる様にビタミンやホルモン剤も用意して呉れます。

一週に二、三回きりだし、あとは彼女が自分の用で幾日も神戸や其他に出張する事がありますから、その間はまる

っきりお休みになります。

女も、幻想的な年頃が過ぎて、やがて心身共に爛熟して来ると、普通の性生活ではつまらなくなり、年下の若い異性を自由に見たいと云う気持が湧くのでしよう。もとゝどちらかと云えば女ばかりの中で育てられ、内攻的で女性的要素が濃い私のマゾ的な傾向



を、彼女に巧みに引出された事になります。彼女は私の様におとなしい中性的なタイプに興味があるらしく、あまり毛むくじやらの、所謂、筋骨逞ましい男性は好みでは無い様です。男の毛深いのは一体に、女性に好かれる様ですが、時折、毛の少いすべくした肌の男性を求める女性も居る様です。私はどちら

かと云うとすらりと背も高く痩せぎみの方で、肉や脂肪の盛り上りむつちりした所が無いので、そう云った遊びの対象として裸体には自信が持てないのに、彼女は、そんな私にサジスチックな情熱を燃やすらしく、何も抵抗出来ぬ私の身体を折檻し、料理してしまうのです。

自分も無毛だからというわけでも無いでしようが、そうも深くも無い私の手足のムダ毛まで、入念に手入れして、ベットに横たわる私に化粧水を振りかけて呉れたりします。そして、着

て居るものを全部脱がした上、私を縄で上手に縛ります。無毛にされた私の手も足も背中の同じ部分で一緒に括り、ベットの上で身動きの出来ないみじめな姿勢を晒して居る私を彼女は好きなだけ眺め乍らベルモットを口にします。

私を縛った時は彼女は満足らしく、優越感を味って、衝動的になり、思う存分に振舞いしばし朝まで縄も解かれません。あまり強く締めつけて痛さが片寄らぬ様に気を使って縛りますが、余り長くそのまゝで放っておかれると、縄が肌に喰込んで来て抵抗出来ぬ恰好で思わず体をよじりたくなります。

普通、緊縛写真や絵でも、縛られているのは女が殆どですが、若い男の緊縛された肉体は、女と違った変化が楽しめてよいそうです。

約束通り来なかったからと云って、縛られたまゝ横たえられた私のお尻を鞭で打据える事もあります。しかし肩や腹部は身体に危険だからと云って殆ど打たない様でした。

肛門責めにされた事もあります。その時は目かくしに猿轡をされます。口の中にはガーゼをはめ、耳の前で結んでありますから、喚く事も不可能で、何をされてもどうにもなりません。

ません。或る時は猿轡、目かくしの上に更にパンティをかぶせ、ゆっくりと時間をかけて責められたりしました。

後手に縛った私の足には、よく西洋の娼婦などが用いて居る、黒いストッキングをはかせ、お腹のくびれた部分を細引で嚴重に縛りその先を手にして引き寄せたり、終日そのまゝの姿で娼婦の様に扱われたりします。女の体内にはさまざまの残忍性が潜んで居るものなのでしようか、彼女は私をモデルに思った事を堂々と実行に移したのです。しかし、そういった遊びの時間から離れれば彼女は優しい人だし、洗練された社交人なのです。よく外国人の女友達にも紹介され、一緒にお茶を飲んだりしました。

私を責めて居る時、どんな淫らな強い言葉を使って野放図に振舞って居ても、もがき苦しんで居る相手の姿態に自分を置き換えてのデリケートな気持は失いません。だから彼女にはどの様に責められて居ても心配なく委ねて居る事が出来るのです。

一度は私を柱にくくりつけて、部屋に鍵をかけたまゝ外出してしまい、二時間以上もの間、手は上に引き上げられ、やっと爪先で立てる位のポーズでしたから、もゝに廻された

ローブが容赦なく肌に喰い込んで苦しく、次第にしびれて行くので一人部屋の中で呻き乍ら不安な時間を過して居りましたが、外出から帰ると、ぐったりして居る私を暫く眺めてから縄をほどいて呉れ、紫色に変色して居る私の皮膚をよくマッサージし乍らいたわって呉れました。責めさいなんて後は、充分に疲労回復に注意して呉れますが、嗜虐的衝動に彼女の血汐が燃えて来ると、息苦しいまでに私を責め苛みます。

やがて、次の日の昼近く眼を覚ましますと彼女も私も昨夜の事等無かったものゝ如く、ウルトラマリンの海を眺めたり、外人墓地进行したり、少しもアブノーマルでない時間を迎えるのです。

まともな方がこの物語りを読まれたら、きっと顔をそむけるかも知れませんが、悪魔の美しさと云うのでしようか、私は彼女との過ぎし日の交渉を少しもいやしくは思いません。それ以来、不幸にして彼女の様な女性とはめぐり合いませんが、今までも眠むられぬ夜の錯倒した妄想の中に出て来る女は何時も西洋人の女だったり、彼女の白い肉体なのです。

女性 の 鼻 の 美



真 鍋 四 十 六

(一)

奇ク八月号に三度、小論を掲載して戴き本
当にありがとうございました。私説が公にさ
れた喜びに加えて、この八月号は、私の私自

身の所論に対する客観的確信の附与と云うは
かりがたく大きいよろこびを、もたらしてく
れました。何故なら、山田氏(サド女性の覆
面)、春山氏(フエチシストの悲願)という

二つの優れた論稿が載せられてあったから
です。確信の内容が、女性の鼻と鼻の孔の美
の両方である事は申す迄ありません。

女性の鼻に対する、私自身のフエティツシ
ユな感覚については、もとより昔からその客
観性(私自身の特異な感覚ではないと云う)
の確信を持っていました。そして、春山氏も
指摘していただけるように、この正しく、且、
高級な(と申し度い)感覚は、外国に於て高
く評価され、この国はそれだけ文化の劣り低
級である故に、高く評価されていないと考え
ていたものであります。それが、このすべて
の点において未開封建と、云うはかない日本
に於ても、漸次、正しく認められるようにな
ったと云う事は、喜ばしい次第であります。
春山氏は、折角の名論のあとで(自分の前途
の為に自作の発表を……云々)と、書かれてい
ますが、これは、堂々たるフエチシストにも
似合わない、情ない御意見ではないでしょう
か。小生の、小見によればフエチシズムは、人
間一般の通常な感覚であって(その意味では、
マゾやサドと同じく)その対象によって、高
下善悪をつけ得るものではないと考えます。
ある人は、クラシックな音楽を、ある人に
は、ジャズを、又ある人には、骨董品を、そ



れぞれ趣味の対象とするでしょう。それが吾々の場合に於ては、女の鼻並に鼻の孔である。と云うだけの事であって、その故に社会的非難を正当に受けるべきか、自明の理と思われまふ。世の多くのフェチシスト諸君が、単に正直である事によって、この社会、この国が明眼する事が出来ましよう。これこそ進歩と呼べるべき事を、私は確信いたし、このKKと云う雑誌こそ、文化的向上の命題において、大いなる讃辭を呈してやみません。春山氏よ、どし／＼貴下の作品を発表せられ度い。小生は、すでに中年、耽美主義者を以って能事終れりと、考えています故か、その望みもつい捨てるのでは、と自分自身がわから

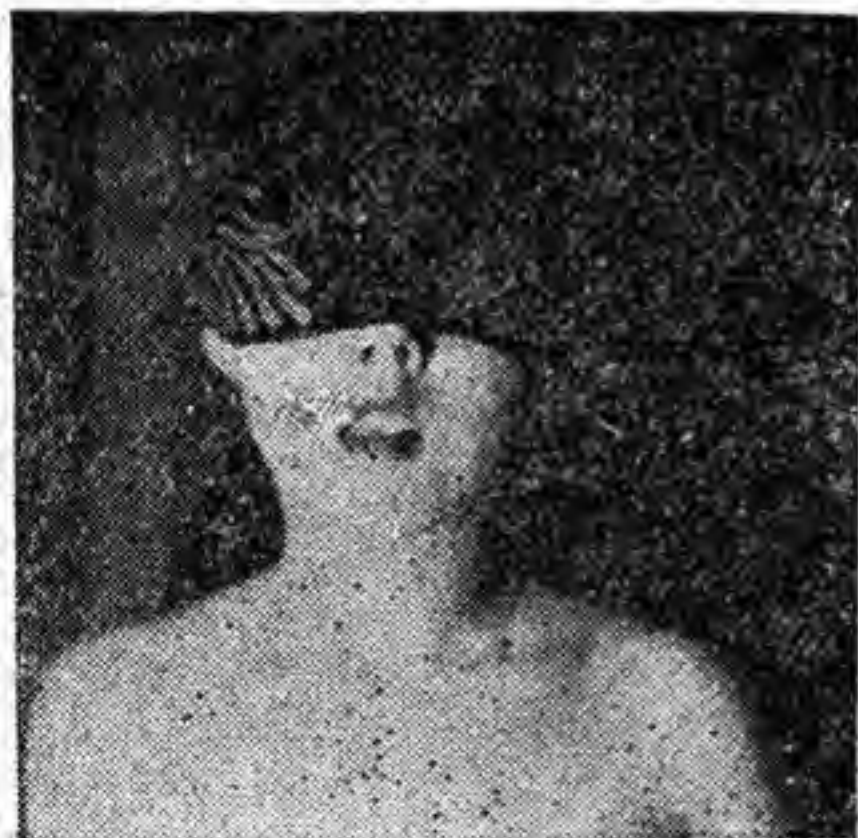
あります。女性の鼻及び鼻の腔に関するフェチシストは、一同の労作を私も又その一人として、期待してやみません。その意味において山田氏の写真作品を、誌上に期待いたします。

(二)

つい最近、大映作品の映画、羅生門を場末の小屋で見る機会を得ました。そしてこの主演女優、京マチ子に対する私の今迄の考えを、まず／＼正しく、確信した次第であります。今頃、羅生門を、などと笑わないで下さい。とにかく、芥川龍之介が生涯をかけて闘った心理の相対性の問題は、別の機会に論じましょう。京マチ子と云う女性の美しさ、長所を

なくなるのです。そして又、個人主義的耽美主義的人生観が、文化的高級性を意味する限りに於いて、KKの読者層一般が、他人の事でごたごた干渉するという愚かしい、この国の一般的風習から解放された人々であることを固く確信するもので

正しく発見し、正当に表現していた事を、私は認め、ようやく日本の映画関係者の中にも耽美主義を解する人があるということは、大きな喜びであります。京マチ子の美しさは、その鼻及び鼻の孔の美しさに、集中せられましょう。たゞて申せば、日本の女優の中で、たゞこの人のみが美の名に価する鼻孔を持つた人と申せるかも知れません。映画こそみないけれども、プロマイドや映画雑誌等でみて来た私は、この映画を見て以来、今後は是非彼女の作品を欠かさず見るように決心したのです。(彼女の出て来ない場面を、見ている間の苦痛は、忍ぶべく可成の努力を要しようとも)この人の鼻は、日本人には珍らしい高い鼻梁を持つています。まず、何よりも高い鼻である



事、それは、北谷氏も指摘していられるように、絶対的な要件でありますが、京マチ子は、その点に於て立派に合格しております。

次に、その鼻の孔であります。それがまた素晴しく、適度にひろがった小鼻と、それに囲まれた鼻の孔は、黒々と然し汚ない感じが全くなく、気持よい大きさと含みをそなえています。第三には鼻の角度であります。これが又まことに望ましい角度を持っているのです。少し上向いた鼻、というのが今日、欧米で正しく認められている鼻の美しさの基準であります。京マチ子の鼻の角度は本当に、望ましい程度の上向きを示しています。

斯様にどの点から見ても全く申し分のない鼻の持主であり、欧米の女性の鼻のように男性の感じが欠除した、女性の鼻として堂々とした感じの仲々に、得難いものであると私は思います。この京マチ子の素晴らしい鼻を思うまゝにのぞき、触れ、もてあそぶ事が出来たら、どんなに楽しいことでしょ



う。馬鹿げた骨董品に何百万の金を費やすよりも、唯一度でもいゝこの素晴らしい鼻を、思うまゝに弄んでみたい。その方がいかに値うちがあるかと、私は嘆息せざるを得ません。齡すでに、人生の半ば以上を過ぎながら、このような素晴らしい存在を眼の前にして、それ

を得る事の出来ない自分を、ほと／＼情なく思いました。しかし唯一の望みがあります。その唯一の望みというのは、京マチ子女史が自分の鼻の素晴しさを意識して、プロマイドや写真、又映画の一切の機会に通じ、その美を吾々に鑑賞させてくれることです。そして今一つ、若し彼女が結婚（形式上変質上付でもあれ）する場合に、私達のような正しい美の評価者と結ばれん事を、切に願いと致します。第一の希望において、K Kクラブが陳情書でも送って戴くか、或は、そうした写真を掲載して戴くように切に希望してやまな

(三)

春山氏が、八月号に、二、三米国誌をあげて居りましたが、あの他にもたくさん、もっとフエチシズム本来の目的のものが、あるように思われます。これは、いずれも女性のフエティシユな美をたゞえて充分なものがあり、恐らく鼻、腹、ヘソ、ヒツブ、脚、足首、わき下、等々並びに、下着、

靴に及ぶフェチシスト諸氏を満足させるであ
りましょう。尚、春山氏は「フェチシズムは米
国が本家」と言われますが、これは、いささ
か独断のように思われます。小見では、やは
りフランスが一番、それから、スペイン、イ
タリー、ドイツ、英国と欧州文化国がつづき、
アメリカはその後に来るのではないでしょう
か。それに中国や印度という大文化国を忘れ
てはならないでしょう。いずれにしても、こ
の日本は世界中で一番、美的感覚の遅れた非
文化国であると云う事に、間違いありません。
幸にKKクラブが出版され、ストリッ
・ショウが堂々と、公演されるようになった
事は、大きな功績（吾々耽美主義者にとって
は、勝ち負け等、全く話題にもならぬつまら
ない事柄です）でありましょう。然し、残念
な事に、このよき日々も今や終止しそうであ
ります。

乍序、ソビエト国や、中国の社会を理想に
考える事に於て、各さかでない小生でありま
すが、美的耽溺を否定する所謂、健康謳歌と
云う現在の、この国々の時間的段階に対して
は、激しい嫌悪を禁じ得ません。せめて自分
の生きている間は、爛熟という言葉のまゝの
耽美時代が去らないでほしいものです。中国

の魅力は、やはり西施傾城の美に求めたいも
のです。ロシアへの憧憬は、アンナ・カレー
ニナの遊蕩生活に向けておきたいものであり
ます。それを反社会的存在と、非難されよう
とも、暴君ネロの文化的功績を、高く評価す
る一人であります。

(四)

随分おしやべりが過ぎました。北谷、山田
青山の犬先生方の御叱責と御指導を願ひあげ
ます。最後に最近の近作も御披露いたしまし
よう。青山氏の言われるように、もしグラビ
ア版にプリントして、戴けるなら本当に幸い
であります。

一、これは、鼻に軽い程度のクセロハン・テ
ープつりあげを使用し、稍、鼻の穴が正面
を向く程度にして、そのまゝ顔を上向け、下

からうつしたものです。鼻の二つの孔が可成
りよくのぞかれ、他方に於て眼の表情は、マ
ゾヒステイツシユな感じを充分に出している
ものと、自負する作品です。

二、これは、主として鼻のフェティツシユな
感覚を満足させる為のものです。少し光線が
足りないのと、腋の下の毛が公開をばから
れるであろう事が残念です。

三、これは、正面からならんら工作を、ほどこ
さずうつして見ました。このモデルの鼻が可
成り理想的な鼻である事はこれを以てお
かり戴けるでしょう。

四、ドイツのフェティシスト雑誌から、一枚
きりぬいてみました。再プリントは難かしい
でしょうが、うまく出来れば嬉しいで
す。

以上

歓義先生 性愛相談欄開設

歓義先生のお仕事が多忙な為と誌面
の都合がつかなかったという二つの理
由で長らく中絶しておりましたが、皆
さまの強い要望により性愛相談欄を本
号誌上より再び開設いたしました故左
記要項により、奮て御相談下さい。

一、解答者、病的な苦悩を有する人達
の友として、日常多くの特異例に接
して、臨床的な豊富な経験を有せら

れる、歓義先生。

一、相談文は出来るだけ詳細にデー
タを記入の上、読者係宛御送り下さ
い。質問者の秘密は厳守し、絶対他
へ洩すような事はありません。

一、相談文及解答は漸次本誌上に掲載
いたします。用紙はどんなものでも
結構です。都合悪き時は住所氏名を
明記されなくとも構いません。

たのしきかな時代劇

女優の縛られる映画から

藤 木 仙 治 文 画

時代劇映画はたのしい。時代劇には夢がある。時代劇はその殆どが勧善懲悪である。くだらない映画ほど、最後には必ず悪が滅び、善が栄えることになっている。

過去に幾たびか時代劇の衰亡が伝えられたのを私は知っている。

然し、今日、週に五、六本封切される日本映画の中で、時代劇の無かった週はまずあるまい。

この現象を復古調だという。或は逆コースだという。たしかに、それにも関連があると私も思う。斬ったはったのチャンバラ映画は

決して平和愛好的なものでは無いだろうし、芸術的にみても優れているものは少ない。

しかし、しかしだ。国定忠治が、農民を苦しめ悪辣な搾取に榮えている悪代官に、敢然と闘いを挑み、みごとに斬り倒してしまうのを観ていると、なぜか胸がスツとするのだ。

立派な侍の家に生れた遠山の金さんが、庶民の中に生活をしながら、悪い役人や町のボス等を叩き潰すのを観るのは、なかなか愉しいのだ。権力をカサにきて善良な町民達を虐げる悪い奉行を、三日月疵の旗本退屈男がさっそうと現れて、エイヤツとばかりやっつけ

てしまうのを観れば、子供ならずとも拍手を送りたくなるのである。

時代劇映画の主人公は、その殆どが庶民の味方である。

やくざ謳歌のストオリイにしても、最後に亡びるのは必ず悪虐非道な親分であり、権力と手を握るボスである。

われらの主人公は決して悪をゆるさない。決して悪に負けない。単純で善良なわれわれ庶民の夢と正義感が、云いかえれば時代劇映画を榮えさせているのではないだろうか。

こういう解釈のしかたは甘すぎるかも知れ



ない。しかし、この国の贈賄政治家、汚職官吏。その昔の悪代官、悪親分、はた又悪家老、悪奉行などと、まアなんとその質を同じくし悪政悪事を同じくしていることよ。チヨンマゲをつけた悪代官が農民達の窮乏をよそに、まわりに女を侍らし厚くやわらかい布団の上に酒色に耽溺している姿。そして現代の政治家が公用自動車を待合玄関に乗りつけて、芸者に囲まれながらゼイタクな料理を喰い、貪

らしではあるが、スクリーンの中の正義の主人公に拍手を送るのではないだろうか。筆が初めから横に滑った。本題に入る。

時代劇映画はたのしい。そして、もう一つ時代劇のたのしさは、我等サディストにとって限りなき欲びであるところの「美女緊縛」の場面が数多く観られるということである。（なに？そのシーンみたさに時代劇を観に行くんじやないかって？）いや、とに角時代劇

慾な悪質資本家と怪し気な商談に時を過している姿。私の脳裡には、これら今昔の悪役人の姿が奇妙にタプって見えるのである。

そして、国定忠治が権力に反抗して敢然と立ち上る

時に、観客のイメージは今昔汚職役人の姿が無意識の中に錯綜して、はかないウツブン晴

には夢がある。美しい容姿の女優が縛られ、猿ぐつわをされ、悶え苦しむ姿は、世にも妖しい美のうごめきだ。暗い客席の中で、我等サディズムを愛好する観客は、ひっそりとその美に陶醉する。

サディズムを変態と冷笑する人達に私は云いたい。「同じ入場料を払って、同じ映画を観ながら、この美を理解し得ない、この陶醉を感受し得ないあなた達こそ、不幸ではないでしょうか」と。

また脇道にそれた。近頃私が観た映画の中から女性の縛られる映画を思いだすまゝに、イメージの残っているものから順不同に並べていってみよう。既刊の「奇ク」に載ったものと重複するものもあるが、それは許してもらうことにして。

はじめに「疾風愛憎峠」（東映作品）時代劇といえど先ず東映を挙げねばなるまい。それ程この映画会社は時代劇が多い。かつての大映のお株を奪った形であるが、阪妻今や亡く、大河内、嵐寛寿郎さほどふるわぬ昨今、片岡千恵蔵、市川右太衛門の二剣優を抱えた（しかも二人共東映の重役である。）この映画会社が、否応なしに時代物製作に力を入れるのは当然であろう。それで結構興行的に採算

がとれるのだから、時代劇ファンという存在はさき程も述べたように予想外に多いのである。

さて此の「疾風愛憎峠」映画批評家には例によって例の如しで、あっさり簡単にそれこそ斬り捨てられてしまったが、私が観たところ。東映作品にしてはかなりいい出来であった。(監督は老巧の佐々木康、脚本小川正)

ここで縛られるのは木暮実千代。市川右太衛門扮する武士を恋する茶屋女で、身分違いの故に脱藩してその恋を遂げようとする。が、寸前に捕まってみせしめの為に往來の樹に縛りつけられ、さらしものにされる。

ファンよく御存知のように木暮実千代の豊かな姿態、艶麗な表情が大きく写しだされる。縛られる女性の肉体というものは、やはり肉中背か、それ以上に肥り気味の身体のほうが見た眼に興を呼ぶのではないだろうか。枯木のような肉のうすい女体が縛られていてもあまり面白くない。その点、木暮実千代の熟れきった胸に、縄がふた巻き、三巻きされている姿は艶やかであった。白っぽい着物が、胸に喰い入る縄の存在をはっきりみせていたのも効果的であった。縄は麻ロープの太目のものであった。又、それ以上にあの大きな、

まつ毛の長い色っぽい眼が、愁いとなげきと恨みに満ちて、辱しめに喘ぐ表情が他の女優では真似られない「縛られた女」の悲しみ、苦しみを表現していた。

こう書いていると、このシーンがかなり長いように思われるかも知れないが、実はホンのワンカットで、時間にしてわずか十秒足らず。折角スタジオにセットを造り、立木を植えて木暮実千代を後ろ手に縛りつけたのだから、せめて一分間位は縛られた姿を前後左右から写し出して、悶える美しさをみせてもらいたかった、と愚痴の一つも云いたくなる。

この「疾風愛憎峠」はこの他にも、高千穂ひずる、八汐路恵子が縛られる。二人は幕府治下の小田原にかくれひそむ勤王志士達の娘妹で、新徴組の斬り込みのために兄、父は殺される。この勤王志士達のアジトを襲う新徴組の芹沢鴨が原健

策。この場面などは従来のチャンバラ映画にない迫真力があつた。アジトを取囲んでなだれ込む幕府方のために無勢の志士達は片端から斬殺される。戸外に逃れる者は短銃で射殺する。妙にリアルに写してあるので残忍である。ニュース映画等でよく観る左翼に対する警察隊の襲撃をホーフツさせる。世相もよ





く似ている。或は監督の意識的演出かも知れない。

薄田研二扮する幕府長官が「女は斬るな。」

女は縛りあげて、他の隠れ家を白状させるのだ」と叫ぶ。かくして後ろ手に縛られた高千穂ひずる、八汐路恵子が突きとばされながら

戸外に出てくる。この縛りかたも嚴重によく縛ってあった。が、このシーンも又短かい。

やがてクライマックス近く、この女二人が牢屋の中に入れられ、その前で原健策の芹沢鴨が「白状せねば吊し上げる」と威猛高に命令する。吊し上げるとは一体どんな責めが始

まるのかと、実は筆者胸をときめかせながら観ていると、市川右太衛門扮する役場の新太郎が出現して、あっさり救い出してしまった。

いったい、時代、現代劇に限らず映画のヒロイン、危難におち入っても救い出されるのが早過ぎるもう少し責められ、苛められたほうがスリルとサスペンスが利いてよいのではないか、そのほうがクライマックスも盛りあがるというもの、

と、茲で文句を云ってもしじまらないが、この気持は、奇々愛読者の方々ならば百パーセント理解して下さるだろう。

次に、これも同じく東映映画「青空大名」片岡千恵蔵、千原しのぶ、浜田百合子主演。

この映画で縛られるのは山賊の娘に扮する千原しのぶ。女優の手持ちの無い東映ではよく使われ、マスクも時代劇女優らしくおも長で切れ長の眼をしている。この映画では前記三人の主演がそれぞれ縛られる。縛るのは横山エンタツ扮する悪虐無道な城主。及びその家臣共。男性の縛られる姿をみて刺激を感じる方も多く居られるので書いて置くことも無駄ではないと思うが、肥って体格のよい千恵蔵を縛る縄が細くて貧弱な上に、だらしのない縛り方なので如何にも芝居染みていてよくない。千恵蔵が力を入れたらすぐ腕から脱けそうである。監督はこういう細かい点にまで注意を払わないといくら時代喜劇でも絵空事じみて観客に真実感がこない。

ヴァンプ役をよくやる浜田百合子は旅の淫売婦に扮し、やはり悪城主に捕って庭の立木に縛りつけられる。後ろ手に縛られて着物の膝がまくれ、白い太股がやゝ露出している演出は一寸珍らしい。みた眼に非常に色っぽく

感じられた。縄を解かれて、あわて、膝をかくす演技も又色気があった。

しかし、この縛り方も甚だアイマイで「緊縛」ではない。「緊縛」の真実性がうすいと俳優が如何に巧みであっても、その演技は空々しく感じられる。「緊縛」のシーンでは、縄も又、演技するということをし、心ある映画監督なら知るべきである。

さて、いよいよクライマックス。搾取暴虐の限りを尽す悪城主に反抗した農民一揆が起る。千原しのぶ扮する女主人公は城主居室の庭先に引き据えられている。この場合の縄は乳房の上あたりに二タ巻き、下に二タ巻きで勿論うしろ手。肌に喰い込み方はいさゝか足りないが、それでも感じは出ていた。キメラが近づいて、うなだれているヒロインの肩のあたりからうなじをなめ、やがて背をまわるかと思ったら、そこでストップ。映画の場合、両手首が背中交叉して縄が巻きついて、いるシーンは仲々観られない。背後から写すのはマレである。我々緊縛ファンにとって、残念という他はない。監督やカメラメンに云わせれば、背中に表情がないからどうしても前ばかり撮ると云うだろうが、無残に縛りあげられた腕、手首だけで、最も緊張した表

情を間接的ではあるが効果的に表現できるではないかと我々は云いたい。

場面は移って、城中奥室に押しこめられたヒロインがエンタツの城主に口説かれる。この映画のエンタツ、いつもの眼鏡をはずしてそのあとの近視の眼が不気味なので、ヒロインの恐怖が生きる。意に従わないので女の肩に手をかけ強引に手ごめにしようとする。その時城中に山賊やら農民らが押し込んでくるので、天守閣まで女を連れて逃げる。縛られて両腕のきかない可憐な娘が、淫虐な城主の手に抱きすくめられるスリルが、心地よい興奮を呼ぶのだが、千原しのぶの表情が固いので危機感がうすれる。その点、前記の木暮実千代とは演技力に於て差があるようだ。

伊丹秀子の浪曲入りで「国定忠治、木曾路の子守唄」という映画。主演は最近徐々にカムバックをみせはじめた黒川弥太郎。戦争が終ってもうかれこれ十年にもなるうというのに、これ又お古いお話を古い手法で普通に描いた忠治映画。捕手に追われる忠治を又追うのが霧立のぼる。十七、八年前、明るい近代的な容貌とスタイルで人気のあった霧立のぼるもいい年増になって姐御役。市川小太夫扮する目明しの親分に捕まって縛られる。直

接手をかけるのはその乾分だが、霧立のぼるの両手をつかんで背後にねじ上げ、腰の捕縄をほどこいて、いざ胸から縄をかけようとする所で場面転換。まことに残念であるが、手をうしろにねじあげられて、縄が一筋胸にまわるのが映画では珍らしく印象に残っている。

場面変ると、太い立木にくくりつけられ、一生懸命にもがいている。縄から脱け出そうというのだ。もがくうちに縄がずり落ちてはどける。いやはや捕方ともあるうものが、だらしない縛り方をしたものだ。この女優も中年になってから肉付きよく、色気のある姿態をもっている。縄から逃れようと悶える所は艶やかであった。

縛られて悶え苦しむ女の姿は、はかなくも又、美しい。乱れた髪が、顔半面覆った猿ぐつわのあたりまで垂れ下って、あきらめと恨みのこもった眼ざしの素晴らしさ。その反対に、縛られても一向に平気でエヘラエヘラ笑っているようなのは、あまり感動がない。そのいい例が「すっ飛び千両旅」。

嵯峨美智子が、やくざの親分の娘に扮するのだが、これが怖ろしく勝気な娘。さらわれて女郎屋に売り飛ばされても客をとらない。他の女郎達へのみせしめに二階の薄暗い部屋

の柱に縛りつけられる。縛りつけられてからのシーンは角度もいろいろに時間も長い。しかしこの娘縛られても平気で、責めにくる女郎屋の亭主を逆にやりこめる始末も、ともこの亭主に扮するのが柳家金語楼。

この映画で特に印象が深かったのは、客に接しない娘に業を煮やした女衞（キドシン扮す）が、縄を手にして立ち上り。

「云う事をきかないと、ふん縛って痛い眼に逢わせてやる」というような意味の言葉を吐く。その周囲には朋輩の女達がかたまつて怖し気にみている。いきり立った女衞がキリキリと縄をほどくと、みている女達の表情にさっと恐怖が流れ、眼を覆う。カメラはこのおのく女達に焦点を合せて、嵯

峨美智子が実際に縛られる場面は映さなかったのであるが、それが却って観客に惨酷なイメージを抱かせたのは面白い現象だと思つた。映画で「責められる女」を表現する場合、直接被縛体にカメラをあてなくとも、実感



は充分であるのである。この点を研究し、凝った演出で我々をたんのうさせる監督は居ないものか。

嵯峨美智子は他に「赤穂浪士、女間者秘聞」で、映画では珍しいローソク責めを受ける。

又、松竹映画「ひよどり草紙」では可憐な少女に扮して縛られるこの「ひよどり草紙」という映画は、一年半程前にも東映で製作した。原作は吉川英治で少年少女向の小説である。東映の「ひよどり草紙」では星美智子が、我々にとつてかなり刺激的な縛られ方をしたが、既刊「奇ク」と重複するので避ける。

東映の「大菩薩峠」第一部で、三浦光子が縛られて水車小屋に運ばれる。気絶から息を吹きかえすと、眼の前に片岡千恵蔵扮する机龍之介が突っ立っているの、ギリとする。縄は胸の上を三重か四重に縛ってあったが、特筆すべき点は無かった。

この三浦光子と花柳小菊あたりが、よく縛られる女優ではないだろうか。時代劇ではなくてはならない役どころだし、二人は人その役柄も似ている。

花柳小菊は「夕立勘五郎」小堀明男主演、でも縛られる。時代劇ではないが、千恵蔵の多羅尾伴内シリーズ「片眼の魔王」では、千

原しのぶと一緒に、椅子に縛りつけられた。

作品の質から云えば、愚劣な、それこそ庶民の夢も何もない映画に、宝塚の「トンチンカン八犬伝」というのがあった。この中で阪東好太郎扮する犬塚信乃が活躍するが、その妹に扮する女優がちょっと珍らしい縛られ方をする。(女優名失念、有名女優ではない)敵の城中深くスパイとして探索しているうちに露見して捕まり、折檻される。城中の広場、居並ぶ侍太将の前に引き据えられ、うしろ手に縛りあげられているが、その上に同じ縄が膝までもグルグル縛ってあるのである。足や裾を縛られるのは珍らしくないが、坐らせて膝を縛るといふのは珍らしいのではないか。そして衆人環視の中で、弓の折れのようなムチで叩かれる。そこまではよいのだが、この女優の演技拙劣のため、大の男にビシビシやられても、たいして痛そうな顔をしていない。悶えもしない。よほどのマゾヒストか、徹底したスパイ精神に鍛えられている女である、と、皮肉の一つも云ってみたくなる。

この辺で最近の鞍馬天狗物から一、二拾ってみよう。

「危し、鞍馬天狗」、云うまでもなく嵐寛寿郎主演。縛られるのは宮城千賀子。もっとも

この映画の最後では、天狗も杉作少年も縛られて、おまけに逆吊りにされ井戸水の中に漬けられる。それを身悶えしながら見ているのが縛られた宮城千賀子。彼女は天狗の思想に理解をもった勤皇芸者。幕府の侍に細竹のようなムチで肩のあたりを叩かれる。宮城千賀子の表情は弱々しく美しいのだが、ムチの打ち方が如何にも頼りない。触るか触らないかというような好いかげんな責め方で、女のほうが苦痛に喘ぐのがピッタリこない。しかし、年の功とはいえ、宮城千賀子はさすがに美しく責められる。声をあげようとすると、猿ぐつわをはめられる。眼だけが切なげに、苦しげに悶える。

「鞍馬天狗斬込む」。宝塚歌劇の新珠三千代が縛られる。市川段四郎扮する善悪不可解なる浪人の家に連れ込まれ、しごきのような布紐で縛られ、猿ぐつわをはめられる。男の家にしごきは無いだろうから、三尺のような帯らしい。

「あの女を縛るんだから、何か縛るものを貸してくれ」というセリフが、印象的な暗示を与えた。新珠三千代は足まで縛られて転がされる。その後、不良浪人二、三人



が侵入して、その足の紐だけ解いてあわや、という場面がある。猿ぐつわの上の黒い大き



Fuji

な眼が、明るくおびえて（という言葉はおかしいが、実際にそう感じたのだから仕方がない）転がされた身体がのたうつ姿はなかなかよかった。

ハリツケ柱にくくりつけられるのは滅多にないが、「流賊黒馬隊」では、西条鮎子、沼田曜一がハリツケになる。黄昏の道を囚衣の上に縄をかけられた西条鮎子が、馬に揺られて刑場に向う姿の痛々しさ。この映画は批評家の間でも好評だった。

同じく東映の「快傑黒頭巾」という映画でも、ハリツケ柱がでる縛られる女優は田代百合子男はその父親に扮する薄田研二。この場面は大友柳太郎扮する黒頭巾が、傷つき倒れて、その幻影の中にモ

ヤモヤと展開するのである。全く珍らしいことに、囚衣を着て高く十文字に縛りつけられた田代百合子の両脇腹に、グサリと槍が突きささる。ガックリと首を垂れる彼女。これは黒頭巾の幻影で、すぐ眼が覚めるのだが、グサリとやられる場面が出たのは先ず珍らしい。主人公の救いの手の来ない前にヒロインが殺されてしまったのは、映画が成り立たない。柱に縛りつけられるのは、たいてい坐って縛られるのだが、立ったまゝつながれるのが

「次郎長三国誌、殴り込み甲州路」の久慈あさみ。女バクチ打ちに扮し、小堀誠扮する猿屋の勘助という親分に縛られる。やがて次郎長一家の殴りこみ。勘助に白刃を眼の前に突きつけられる。このシーンはあまりいたゞけなかった。縄だけは太く強そうだが、緊縛が足りないのだ。

縛られて長く歩かせられるのが「男の血祭」（東映、市川右太衛門主演）の日高澄子。悪い親分に縛られ、かなり長い田舎の夜道を縄尻をとられて歩く場面。縄尻を引かれて後ろによろめいたり、前に突かれるのがよい。手に手に獲物をもった荒くれ男達に取り巻かれ、口惜しそうな表情で歩く、日高澄子は酌婦あがりのあばずれ。勝気な女を縛って責めて、口惜しがらせるのも又、面白い味がある。

齊藤寅次郎監督の時代喜劇映画にも、女が縛られる場面がよくある。

「びっくり太平記」。相馬千恵子扮する花魁が、阿部九州男の由井正雪ばりの浪人に誘拐される。猿ぐつわされて寺の奥室の柱に縛られる。又、星美智子扮する町娘も、悪浪人（益田キートン）に縛られる。うしろ手に縛られて深夜の江戸の町を引き立てられるのだが、ここでこの監督一流のギャグがある。縛

られたまゝ逃げ廻る星美智子の不自由そうな身体がちょっとよかった。隠れ家に連れ込まれ、阿部九州男の悪浪人に口説かれる。猿ぐつわを噛ませられ、足までくぐられて懸命にもがくのだが、阿部九州男は執拗に襲う。必死に逃げようとする娘が、不自由な身体で芋虫のように畳を這う姿態が、なか／＼リアルだった。が、こゝのカメラの角度が悪いのでよく描写されなかったのが残念。

同じ監督の「寛永御前試合」でも、物置きのような所に娘が縛られるが、これと云って取り上げる点はない。

悪人に捕われるのではなく、自分から手を後ろに廻して縛られる映画に、やはり齊藤寅次郎監督の「快盗火の玉小僧」。封切されたのは大分前だが、宝塚の尾上さくら扮する火の玉小僧が、あきらめ切った表情で、うしろ手に縛られ、衆人環視の中をひかれていく。苦しみや悶えの表情ではなく、あきらめと悲しみが、又別の美しさをかもし出していた。

悲哀感が溢れるのは、花井蘭子で、映画女優としてもその名は久しいが、役の上で縛られることも又多い。顔立ちがほっそりと面ながで、いかにも淋し気な表情なので、縛られると痛々しい。「右門捕物帳、伊豆の旅日記」

の時のような鉄火な女に扮しても、縛られた姿は弱い。最近封切られた「やくざ狼」でムシロ囲いのバクチ場の中で縛られるが、薄暗い光線の中に、青白い顔が悲しみと恐怖におののいている姿は痛々しく、他の女優ではみられぬ悲哀感がにじみ出ている。日高澄子のように、縛られてもふてぶてしいのと好対照である。各女優の個性、演技力によっても縛られた時の雰囲気、効果はこの様に違っている。『女体を縛る美』の追求も、極めれば又その道深し、と云わねばなるまい。

こうして書いていくと、女性の縛られる映画はかなりある。この一文に引用した映画は大体過去一年の間に封切されたものであるがここに挙げたもの以外にも勿論まだ数多くあるし、現代劇、洋画をも含めればかなりの本数になる。

と云うことは、劇のクライマックスに於てヒロインの危機を演出するには縛りあげるこれが一番観客に訴えるということであろう。全ての観客には、その程度の差こそあれ、縛られたヒロインに劇のクライマックスを感じ興奮する。ヒロインを縛り、責めることによって観客の手に汗を握らせ、劇の盛り上りを効果的にする。

時代劇に於て（そして全ての活劇映画に於て）このように重要である女の責めを、監督、演技者は意識的にしろ無意識的にしろ承知しているくせに、その演出演技は安易であり、マンネリズムである。もっともっと研究と工夫が、彼等にとって必要ではないか。（さしずめ「奇ク」でも読ませたいところだな）

私は時代劇映画の簡明で明るい諷刺を好み他愛ないチャンバラのスポーツ性をこの暮しにくい浮世の清涼剤として愛し、更に又、銀幕上に美しい女性が縛られ責められるのを鑑賞し、たのしむ。

数々の美女を縛るということは、ひまど金との余裕のない多くの善良なサディスト達にとって容易なことではない。その夢を、或る程度実現させてくれる時代劇映画を、だから私は愛するのである。——おわり——

◎時代劇の映画や洋画の中の責め場面についての記述は、先ず藤木仙治氏のを掲載しましたが、今後も引続いて扱ってゆきたいと思ひますので関心をお待ちの方は断片的でも結構ですからお寄せ下さい。

「鍼術」の責め発見

—— なぜ漢方医療が廃らぬかの理由 ——

津久井 毅



針で神経を刺す治療を鍼術というのだが、随分古い療法だ。恐らく原始時代に石で作った鍼のようなもので刺戟したり、出血させたりして病気を治した原始療法の変形したものと思われるが、もとは支那からの伝来で、徳川三代将軍が当時の医学では病名不明の難病に苦しんだ折、杉山和吉が鍼を以て治療し、それが神効を奏して鍼の医療効果が高く評価され、幕府は鍼医学校を創設して斯学の奨励

に力を入れ、杉山和吉は盲目の身で医博士の称号を許された。以来、連綿として今日に至っているが、現代の如く、科学が文明の根幹をなし西洋医学がこれほどまでに発達した中で、昔の面影はないにしても、なお信仰的な声価を維持しているのは奇蹟的なことだと言える。

正直に言うと、現代人ははたしてまだ鍼術の厄介にならねばならぬだろうかというところ、現代医学の発達で、その必要は殆んど無いと言っているのである。そう言えば鍼術師から抗議を受けそうだが、論議の余地のないところである。

であるにもかかわらず、鍼術を好む人がまだ多数あるというところは、医療効果以外に何かの秘密があるに相違ないと見当をつけたのが本文研究の動機であった。果して私の発見したものは「鍼術」の責めが患者をして刺通を悦楽するマゾヒズムに耽溺させているという事実であった。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

鍼の施術を受けると、どのような痛覚があるのか、と言うことを、はじめに知っておくべきで、少し廻り道だが触れておきたい。

背椎から出る神経には、知覚と運動の、そ

の名の示す通りの作用をする神経がある。知覚神経は皮下の浅いところに分布しているから、鍼が穿皮する瞬間に、ヒリリとした痛覚があつて、すぐその痛みは熄んでしまう。

鍼が皮膚を穿ち、脂肪層を貫き、筋層に入ると、これに通る運動神経の幹や枝に触れるし、太い神経だと鍼尖で突くことができる。

神経の走行には一定の解剖的コースがあるから、その部位を体表から測定するのは少し熟達すれば百発百中と言ってもよいし、漢方の経穴学上の経穴と解剖学上の主要神経の部位が大体において合致するから便宜でもある。

神経が鍼によって刺戟されると、電撃的な疼痛が神経の走行にそって襲ってくるが、実感的には焼火箸をあてられたような痛みでもあり、じーんとひびく打撃痛のようでもある。すぐそのあとで、懶い麻痺が起る場合もある。むしろ神経を外れると殆んど無痛、無感覚で、被施術者は体中に鍼の刺入されていることすら感じないものである。

この痛撃反応を、被施術者は「応えた」と言つて悦び、この鍼の痛撃が一

種の醍醐味となつて忘れられないものになる。いったん、この鍼の味を知ると、習慣的に反覆施術を求めるようになり、麻痺のもつあの恐ろしい患者心理と似通ってくるが、世俗ではこれを「鍼は癖になる」と言っている。明らかに、この現象は刺痛を悦樂するマゾヒズムであると言つてよいのだが、マゾヒズムと言つても今は広義のものを指しているの



で、狭義の淫好的なマゾヒズムは、後に述べるようにそのうちの極く限られた人々だけが経験するものである。

鍼をすると、快い刺戟で神経が鼓舞されるから、心身が一時的に爽快となるのは、入浴、あんま、マッサージ、指圧などの効果と大体は同じものである。

精神的にもある種の効果が認められる。気鬱なときなど、刺痛をうけると、昇華作用があつてさっぱりした気分になる。これを古人が鍼は瀉の療法だと言つたのばうがったことだ。

だが、施術後の快適のために、厭な刺痛に泳えるのでなくて、鍼の刺戟痛そのものを無上に悦び求めるところに、鍼としての効果の責めが伏在するのである。

鍼の痛みを悦樂する人のことを「鍼食い」と言うが、鍼師はあまり歓迎しない、というのはだいいちこんな被施術者は、普通の術式では満足しないから、余程強度の雀啄術のように、目的の神経を上下に激しく突き立てぬと「応えた」とは言わないから、術者としては労が多いので嫌うのである。

だが、この鍼食いの中にこそ、珍らしいマゾヒストがあるもので、ここでは好個の研究対象となるわけだ。

◆◆◆◆

数個の事例を引用して見よう。これは市内の相当有名な鍼灸院での実例だが、むろん公表することはできないし、営業上にも影響することだから、すべては仮名とする。

このK鍼灸院は、寝台が五つあって、鍼灸師三名、うち男二人女一人、助手女一人、指圧兼電療技術者男一人と言う充実した陣容だから、患者の数も日に百人内外を算えると言う繁昌ぶりである。

それでも鍼食い患者は十名内外というところで、その内訳は男三人女七人とあって断然女が圧倒的であり、女は鍼を好むと言う古来からの定評を裏付けている。

○吉本京子。歳四十。本人の主訴は月経不順血の道だという。中肉中背、容貌稍々尖鋭で男優りなところがある。独身で飲食店を経営している。

数年前、鍼の施術をうけている時に、術者の不注意から肩背部の肩井（経穴）僧帽筋中に折鍼して、外科的手術をした傷痕がある。それでも懲りずにずっと鍼を続けているとい

うというから、相当な鍼食いであること分る。独身だということは、恐らくは男によって満足のできない異質な生れつきであるからだろうか。

施術中、肩背部などの上半身の刺痛反応は通常であるが、下腹部、恥骨上際、腰部に鍼が及ぶと、細に入り微を穿つ注文を術者に発すのだ。殊に腰部の刺鍼は鍼二番の太いのを所望して、捻鍼、雀啄を強烈にやってくれといい、鍼が腰神経を探り当てて、神経の顫動するのが分るほどのひびきが術者の指頭に感じる程度に効くと、はじめて恍惚として

「ああ」

と言う呻きを発して、術者をどきりとさせる。その時分には術者の方は額に汗の玉を浮べて、ふーふーと言っている。

施術がすむと、さっさと着物をきて、

「あーすっとしたこと。これで又一週間は気分良く仿けまっしゃろ」

と言うと、治療代と、いつもきまってる鍼師に、

「お菓子代りに召し上っておくなはれ」

と、店のおすしなどの手土産を置いて帰るのだが、いつもの鍼師が何かのことで休んでいたりとすると、他の鍼師は、散々である。

「そんなん、さっぱり効けしまへんわ、いったいどこへ鍼してはりまんの、ひりりともせえへん、阿呆みたいな鍼だんな」

とやられては、鍼師の方で手を上げてしまふのである。この人にとっては鍼が良人の代用品みたいなものである。

○寺井伸子。歳三十二。本人の主訴は両脚の大腿諸筋のロイマチ性の疼痛。瘦型。長身で容貌普通。中産家庭の妻。

ロイマチスとは、はっきり診断のつかないような、緩慢な筋痛が断続的に大腿部にあるが、機能にはむろん何の障碍もない。

鍼は腰部から大腿部、下腿の三里の近傍に経穴を求めて刺入され、術式としては軽い直刺である。

しかし、それは術者の処方で、この患者は足趾の末梢部への刺戟を大いに好み、殊に拇趾の爪の両傍に、太い鍼できりきりと血の出るまで刺されることを願うのである。

趾端の刺痛は格別で、ちようど脳天を錐で揉まれるようなそそけ立つ痛みがあり、どんな強気な者でも、悶絶せんばかりに苦しむものである。

それに太い鍼で、出血するまで刺せというのは、そこに刺痛の悦楽があるからだが、鍼

師がほじるように太い鍼を刺すと、とたんにくっ歯を喰いしぼって、軀全体でその痛みを耐えようとして、悶え苦しむ様子は、怪奇な凄惨さを匂わせる。

頃合いをはかって鍼師が抜鍼すると、ぶつと赤い血が吹き出て、たららと一条の糸を引く。すると患者は

「ふー」

とベッドの上で、安らかな吐息を洩す。鍼術では末梢刺戟の反応を治療に併用することはあるが、この場合の趾端の刺戟がこの患者の筋痛に効用あるものとは考えられない。だが患者は

「血が出ると、すーと筋痛が緩解します」と言っている。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

以上の二例は極く平凡だが、鍼の責め効果についての消息をよく物語っていると思う。次に述べる話は、そのうちの奇譚に属するもので、まったく初心の女患者が、K鍼灸院に勤務していた宗像時雄という少し変質な若い鍼師に鍼術をうけて、突如としてマゾヒズムの悦楽を知り、その後宗像との間に関係が生じて、表沙汰になって一悶着が起り、宗像もK鍼灸を辞めさせられたという事件で、その

顛末などはここでは問題ではないが、偶然の機会が眠っていた、マゾ的心理に点火することがあると言う好例であるのと、鍼責めの魅力を証明するに適切な事例なので書いておきたいと思う。

異常心理の所有者は、已の心理については極端な秘密主義で、絶対に自分の正体が公にされる惧れのない場合の外は、滅多と露出しないうのを通例とするが、宗像がその一人で、彼は臀部崇拜（フエティシズム）の心理をもっていたが、鍼灸院では誰一人そのことに気づいた者はない。

しかし、宗像のフエティシズムは、単に異性の臀部でありさえすればよい、と言ったものではなく、そげ落ちたような女の尻は、彼の極度に軽蔑するところで、見ようとさえせなかった。

その日、日中の暑気を払う涼風が軒下の風鈴に軽い響を立てていた宵のことだったが、初診を乞う若い女があった。

皮膚の色は、少し黒味勝ちだが、柔いきめの細やかな光沢があつて、ちよつと魅せられる甘い乳の臭いが匂っていた。

容貌は十人並であつたが、眼が、ちかちかと可愛げに煌めいて見えるのが印象的で、し

きりと、腰痛を訴えて鍼を求めた。

担当には宗像がなつて、早速治療ベッドの上に女を招いた。女は躊躇うこともなく、ピンク色のワンピースをすらりと脱いで、宗像に言われる通り俯向きにベッドの上に寝た。

宗像が、何気なく女の臀部を見た刹那、はッとする驚愕と歓喜が潮のように彼の胸を苦ししい程に浸したのである。それは、実に見事なものであつた。豊に盛り上った両半丘のなだらかな曲線に、宗像はしばらくは、病状を問うことも忘れて妖しくひきつけられてしまった。

彼が多年求めて与えられず、絶望視していた憧れのものが、忽然として今、眼前に絶品の麗容を現わしたのである。

間もなく我に還ると宗像は騒ぐ胸を抑えてひと通りの病状を問い、腰部の痛点を検診したが、腰痛は感冒によって誘発された軽度のもので、恐らくは放つて置いても自然治癒するほどのものであつたが、彼は決して正直にそれを告げなかった。

「この神経痛は性質が悪いですよ、余程根本的に治療しておかないと再発しますね、いったんは治ったように思つても鍼を続けておかないといけませんよ。」

と惘惘的に説明すると、女はちよつと驚いた顔つきで

「あらどうしましょう。再発だなんて厭ですわ、幾日でも通いますから、根本的に治して頂戴」

と、半ば哀願的に宗像の言葉を少しも疑つた風もなく答えた。宗像はそこでちよつと壮重なひびきをもたせで口吻で「よろしい、だが完全に治すためには、少し痛い目を覚悟せねばなりませんよ」

と諭すように言ふと女はこくりと微笑で肯いた。宗像はその時自分で言つた、「痛い目を覚悟せねばなりませんよ」という言葉に、自身が愚れたような、唐突にあるサド的な感情が暴風のように心を掠めた。

（この女を責め苛んでやろう）というわくわくしたような不思議な愉しみに思わず舌なめずりをしたのである。

それから宗像が施術した鍼は、古法でいう置鍼術で、太い二番鍼を、腰椎両傍に並列して八本、それに太腿外側と後側に左右十本、神経を捉えて刺通したまま麻痺するまでそのままにしておくのである。



銀鍼が妙に静な様子で、女の波立つ筋肉のうちに深く埋ったまま、立っていた、女はきつと唇を噛んで、じーんとひびく神経の痛みを耐えている風だった。

宗像は平然さを装って、打ち終った手を休めて、女の様子を打ち眺めていた。他の四つ

の寝台では、電氣をかけてもらっている者や、背椎に指圧を受けている者や、鍼をしてもらっている者などがあって誰も特に宗像の方に注視しているものはなかったが、それでも宗像は怪しまれまいとする自己防衛的なものに、絶えず強迫されているようだった。

女は、初めての神経が鍼で刺された電撃のショックに目も眩む思いで、しかもその痛みはちんちんと続いて、少しも緩まなかったもので、しまいいは身をもたえようとしたが

「動くも鍼が折れますから静に……」と完像に言われて、今は絶対絶命な痛みを声あげて泣き出しそうになった時である、不思議と苦痛な心の一角が崩れてきたのだ。

何と言うこれは矛盾する心であろうか、ずきずきとする喜びが苦痛な感じを押しのけて俄にこみ上げてきたのだ。女はその喜びの情が常のものでないことを知って慌てたが、奇妙な生理の変化は、止ることのない狂暴さで容赦もなく女を深い淵へ引きずり込んでしまった。

「先生」

と女は、ひそと呼んだ。宗像はすでに女の秘密を知ったのだろうか。二人の眼がすべてを理解して絡み合った。

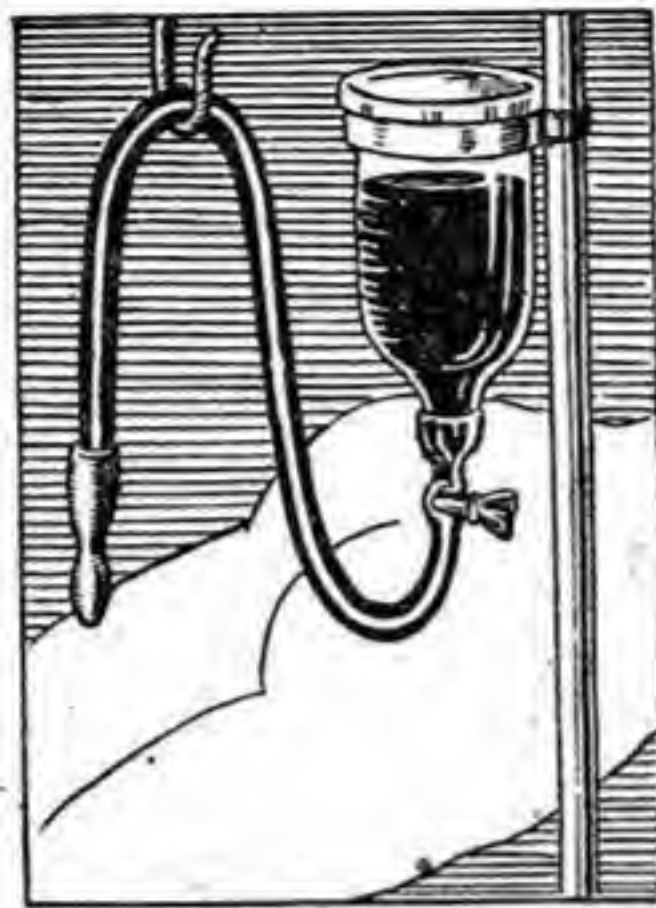
◇◇◇◇◇

この話は、のちにたまたま宗像夫婦から聞

かされたことで、現に二人は幸福な夫婦生活にあるらしいが、それは鍼の責めとは無関係だから詮索は措くとして、鍼にしても指圧にしても、神経を刺したり圧迫したりすることによる痛覚は、日本人の最も悦ぶもので、そ

こに「責め」が治療というノーマルな衣をひっかけて、ひそかに存在しているという事実を指摘すれば、本文の目的とするところは終ったのである。

浣腸通信に寄せて



羽村京子

読者の皆様、すっかり御無沙汰してしまいました。妊娠、出産という思いがけない事情のために、長い間殆んど何も書けませんでした。が、子供が生れてからもう三ヶ月近くなり

現れでしょう。後者のものについていえば、それは、切腹願望とは少しちがった形をとってあらわれています。私の腹を縦に真一文字に割かれ、臓腑を出して料理され、或い

ます。子供が出来ても、私の倒錯した性癖は一向改まりそうもなく私たちは一応このような奇妙な生活、私たちなりに割り切っているつもりなので、業の深さ(?)に今更のように驚くばかりです。

私の古い告白をお読みになった方は、私の性癖が、いかなるものかについて、よく御存知のことと思います。そうです。肛門に対する激しい執着、そしてもう一つは腹を割って腹わたをひきずり出される事への幻想、欲望なのです。

私はマゾヒストです。これらの性癖は、二つとも私のマゾヒズムの

は、臓腑をひろげて解剖されたいという願望です。その場合、弄られる臓腑、殊にひっきりまわされてぶちまけられた長く、みにくい腸の管の幻想が私を夢中にするのです。その他の臓器、殊に腹部臓器も私は好みます。腸の上に、つながっている、どろ／＼になった食物を容れた胃袋、その横のグロテスクな形をした肝臓、下の方では、透明な液体を容れてぶく／＼と膨らんだ膀胱、そして最後に女メスとしての誇りと汚辱とをこめた卵巣、子宮、膣、これらの器官は、人間が動物であることを証明し特に最後の器管は、その正常な機能を営むことによって、殊更に動物としての刻印を女性の上にきざみつけるのです。かくて女は子を孕みます。大きく膨れ上った子宮、腹をつき出した妊婦の姿、その不恰好な歩きぶりのすべてが、犬や猫と変らない動物の生理の法則を、女メスとしての私たちにいやという程思い知らさせるのです。

肛門について語りましょう。カエル、ヘビやニワトリや、哺乳類でも「単乳類」と呼ばれる動物では、泌尿生殖器の開口と、消化器の開口とが一つになっています。それらの動物では、いわば肛門から脱糞するだけでなく、肛門から放尿し、肛門で生殖するので、私たち人間においても、これらの三つの機能は、お互いに隣接している器官に依って、営まれ、その開口は一応別々になっているとはいえ、極めて接近しています。ここから或る種の人々においては、それら相互の混同、それらの混用が行われます。ソドム族がそうです。それらの人たちは、自分たちの性慾の遂行に当って肛門を愛用するのです。医療上の手段に過ぎなかった浣腸が、性的な快感につながり、ある種の人々によって愛用されているのも、こうした事情によることと思われま

す。浣腸についての私の好みも、多少特異な点があるように思います。第一に、私は注入される液体が非常に多量でなければ満足しません。第二に、そうして多量に注入して膨満した腹と、ソーセイジのように膨れ上がった腸の感覚を私は好むことです。私は液体でなくともよいので、空気を送入することがありますが、この場合もお腹がボールのように、カチカチになるまで膨らまないと気が済まないのです。断っておきますが、空気を入れると、どうしたわけかお腹が、相当痛くなりま

それを写真にとって「奇ク」誌上にでも発表してもらったら、などと空想しています。

す。液体の場合も、排泄を促進する薬剤ではなしに、ただのぬるま湯を用います。その方が刺激がなくてたくさんに入るからです。また大腸壁は、吸収力が強いので液状の食物を肛門からとる事も出来ますが、その場合、少量のアルコール分を入れると吸収がよくなります。勿論、お酒をのんだ時のように酔ってきます。このような私たちの目的のために、注射器の形をした浣腸器では間に合わないで、イリガートルという器具をつかいます。ガラスの容器の底から長いゴムの管をつけたもので、ガラス器を高く上げて浣腸するようになっています。また肛門が完全に上向きになっていれば（漏斗）じようごを直接肛門にさしこんで、ヤカンから湯を流しこむ方法もあります。但しこれは、イリガートルとちがって自分で自分に、浣腸することは出来ないでしょう。それから、これは実際に浣腸出来ないのですが、薬屋の店頭によく飾ってあるイチシク浣腸の大きな広告用模型を見ると、私は興奮をおさえることが出来ません。あれで浣腸の真似事でもしてみたら、そして

空気を入れる方法（空気浣腸とでも云いましょうか）では、ゴムマリの収縮する力を利用するもの、空気ポンプを用いるもの、管を口にあてて吹きこむ方法などがありますが、

私がこれまでにいろいろの機会に書いたものの中に、大よそ書きつくしたような気がいたします。ただ面白いのは、自分の肛門に一端をさしこんだ管（ゴムホースでも、この頃でたビニールのものでよい）の他の端を口にくわえても、かなりの程度まで自分で自分を膨らますことが出来ます。やってごらんになると分りますが、腹に力を入れないように即ち、主として口の中の（ほったの）筋力だけを使うようにして、吹きこむのが秘訣です。浣腸については、まだいろいろ書きたいこともあり、いつまで続けても果てしないのですが、今日はもうこの位でやめます。つまらないお話でした。でも「奇ク」に時々およせになっている浣腸に関する記事が、毎号たのしく読めることは、本当に嬉しいこととご

ざいます。今後も皆様方のいろいろなお話を聞かせて下さいますよう、浣腸愛好者としてお願いする次第です。



耳かきとガラスの棒

私の体験記

角 皓 子

これから皆様に申し上げようとしているこのお話は、告白といえますよりは、むしろ体験記とでも申した方が適當かも知れません。

私は終戦より此の方、それは色々苦しいことや辛いことを経験して参りましたが、これもその一つに数えられるものなのです。

昭和廿四年、皆様方も御存じのように、まだその頃の日本の姿と云えば本当に苦難の時代で、私達の生活もそれはみじめなものでございました。物価はうなぎ昇りに上り、私達の命の糧であるお米は遅配欠配で、明日の希

望もなく、毎日食糧の買出しに追われている有様でした。本当にそれは今思い出しても、ぞっとするような生活難、食糧難の時代でございました。

丁度その頃でございます。運の悪い時には仕方のないもので、その年の六月末に父が突然肺炎で倒れてしまったのです。

私達一家は、更にはげしい嵐の中に捲き込まれてしまいました。一家の柱である。父に倒れられてしまった、明日から私達の生活はどうなるのでしょうか？ 毎日の生活に追わ

れ追われて、蓄えとてありませんでした。戦前の裕富な暮に較べると戦後の私達の生活は本当にひどいものでした。一体どうしたらいいのだろうか。それにしても一番困ったのは、父の薬代でした。ペニシリンに二万円以上もかゝると、お医者様にそっと云われた時の母の暗く沈んだお顔、今でも私ははっきりを思い出すことが出来ます。

二万円といえば、ほんとに大金でした。それでも、父の生命にかゝわることでしたから、一刻も躊躇してはおられませんでした。

早速母が親戚中をかけずり廻り、どうにかそのお金を作り、その急場を切り抜けることが出来ましたが、その借金は一家にとって大変な重荷でした。

「ねえ、お母さま、私思いきってアルバイトをやってみようと思ってるの。ね、いゝでしょう。そりやまだお仕事の当てはないんだけど……。私思いきって何かやって見たいの」
「でもね……」

母は余り乗り気ではないようでしたけれども、時が時でしたから渋々許可して下さいました。

私はそう決まった翌日、早速K職業安定所に行きました。他に当てはありませんでしたし、それにこゝが一番早く、お仕事が見つかるということを聞いていたからでした。

しかし、中々いゝお仕事はありませんでした。

「現在、進駐軍のメイドなら、二名ほど欠員があるんですが……」

「……………」

「これなら仕事も楽ですし、女の方には適したい仕事だと思うんです」

「……それでは、よろしく願います」

私は暫く考えていましたが、メイドのお仕

事をすることに決めたのでした。

週給千七百円といえ、大体月に八千円位にはなる。私はそう胸算用していました。

私はそれから三ヶ月間、メイドとして臨時にアルバイトをすることになったのです、私にとって始めてのお仕事でした。

母も承諾して下さいました。私は一日から出勤しました。指定された勤務先は、省線T駅を降りて二十分程の処にありました。

そこは日本人の家屋とは別に柵で区切られ洋風建ての瀟洒な新しい家々が、整然と列べられたように建っていました。

受付に行くと、もうちやんと手筈が付けてあり、私は早速係員にレイモンド・ベネットセコンドリウテナント、日本流にいえば少尉の家に連れて行かれました。係員は流暢な英語で、ベネット夫妻とペラペラと何か話してそれから私を紹介しました。

私は始めて外人の前に立ったので、もう何か固くなり、それでもどうにか

「グッド・モーニング・サー」

とだけ云うと頭を下げました。

ベネット夫妻は、私を見ながらニコニコ笑っていましたが、私には好ましい人達のように思えるのでした。一番不自由な思いをした

のは言葉でしたが、それでも手真似、身振りで結構相手に通じました。

お仕事と云うのは、ベネット少尉のお宅で飲み物を運んだり、お皿を洗ったり、雑用を開けたりしてお食事のお手伝いをしたり、また御主人のシャツ、寝巻、シーツ、枕カバー、毛布や子供の物を洗濯したりすることでした。しかし奥様は決して、御自分の物を私に洗濯させませんでした。

主なお仕事と云えば、矢張りお洗濯でしたが、でもみんな洗濯機で洗うのですから本当に楽でした。私はまだ洗濯機を使ったことがありませんでしたので、毎日のお洗濯が面白くてなりません。私はもう何か一人で得意になっていたのです。

又、奥様が外出する時には、よく二人の子供のおもいをさせられました。言葉が分からないので、子供達に泣き出されたりすると、却って私の方が泣き出さなくなるのです。私は夢中で子供をあやすのでした。

それですからメイドと云っても、それは名前ばかりで実を申せば、ていのいゝ女中でした。しかし奥様が毎日、チョコレート、ガムを呉れたり、たまには靴下を買ってくれたりしましたし、始めてのお勤めにしては、本当

に恵まれた楽しい生活でした。

しかし厭なことが、一つだけありました。

それは身体検査のあることでした。身体検査といっても、それは只の検査ではなくて検診されるのでした。メイドは勿論、売春婦ではありません。しかしメイドと称して、そういう種類の女の人達が、まぎれ込むことがよくあるのでした。そして中にはその方がお金になるので、そういう生活に落ちていくメイドの方もあるとのことでした。

勿論こゝでは、そういう女の人達はオフ・リミットでした。ですからそういう行為をしていることが分れば、直ちにクビでした。進駐軍勤めといっても、ましてその家族の方たちと一緒に生活するのでしたから、その検査はとてもやかましく厳重なのです。

私達メイドは、いくつかの班に分れていましたが、私達の班は毎水曜日が、その検査日に当てられていました。ですから私は水曜日が一番厭でした。その日だけは、



家を出るのがおっくうでした。勿論このことだけは、お母さまにも誰にも黙っていました。私は始めのうちはそういう検査が、まして検診があるとは全々知りませんでしたので、それを聞いた時には、びっくりしました。よ

っぽどメイドを止めようか、と思った位でした。でも、父の注射代が欲しいばかりに、我慢しなければなりません。こゝへ出る前に、安定所で最初にそう云って呉れたら、此処へは来ないで他を探したものを――。私は後から後悔しましたが、もうどうにもなりません。私

「私は婦人科の診察を進んで受けます」

という書類にサインさせられました。そして小さなガラスの板を渡されるのです。それには33という番号が入っていました。

私達は番号順に並ばされ、先ず最初にズロース一枚の恰好で体重を計られるのです。それが済むと次の部屋に廻されます。その部屋の隅の方に、カーテンで囲ったコの字型の脱衣場があります。私達はこゝでズロースを脱ぐと、スリッパ一枚の姿で順番を待っているのです。カーテンで囲ってあると云ってもそれは型ばかりで、カーテンの下の方が開いているので、ズロースを脱ぐ恰好なんか、まる

見えなのです。

「33番の方、どうぞ」

そう看護婦に呼ばれると、私はもうどきっ
としてしまうのです。そこには医者が一名と
看護婦が三名います。私は看護婦にガラスの
板を渡すと、腰までの処で短く切れた、あの
妙な恰好をして両脚を乗せるようになってい
る検診台にのぼるのです。看護婦が遠慮なく
私のスリッパをお腹の当りまで、サッと素早
く捲りあげます。

あゝ、その時の恥しさ、とても口では云え
ないような、それは女でなければ分らない羞
恥でした。私はハンカチで顔をおううのでし
た。私はこの時程、女に生れたことを、怨ん
だことはありませんでした。

そしてピカピカ光った金属性の耳かきのよ
うなもので、採った液を先程のガラスの板に
付けられて検査をされるのです。只それだけ
の簡単なものでしたが、私達女にしてみれば
口にそうは云っても、本当にたまったもの
ではありませんでした。そうして病氣のある
人は、後日呼び出されるのです。しかし私は
全然そんな心配はありませんでした。それも
その筈です。異性のいの字にも触れたことは
ないので、病氣などあるわけがありません。

せんでした。

それが済むと今度は検便されるのです。丁
度赤痢が流行している時でしたし、それに私
達は食事のことにも携さわるので、蛔虫もひ
どく恐れられていました。

私が勤め始める半年程前までは、各自がそ
れぞれ便を持っていったのだそうですが、そ
んなことをして持ってきたのでは、まるで菌
をばらまいて歩いているようなものだといっ
て、軍の方からとめさせられ、それから直
接検査をされるようになったのだそうです。

検査というのは、寝台のようになった台の
上に四つんばいになり、丁度エンピツ位の太
さのガラスの棒で検査をされるのでした。そ
の時の恥しさといったら、何にたとえようも
ございません。

みんな恥しいので、ズロースを一寸ずり下
げると台の上に四つんばいになるのですが、
看護婦や若い男の医者ですと、わざと私達の
ズロースを膝のあたりまでずり下げ、しかも
ガラスの棒を、極めて乱暴に取り扱うので
す。

こゝの部屋は、オーテンも何も囲いをして
いないので、前の人の恰好がまる見えなので
す。私達はみんなの眼の前で、思い切り恥し

い思いをさせられるのでした。

只軍の命令というその一言だけで、こんな
恥しい思いをさせられるなんて、それでも私
達は何も云えませんでした。でもあれから日
本も独立したのですもの、もう今ではこうい
うことはきつとなくなっていることでしょ
う。

しかしこの検査を除けば、メイドの生活は
本当に愉しいものでした。ベネット夫妻も明
るくいい人達でしたし、それにあの暴れん坊
の子供達の印象的な顔も、忘れることは出来
ません。私は三ヶ月間のメイドのお勤めを、
つゝがなく終えたのでした。

ほんとに短い間でしたけれど、私にとって
は貴重な体験だったと思っています。

おしまいに、こうして得た私の尊いお給金
が、どれ位家計のお役に立ったかを付け加え
させて頂きまして、この私の拙い体験記を閉
じたいと思います。

七月三十日、角皓子さんの兄さんからの
便りによると、療養中だった皓子さんは七月
四日、二十三才の若さで逝去されたとの事
です。こゝに謹んで皓子さんの御冥福をお祈り
します。遺稿が相当あるそうですので、機会
を見て誌上に御紹介したいものです。

懸賞 告白と手記と体験 入選

人 生 の 虹 竹 谷 十 三



前 が き

私は、今迄、アブ小説は書いたが、告白ものは書かなかった。それには、数々の理由があるが、一つの理由として、現在私を愛して居るし、私の趣味に大きな理解者である妻に対して、先妻の思い出話を読まれる事が何か心苦しかったからだった。私は、今の妻を深く愛して居ると同時に、死んだ先妻も限らない愛情をもって思い出すのだ。さて、今日にな

って、何故告白文を書く気になったか、その変化は、何処から来たのかと言うと、今の妻に対する信頼感が強まった——と言うより、アブに対する理解が深まった事が、安心して告白文を書く気にさせたのかも知れない。
それに先妻が死んで、既に十三回の命日も近づいて来たからである。

(一)

私のサディステックな感情は、小学五、六年頃から、書物や写真によって培われて来た。俳人だった父は、こうしたものの蒐集家でもあった。だから、犯罪心理や性科学の本は書棚にギッシリと詰っていた。何気なく一冊を手にした少年の私は、直ちに、その虜となってしまう。父と母が別れて別居生活をする様になってからも、私は、そうした方面に興味を持って、何とか、そういう種類の本を手に入れ様と努力し出した。始めは、継子いじめの縁日本えんにっぽんから、裸体画、探偵本に至るまで、苦心して集めた。勿論、子供の力では、大し



たものは手に入らなかった。私の叔父で一名前を言えば誰でも知っている位有名なジャーナリストで戦犯者なのだが——あるS氏が、この方面の蒐集家で独逸語の本や浮世絵を沢山持っていて居た。中学四年の夏、S氏の宅で、こうしたものを盗み見した事から、私の知識はぐんと進歩した。今は、貧困のどん底生活をして居る私だが、子供の頃は、家庭が相当に豊かな生活をして居たので、中学生にしては、身分不相応の金を、この種の文献を集めるために使った。その頃、広い家には、母と私と年若い女中の三人暮しだった。外出好きの母は殆んど、家に居なかった。十八の私と十七の女中絹子との間に思春期にある者同志の関心が生ずるのは当然の事だった。しかし、二人共年が若く、肉体関係にまでは至らなかった。それでも、母が芝居等で夜遅く帰える日には、二人で一緒に風呂に入った事もあった。絹子は、田舎から出てきた娘に似合わない程、色白で、それに脚線の伸びた大柄なたっぷりした肉体を持って居た。しかし、二人の線香花火のような恋は一年程で、お互いの我儘から喧嘩別れとなってしまった。後で、解った事だが、私も絹子も、サディストだったので趣味の上でも夫婦になったら全く一致しなかったろうと思う。兎も角、絹子はそれを機会に家を出て行ってしまった。

私は、大学生になった。その間に、二度程失恋をした。私の思想は、大きく変化して日に／＼左翼化して行った。無産党盛んなりし頃の事だった。アナキストからコンムニニストへと私は変わって来た。

ある日の事、買物に行って、偶然デパートの売子になって

居る絹子と再会した。二人の恋は、再び、燃え上ろうとしたが、これも短かかった。と言うのが、絹子は私と結婚する考えて居たらしいが、私は、飽くまで革命家として身をたて様と決意して居たのだった。前よりも垢ぬけして都会娘らしくなって居る絹子だったが、思想的には、ハーちゃん、ミイちゃん、の域を出ず、徹底的な小ブル精神の女だったので、私は、彼女と結婚する気になれなかったのだ。

そうして居る間に、私は、次第に「赤」の運動に深入りして行った。学生運動から労働運動へ。そして、ある町工場で女工三十人程を使っている処のストライキのオルガナイザーに私が選ばれて行く事になった。

忘れもしない一九三一年の九月のドジャブリの日だった。ストライキに負け、首を切られた五人の女工の身の振り方を相談した後で、私は、山口操と言う女工と連れ立って、その会合の場所を出た。

小柄で年も若い、一番しっかり者のこの山口と言う女工に、私は前から何となく魅かれるものがあった。

雨は、横なぐりに吹きつけて居た。レインコートを着た私はよいが、山口操はアメリカンスの着物の下半身は、グッジョリと濡れて脛にまといいていた。

「兎も角、歩きながらでは、話が出来ないから、こゝに入りましょう」と、私は、人影もない汚いミルクホールに入った。

「君は、これから、どうする？」

私は、眼鏡の曇りをレインコートの袖で拭き乍ら言った。

「どうするって？ 何の事？」



操は、不思議そうに私の顔を見て言った。

「つまり、今後も、こうした運動を続けて行くかって事さ」

私は、五銭のコーヒーを口の前迄持っていったまゝじっと

操を見た。キチツと合った着物の胸は、ふっくらとしていて

その下に大きな乳房が隠されて居る様に思えた。

「勿論、やるわ。妾、殺されたって革命はやるわ。それとも

あんたはやめるってでも言うの？」

と、句調は男の様な物言いだったが、操の声は甘ったるく

可愛らしい優しさで、私の耳に快く響いた。

「有難とう、僕は、きつと君がそう言うと思ったのだけど……

……オヤッ！ その君の腕どうしたの？」

私は、テーブルの上に乗せられた操の二の腕に、紫色のあ

ざのあるのを見て言った。袖口まで濡れた操は、袖をまくり

上げて居た。

「あゝ、これ？ 母さんに抓られたのよ。こんなの何でもな

い」

そう言って彼女は、ニツと淋しく笑い、濡れた袖をのぼし

て、腕をかくした。

「痛いだろう？」

「痛くなんかないわよ。私、毎晩の様に母さんと父さんにい

じめられるんだもの、平気なの」

「君のお母さんは、継母なのかい？」

「母さんは、本当の母さんよ。でも、すごいヒステリーなの

父さんは、継父よ。二人で何かと言うと、私を裸にして責め

るのよ。」

強情でしっかり者の山口の裏面には、そんな生活があった

のか、彼女の瞳には、涙がキラリと光った。

こんな事があってから、二人の間に、急速に親しくなっ

て行った。私は、運動の上で、彼女をレポーターに使うだけで

なく、次第々々に深く愛する様になった。彼女は献身的に運

動のため働いたし、私の命令なら、どんなことでもやった。

私は、仕事以外でも閑さえあれば彼女に逢いたいという念に

かられた。

五ヶ月は過ぎた。翌年の二月のある日。

私と彼女とは、珍らしく安小料理屋の二階で逢った。

「どうしても、父も母も、私に運動を止めさせて、その男と

結婚しろって言うの。同志！ 見て頂戴！ 昨日も、こんな

に責められたのよ！」

そう言うのと、大胆にも、操は、片肌を脱いで、私の前にむ

っくりと盛り上った乳房を見せた。娘にしては、乳暈が黒々

として居たが、張りのある立派な乳房の上には、紫色の細引

の喰入った跡があり、肩にかけて、点々と褐色の小さな跡が

あるのだ。

「これ、火のついたお線香の跡よ。背中中、もっとひどいと

思うの……」

そう言った時、料理屋の女中が来る足音がしたので、彼女

は急いで着物の前を直した。

「解った！ 今夜から、家を出ろ！ そしてカフェーで助け

ばい。少しの金なら、僕もある。……だが……今夜、泊る

所はあるかな。僕の家は、母と女中が居るし、アシトに使う





のはまずい！」

「大丈夫、今夜は、女工時代のお友達の家泊るわ。嬉しいわ。家出したいと前から思ってた。やっと許可して下さい……」

操は、本当に嬉しそうに、明るい顔になった。そして、私は、その夜、始めて、自分の恋心を打ち明けたのだった。

「そうお。私も。でも、私、とてもあんなの奥さんになれるなんて考えた事は、一度もないのよ。結婚して呉れると言う気持だけで嬉しいわ。」と、おどけた調子で言って、「ハラ

ショー」とロシア語で叫んだ。操は、小学校しか出なかったが、この六ヶ月で、知的にも素晴らしい進歩をしたのだ。

彼女が、家を出て、カフェーに住み込んでから、二ヶ月程した四月のある夜の事だ。突然、数名の警官に私の家は襲われ、私は逮捕されてしまった。処が、用心をしていたので何一つ証拠となるものもなく、同時に家の方で有力者に手を廻した事もあって、一週間程の豚箱生活で帰えされた。取調に当った特高を知って居た事にもよるだろうし、転向を認めた事にもよるだろうが、どうして、あんな軽い取調べだけで出られたか、今でも不思議に思っている。兎も角、私は許されて出て来た。然し暫くすると、私はひもつきで警察から出された事が解った。そこで、当分は、昔の同志にも会う事は出来なかった。その時、先ず私の差し当りのする事は操との結婚を母を始め、親類の者に認めさせる事だった。「赤さえやめれば」と言う条件で、これを認めさせて、公式に操の家にかげ合ひ出した。丁度、その頃、私と同時に逮捕されていた操は警察から帰えされて来たのだ。操の両親は、赤い娘等、一日も家に置きたくなかったらしく、私はその日の間に、公認の駆落ちをする事にした。兎も角、二人共に東京に置いては、再び、悪い事を始めるだろうと言う両方の親や親類の言葉を巧みに利用して、私達はこゝで結



婚する機会を逃がしたら再び廻って来ない思ったので、親達の希望を入れて、田舎の叔父の監視付ではあるが、湘南の淋しい漁村の叔父の家の離れに同棲生活を始める事になった。夏なら、このM村も避暑客で賑うのだが四月とあっては、土地の者だけだった。叔父に連れられ、海に見える離れに、二人切りになった時は、私も操も、運命の急転に、感慨無量で、黙って顔を見合わせるだけだった。

(二)

二人はその夜、風 vari な新婚の一夜を送った。操は、警察で可成り激しい拷問を受けて来たらしく、体中がむくんで居るばかりでなく、傷だらけだった。

「私は、こんなに頑張って居たのに。あんたも捕っちゃったのねえ……」

操は、白いシーツの上に横になり天井を見ながら囁くのだった。

「うん、操！ 済まない。でも、他の同志達の事は、少しも解らないのだ。僕達だけがボツ落すれば、それで済むのだ。」

「あんたは、もう、運動を続けない考えね」

「いゝや、そうじゃない。だが、今は、同志達と連絡をしたら、運動を打ちこわす様な事になる。それに……僕は、どうしても、操！ 君と一緒にいたかったのだ。解って呉れるね……」

「……………」
操は、返事はしなかったが、ニツと淋しそうに笑った。

「私、警察の奴が、煙草の火で、お乳を焼いた時、あんたの事を考えて居たの。私は、拷問には慢性になってるから。でも、髪の手で吊り下げられた時は苦しかったわ……」

「済まない！ 操！」

「いゝのよ。私、本当は主義も主義だけど、あんたの奥さんになりたかったの。と、言うより、あんたの女奴隷でもいいから。一緒に住みたかったの」

田舎の叔父の一家は、私達二人を好き勝手にさせて置いて呉れた。私は、大学を卒業の年だったから、論文を書くだけで、一学期中学校にも出ず、昼間は海岸を散歩したり、夜は論文を書き、二人で思い出話をしたりして日を過ごした。操の休も、思ったより早く元気になり、夏休みには、妹達も遊びに来て、もう一人前の若奥様らしく次第に落ち付いて来た。夏休みの終りと共に、私は操を連れ、自分の家に帰った。

操は、母を始め、家の者と想像以上に折り合いもよく、平凡な若妻として昼間は甲斐甲斐しく立ち回った。夜の生活は、他の家族は、何一っ知らなかったが、私は毎晩の様に操を責め苦しめて居た。勿論、これは、私の望みであると同時に、操の希望でもあった。

私は、その後、同志との連絡を結び、再び運動を始め様としたのだが、十月の大検挙と共に、すべての同志が捕えられ手も足も出ない状態になって居た。翌年、大学を出て勤め人になると共に、益々、連絡の手がなくなり、ズル／＼ベッタリのまゝ運動から離れて行った。運動から離れた私は、酒を飲み、又、前の様に文献の蒐集を始めると共に操に対して



必要以上に乱暴な夫になり果てゝいた。

長女が生れた頃から、私は操を激しい責めの生活に追い込んで行つた。昼間は、姑や小姑に気兼ねしながら生活する操に次々と無理な仕置を私は考え出して命令したものだつた。

夜遅く酒に酔つて帰つて来た私は、毎晩の様に操を素裸にして責める事が、当時の唯一の私の楽しみになっていた。離れに赤ん坊と三人で寝て居たのだが、鞭等は音がするので使うことが出来なかつた。操はどんなに苦しくても、低声で呻めく程度で、決して大きな声や泣き叫ぶ事はしなかつた。警察官が彼女の肌にした様な煙草の火や母親がした線香の火等

昭和九年九月十五日に撮影したもの
操が長女を生んで一年目、健康だつた頃



は、手軽な方で、もっと惨忍な事をした。

長女が生れて一年程すると、再び、彼女は妊娠したが、二人共、どうしても子供がほしくなかつたので、何とか流産させ様と益々、激しい責め方を始めた。

毎晩、私は、操の腹部に熱い湯タンポを乗せたり、又、冬の事だったので氷を庭から取つて来て、下腹の上に乗せたりもした。又、海老責の縛り方で、明け方まで放つて置いたりもした。操は、間もなく流産した。目的は達したけれどその後もいろ／＼な拷問は、次々と二人で工夫しては変つた責め方を行つた。

縁日等に二人で散歩に出た時に、犬の鎖や革の紐なんかを秘かに買い集めて来る楽しみは、他の人には全く解らないと思う。

結婚して三年目の頃から、操の健康が次第に弱つてきたので、ある日、医者に見せると、結核の第三期だから、直ちにサナトリウムに入院しなければと宣告された。驚いた私は、その日の中に操を海岸のサナトリウムに入院させた。そんなわけで二人の夜の秘密も、これで当分お別れになった。

愛妻と別れての私は、全くだらしない人間になり果てて、人生が卵の殻の様に思え、酒ばかり飲んで暮して居た。

丁度その時、三度、私の前に絹子が現れた。絹子はおでんやの女将になっていた。勿論、亭主もあつたが例によって若々しく装つて、脂の乗り切つた年増女の



手管で私を誘惑し始めた。

私は、この時、始めて、彼女と肉体的交渉を持った。私は操を深く愛して居たので彼女の誘惑に負けた事に対し漸愧に堪えない気持ちになるのだった。彼女の前に出ると再び、誤りを犯す事になってしまうのだった。

絹子の脂切った肉体は、私には、どうしても愛する気持ちになれないのに、強引な誘惑に圧倒されてしまうのだった。絹子の乳房は、脂切って大きいのに、操の様に締りがなく、乳首も落ち込んで、何処にあるか解らない様な乳房で、操と比べて全く魅力がない、胴も太く、スタイルも素晴らしいとはお世辞にも言えないのに、唯一の武器である色白さと、強引な技巧で私を離すまいとして居るのだ。

私は、遂に決心して、三回程の交渉で断然、絹子と離れる事を誓い、総てを操に告白した。

サナトリウムの白いベットの上で、心持、肥って元気になった操は淋しく笑って言った。

「いゝじやないの。どんな女の人と関係してもいゝわよ。唯本当に愛して居るのは私だけと決めて呉れゝば。私、その人にいじめられたいわ」

「莫迦！ 又病気が始まった！」

「ホホホ……それだけ、私が元気になったのよ。私、先生が気胸の針を刺すとあんたの事を思い出すのよ。今度、元気になったら、針責めをして呉れない……」

操は、例のニツと笑った顔で、子供の様な素早さで、私に接吻を求めるのだった。

(三)

幸な事に、操は、再び元気になって退院出来るようになった。しかし、東京の空気は悪いし、子供も小さいので伝染の事も考え、避暑地Kに小さな家を借りて、操を婆やと一緒に住まわせた。Kは、東京から電車で一時間程度なので一週間の多くは、操と一緒に生活する事が出来た。

元気になるにつれ、二人の病氣は再び始まり出した。特に今度は絹子と言う女が介在して居るから事だった。

絹子呼んで呉れ——と言うのは操の願いだ。絹子が遊びに来る様になって、始めの一、二回は、他人行儀だったが、次第に二人の趣味を知るにつれ絹子は、大胆になって来た。

ある晩の事だった。酔っぱらって遅くなった私と絹子はKの家に帰って来た。その晩、特に絹子は、操を憎んで居た。電車の中で大声で、

「あんな女さえ居なければ、私は、坊ちゃん——私の事をその時でも絹子と呼んでいた。——のお嫁さんになれなくても、愛人で居られるのに。第一、私が身を引いたのは、あんな女工上りの女をお嫁さんに迎えるためじやないのよ……」と私にからんで来た。私は、彼女の身勝手な言分には飽き飽きして居た。

さて、Kの家について、操が出迎え、例によってビールで飲み直しが始まった。私は独りで飲む時は操を裸にして給仕させるのが習慣だったが、その晩絹子が居るのに、操は、ど





最もマゾの激しかった頃
サナトリウム退院の日

んく着物を脱ぎ裸になって給仕を始めるのだ。

「フン、何だい。やせぼちの体の癖に。肺病やみ！」と絹子は憎々しげに操の裸を見て言った。小柄ではあるが、胴がキリ／＼と締り大きな乳房、スナナリとした足、それにサナトリウムに居たので、全体に肉付きもよくなって、若さにビチビチとして居た。これが肺病の体とは思えなかった。

「お絹さんは、何を怒っているの。私が憎らしいのでしようどうぞ、思い切り責めて下さらない。」と操は、目を輝やかして言うのだ。

「よく言ったわね。よし、男がいじめるのと違って女がいじめるのは、どんなものか目にも物を見せてやるわ」

そう言う絹子は

立ち上って、力一杯、操の頬を打った。私は黙って見て居た。絹子は、

操を押さえつける

と私に紐を取れと

命じた。私は、戸

棚から、愛用の鎖

や細引を出して絹

子と一緒に操を後

手に縛り上げた。

「へえー、こんな

事をされるのが好

きだなんて、大変な変態女よ。」

絹子は、呆れた顔で私を見た。

「僕達、夫婦がどんなに愛し合ってるか、君に解って貰えるだろう。操は、僕のためなら大切なお乳もいらぬのだ。だが、君は、そうじゃない。僕と君とは、昔から、単なる友達なのだ。解ったろう……」

私は、絹子の顔を見てハツキリと言った。だが、絹子は、首を横に振った。

「まだ、私は負けるもんか。よし、本当に、奥さんは、坊ちゃんのためお乳を捧げる気があるか、ためしてやるわ」

そう言って、絹子は、縛られて坐ってる操の前に来て、力

一杯、片方の乳房を掴んで曳いた。

「どう、私は、このお乳を曳き裂いてやるけど。それでもい

いの……」

「え……どうぞ……」

操は、一寸痛さに顔をしかめたが、静かに答えた。

「これでも、平気なの……」

絹子は、操の乳房を掴んで引き倒した。

「……」操は目を閉じて黙って居た。絹子は足で踏んだ

り、爪を立て掻いたりした。

「よし、こうしてやる。」と言って絹子は、再び操を坐らせ

ると、自分で膝の上に乗し顔を持って行ったと思うと、ガブ

リと乳房に噛みついた。

「アツ……ウ……ウ……」

操の顔には、苦悶と共に楽しそうな表情が現われた。





「フー」と大きな息をして絹子は、顔を離すと、操の小麦色の乳房のふくらみには、菌型がくっきりと残り、一つから血が流れ出て居た。人一倍黒々とした褐色の乳暈からも血が流れて居るのだ。

「噛切ってやろうと思ったけど、可哀そうだからやめた」と絹子は怒った様に言った。

「いゝよ、噛切っても……」と私は、興奮した気持で答えた。

「やな事だ。第一、大きくて口一杯になるから駄目よ。それより、乳首、切り取ってやろうかな……」

絹子は、次第に拷問の楽しさを覚えて来たらしい。

「切り取るのは、何時でも出来るさ。それより、じわ〜と責めてみるよ……こう言う道具があるんだ……」

そう言って、私は、戸棚から、彼女の愛用の乳房を締め上げる鼠取りのバネを工夫した乳房挟みを出して、操の乳房に掛けた。

「呆れたものね」

先刻まで私と操の間を嫉いて怒ってた絹子も、次第に冷静になって来た。間もなく、終電車で絹子は帰って行った。その後も私達二人は夜の更けるのも忘れていろ／＼の責め方を実験した。二人は、本当に幸福だとしみじみと思ったのだ。

こんな事があってから、絹子は、時々やって来ては操を責める事があった。時には私の留守に来て、勝手に泊って操を拷問に掛けたりするらしかったが、操は私に何も言わなかった。

再び、操の体は、生傷だらけになって来た。ある晩の事だ。仕事が忙しくてKの家に四、五日行かなかった。ので、操に会いたくて飛ぶ思いで駆けつけると、驚ろいた事には、出迎えに出たのは絹子なので、ギョツとした。

「ホホホ……且那様の御入来ね。私は、昨日から来て居るのよ。さあ／＼優しい且那様、奥様がお待ちか



ねですよ。どうぞこちらへ！」

絹子は、私の手を取り、風呂場に案内した。風呂場に行く
と、アツと驚ろいた。真冬だと言うのに、水風呂に操は、つ
けられて居るのだった。

私は、彼女の蒼白な顔に手をやった。熱がある。ぐったり
した生気のない瞳。私は、急いで、妻を抱き起した。両手を
固く後手に縛られ、両の腿は針金が肉に喰入る程に締め上げ
られて居た。

「駄目じゃないか、莫迦！ お前も、お前じゃないか」

私は、操を叱りつけて床の上に横にさせた。

その晩、操は、九度以上も熱が出た。医者を呼ぼうと考え
たが、体中に生傷があるので、医者は呼べなかった。婆やは
国へ帰って居なかった。絹子はニヤ／＼して笑って居るだけ
だ。

「御本人のお望みなのだから、いゝじゃないの。私にもっと
責めて／＼と頼むんだから仕方がないわよ！」

私は、アスピリンを飲ませ水枕をつけて夜通し看護した。

私は、絹子に、何度帰れと言っても、絹子は平然として腰を
上げそうにもなかった。

医者に見せねばと思うのだが、乳房に残る紫色の傷跡、そ
れに、昨日出来たらしい太腿の傷、その他、針を刺した跡が
あっては、刑事上の問題になる事を恐れ、操も、苦しい息の
下で、「どうか医者を呼ばないで」と頼むのだった。

一週間過ぎ、二週間過ぎても、操の熱は七度八分より下ら
なかった。殆んど傷跡が消えてから、医者を呼んだが、やは

り胸の病気が再発したのだ。しかも前より悪化して居た。

私は、絹子と完全に手を切った。そして、一心に操を看病
したが、運命は、再び幸福を与えては呉れなかった。翌年の
春、操は、遂に死んでしまった。私は、愛妻を失いこの世に
何の希望もなく呆然として居る時、召集令状が来た。

戦争は人生をゆがめた。総ゆるものの幸福を奪って行った。
私の生活も、ぐっと変った。私は新しい妻を迎えた。過去の
すべては、戦火と共に失なわれた事がある意味で喜んで居る。
新しい妻は、次第に、私の趣味に理解を持ち、よき人生の友と
なって呉れた。だが、過去の様な事は出来ない。第一、経済的
にも激変してしまった。今では、唯、私の空想として、思い
出として頭に残るだけである。戦後、御誌の様な素晴らしい
本も出たし、自由にもなった。昔は本当にそうした事は夢だ
った。一枚の裸の写真をとる自由さえなかった。その中で集
めた文献も道具も、総ては灰となった事を残念に思う。再び
こうした自由が弾圧される心配が出て来た今日、私達は、何
としても、人間性の自由を守り通したいと切に考えて居る。

(追記)

操の写真は、殆んど焼いてしまいました。こゝにある
二枚も、大して感心したものではありませんが、この告
白文に何か印象的なものを与える事が出来ればと思って
同封します。裸体の写真もあったのですが焼いてしま
いました。



草双紙に見る女腹切 (2)

川合伊都子

忠孝義理詰物

話の発端は丹波の国守豊浦判官種之が、飛弾の国守藤原尹次と足利家に対して謀叛を企てたことから始まります。

そも／＼種之が謀叛に加担したのは通陽門院の女官十六夜を御所から奪い出すときに尹次に発見され強制的に血判させられたので、義持將軍からの兵を差向けられるに及んで、種之は一森嘉門次に防ぎ矢させて切腹して果てます。

その最後の場へ駆けつけた楠原浦辺之助に十六夜の産んだ女兒を乳人いばらに預けてあるゆえ、その兒の成長したとき家の宝山鳥の名鑑と系図の一巻を証契に家の再興を計るよ

うに遺言します。

それから十六年後、種之の伯父でありながら豊浦家を横領しようと奸計を廻らしていた雲川曾根九郎は、神崎へ

出て町人となり、山崎屋与次兵衛と名

を改め、妾腹の子与五郎と算盤を手にする生活をしていました。この与五郎が血道を上げ

て通った神崎の廊の吾妻という遊女が、曾根

九郎の昔戀のかなわぬ遺恨から手にかけた嘉

門次の妻小桜が生んだ娘で、その時曾根九郎

の取落した山鳥の明鏡は娘を拾い上げた百姓

塵平の手にあったのです。

与次兵衛の女房お駒は、実は豊浦判官の落胤を育てた乳人いばらで、判官の息女をお陸



と名づけ、実子の飛古助の妹として、主家の没落を幸いにそろ／＼年頃ゆえ遊女に売ろうと企みます。

遊女吾妻は両親の仇討をしたいと念願し、遇々南与平という侠客を敵と信じ込みますが、この与平こそ誰あろう御家の忠臣楠原浦辺之助で、総ての事情を調べ上げ、与次兵衛夫妻の悪事を暴露するので、与次兵衛は、吾妻が「親の敵」と与平に切り付ける刃を奪い「何を隠そう敵はこの与次兵衛」と切腹して

しまいます。そこへ吾妻に横恋慕した飛古助が現われ、いきなり吾妻を引立てようとする
と片蔭から一刀の下に飛古助を刺し殺して血
刀を提げたまゝお駒が現われます。

皆々これほど驚くのを尻目に、お駒は飛古助の死骸に腰をかけ、血刀逆手に己れの腹へぐさと突立てます。

「判官公の姫君、お家の系図、楠原どのお受取り遊ばせ」

と口に呟いた一巻をお陸の手に持たせ、苦しい息をほっとついて悪事の一ふしじゆうを

物語り、

「与次兵衛どのゝざんげを聞き、所詮眞人間にはなれぬ我が子を殺して申し訳」と刀を引廻して落入ります。

この草紙は文化十四年正月版種彦作、

柳川重信画くとあり、種本は近松の「寿門松」と作者自らそのはしがきに述べています。「義理詰物」と題したのは与次兵衛と塵平とが将棋を指しながら駒になぞらえて物語る条があり、例えば「な

にさ、あのお駒がイヤこの駒がなり込んで金をしてやる了見でもめったにそうは指させぬ」といった調子の台詞です。

仮名読八犬伝

犬の草紙

どちらも南総里見八犬伝であることは言うまでもありませんが、「仮名読八犬伝」は弘化五年版為永春水の鈔録、一勇齋国芳の画です。「犬のそうし」は柳亭種彦鈔、国綱画で文久二年に四十六編が出版されている処から初版は嘉永年間だ



犬の草紙の
伏姫切腹

ろうと思いますが缺本しているので不明です。この他に嘉永年間に「今様八犬伝」が出ている様ですけど、これは所蔵されていませんでした。

筋は誰方も御承知ですから、前記二種に載せられている伏姫切腹の画だけ書いて見ました。尚八犬伝にはもう一人犬村大角の妻雛衣の切腹があります。

犬村大角の父赤岩一角を食い殺して偽一角となり澄ました山猫が、犬飼現八に眼を射られ、その傷を癒すためにまたゝび丸の鞘を砕いてこれに胎児の生血を混ぜて服用しよう



犬の草紙の
伏姫切腹

いうので、懐胎した雛衣の胎児を需めます。

雛衣が腹を切ると傷口から礼の字の玉が飛び出して偽一角の胸に衝つてこれを倒します。現八が大角と力を合せて山猫を退治し雛衣を抱き起すと「思いのまゝに掻切つてみのわた(大腸)ほそわた(小腸)流れ出で目もあてられぬ有様」でした。

読み本の「八犬伝」では、伏姫は腰を浮かせて反り身になり膝頭で立って双手突き姿勢が画かれて居り、雛衣は草双紙と同じようなポーズが画かれています。

梅川物語

望月晴間之介輝影の老臣正直正太夫の娘袖萩が、父の兵学の内弟子になっている横島悪太郎の謀反を知り、父の留守に悪太郎を殺して自害しようとする。それを帰宅した正太夫が身儘な自殺はならぬと留めて主君にこの由を届けた結果、袖萩は切腹を仰せつけられます。その切腹の場を原文のまゝ記して見ますと、かくて程なく入り来るは、お家の忠臣福升牡丹之介見届け役として相役つれて座に



つけば(以下数行虫喰いのため不明)わるびれもせずしとやかに、切腹の座におし直れば、福升牡丹之介懷中より一札取り出し罪の次第を読み聞かせ切腹の由申し渡せば袖萩は両手をつき、言葉静かにお受けを申し常には人にかくしたる雪の肌を押し開けば、子持ちの乳のふっくりした胸から腹を撫で下ろし、前に据えたる三宝の紙に巻いたる九寸五分を逆手に取って検視に向かい、おん見とゞけ下さるべしとすでに腹へ突き立てんとしたるとき正太夫は声かけ

て、やれ待て娘、切腹には介錯の役目ある筈、介錯には何者が、と尋ねられて牡丹之介、介錯の役目は即ち牡丹之介、申しつけたる品これへ、はっと答えて持ち来るは思いがけざる姿見の鏡を前におし直せば、父娘は目と目不審顔、牡丹之介は立上り、鏡は即ち女の魂、その魂に曇りなき父娘が心を我君より照し給わる此の一品、見事に腹を切り給え、心得ましたと袖萩がすんでに腹へ突立てんとしたる所を牡丹之介鏡に映る袖萩が首をはしと切り落せば鏡は碎けて飛びちったり。これはと驚くところ一間のうちより主君晴間之介、介錯とくくと見届けたと

立出でます。この後袖萩は奥女中達の指南役に召出されますが、袖萩の弟忠之丞と奥女中梅川との色模様、ついで忠之丞が大小捨て、忠兵衛となるお定まりの合巻本らしい仕組になるのです。

この草紙の作者は山東京伝、画は柳川重信文化十年正月版ですが、本誌の女腹切八景の「散紅葉」にあった溝口与之女切腹の焼き直しで、鏡に映る首を切って本人を助けたのが趣向かも知れませんが、筋もおかしい処があって駄作だと思います。

女^メ闘^ト美^ミ考現

土俵四股平



蜜

昨年初夏、本誌に「闘相撲」なる拙稿を寄せたのを最後として、約一ケ年余、女斗美に関する原稿をしたゝめなかった。四股平がペンを握らなくても、レスリング日本の旗風に對してゝも、女レスリングにモチーフした創世が登場せねばウソだと思っていた。果せる

かな二三の雑誌に、女レスリングの転写々真があらわれ、それらをテーマとしたドキュメンタリー的な小説が掲載されたが、四股平の主張する女斗美の線にあわすと、思わぬところに間隙が出来ていた。茲に久々ペンを走らせ、かつて私へフアンレターを寄せて下さった各位に久瀾を謝すると共に、最近の読者諸氏に、秋波ならぬ四股の轟をつたえたいと思うのである。

そも／＼女斗美なるものは、と説き出せば、書く方もウルサクて、読まれる方もネムイことゝ存するので、旧友でない読者諸氏は、女斗美（メトミ）なる名称を形成する三ツの漢字からその大意を想像して貰いたいと思う。

本誌が草わけだったように思うが、こゝ二、三年は、責め黄金時代で、群小類似雑誌が、口絵に、内容に、責めのカオリをたゞよわせなくては、風俗雑誌ではないように思つて、下手な小包のように、ムザンにも裸の女体に縄目の恥辱か喜悅かを与えているが、四股平とてその数多いポーズやスケッチの中に、これは頂けると、食指を動かすものがないでもない、しかしその大半は、私個人としてはドウモ食欲を催さないシロモノである、といつても、ソレは下戸が酒飲上戸をケナスようなもので、お互に不愉快であり迷惑であるから、よその畠を荒す気はモウトウない、そんな気はないのであります。

「責め時代」の脚光を借りて、女斗美のそれを説くと、メトミは「相攻め」乃至「相責め」の美であるといえる。相攻めが白熱化すると自然に「相責め」に達するのである。「相攻め」の範囲では、苦悶の様相は大して見られないが、「相責め」となると、其処にサディズム傾向が濃厚にみられる。私並に私の同志が愛好し鑑賞する角度は、サディズム的な色彩を、絶対的な必要な基準色としていない。云い直せば、「女性の苦悶」を目標とし

て進んでいる道ではないのである。どこまでも美の探求であり、健康的な美でなければならぬのである。

女斗美を表現する女性には、不健康な女、肉体方面のみでなく、精神方面に於てもソコに重点がある。サディズムやマソヒズム傾向は、健康な人間にも若干はあるもので、もしそれ等まで変態よばわりすれば、全人類が変態者になってしまうように思う。〇〇淫乱症、××淫虐狂とか呼ばれる線を乗越すと仕末が悪いが、その線が東徑何度やらマコトにむつかしい問題となるのだ。症とか狂とかいうものは常態でないのであるが、世には芝居狂、相撲狂、発明狂、野球狂、何々狂とイロ／＼あるから、社会に害毒を流さぬものであれば、「狂」即ちマ

ニヤは精神病的に、精神病の偏執狂の域に入らない限度において許さるべきだと思ふ。

メトミは健康な若い女性で体力気力もほど伯仲する者同



志の「相攻め」から発する斗力美であって、私の愛弟子であり、メトミの理解等である矢筈順子は、女斗美を諷刺？して「女性の勇美」といっている、そこで師たる私は破顔一笑「それは素敵だ、ついでに女偏に男」を旁とした女偏は女力士即ち私の自己命名である「力女」（チカラメと読む）となる読である。

一口にメトミといっても、上は頭髪に発し

て、下は足の裏に至る広範囲に発生する肉體美であるから、メトミのピントをどこに合すかは、これを鑑賞する人の趣味と感覚によって大いに違ふのである。

メトミを表現する「力女」を、私はメトマーズなる愛称で呼んでいるが、その顔顔を目標として語っても数頁を要することである。かって本誌を飾ったメトマーズ北海千珠子は、その代表的な容貌をしていた。眉が美しく、睨がや／＼釣って、眼差が幾分鋭く、唇は肉感的な受口で血色が大変よかった、胴もズングリしていて、一見して力士風の貫祿を備えていた。四股名を「八重桜」と名乗らせたのも、そこに彼女の風貌を彷彿せしめるところがあつたからだ。現在私の手許にいる矢筈順子は、北海に比べると年も若く、身丈も三寸は低く力士風格は稀薄であるが、斗志は北海に劣らぬものを胸中深く、豊満な双房のもとに抱いているように見える。北海と違って生娘であって、すこぶる純情であるから、イザといった場合の斗志斗魂は、ルーズさがないだけに、生一本に燃えあがるのではあるまいかと思う。妬心も北海に比べて幾倍か鋭く、ために私をなやます率もヒドイ訳である。男女にかゝわらず、小柄な者ほど勝気で

あって、小柄な日本人が戦争に強く、かつては戦捷国となり、好戦国民と呼ばれたのもソコにあるようだ。私の経験からしても、大女に斗志の強い者は少く、たゞ固有的な肥満体に若干の自信をもたせて、ボリウムの他を圧倒しようとするだけで、小柄な相手が真剣にかゝれば、一も二もなく敗退するのがつねであった。その点に於て、矢筈順子の如く出雲民族の血統をひく娘は、智性の中に山咲のリンドウを見るような野性美があつて、末たのもしい限りである。八重桜のような豪華な色も香もないが、その四股名の「矢筈山」が示すように、その昔、小柄な勇将、源九郎判官義経がたずさえた弓矢のように、不倒不屈の面魂に、新人の面目が輝いているようだ。「メトミ考現」と題して筆をおこしたが、今回はそのプロログであつて、稿を重ねるにつれてその詳細を述べたいと思う。といつてもこの辺で筆を止めては、次号への御期待も如何と思うので、まずメトマーズの頭髮論をいくさき書き並べて、その責をふさぐことにしたい。

四股平は純粹の日本人だから、頭髮はヤハリ真黒をもって最上とする。また直毛を理想とするが、こうパーマが流行しては、パ

ーマを嫌厭すれば取材が困難となるう、ただ国技「相撲」の土俵上へ、パーマ登場はイヤだと思ふ、ヤハリ濡羽色の黒髪直毛に限る、鬘も相撲鬘、観音鬘がよく、座敷相撲「な」どなら日本鬘の島田や蝶々も悪くない、古典的な美は、どうしても封建時代の相撲道の形式に準じなくては味が出ない。したがつて女力士の肉体も、錦絵風の、太鼓腹の一見して「力士」と受取れる「梅ヶ谷」型がよい、現代なら「東富士」タイプであらう。この趣向はメトミとしても、重量感の誇張された、濃厚な靜的な相撲美を鑑賞するのを目的としての構成である。髪の生際など、日本髪にピタリと来る富士額の襟足の美しいのがぞまれる、私の主観からすると、海女の観音鬘に多大の魅力があるといふたいのである。

女レスリングともなれば、これはパーマに限る、鬘では一分とはもたないし怪我をする、生際など問題じやないが、刈上げの頭は御免ものだ、変にセットなどして欲しくない、烈しい動作に断髪が乱れ、サンバラ髪が波にゆられる海松のように、マツトの上をのた打つ様は、脂汗にぬれて項にまといつく凄美観と共に、メトミ鑑賞上見逃せに出来ない一景であらう。

メトミに於ては、頭髮の黒色と、股間の禪やパンツの黒色とが、上下に對峙して、桜色又は小麦色の肌を引締め、肉体が描くあらゆるポーズの、兩者の位置や優劣の度合を、明確に観取せしめるに役立つのである。これは色彩學的に、天然色のモード写真の腰部へ、あらゆる色調の色彩カードをあてゝ吟味すれば、黒色が如何にピタリと来るかが理解出来るのである。好色漢の空想では、赤系統に指を屈するであらうが、血の氣のある肉体に、赤の如き暖色系の色彩は、かえつてその美を損するものである。勿論外人の如く、金髪や紅毛の場合は、そして肉体が白人種のその名の如く、雪肌であればであるが、これとて暗色や濁色でなくてはダメである。何故かといへば、之は登場人物に重量感が必要だからだ。メトミはランニングではないのだ、輕快性よりも、ヤヤ鈍重感がのぞましいのだ、初切相撲のようなケレン氣味なモノや、地に足のつかないモノの鑑賞は御免なのである。真黒の直毛長髪といい、往昔の人々がオハグロを愛したことを考えても、我々純粹の日本人は、黒の紋服と共に、黒と白の對比感覚を愛する国民だといえると思う。(以下次号)

語物語 夢

松原虹児

「まあ、こんな所まで来てしま
たわ」

綾子は気付いて四圍を見廻した。
たった今別れて来たばかりの人の
ことを想い、近い将来の新しい生
活に楽しい計画を樹てながら、涼
風に誘われて、何時の間にか帰途
とは逆の道に足を運んでいたの
だ。つい目の先に倉庫の様な建物
が、無気味な程ヒッソリと立ちは
だかつて、人の気配すらない。夜
空には無数の星が、一面に美しく



く輝いている。

帰ろう—そう思って綾子が踵を返しかけた
時だった。建物のかげから、黒い影が飛び出
して来るなり、どんと突当った。男はヨロケ
ル綾子をチラッと見ただけで、タッタと二、
三歩駆け抜けて行きかけたが、すぐ立止まっ
て向き直るなり、手を伸して、胸に触れて来
た。本能的に身をすくめる綾子の耳元に激し
い息吹きがかかり「今夜十時、永代橋迄、頼
む」早口にそれだけのさゝやきが聞えると、
男はサッと身を翻して前の空地へ走り
出して行った。

それと殆ど同時に、バラバラッと又
二つの影が飛び出して来た、かと思



間に「ブスッ」鈍い音がして一人の手元に煙が立った。空地を走っていた男の長身が、よるめくとくずれる様に倒れた。……ほんの数える程の間のことである。

呆氣にとられて、立ちすくんでいる綾子の前に、その大男が立ちはだかり、まだ煙の消えていない消音拳銃を突きつけた。何国人かわからないが、艶迄茶色なのは日本人ではない。「私は……私は……」綾子は弁解しようとなつめたが、妙に咽喉がひきつった様で声が出なかった。少し間を置いてもう一つの影が帰って来て低い声で云った。「野郎持ッてませんぞ」「ナイ?」大男の目が夜目にもキラリと光るのが分った。「アナタ、今のここと見



た、しばらく帰す訳にゆきません」その大男は綾子を車の中へ押し込み目かくしをした。綾子の必死の弁解も、抵抗も、冷い銃口の前には役立たなかつた。

夜道を疾走する車の中で恐怖にふるえる綾子を、なめる様なまなざしで眺めていた男はそのふっくらした胸にハミ出ている紙片に気がついて、スツと抜きとった。何気なく手にとったらしいが、一見するなり、その目は異様に光り、憎悪の眼が射すように、綾子の白



い頬に注がれた。

どの位走ったか、連れ込まれた一室で目かくしを外されるなり大男の凄惨な形相が綾子の目にとび込んで来た。「ムスメさん、連絡場所を云いなさいッ」「私は通り掛っただけです」「ではこれはどうして、オマエが



持ってた? さっきの男の盗んで行った連絡書、通り掛っただけのオマエが持ってる筈ない。もう一枚、地図がある筈、……スパイ、……ウーム、……デンキチー外人は面倒と思ってか横に居る男に合図した。伝吉と呼ばれた男が無言で綾子のユカタの衿を掴んで、ぐっと引

下げた。真白い柔らかそうな、それでいてムツチリと張り切った丸い肩が、二の腕まで一気に入らわにされた。「アッ、何を」綾子は思わず叫んだ、「カンニンして、私、ホントに何も知らないんです。たださっきの人が十時に永代橋迄たのむって云ってました。それだけしか知りません私はあすこを歩いていただけなんです。」「十時に永代橋?」伝吉は一寸手を休めたが、「よし、それや、すぐ分らあ、この家の地図はどうした?十時といやあ余り時間がねえ、出せ、出さねえか、このアマ……」綾子がいくら知らないと言っても、二人は信用しそうになかった。遂に帯をとられ、ユカタを脱がされて



しまったが、二人の云う地図は出て来なかった。「チッ」舌打をして外人と何やら囁やいていた伝吉が「こっちへ来いッ」手荒に綾子を引立て、隣の部屋へ突き入れた。「マリさん、帰る迄、こいつを見張って、くん、スパイらしいんだ」

室の中は、贅沢な調度品ではあるが余り整理の届いていないらしい十畳敷程の洋室である。隅の方の姿見の前でワンピースを着た女が頭を解いて居た。二十二、三であろう。美しいがじろりと眺めた目に妙に剣がある。

女はジロリジロリと綾子の顔を



から足元まで観察していたが、やおら、一、二歩近づいた、綾子は先程とは変わった、云い様の無い気味悪さを感じ、思わず床をにじっていた。



「フーン、そんな可愛い顔をして、お前
メパイかい、どちらのイヌなんだよ、サツの
方かい？それともジュールの手下かい？」
「え、どっちなんだよ、どっちにしても、あ
たいの大事なジョニイの仕事の邪魔をするや
つなんだね。」
女はジリッジリッと寄ってくる。

女は小机の抽出
しから細引の束を
取り出した「アタイのジョニイはね、とって
も偉いんだよ、ヘン、はばかりながら、そこ
らの野郎が、いくらバタバタしても敵うもん
か、日本の警察なんかにつかまるジョニイだ
と思ってるのかい、仕事の邪魔しようたって

そうはいかないよ、お前だって、女のくせにイ
ヌの真似なんかしやがって、生意気だよ、一体
お前にどんな事が出来るんだよ」女は狂気の
様に、綾子をにらみ据えて罵りながら細引を
解いている。綾子は漠然と乍ら、自分がとん
でもない何か大きな事件の中に引込まれ誤解
されているのに気がついた。と同時に女の手
にある細引が何をする為のものかを察して、

云い知れぬ不安と恐怖が、音を
立て、身体中を駆けめぐる様に
感じた。「私は、私は……」何と
か弁明しようと焦るのだがどう
しても次の言葉が声にならな
かった。// どうしよう、あゝどう
しよう、お母さん、道夫さん、
救けて道夫さーん」心の中の声
が悲しい人に助けを求めて絶叫
する。「フン、お前は捕虜なん
だよ、アタイはその捕虜を逃さ
ない様にするのが今の仕事だ
よ。わかってるかい。」女は野獣が餌物を襲う
素早さで、綾子の首を背後から羽交絞めに
した。

綾子は無意識の内に、必至になって争っ
ていた。逃げなきあいけない。と云う意識



が、乙女の身に闘志を湧かせた。何も関係のない私が、何故こんな目に遇わなければならぬの、ただ通り合したというだけなのに、その話を聞こうともしないで、理不尽な、そんなことが争いの内に、チラッチラッと脳

裏をかすめる。恐怖が怒りに変った。満身の力を振って逃れようとした。息もつまる許りに首を締めつけている女の腕をようやく外して、床に倒れた途端、ビリッと音がして女の服が肩から腰のあたりまで一気に裂けた。

「畜生ッ、手加減してやったら、いゝ気になりやがって」女のまなじりがキリキリと吊り上った。服の裂目を両手に持つと勢いよく裾迄裂き切って、乳バンドとパンツ丈の裸身をむき出しにし、



怒りを全身に漲らして身構えた。小麦色をした肌が、上気と汗とでシットリ潤んでいる様である。柔軟な体軀を構えた姿は豹を連想させて、沃しい美しさを感じさせる。獲物を狙う目は綾子の全身に絡みつき、隙をうかがっている。

次の瞬間女は、咄嗟に蹴り上げた綾子の足を巧みに避けて、宙に足を跳ねたまゝの綾子の上に躍り掛った。「畜生ッ」女は掴んだ髪の毛を抜きとらん許りに引張る。偶然肩に担いだ恰好になった綾子の足を利用して、くの



字になった身体をぐいぐいと締めつけてくる綾子は思わず悲鳴をあげた。争そった、防いだ、出来る限りの抵抗は試みた。然し怒りにみちた女の激しい攻撃には遂に抗し切れなかった。組み敷かれて何時の間にか手首に掛っていた細引が首に廻され、引絞られたとき、綾子は死を感じた。苦しさと同時に怒りが又恐怖に逆戻りした。「か、



かんになんして……」ときれぎれに苦しい息の下からかすかに哀願した。脊中に吊上げられている左手首に、右手首を重ね合わされたときには、もう振りほどく氣力もなかった。「今更何を云ってんだよ、始めからおとなし



くしてりゃいいものを、アタイを馬鹿にしやがって服迄破ってさ、カンニンでもないだろう、あれだけあばれて、負けたんだ、どうされたって文句はない筈じゃないか」

額の汗を横なぐりに腕で拭き乍ら、憎々しげにうそぶいた女は、後手に縛り上げた美しい獲物を見降して履いているハイヒールの先で、乱闘であらわになった乳房を蹴った。

しばらく間を置いて女は、転されている綾子の傍へジャガミ込んだ。ぐっと髪の毛を掴んで引起し、顔をのぞき込んで云った。「フツ、覚悟したかい、アタイはねお前の様な可愛い顔をした娘が、そうして痛さをこらえているっていう表情が、たままない程好きなのさ、これからお前がさっき汗を流さして





を眺めていたが、ニッと片頬に笑みを浮べチラツと綾子に視線を投げて、傍の椅子に手を延した。綾子をその上に、仰向けに寝かす様に反らせ、右膝から口を通して左膝を縛りつけた。椅子に固定された細引一本の為に動けない。

「人間椅子ってわけね、オッパイのクッションも一寸気が利いてるじゃないの」

女はその思い付きに満足したらしく、残忍な笑みをたたえながら

くれただけ埋合せをして貰うからね。いいかい、それから云々とくがね。ここはどんな大きな声を出しても外へは聞えないんだから、出したかったら遠慮なく、うめくなり、わめくなり、好きな様にしがいいわよ、その綺麗な唇からあがる悲鳴も悪くないものさ」

女の瞳はキラキラと輝きを帯びている。綾子の不安はその極に達した。

女は一寸考える様な付目で四辺



そのクッションに馬乗りになった。ブツクリ張切って、かすかな震えをみせていた豊かな綾子の乳房が女の尻に押潰されそうになった脊中に重ね合されている両手首が、メリメリ音をたてて砕けるのではないかと思われる程痛い。「アツツ」と思わず出る悲鳴「どう？ 苦しいかい？ フッフ」女は苦痛にゆがむ綾子の表情を気味よげに見降しながら煙草を吸いつけた顔を近よせてフッフと煙を吹きつけて、「ウッフフ」さもたまらないと云った様に含み笑いをし乍ら腰をゆするののである。懸命になつて苦痛を堪えている綾子の頬へ、鼻へ、唇へ煙草の火が押しつけられる。

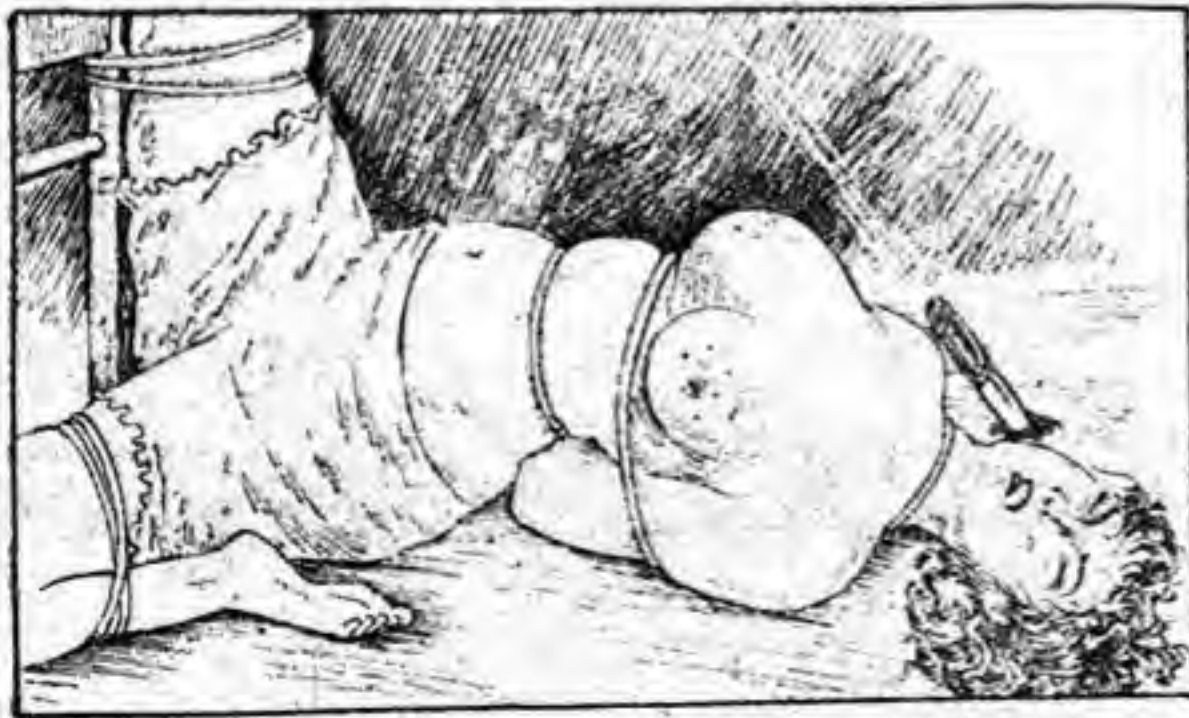


「フーン、オッパイって潰れないものネ」
 やっと降りると女は、綾子の乳房を掴んで
 さも大発見した様な云い方をした。
 「アタイのよりいい位のを持って、スパイの
 くせに生意気よ、どうしても潰してやるから」
 女は横の机に腰を掛けて、固いハイヒール
 の踵でその乳房を踏み出した。綾子は堪え難
 い苦痛にうめき続けた。美しい顔にベツトリ
 脂汗が浮び、この儘悶死するかと思われる程
 である。白い乳房は無数のアザが出来、紫色
 に変色した。何と思ったか女は床に降り綾子
 を椅子から解いた、グツタリしているのを構
 わず、シユミーズを裂き取った、綾子の白い
 柔肌が露出される。



今の椅子に片足を立てて縛りつけると女は
 ジャックナイフを持って来た。
 「お前の様な綺麗な肌をしてる奴をみるとア
 タイは忌々しくなるよ、今からメチャメチャ
 にしてやるから」
 云い乍ら刃の腹でピタピタと頬を叩く
 「カンニン、もうカンニンして……お願い」
 綾子が心死の哀願をしたらした時だった。
 「大変だ！」パツと扉が開いて伝吉が飛び込
 んできた、その見事に驚いて女は戸口まで走
 り寄った「どうしたのよ」「手が廻った、早
 く逃げなきゃ、もうつい其処迄ボリが来やが
 った」「チッ、これからがホントの楽しみだ
 と云うのに、畜生！」女はキツと綾子の方を

睨んでつぶやいたかと思うと、手のナイフを
 サツと投げつけて部屋を飛び出していった。
 ナイフは綾子の顔をかすめて、頭の横にぐっ
 さりと突き立った。〃救われる〃綾子はそう
 思うと急に全身の力が抜けて行くのを感じて
 深い真暗な谷底へ落ちて行く様な気がした。
 翌朝の全国各新聞は、某国人ジョニイを始
 め女を含む密輸団の全貌を報じた、その仲間
 割れが検挙の端緒となった経過を伝えていた
 が、同時に、ジョニイ宅に捕えられていた美
 女、田下綾子の受難記が大きく扱われ、満天
 下の同情を
 集めた。
 綾子は病
 床の中で、
 「何が何だ
 か、訳が分
 りません。
 本当に私、
 夢をみてい
 た様な気が
 します」
 と記者に語
 ったそうで
 ある。



夕暮の窓辺にて

古川裕子

私はいま地の底に居るようです。全身をひたすこの汚辱感、自らの肉体に唾を吐きかけ、この世から消してしまいたい。二度あることは三度ある。裕子は性懲りもなく又出かけたのです！

昭和二十九年六月〇日雨の夜に、東海道浜名湖畔弁天島の一旅館の一夜、私の汚辱はそこで行なわれたのです。いゝえ、いゝえ、決して私の相手をして下さったT氏にこれを申しているのではございません。私は自ら進んでそこへ参ったのです。誰のためでもない、たゞ私自身の「性欲」のために……。

今この絶望を抱いて、腑抜けのように座りなれた机の前のすりき



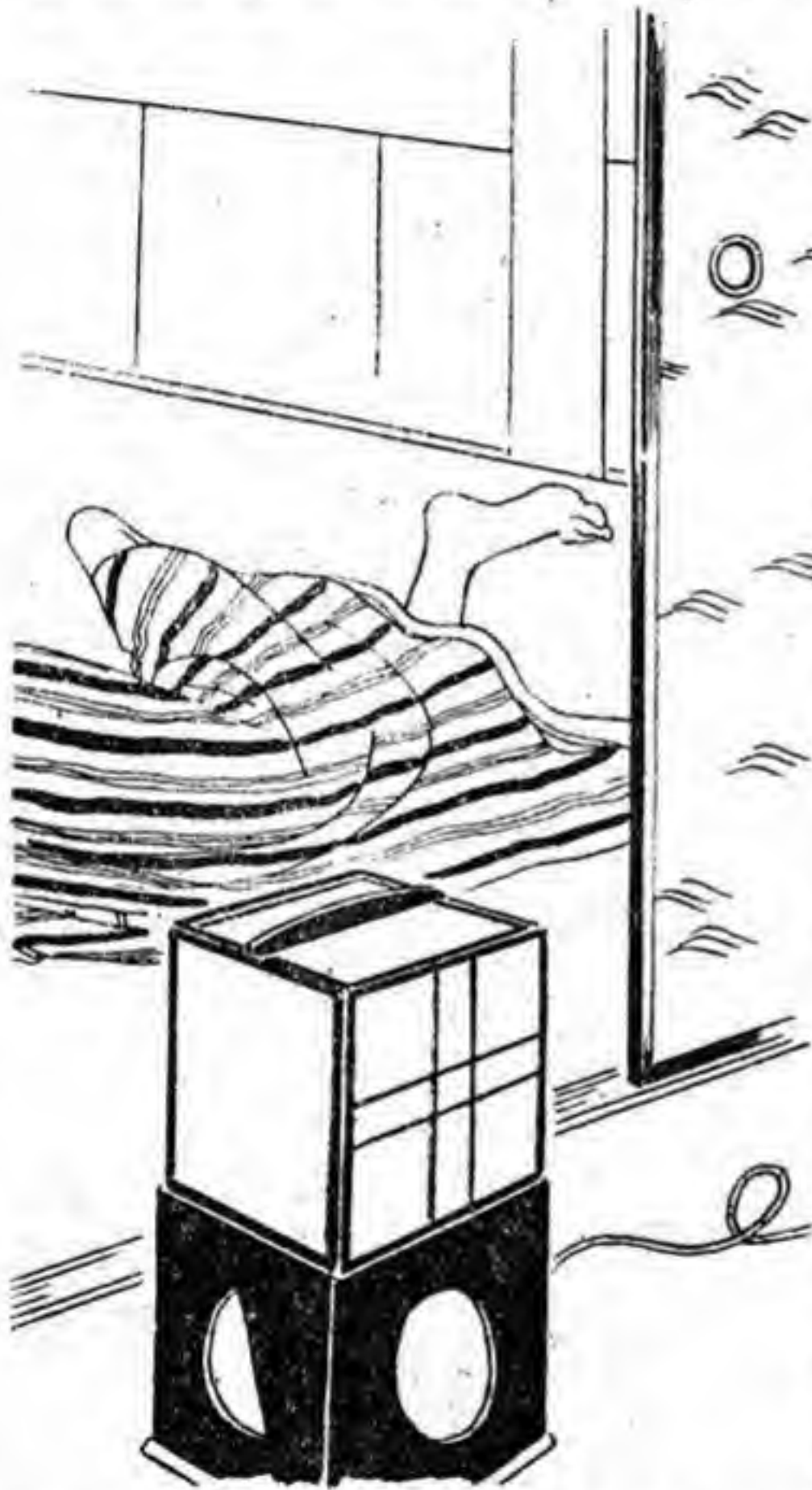
れた赤い座布団に坐って裕子の胸につきあがってくるのは、ただ自分への厭悪と身をしぼるような悔恨だけ。私は「娼婦」！今の裕子は「娼婦」以外の何ものでもありません。いや裕子は前から娼婦だったのです。札幌へゆき、あの雪まじりの朝の雨の中で、私のポケットには三万円の札束が無理やりにつめこまれてあった。失神して気付いてみれば半裸の身体に洋服が被せられてあり、追いつてられるように外へ出た私のポケットには、あの札束があった。これもとても正確な云い方でした。裕子はこの札束を遂に返さなかった。それはS氏の私の身体に対する報酬であり、彼が私に加えた凌辱を合法化し、合意化するためのお金であることは、誰がみても間違いない。そのお金を私は送り返しもせず使ってしまった。義姉の突然の入院は、私の分別を失わせた。目前の急場の必要に対して、手のうちにあった札束の魅力には裕子は抵抗出来なかった。義兄はそれ以後、彼の乏しい俸給の中から、なし崩しにそれを私に返してくれた。しかし裕子はS氏にそれを末だに返却していない。あの日から——札幌におけるあの雪もよいあの夜から、裕子は一人の「娼婦」となった。口に偉そうな理屈をならべ、高潔な精神への熱望をのべたてる古川裕子という女は、——ただ金によって身を売る娼婦なのです。しかも裕子は、貧しいけれども、自分一人だけは食べてゆける亡夫の会社の株と、それからさやかな職業をもっている。裕子が「娼婦」になったのは、貧窮のためではありません。このけがらわしい女は、たった一つ自分の「性欲の充足」という理由だけのために身を売ったのです。裕子は売春がいつも百パーセント悪徳だとは思いません。なる程、行為そのものだけを考えればこれは論議の余地がありません。「悪徳」です。でも現実の世の中——この

生きにくい世の中に、たとえば子をもった未亡人たちが、生きてゆくには、この方法しかない場合だってあるのです。もしも自殺が悪徳なら、親子心中が悪徳なら、このような事情で自らの身体を売らなければ「生存し得ない」母と子にとって、血を吐くようなその行為を、いったい誰がとがめることが出来ましょう。しかし悪徳があるとしたら、社会が——そのような人々に、そのような方法以外に生存の道を与え得ない社会が「悪徳」の責を持つべきだと思えます。この人たちを責めるならば、彼らに対して「罪なきもののみ石をなげうて」です。誰が彼らを罪人と呼び得ましょう。でも、でも、この裕子は——はっきり申しあげます。裕子は自分の淫蕩さのためにだけ娼婦となったのです！私の前にあるのは地獄への道だけ、裕子にどのような石を投げられても、それに対して何の弁解の余地もありません。売春禁止法という法律があるならば、第一に罪すべきは、この私のような女です。裕子の悪徳はそればかりではありません。裕子はその所謂「告白」なるものの中に、隠すべき所業を露わに書きつづり、「年少者若年者を害して」きました。いやそれどころか、自分の良いような理屈をつけ如何にも「実は」本来高潔な人間なんだけれど生れつき因果な宿命を負っているの、やむをえずこんな所業をしてきたのだなどと、自分の意志の弱さを「宿命」なるものに責を押しつけて憶面もなく書きつづけて来ました。そして一度のみならず、二度（大阪での出来事）そして今度の弁天島で三度目です。私は今はもう自分の本性を弁解する元気を失いました。そんなことを云ってものになるでしょう。読者の皆様、古川裕子は、心身ともに、まごうかたなき淫売婦です。この女は「淫売婦」の名称以外には、与えられる名はないのです。裕子は、この

「告白」を書く理由を、自分では解りません。私はただ書いています。いいえ泣いてなんかいません。無表情に、腐った魚のように濁った目をして、唇を半ばあけ痴呆のようにこれを書いているのです。

思えば、この一ヶ月間、裕子は猿ぐつわに憑かれていました。いつもなら断続的にくる裕子の「狂乱の日」が、最近は絶え間なしだったのです。昨日も今日も明日も、私の頭の中には猿ぐつわへの願望が消え去らないのです。普通ならこの願望は緊縛へのそれと一緒に現われてくるのに、今度だけは、猿ぐつわの観念のみが殆ど強迫的に私の全身に拡がって動かないのです。こんな気持が解っていただけでしようか。おそらくは正常のかたには想像もつかぬ心理でございましょう。裕子のような「異常者」「変質者」だけが、この

奇妙な強迫観念にとりつかれるのでございましょう。「猿ぐつわ」と口の中でつぶやいただけで、自分の手のひらで自らの口と鼻とおさえただけで、この女の全身は燃え悶えるのです。まして亡夫との生活で使った、かずかずの猿ぐつわ類、嵌口具類——それらを取り出し、この世の中でたった一つの裕子の片隅、嚴重に鍵のかかる私の部屋の姿



見の前で、自分の口に嵌めて鏡にうつったその姿は、まるで悪魔のよう。ポツリとついた電燈は奇怪な嵌口具を嵌めた女の顔に濃い影をつくって、この世のものとは思えぬ虚像を鏡の中にうつしだしているのです。そしてこの身悶え、熱く荒い呼吸、——この姿はいったい何なのでしようか。これが人間の姿でしようか。異常性欲の泥沼の中からうかび出てきた悪魔の姿、そうというよりほかはないのです。

裕子はこの「嵐」の中に狂い廻りました。奇譚クラブの猿ぐつわの挿画や写真の一枚一枚を喰い入るように、焼きつくすようなまなざしで見入りました。猿ぐつわへの記事を百べんも読み返しました。勤めにも厚いマスクのかけ通しでした。幸い私の職場は病院の一部なので季節はずれのマスク姿が、それ程不自然ではありませんでした。家へ帰れば早速、自分の部屋に逃げるように閉じこも

て、金属やゴムの書を自らの口に嵌めてすごしました。夜も勿論、そのまま寝ました。妄想と息苦しさとは私を眠らしめませんでした。口の中に一杯つめられ歯の間に噛まれた猿ぐつわ、目のふちから口と鼻をして、顎までをびったりとおうてしまうゴムの書を嵌められたまゝで、眠るなどという芸当は、それらに馴れた私にさえも出来ることで

はなかったのです。その上身もねじきれる興奮、しかも「満足」が―「充足感」がないのです。私は次第に痩せ、目ばかり異様にきらきら光ってきました。目のふちに黒いくまが出来、頬の筋肉がヒクヒク痙攣し、いらだたしくなっていたのです。義兄は心配してくれました。また神経衰弱の再発ではなからうかと。

今年の梅雨は殊に雨が多く、しかも梅雨らしくない叩きつけるような豪雨が、裕子の住んでいる地方には続きました。今日も雨、そして明日も明後日も雨、雨、雨。私は、どうしても得られない「充足感」を求めて、狂い廻りました。食事の時、私の頬についた嵌口具のあとを、義兄だけに見られぬように、病氣と称して自分の部屋で、自分の寝床の上で一人でたべました。自分の部屋以外に出る時は、必ず大きなマスクをして出ました。この不自然な程大きいマスクも、私のマスク姿を見馴れた義兄たちが、さして不思議にも思わなかったらしいのは、せめてもの幸いでした。

遂には私は勤めを休み始めました。そして窓にしぶきをたてて、ぶち当たってくる吹き降りを眺めて呆然としていました。ものたりない、ものたりない。



い、ものたりない。私はありとあらゆるものを口の中につめこみ、あらゆる贅を嵌め、自らを鞭打ちました。鏡の前で、猿ぐつわ姿の全裸で狂いました。それは「狂人」以外ではありませんでした。鏡の中で奇怪な踊りをおどる自分にふと気付いて、私は骨の髄まで凍るような「恐怖」を感じました。裕子は本当の狂人になってしまった！この姿、この姿はいったい何なのだ！と。

でも、でも私の「嵐」をなだめてくれる充足感は、何としてもやってこないのです。私は自分が本当におそろしくなってきました。このまゝでは、遠からずこの裕子は狂人になってしまふ。あゝ何とか、あゝ何とかそこから逃れる工夫はないものだろうか。今度はこの強迫観念か、猿ぐつわへの願望と相いまって更に私を苦しめました。一睡も出来ぬ夜がつづき始めました。私はますます痩せました。

義兄がそのような裕子を見て、驚ろきの声をあげた程。

私は歯を喰いしぼり私の嵐に抗していきました。きちがいになるきちがいになってしまう。自分で自分にはめる猿ぐつわなんぞ一文の価値もない。このやわらかい頬、この赤い唇、このぬめぬめとあ

たたかい私の舌、白くわたのようにきめのこまかい私の咽喉、これらを異性の手で——「男性」の手で、男の手で、容赦なく、しめつけ、ひねり、おさえ、苦しめ、けがす。そうでなければ、そうでなければ私の嵐は永久に去りそうもない！私の求めているのは、男の手が私の唇を舌をそして発声を、呼吸をおさえ、けがし苦しめ悶えさせることだ。被虐のよろこびを、男の手から受ける以外に、今の私を救う道はない！私は心からそう信じ始めたのです。

裕子は夢中で私に寄せられた「男」の手紙を探しました。そしてその一つ一つをむさぼるように読み、検討し、比較し、今の私に、もっとも適当な相手を求めました。私はその一通を選びました。名古屋市昭和区のT氏。この人こそ今の私の「男性」！裕子は殆ど無意識にそのかたに誘いの手紙を書きました。「お会いしたい。日時と所場と指定して下さい。どこへでも、どんな速くでも、あなたの御指定の場所へ、今の裕子は必ず参ります」と。

これはまごうかたなき娼婦の口説の手紙でした。裕子はこの誘いに対する御返事をまちこがれました。その一週間の長かったこと、苦しかったこと！八日目に私は遂に御返事を得た。そして選ばれたのが、浜名湖畔弁天島の某旅館。裕子は、相い変らず降りつづくどしゃぶりの雨の中を、ゴムのレインコートのフードもまぶかに、傘も持たず、家を出ました。呆然と出た。フラフラ出たなどと申すものではありません。それは雀躍と駆けつけていったと評すべき、浅間しい裕子の姿だったのです。

浜名湖は想像していたより、ずっと平凡な湖でした。いつか大阪へ行ったときも、この湖のそばを汽車で通った筈でしたのに、どう

しても記憶がありません。もしかしたら、居眠りでもしているうちに通りすぎたのかも知れません。

「べんてんじま」という駅は、さゝやかなものでした。急行はとまらぬとのことなので、東京から普通列車でゴトンゴトンとやってきた私が、薄暮にこの駅についた時には、いい加減疲れ果てていました。しかも霧のような雨が、それでも小止みなく降りつづいていて、私の心を一層憂鬱にしました。

駅前道は砂地で、しっとりと濡れていました。駅の灯がぼんやりとにじんで、普段なら明るい東海道筋の景色を、今日は暗く冷たくもの憂げにさえ見えていました。

五月末の冷たき日や、蚕室に蚕は眠れり、彼ら病めるなり……彼ら知れり台所の水がめに水悪しく濁れるを、五月末の冷たき日や悪運ぞ満つる。

誰の詩だか忘れてしまった。しかも正確な詩句さえ覚えていないのに、突然きれぎれに私の心に、何の脈絡もなくこんな言葉が浮びあがってきました。

その日の裕子は、いいようのない懈怠の中にありました。恐らく女らしいものごしや、いきいきとした期待の心など、その時の私にはありはしなかったのです。雨の中の弁天島駅に私はおり立った——ただそれだけがにぶく、水がめの水が悪しく濁っているように、私の心にべったりと影をおうていたのです。

裕子は、のろのろとした態度で、お迎えに出てくださっている筈の名古屋のT氏を探しました。しかしそこにはそれらしい影も見えませんでした。私はがっくりと気落ちしました。はるばる、これまで来たのに……二人の宿の客引が半ば疑しように、それで

も私をうるさく勧誘しました。私はそれにつとめて無関心のようにふるまいながら、ゆっくりと駅前の道に出てゆきました。レインコートボタンもはめず、フードもかぶらず霧雨の中を、だらしなく私はT氏に指定された宿に行ったのです。

仲々立派な旅館でした。おそらくこの地では一流か、それに近い宿屋なのでしょう。湖をみはるか、大きな松が多い足もとまで水がくるせまい庭が印象的でした。私はT氏の名をあげて宿へつきましたが、こゝでもT氏はまだお見えになっていませんでした。ペラペラ付の十畳に通されて、私は立ちあがり、暗い湖をすかして見ました。湖というよりは海の一部、単なる大きな入江の感じでした。対岸でしょうか、それとも漁火でしょうか。暗い中にいくつも灯が明滅していました。耳をすますと、潮騒がきこえます。私はべたりと畳の上にすわって、着換もせず暗い外ばかりながめていました。猿ぐつわへの妄執もT氏への期待も、今は何にも消え失せてしまっているようでした。この宿屋に何のために来たのか、その意識さえ明瞭には心に突きささってはこなかったのです。私は今こゝに居る——これがその時の私の心境のすべてだったのです。

キッチンと和服を着こなした中年の女中が宿帳を持って来ました。外を眺めている私の後姿に、遠慮がちに声をかけました。私はふりむいてペンをとりました。「名古屋市昭和区〇町〇番地TN妻裕子三十三才」私は何の躊躇もなく、こう書き流しました。そして書き終ってペンを置き乍ら、おそらくこれを見る人は誰もこれが本当だとは思いません。——不思議な程、ためらいもなくこの宿帳をかく裕子は、すでに「病的嘘言症」の末期に達している、との思いが、一瞬心の中をひらめいて、すぐさま消え去ってゆきました。そ

して私は平然と、今度は微笑さえも浮べて宿帳を私と同年輩のその女中さんの方に押しやりました。彼女はそれをのぞきこみもせず、静かに閉じて部屋を出てゆきました。背の高い、しかし肉付の悪くない落ちついた女中さんでした。私は何がなしにこの女中さんに好意を持ちました。その後姿を見送ってしまうと、私にも漸く余裕が出来て来ました。服を脱ごうか、或はT氏がいらっしゃるまで、このまゝでいようか、初対面のかたに最初から宿の丹然姿では、女の私は流石に気がひけます。私はいったん脱ぎかけた手をやめて、また座りました。そうして始めてこの部屋の様子を見廻しました。両隣は一枚の襖で仕切られているばかりで次の部屋です。まだ両隣ともお客はいないようですが、急に不安になりました。これは駄目、この部屋では何も出来ない。調度の立派な感じのよい部屋ではあるけれど、こゝでは駄目、何も出来ない。こんな恐怖心にも似た不安がいきなり私の胸の中をかき廻し始めました。するとそれにつれて私が何をしにこゝに来たのか、私は今は何を願望しているのかが、鮮烈な色彩をもって怒濤のように私を圧しました。何故遅いのだろう、何故来ないのだろう。もしかしたら約束を破って来ないつもりではないかしら、二十九才、私より年下だと云った。手紙にもどこかおずおずとした気おくれが感じられた。「信じられないかも知れないけれど僕はまだ童貞です」手紙の一節がいきなり頭の中によみがえってきた。私は不安になった。来るかしら、本当に来るのかしら、年上の女の強引さに辟易してこの白面の青年（私の想像では）決心がつかなかったのではないか、いや冷静な人なら、あの私の手紙に、そう安易に応じられるものだろうか、T氏はたしかに私と約束した。そしてこの日、この時間、この土地この旅館の名ま



で指定してきた。私は弁天島など生れて始めてきく土地の名だったのだ。ましてこゝのこの旅館の名など夢にも知らなかった。それが今、私はこゝに居る。たしかにこゝに座っている。こゝに私が居ることはT氏の指示がなかったならば絶対にあり得ない。さすればT氏の心は、たしかにこゝに来る決心をしている筈だ。間違いはな

い、間違がある筈がない。私はこんな解りきった筋道を一つ一つたどって自分を納得させようと思いました。重い黒い旗のように私の胸をおおう不安を、こう考えることによって鎮めようと思いました。その時には、すでに私の「妄想」は、はっきりと目を醒していました。牙をむき出していました。あゝ、あゝ、今晚来てくれなかったら

どうしましょう。どうしてこの見知らぬ土地の一夜を、私一人ですごすことが出来よう。早く来て、なぜ来ないの、失礼な人。女をこゝまで呼び出しておいて、すっぱかすつもり。失礼な！でもそんな侮辱感よりも、今の私はもっともっともっと単的な要求がある。男の手で、男の指で、男の体臭の中で私に猿ぐつわを嵌めて欲しいのだ。私の自由を奪って、ゆっくりと、さるぐつわをはめてしまっで欲しいのだ！十全の被征服感の中で、この女のやわらかい燃える唇に白く血のけのさした、つやつやしい頬に無惨な猿ぐつわをはめて欲しいのだ！名誉も、秩序も美も静謐も、善も悪も、今の私にとってそれがいったい何であろう。私の望むはたゞ一つだけ、男性の手によって、私の一切の自由を奪われない。手足も、発声も、呼吸の自由さえもうばってしまってもかまひはしない。殺されたって何

の不足があるものか、マソヒストがマソヒスムの充足感の中で死んでいったなら、本望というより何をいうことがあるう。いっせ殺されてしまいたい。T氏は、いやTはTは、何故こないの、なぜ早く走ってこないの、意地悪！

もう夜がふけて来たのに、女中さんに何度上り列車の時間をきいたことか、それなのにあなたは、まだ来ない！

待ちくたびれたT氏が私の前に現れたのはその夜の十時すぎでした。女中からその旨を聞き玄関に出迎えて、始めてT氏にお目にかかったわけです。茶の背広に赤いネクタイ、割合背が高く痩せぎすで、年令よりは若々しく見えました。第一印象は、むしろ平凡な「サラリーマン」という風でした。宿帳の上では私がT氏の妻になっています。T氏は初対面の私に規帳面に挨拶をされようとするのを、いささか慌て気味におさえて、如何にも妻らしく私は振舞いました。しかしこれでは妻としてよりは、むしろ「若い燕」と見られても仕方がないみたい。私はT氏と肩をならべて部屋にいそぎながら、内心ではこんなことを思っていました。それにしてもこの人が本当にあのお手紙の主のT氏なのかしら、相当のサディストのように受けとれるあのT氏なのかしら、私はむしろそのおとなしやかな風貌に途まどいしてしまいました。思えば札幌のS氏は年令も相当でありましたが、筋骨も逞しい、かなりアクも強い、サディストらしいサディストだったと今更のようにS氏のことが、ふと頭に浮んで来ました。いやそれだからT氏はものたりないなどと申しているわけではありません。T氏はどこか私の亡夫に似ていました。心の隅で、かなりオドオドしておられる様子をうかがい見て、私は何か

弟でも迎えたような気分になったのです。

T氏は遅れた理由をクドクドと述べたてて私に陳謝されました。「でも今、目の前にいらしたのですもの、いまさら遅刻の理由などはおききして何になりましょう。お互に過去の身の上話はやめましょう。人間の運命のゆきずりにふと出会った男と女、たゞそれだけで結構ではないでしょうか」私は映画のせりふの様な言葉を口にしなが、あらためてT氏をじっとみつめました。お顔全体はかなり角張って見えますが、お顔の色の白さと、濃い眉とが印象的です。肩などもかなり痩せて肉付はよくありませんけれど、いかつく瘡癥の強さと育ちのいいお坊ちゃんじみたところがいりまじっています。瞳の色が茶色で、マツ毛が長く、その目は緊張と期待と不安と一抹の後めたさだが、こんがらがって、すこし落ちつきを失っていらっしやるようでした。中年の女というものは図々しく、憶面もないもので、わずかの間にこんなところまで観察していたのです。「私が古川裕子でございます。このたびとんでもないお願いを致しまして、お忙しいところを御迷惑をおかけ致しました。何卒宜しくお願いいたします」

私はきちんと座って、紋切型にこう御挨拶をしました。T氏は固くおなりになって

「僕こそ飛んでもないお願いを……。TNです。こちらこそ今後ともどうぞ宜しく。」

と四角張って挨拶を返されます。どうも調子が大分違って私はすこしほゝえましく、又すこしこれで大丈夫かしらといささか不安になってきました。

ともあれ、私はT氏の着換を、まるで妻のように、姉のように手

伝いお風呂場へ送りだしました。T氏が旅の垢を落しておられる間に、私は座敷にすわって考えこみました。

「今夜はこれが私がリードしなければならぬのではないか。これはいったい奇劇なのかしら、悲劇なのかしら」T様ごめんなさい。

あの時私は本当にこう考えたのです。

その時、先ほどの女中がお茶とお菓子をもってきました。

「奥様、お願いいたします」と紫檀の机の上においてさがろうとする女中さん呼びとめて、

「どこか、もうすこし静かな奥まったお部屋ないかしら」

私は女中さんの手になにがしかを握らせながらこう申しました。

「宜しうございます。奥のはなれが丁度あいております。お二人様ならばそちらの方が宜しうございましょう。只今帳場に連絡して用意しますから、少々お待ち下さいませ。」

女中さんは万事のみこみ顔でこう答えました。私は一仕事がすんだようにホッとしました。

T氏は上気した顔でお風呂から帰ってきました。私はお茶を注ぎながら手短かにもっと落ちつける部屋を頼んだことを彼に話しました。彼はその話から、あらためて彼が今こゝになにをに來たかを感したようでした。顔が一層こわばり身体がふるえているようでした。

紫檀の机を前にして、始めてゆっくりと二人は向い合いました。

「奇譚クラブに載ったあなたのものは全部読ましていただきました。この世の中に貴女のようなかたがいらっしゃるとは夢にも思いませんでした。それに僕を選んでくださるなんて……」

T氏はひとりで興奮なさったように話しつづけます。私は慌てて

それをさえぎりました。

「裕子は御覽の通りのお婆さんで、さぞ、びっくりなさったでしょう。つまらない女です。御縁があつて嬉しうございます。何も申しませんから何でも御要求なさつて下さい。あなたに始めてお会いしたのに、まだ小一時間しかたつていないのに、もうずっと前からのお知り合いのような気がしますのよ。」

そこに女中が用意の部屋がととのつたことを知らせに來ました。私たちは廊下を幾まがりして女中さんのあとをついてゆきました。そして恐らくは新婚者むきの次の間つきの六畳に移りました。なる程こゝは三方が壁で、離れになつていたので、私たちの目的にはもつてこいでした。次の間の四畳半には真赤な布団が敷いてあり、行燈型の小さいスタンドと水さしと灰皿が枕もとに見えています。T氏はそれを見て著しく心をそられたようでした。私はT氏が童貞だということを半ば信じ始めた位、彼は動揺していたようです。

彼は突然私の肩を抱きました。顔を仰むかせて私の目をのぞきこみました。

「奇麗な目をしている」これはつぶやくような彼のひとりごとでした。

「マスクをしてごらん下さい。僕も女のマスクが好きだ。」

私はT氏から離れて私のマスクを出そうとしました。ところが後むきになつたところを激しく抱きよせられ、T氏の胸にどざりとぶつかる、口と鼻とにマスクをかぶせられました。T氏の指が私の頬に、耳に、うなじに、頸に忙しくさわりました。私はその時火のように燃えました。T氏は私を畳の上に転しました。いつの間にか細引を持っていて、ひしひしと私を後手に縛りあげていました。見

事な手際でした。私はむしろ呆然として畳の上をごろごろと転されているうちに上半身は肩まで露わにされ、頸に縄がくいこみ、床柱に身うごきも出来ないように縛りあげられていたのです。これは「坊や」どころではありません。

T氏は息をはずませながら、柱に括られた私の顔をみつめていきます。肩がせわしく上下し身体がこまかく震えています。

「そのマスクは僕のだ。臭いでしよう。僕の匂いがする筈だ。今日のために、あなたに嵌めるために念入りに用意していたものだ。」

T氏は私の前に姿見をひきずってきました。そして赤い鏡掛けをはずして縛られた私の全身をうつし出しました。

「御覧なさい。これがあなたの姿。あなたは僕のものだ。僕はずっと前から今日という日をまっていたんだ。」マスクは異様な男の匂いがしました。それは汚れていて厚く、大きく私の口鼻をおおいつくしていました。この臭い匂い、私がいつもかいていたことのあるこの匂い、——私はハタと思い当りました。と同時に身悶えをせずにはいられない、熱い熱い衝動を感じました。私は縛られた縄も切れよと

激しく身悶えし、マスクの下に呻きました。

「うるさいね。黙って静かに謹慎していなさい。」

T氏はマスクをいきなり剥ぎとると、それをまるめて私の口の中に詰めこみました。大きい厚いマスクとガーゼは、それだけで私の口に余る程の量でした。

「これもあなたの好きなものだ。」

ゴム布が私の顔の半分をおうてひきしぼられました。私は悶えうめき、夢の中に入ってゆくような情感の嵐に突入していったので



す。

長いような短かいような一夜でした。この時間にあった詳細を私はお話する必要もなく、又その勇氣も持ち合せません。要するにT氏にとっても生れて始めてのセンサーショナルな日であつたらしいし、私にとっても渴するものが泉に会い、思うさま欲するままに渴をうるおしたひとときであつたのです。

夜明けの、湿気を含んだ重い微風の中に、私は一人で外に出ました。東の空がもう大分白んで、湖から沖に出てゆく漁船の発動機の音が、遠く近くきこえ、私に忘れていたものを思い出させました。今日も頭を押しつぶすような曇天、しめっぽい重い風に疲れはてた私の身体の中を、ゆっくりと吹き通ってゆきます。このつぶやくような風！私は突然眩暈と嘔吐を感じました。

わたしはいったいなにをした！一夜忘れていたものが声をあげて目を醒めたのです。お前はいったい何をした？それはすさまじい声でした。生理の充足感など、このひとときはどこにもありはしませんでした。このしめった暗い風、憂鬱に沖にのろろと出てゆくあの船たち、そして足もとの真暗な波。おまえはいったい何をした！胸をしめつけるようなこの声。見はるかす湖の上においかぶさる曇天が、芝居の緞帳のようにゆらゆらゆらとゆらいで、私は激しい眩暈を感じ砂浜に膝をついてしまいました。おまえはいったい何をしました！激しい不安と胸部の絞窄感。曇った空はまだゆらいでいます。重く、ゆっくり、ゆらゆらと。私は砂にまろび、身体中につきあがり、わきかえってくるあの言葉をきいていました。おまえはいったい何をした！おまえはいったいなにをした？なにをした？

お別れするまで私はT氏に対して、まるで姉のように、母のように手伝いました。ふしぎにおだやかな感情でした。夜明の湖畔のあのすさまじい声は、その時も心の中に鳴りひびいていました。しかしその声は私だけのもの、T氏には何も関係のないことです。何の因縁かこの運命の中でふとめぐりあつた一人の男性、そのような感情は私を優しくしました。着換えから出発まで、なに、世話をし、一足先にT氏を送り出しました。

T氏は別れぎわにこう云われました。

「私はあなたが忘れられなくなった。また会って下さい。おや、あなたは真蒼ですね。御気分がわるいですか。」

私は静かに答えました。「御縁がございましたらね。お元気で」狂乱の一夜のあとにも、言葉づかいをくずさぬT氏―私は彼の白い顔をじっと見つめました。悲しいのでもなく、まして憎いものでもなく、懐しいのでもなく、ただみつめていたのです。この心理は私には説明出来ません。ただ一人の「女」が一人の「男」を黙って見つめていたのです。

T氏に別れてしまうと、私はいったん宿へ帰りました。寂莫感が今更のように身に迫ってきました。この世にたった一人のこされたような気持。私は畳の上に身を投げだして泣きました。涙が自然に溢れてきて、私の頬を静かにつたって流れおちました。私は涙が溢れるまゝに拭おうともしませんでした。この身にしみ通るような寂莫感。「女」が「男」に別れたときに感ずるあの人間感情、心が意外に素直になっていたのです。純潔というには程遠い、人生の幾山河を越えてきた中年の女のこの素直な悲しみを、私は自分で思う存分甘やかしていました。こゝ数年来、夫を失ってからあの日々、



私の心がこんなに弱く——いいえこんなに素直に感じられたことはありませんでした。こんなに抵抗もなく、こんなに優しく、自然に溢れる涙を私はいつから忘れていたのでしょうか。この数年、私

らです。

何と単純なこと——私はたゞひとりの「男」のひとに会った。私は彼にプラトニックな愛情を感じたのだろうか。いやあの狂乱の一夜

の目からは数え切れない位涙がおちました。女というものは泣虫なものです。でもその涙はいつも自意識の枷にしめあげられて、搾りだされる苦しい苦しい涙でした。心がひとりでに融けるようにあたたかい涙など、一度もありはしなかったのです。唇をゆがめ、こめかみに青筋をたてて、齒を喰いしぼっても溢れてくるあの涙は、云って見れば「女の涙」ではなかったのです。でも今は——でも今は、私の目からはあたたかい涙が溢れています。あとからあとからそれは私の素直な心が、やわらかに融けて流れる甘い人間くさい、女の匂いにみちた涙なのです。ほらこんなに透き通って、ほらこんなに光って……私はハンカチおしあてて人生の半ばの涙を——三十三才の女のかなしみとよろこびとを素直に声もなく泣いていたのです。

私はその夜をまたこの旅館ですごしました。春雨がしっとりと万物をうるおすようなこの充足感を、独り静かに味いたかったからです。

見知らぬ土地の一人のエトランジェとして誰にもわずらわされずに人生の片隅のひとときの女の幸福をしみじみと味わいつくしたかったか

をすごしたいま、私の眼前から消え去っていったあのTなる青年に、私は本当に心からの愛情を持ち得たであろうか。この間に対しては私は、しかく割り切っては答えられない。マゾヒズムというものは「肉体の愛情」なのだろうか。又精神の愛情なのだろうか。私はT氏に対し初対面の時から悪感情を持たなかった。いや私の哀れな性質は、誰に対してだって心の底から憎み切れるような強い心ではないのだけれど、それにしても、どんな「男」が現れるか全く想像もつかないあの場合、私の前に出現したT氏に対しての第一印象は決して悪いものではなかった。そして今でも私はT氏を懐しく思っている。でも裕子はT氏からどれ程の「意見」をきいたろう。T氏の所論「生活と意見」をどれ程知り得たろう。この人の心づかいや思想や感情のうごきについて、私はどれ程の観察をなし得たろう。その答はことごとく「否」である。私の知ったのはT氏の10%にも満たない、いわば彼の性癖の面だけではないか。それなのに私はこんなに女らしく優しくなっている。性の充足感を感じている。夜明けの庭で感じたあの痛烈な自虐の心は今不思議に影をひそめているのは、いったいどうしたことなのだろう。私が求めたのは、要するに「男」の行為だけだったのだ。たとえどのような男にしろ、昨夜のT氏の位置で私に対したならば、私は手もなく満足したのだろうか、今のように満ちたりた、優しい女になったのだろうか、ああ何ということ！ 私は紫檀の机にもたれて、とめどもなく考えつづけました。

T氏は再び会おうとおっしゃった。お世辞にも私を「すばらしい人だ」とおっしゃって下さった。こんな言葉に胸をときめかす程、私は単純でもなく純真でもない、そして若くもないと云いたいが、

哀れな女の心は、そうです、そこはかたない満足とうぬぼれとを感じている。性欲の満足のために、見知らぬ男のかたを手紙で呼びだして、無責任な一夜をすごす中年の女がどうして「すばらしい」とがありましよう。不貞で、淫蕩で、そして自堕落な女となぜおっしゃらないのでしょうか。世間には多く未亡人がおられる。大部分のかたは亡き夫に対する貞節によって、或は自らの慎しみ深さによって、身を持するに潔く、立派な生活をしていらっしゃる。それに較べれば、この裕子など泥水にまみれた女です。私はつとめてそう思おうとしました。でもその日の私には——恥しいことながら——これがいつものように激しく身に迫ってこないのです。私はむしろ慌ててしまいました。お前は何でそんなに平気でいるの、いつものような反省がどうして今日はかくも空虚に思えるの？ 昨夜の行為に対して、あの夜明けの起き抜けの倦怠の中で感じたあの痛烈な自虐の心はどこへ行ってしまったの？ いつもお前が持っている。あの良心（おこがましい話だけれど、それだけがわずかに私の支えだったあの良心）はいったいどこにいったしまったの？ 今の私にはそれらがちっとも実感として起ってこない。自らの鞭が遊びごとのようにうつろに見える。何年にも感じたこと不思議な充足感のうちに私は次の夜をひとり、「やすらか」に寝たのです。

翌朝私は弁天島を去りました。この土地がこれからの私の生涯にどれ程の関係があるのか、神ならぬ身に解るわけありませんが、裕子はある種の感慨をもってこゝを離れました。朝の汽車はかなり混んでいました。空は漸く晴れて久し振りで青空が見え始めました。汽車の窓から見える東海道の駅々の景色は明るいものでした。大船あたりから幸福そうな婦人が可愛い男の子をつれて私の前の

席に座りました。着こなしのいい、それよりもお金のかかった和服姿の上品な夫人でした。十才ばかりの男の子も見ると利発そうに、又思われて見えました。この人たちの姿を、見るともなしに見ているうちに、私は、云いようもなく悲しくなりました。幸福な人たち！ 私を含めて、私の周囲の人たちは、何かにか不幸を背負っている。経済的にも家庭的にも。いや日本全体が不幸な季節にある時、いま私の目の前の婦人が何と幸福に見えることでしょう。明るく上品な微笑、経済的にも見るからに裕かなあの様子、可愛らしく利巧そうなお子さん、いったいどういう人がかくも恵まれた運命を背負うのだらう。私のようにどろ沼に転び不倫な幸福を、おずおずと身をちぢめて味っている女が目の前にいるというのに——私は突然声をあげて泣きたくなるような衝動をひたすらおさえつづけていました。

その夜私は久し振りで銀座をたった一人で歩きました。亡夫とはよくこゝに買ひものやら散歩やらにきました。あれから何年たつことでしょう。銀座は溢れる程の人の波でした。誰もかれも、すばらしい流行のなりをして、不幸そうに見える人など、たった一人もいませんでした。皆夫々に明るい微笑と活発な足どりに幸福そうに夜の散歩を楽しんでいました。私のペシミズムは又頭をもたげてきました。こゝは私の居るところではないと。この人たちの、どこに「不幸」があるのだらうかと。

ともあれ、私は住みなれた東北の片田舎に帰り、今すり切れた赤い座布団に座って、机に向い、これを書いていきます。長い長い雨も今日の昼すぎにはやみ、窓の外に静かに夕暮が迫っています。

帰って来てから私の心を襲ったのは、やはりいつもの私らしい激しい自虐の心でした。悔恨と汚辱と痛苦と——結局私の得たものはこれだけだったのです。あの不思議なやすらかさは上野駅で寂しい夜行列車にのりこみ、大都會の灯を後にした瞬間から、私の心から消え去ってゆきました。闇の中に遠ざかるあの街の灯のように。汽車は一本の笛のように北を指してひたばしりに走りました。翌日、私は重い言葉と黒い衣の似合う人々の住むこの東北の村へ帰って来たのです。

そして今、窓の外は今日の夕暮の最後の光が輝いています。

空は屋根のかなたに

かくも静かに、かくも青し

樹は屋根のかなたに

青き葉ゆする

打ち仰ぐ 空高くみ寺の鐘は

やわらかに鳴る

うち仰ぐ 空高く樹の上の鳥は

悲しく歌う

あゝ神よ

質朴なる人生は かしこなりけり

かの平和なる もののひびきは

街よりきたる

君　すぎし日に何をかなせし

君　今こゝにたゞ嘆く

語れや君　そも若きおり

何をかなせし

男色事件のために囹圄の人となった西欧のある詩人は牢獄の高い窓からわずかに見える青空をのぞんでこう歌いました。

あゝ私にも「単純で静か」な人生が欲しい。街からくるあのもののひびきのように平和な生活が欲しい。

私はひざまずいて神に祈りました。

「裕子は罪ある女です。私が生れてきたことが、あなたの思召しならば、私をお赦し下さい。もしも私が悪魔の子ならば、地獄へ追いつ落して下さい。哀れな私はそれ以外に私の罪を償う方法を持たないのでございますから」と。

(終り)

マリー・マドレーヌ

(女性犯罪史に現れた一毒殺マニア)

寒　川　緑

一六五一年、燦然と光彩を放つフランス王宮——質健優雅の風、影を払い、背徳の淫風

娼獍する所、内に燦る顔麁の腐臭は其の極に達していた。やがて一世紀有余の歴史の流れ

は、彼の血腥いフランス革命の警鐘に其の頂点を劃する、急速に昂まる罪の狂宴、その渦

中であつては偽善、シニズム、悖徳は依然として中央に跋扈していた。

史上最も徳義紊乱を極めた一時期である。

だが、此の汚濁の渦中に躍った淫奔、不倫、残忍な殺戮者の一員が、風にも堪えぬ美しき女性であつた事は、一驚に値することである。その名をマリー・マドレーヌと云う。富裕な貴族ドルー・ド・オーブリ卿の娘で、父はルイ十四世の下、パリに頭職を占めていた。

彼女は幼時からして今日の如何な上流、且つ寛容な家庭に於ても思考し得ぬ程の奔放、不節制な日常を黙認されていた。長ずるに従つて、内に胚胎する不羈の性格と、性に対する慾望は芽をのびし初め、当時の淫靡な空氣に充滿した社会に於いて、上流子女が慾望の捌け口を見出していた常套的快樂を以てしては満足を得られなくなった。

青年期に達した彼女の容姿は窈窕として、均勢が取れ、造化の妙を尽し、驕慢の風は払うべくもなく、その内に燃える黒曜の瞳は恋のたくらみと夜叉の情熱とに交互にキラキラと光っていた。貴族的な蒼白さを湛えた肌の色は、面長の美貌に調和してフサ／＼と波打つブルネットの頭髮に、一際引立って見えた。ヌメ／＼と濡れる口元、朱唇は薄く非情の性

格を現していた。優しく脹んだ乳房はやがての豊饒さを約束していた。身の丈はさして高い方ではなかったが四肢は細／＼と優美にしなやかであつた。

彼女の奔放な恋の船出が始められた。流石の寛容な父親の眉をも顰めさせた。彼女の愛人の数は不詳であるが、記すに暇なき程のものであつた事は推して知られよう。彼女の無軌道振りには、マリーの神学教授を以つてしても其の芽を摘むことは不可能で、一族の悩みは元より、早くも口さがない宮廷のゴシップへと発展して行つた。

こうして三年の歳月を経た。ド・オーブリ卿は此の肉に憑かれた秘娘の理性の手綱を引き締め得る唯一の方途は、結婚に依つて一家を持たせる以外、如何なる解決策も見出し得ないと考えた。彼は娘の夫君にブランヴィリエル侯爵を選んだ。これは次の重要な理由に依るものであつた。第一に、ブランヴィリエル侯が由緒ある名門の血をひき、世の尊崇を集めた一族の出であること、侯の高邁な人格、並びに彼がその妃の不身持を矯正する何等かの感化力を持つと考えられたことである。

此の計画は其の第一歩からして破綻を運命

づけられていた。その悲劇面の最たるものは彼ブランヴィリエルが——魅惑的なマリーの妖術に操られる他の多くの男と同様——その五体から発散する云い知れぬ毒氣に当てられて、死ぬ程にも彼女の幻影を恋い焦れてしまつたことである。

一方マリー・マドレーヌは、ブランヴィリエル侯を遇するに冷い忿りを籠めて嫌惡し彼の姿を目にしても其処に映るのは、たゞに父の意志を忠実に遂行する道具としてであり、又肉の遍歴の終焉地を見出すのみであつた。彼女は凡ゆる手段を講じた。涙、媚、脅迫、ヒステリカルな激怒——如何にもして此のインゲイチメントの廃棄を父親に掻き口説くのであつた。然し彼の決意は小揺ぎもなかった。心ならぬ華燭の典が豪華絢爛の裡に行われた。一六五一年、マリー十九の春である。

マリーの父の吐く息も一時の程は安らぎの階調を辿つた。三年余に亘つて打続いた娘の乱行もこゝに終末を告げたかに見えた。然し彼女は既に新夫を自己藥籠中のものとし、これを奴隸化していたのである。そして早くも然し第一歩は極めて慎重にラヴ・ライフを復活し始めていたのである。事実彼女は以前に



も増して広範な密通の自由を得た事に認識を新たにした。彼女は既婚夫人なのだ。

彼女の所業に纏わるスキヤンダルが夫の耳に入るのには避けられぬ所である。彼女は殊更陰蔽の気配は更に見せなかった。公然と夫及び父を無視侮蔑したのである。姦通する事に依って其処に何等かのサディスティックな喜びを享樂しているかに見えた。隷獣となり果

てたブランヴィリエルは、せめて家名に泥を塗るような事のない様嘆願するのだったが、彼女は冷く嘲笑を以って迎えるだけであつた。

実際、マリーは新しく燃え上ったロマンス——美貌の若き砲術大尉セント・クロワ卿との灼けたゞれる様な恋愛を故意に憚りなく誇示するのだった。歴史家達は其の後の彼女の

所行を擁護すべく、マリーが彼を愛していたと臆測さえするのである。何れにせよ、思慮分別の埒を超えたセント・クロワとの逸脱振りには、マリーの父に思い切った方策を取らせる原因となった。彼の権勢の及ぶ所、忽ちセント・クロワに罪科を被せ陰惨なバステイーユ監獄に繋留する事に成功したのである。

妻を奪われたブランヴィリエルは此の、妻と協力して夫なる己が頭上に不名誉の象徴的角冠を打ち樹てようとした颯爽たる若き大尉の逮捕及び判決には明らかに無関係であつた。愛人を投獄されて彼女マリー、マドレーヌの父に対する憎悪の情は抑える術もなく燃えさかった。彼女はひそかに復讐を企てたのである。運命は彼女に未知の共犯者を与えた。バステイーユ監に於いてセント・クロワは毒薬売買を業とするエグチリなる一イタリヤ囚徒と知り合った。彼は若者に致死毒、特に砒素を主薬とする調合秘法を語ったのである。

一年の刑期が明けて、セント・クロワはバステイーユより放免された。彼は惹き寄せられる様に妖しくも美しい復讐に燃える情婦の元に走った。そして、彼等の不倫の情花は、その中断されることの斯くも速やかであつた如く、急速な反射を見せて返り咲いた。

セント・クロワはパンテュー監の体験をつぶさに語った。毒殺芸術の知識も含まれていた。マリーは異常な熱心さで耳を傾けた。彼女は其の獄中談に憎い父卿殺害の暗示を読んだのである。

ド・オーブリ殺害の協力をマリーに求められた、情人は進んで其の共犯者たる事を誓った。ド・オーブリは彼の灰色の獄房に於ける呻吟の一年に対する当面の原寇なるが故に彼も亦復讐の動機を有していたのである。セント・クロワはマリーに砒素に関して凡ゆる知識を披瀝し、毒薬入手の便を約した。

既に毒薬を掌中にし、処法に通曉した後も魔性は然し直ぐには父に投薬することはしなかった。貧民救済院の頼りない哀れな病人にこれを適用したのである。彼女は此の行為を慈善のマスクの下に行った。陽蔭の一隅に息をひそめて棲息する此等犠牲の動物の食物に医薬、衣類を供し、憐れ感謝の声を受け乍ら砒素を投じ、徐々に肉体を蝕む死の影を見詰めていたのである。

史家はマリーが其の成果を目に収めた際の感情を「歓喜してなる表現で述べている。患者の大量毒殺に依って已が技術に自信を深めた彼女はこゝに父へと魔の手を伸ばした。

細心の注意を必要とする事ではあった。どんな些細な嫌疑も二人の上にかゝっていてはならないのだ。八ヶ月の間、彼女は蛇性の根氣を以って微量の毒を盛り続けた。反面、父に接するに、過去の忿激を悔るが如く、肉身を敬愛する孝順の婦女を装ったのである。ド・オーブリの心身は日毎シリ／＼と衰弱を加えて行くのであったが、彼には娘を疑う一片の理由も見出さなかった。侍医も今は匙を投げた。

八ヶ月の後、ド・オーブリは息を引き取った。成功に意を強うしたマリーは戦いて拡張した。女性にとって豪華な生活環境は他の何物——セント・クロワとのロマンスは恐らく別としなければなるまい——より重要事であった。父の遺した巨大な財産の取得以外、彼女を満足させ得るものは何もなかった。財産と共に新生活に入るに当って二人の兄弟、数人の姉妹の抹殺が必要であった。

マリーは手際よくやり終えた。綿密な策謀を廻らせた数年の短日月の裡に、凡ての骨肉が次々と影を没して行った。そして此の触れば死なん毒を湛える美妃にかゝる嫌疑は皆無であった。侍医達も、多分に彼等の困惑を隠蔽しようとの事であろう、一家を襲った死の

嵐を原因不明の血行障害に帰納する始末であった。

こゝに至ってマリー・マドレーヌは彼女の夫、妻の隷従を甘受するブランヴィリエルの厄介払いを決意した。彼のマリーに対する愛情は輕蔑を以って報いるに足るべく、又彼の財産は既に彼女の手中に帰した巨財に加産すべく動機使喚に充分であった。此の事成った時は情人と誰憚る所なく結ばれ、此の世ならぬ血腥い一對の夫婦は其の摘み取った数々の罪の果実の上に爛熟した生を営み得るのだった。

だが、注がれた美酒も此の度は情夫を陶醉させる事は出来なかった。彼はブランヴィリエル侯に何等悪感情を抱いていなかったし、又飽くなき殺人に酔うマリーと結婚する考えもなかったのである。

彼の拒絶に瞋恚の眦を割いたマリーは自力で決行した。肉身を殺害したと同量の砒素が盛られた。然し奇妙にも毒の効果は現れぬかに見えた。良心の苛責に抗し得ぬセント・クロワがひそかに解毒剤を配して、此の妻を奪われた男の生命を保護していたのである。召使に金を与え、ブランヴィリエル不知の間に服用させていたのである。

事件と通じて最も奇異な場面は、此のブランヴィリエルが最愛の妻に日夜毒殺され、一方妻の情夫に解毒剤を以って生命を救われ而も此の恐るべきパントマイムに氣附くことなく生を長らえた一幕であろう。

「悔蔑得し女性の怒りに似て恐ろしきは地界にもなし」と詩家は吟う。マリー・マドレーヌの兇性に巢食う憎悪

怨恨の情は今曾ての愛人に向けられたのである。

二十年に亘って纏綿と繰り展げられ、罪の一駒々々で綴った情事の果て、

一六七二年に彼セント・クロワも亦死んで行った——突然、そして不可解に。

彼の死因は如何に手を尽しても判然しなかった

——だが其の死の背後にマリーの白い緘手が動いていた事は疑う余地のない事である。

情夫殺害はマリー破壊の因となった。二人の口

マンスが冷却した後、彼は生命保全策として共謀して行った幾多の殺人を酷明に書き綴った書類を用意していたのであるが、それが図らずも死後、彼の手廻り品から発見されたのである。然し買収した召使の口を通じて此の事実を知るやマリーは逸早くイギリスへの逃亡に成功したのである。

不在審議の末、彼女の罪状は明白となり、砒素毒に依る大量殺人の廉で死刑の判決が下された。フランス当局員は本国召喚の逮捕状を携えてマリーの足跡を追求した。

彼女の逃亡は続いた。イギリスからドイツドイツからベルギーへ。其処で或る修道院に偽名を使って身を隠した。

フランス当局も盲目ではない。密偵は幾多変装に練けていた。僧院長になりすました一密偵は、虫の這うような根氣の末、彼女の信頼を取り結んだ。そして愛の告白、常套的駈落ちの相談。一度聖地を離れた彼女は翼を剥がれた鳥も同然であった。忽ち逮捕されフランスへと送還されたのである。

法廷は賞讃すべき公明さを以って、有罪を立証する数々の物的証拠のみに満足する偏明を避け、彼女に第二審を許容した。マリーは肩を聳やかして全罪状を否



定した。彼女は云った。

——セント・クロワは私が愛人としての彼を見捨てたので殊更誣告をしたのに違いありません——

次いで法廷に証拠物件として彼女の日誌——古今を通じて最も怪奇な独白に埋められた日誌の一つ——が提出された。其処には、彼女がその偏執癖から、現在訴追されている殺人行為は云うに及ばず、その他数え切れぬ兇悪事に関して正確且つ完全詳細な描写をしていたのである。そして此の致命的とも云うべき日誌が彼女の逃亡後官憲に依って押収されたのである。

読み進む一頁々々は大量殺人に加えて彼女の野獸性を立証する以外の何物でもなかった。其処にはアブノーマルな一美女に依って行われた肉の営みが口の端にのぼし得ぬ微細さを以って浮彫りされていたのである。彼女の経歴の斯かる面の記録は少女時代に迄遡った。

我が手になる日誌の法的信憑性を否定しようとして彼女は絶望的な努力をした。彼女は主張した。日誌は高熱に浮かされた病床で記したものに相違ない。そこに在る人間は眞の彼女の姿ではない、と。

しかし、長年に亘る公然たるスキヤンダル

に満ちた淫蕩な過去は今蜂起して、此の窮地に追い込まれた彼女に死への扉を開くに役立ったのだ。彼女の所業を知る世人の目を糊塗し、その証言を論破する事は不可能であった。遂に法廷は彼女を拷問に掛けることに依って行詰りの局面転換を計った。当時のフランスに於いて拷問は依然として合法手段であった。

袖触れ合う世の男性を魅了し尽した優婉な女体は魂凍る拷問部屋に曳かれ、運命を暗示するばかりの青白く燐を放つ裸身を苛まれたのだった。手を括られ、足を締められ、拷問台に苦悶の呻きを上げ、革鞭の唸りは白地に紅の筋を溶かし、むくつけき刑吏の前に雪の尻をもがらせるのであった。

鋼鉄の神経もはじけ散った。土牢に繋がれる身を前にして彼女は一切を自白した。肉体的には彼女も矢張りか弱い女であった。

彼女の第二審廷に於ける一成果は毒殺組織網の暴露であった。その中幾人かは宮中の要人も含まれていた。引き続き敏速に行われた他の多くの裁判には王の現在の側室モンテスパン夫人の名も連座していた。ルキ十四世の信を失った彼女はその地位をマンテノン夫人と代えられた。だが断頭を免れた事は以て幸

運とすべきであろう。

事実、この生命を脅かすべく張り廻らされた余りにも複雑なる毒殺網に、ルキはフランス裁判史上最も戦慄すべき審問の庭——焔の法廷——を復活したのである。此の裁きの庭に立たされ判決を受けた者は刑罰中の極刑を宣告された。——彼等は生き乍ら火焙りの刑に処された。

しかし、ド・オーグリ卿の娘にしてブランヴィリエル侯爵夫人であるマリー・マドレーヌは、他の無辜の者と同様前記実父及び夫を殺害したとはいえ此の火刑は免れ得た。

未だ衰えぬ美を誇る齡四十四の女性、宮廷礼服に美々しく着飾り、髪をあでやかに結び上げたマリー・マドレーヌは静かに木の処刑台に蹲き、少しく中高の断頭台にソツと首を差し伸べた。牧師が傍に立った。彼の唇は祈りの文句を呟いていた。一瞬白光る執行人の斧が閃めき、彼女の頭は柳籃に転り入った。

斯くて、史上最も艶美なる女性の一人、最も淫蕩奔放、最も血の匂いに包まれた女性——已が父及び夫のみならず、最も忠実なりし愛人をも殺害して顧みなかった女性は斯く身を滅した。

時は一六七六年七月十六日。

(被虐少年期)

愛と憎しみの彷徨

三 根 耕 二

私が恐ろしい放火少年囚としての烙印を押されて、故郷から遠く離れた此の姫路少年刑務所の冷たい鉄門を潜ってから早くも一ヶ月の月日が流れ去っていました。

暗い独房での一ヶ月間は数えて十六才の少年の身には何と耐え難い責苦の連続であったことでしょう。冷酷非情の権化とも云うべき野村鬼看守の燐火のように燃える淫虐の炎、その却火の中で私は呻き、喘ぎ、のた打ち廻ったのです。全裸に剥かれ立竦む幼い肌に加えられる鞭の一撃毎に私の蒼白い肉体は息も止るかと思う程の灼ける様な疼痛にさいなまれるのです。苦痛に歪む私の額には脂汗がじ

っとり粘りつき、声も涸れてしまうのです。屈辱と羞恥に打震える成熟し切っていない稚ない肉体は却って淫虐の鬼を妖しく刺戟するのでしよう。冷たい敷石の上でのおのゝく、真白な太股へ、小さく盛り上った臀部へと何かに憑かれた様な野村看守の凌虐の数々。ああ、私は幾度その嗜虐の犠牲^{いけにえ}となったことだろう、全く此の世ながらの生地獄なのです。何時になつたら此の苦難の坩堝から解放されるのでしようか。若さを欲ぶこともないみじめな青春を費さねばならぬのでしようか。怒り。怨み。呪いのありたけを私は心の奥底深く刻み込みました。いつかは必ず此の復讐を

してやるんだ、あの冷血の塊を、あの眼鏡の看守の取澄した衣服をむしり取ってやりたい。そして脂切った躰を思い切りいたぶり苛んでやろう、鬨り辱めて屈辱のどん底へと突落してやるのだ。此奴の誇りも自尊心も粉みじんに打砕いてやろう。そうして腹を抱えて嗤ってやろう。見栄も体裁もなく哀願し赦しを乞う姿に嘲笑をあびせてやろう。しかし現実はどうでしょう。哀れな現実、そして余りにも厳かな現実、私は淫虐の虜として冷たい敷石の上にその羞しい裸体を曝しているのです。そんな苦痛と屈辱の渦の中でいつしかそんな復讐の妄想を抱いているのでした。私は心の

奥底から湧き上る呪咀と怨嗟の思いに胸を灼くのでした。此の独房の一ヶ月の生活は生涯消ゆることなき痛々しい傷痕を稚い肉体へ刻みつけているのです。恐ろしい哀しい傷痕を暗い鉄窓から吹込んだ冷たい風も、今では青葉の薫りをのせてくる暖かい風と変わってきていました。さわやかな青葉の匂いの何と郷愁を唆ることでしょうか。時折聴えてくる遠い社会のざわめきに、幼い日の無邪気さをほる苦く思い出させるのでした。

そんな或る朝でした。ガチャリと錠の音がして扉を開けられ私は野村看守の前に呼出されました。他に小野寺少年など十人程が緊張した面持ちで呼出されてきました。皆不安に蒼白になり乍ら机の前に二列に並びました。常に傷めつけられている私共、又嗜虐のいけにえになるのかと半ば観念して練みそうになる足を引しめて並びました。泣いても喚いても、どうにもならぬ別世界、羽をむしられた小鳥とも云うべき境遇、これが私達の身を置いている現実なのです。そうして此の現実は一ヶ月の独房生活でいやと云う程、此の身に知らされているのです。

しかし今朝はいつもと一寸様子が違っていました。野村看守の傍には若い雑務の看守が



書類を手にして立っているのです。一体何だろう。面会？ 呼出し？ 何れにしても、あの鬼看守のいけいけとなるではないらしいのです。そう思うとホッとしました。皆同じ気持と見えて、一様に明るい顔付になりました。野村看守はいつもに似ぬ勿体振った顔でじろりと一同の顔を眺め廻してから口を開きました。

「お前等は今日から工場に出ることになる。工場へ行ったら規則をよく守って真面目にやらにやいかんぞ、先輩や仲間の者と争ったりせぬように、一生懸命に働いて修養に努めて更生して一日も早く社会に出られるようにするんだぞ。工場で反則をすると懲罰で又こゝへくることになる、そんな者は先生が徹底的に教育を仕直してやるからその心算でいろ。分ったな」

何と此の訓示の言葉の空々しく聴えたことでしょうか。此の男に人を教え訓すような資格があるでしょうか。全くナンセンスです。

しかしもうそんな事はどうでもいいのです。此の地獄から野村看守

の手から解放されるのです。底知れぬ拷問と止る処なき淫虐の泥沼からは匍上ることは出来るのです。これから行く工場がどんな処であるかは知らない、しかし如何なる処であろうと目前の此の男の冷たい手に捕われているよりはよいと思われまます。それ丈で気は晴れ心は仄かに明るくなるのでした。

私共は浮き立つような気持で若い看守に連れられて四舎を出ました。一步戸外に出ると空は青く澄んで白い雲が目には沁みるようでした。爽やかな風は心地よく頬を撫でてゆきます。あゝ輝やく宝石のような眩しい世界！

くら／＼とするような気持でした。それも無理はないのです。一寸想像もつかない冷たく陰惨な独房の生活、それに加えて隙あらばと獲物を狙う地獄の鞭。疼く鞭痕をさすって口惜し泣きした悲憤の夜。私はその中から明るい光の下に逃れ出たのです。解放されたのです。しかし白昼の太陽の下で見る自分の姿は悲しくなるばかりでした。憔悴し切って蒼

白い肌の色、過ぎし日のあの元気のよい悪童であった私は見違える程にやつれているのです。しかし若さはその苦難に消え去ってはいませんでした。蒼白の頬にも血の

色がのぼり紅顔と云う言葉その儘でした。肌にも稚なさは美しい肌理となつて残っています。濃い眉、あどけない口許と真白い美しく整った歯並びは人を魅きつける未成熟の美しさでした。その美少年振り故に私は後程奇しき運命に弄ばれ、色々の禍の元ともなったのです。あの四舎の少年雑役が洩らした言葉、

「お前は可愛い顔してるから工場へ行ったら気をつけろ、みんな狙ってるからナ」

何も知らなかった私に、此の言葉の意味がよく分りすぎる程に知らされたのは、それ程遠いことではなかったのです。

青葉の下の道は恐ろしい獄内とは思えぬ美しいものでした。木々の間から赤い高い煉瓦塀や古色蒼然たる建物が見えています。四舎を出た所にある広い大教誨堂(講堂)、その西側は相当の広さを持つ運動場があり、その塀際の隅には哨舎があり、拳銃を肩から吊った看守が立っているのが見えます。塀の向うに見える丘には人家や林などがあり、畑仕事らしい人影も小さく見えるのでした。のどかに動いているその人影と私共の間に何んと大きな隔りがあることでしょうか。自由と束縛、天国と地獄とでも云えましようか。そんな大きな違い。



しかし久方振りの快よい大気はそんな感傷を、やわらかく包んでくれるのでした。

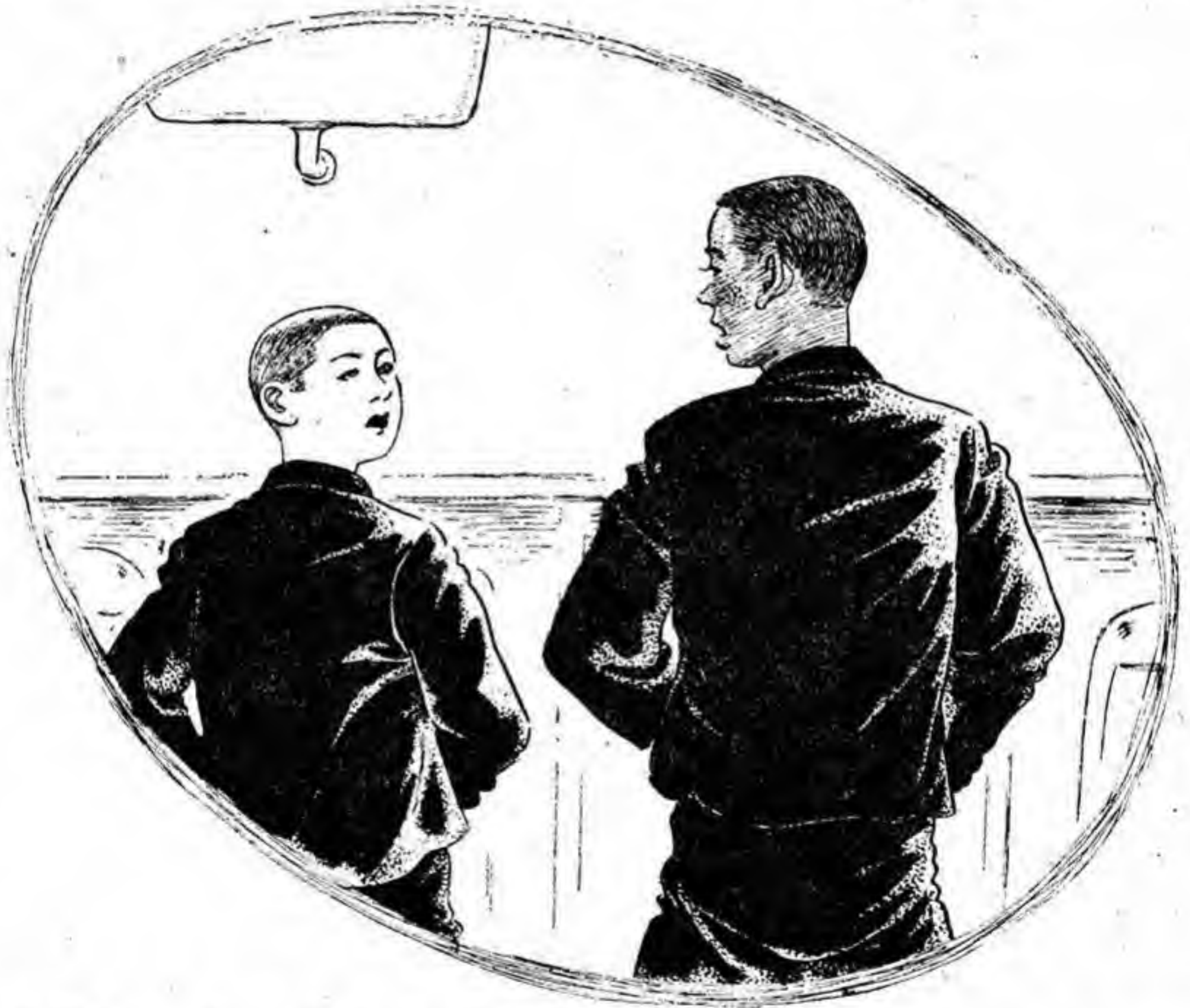
キヨロくとしてゐる私共は若い看守に促されて戒護課へ行きました。初めて此処の鉄門を潜った日、此の戒護課の調室で髯面の戒護課長に喝されてから早くも一ヶ月以上の月日が流れ去っていた訳で一寸感慨無量でした。髯面の戒護課長は私達に面倒臭そうに出役云渡しを行いました。帳簿をパラツとめくっては「二〇七番、お前は今日から五工場で紙管工をやる、舎房は七舎の五房」「何番、お前は二工場で木工、舎房は三舎の十二房」と云う工合にそれらの作業を指定し舎房を定めて云い渡しをするのです。二〇七番これが私の名前なのです。此の獄中での名前なのです。私は紙管工と云う仕事を云渡された訳ですが全然どんな仕事か想像もつきません。

すべては未知の世界なのです、舎房は今度は一人でなく何人かの先輩のいる雑居房なのですが如何なる人達と一緒にになるのかは夜にならねば分らないのです。期待と不安が私の小さい胸の中で渦巻いてドキン／＼と動悸が打っているのです。やがて云渡しと訓示が終って私共は再び若い看守に伴われて洗濯工場へと向いました。洗濯工場と云うのは全収容者の衣服、寝具等の配給、交換、修理をやっている所で、チョビ髭の小柄な看守と十五六人の少年がいました。積上げられた囚衣の繕いをやっていた少年達の好奇の眼が集中します。このチョビ髭の看守は「チンドン屋」と云う綽名で、柔道五段、剣道三段と云う猛者であることは後に知りました。さて此処で私共は古い国防色の作業衣と長着と呼ばれる室内着を受取り作業衣はその場で着替えて次へ向いました。再び戒護課の前を通過して美しい並木道を歩きます。東側の建物は未決の拘留所と木々に囲まれた病舎です。病舎とは病院の事で病氣や負傷した受刑者は茲で療養する訳です。

私達は西側の最初の建物へ向います。こゝは一工場と呼ばれ木工場で電気鋸がけた／＼ましい音を立てカン／＼と云う釘を打つ音、多

勢の少年達が忙し気に立仿いで活気があります。

私達の姿を認めて背の高い美しい口髭の看守がやってきて入口の扉の錠を開いて私共を中に入れました「新入りだぞ」と少年達がざわめいて好奇の視線が集中されました。こゝで一人をおいて、隣の二工場へ二人をおきました。二工場と云うのは機織工場です。次ぎが三工場で洋裁工場です。ずらっと並んだミシンが喧しい音を立てゝ茲にも多勢の少年達が仿いでいます。こゝでは収容者の衣服も作っています。外部の大工場の注文の作業服なども作られているのです。こゝで三人が別れて次の四工場へ行きます。四工場は鉄工所と云ったら良いでしょう。ハンマーの響きやガッツン／＼と音を立てゝいるプレス機械、電気ドリルの唸声とこゝも活気あふれ



る工場でした。もっとも従業員がすべて少年工ですから活気も満ちている訳です。これが受刑者とも思えない盛り上った肩を露き出しキラ／＼と汗をしたゝらせて立仿らしている半裸の姿。しかし此の工場からは放火、逃走事件を出しましたが、その話は後に書くことにしましょう。

四工場に残っていた仲間の大部分が入り、いよいよ私と小野寺少年の二人丈が最後の五工場へ行く訳です。小野寺少年は前回にも登場した十七才の東京生れで、四舎では私と二人がよく野村看守の淫虐の対象となったのです。そして又二人は同じ五工場へ行くことになった訳で、二人は顔を見合せてニッコリと笑い合いました、そう何となく心強い感じがしてきたのです。又長い道を歩いていよいよ最後の五工場、こゝは他の四つの

工場や倉房などと離れた北側の隅に建てられた「丁」字型の工場でした。他工場と離れているのは少年区と云って十八才以下の少年を主に集めているからで、他は準少年つまり十八才以上二十才迄と云うことになっているのでしたが、実際は九十八%迄は十八才以上が多いのでそんな区分は守られていないのです。精悍な感じの三十才位の看守が私共を見て扉を開けて呉れました。中に入るとやはり騒しい機械の音がしていました。鍵型の曲角つまり工場の真中に一段高い担当台の前に並んで立って二人の看守が書類の点検をして話し合っている間、私と小野寺は周囲の様子を呆然として眺めていました。南東側の方ではガチャ／＼と忙しそうな軍手作りの器械、そのそばでズラッと机を並べて多勢の少年が指先か／＼をやっています。私が独房でやらされて科せられた二十四足が出来なくて苛責の種となっていた作業は、こゝでもやっているのです。窓側の洗面場らしい処では床屋が次々と頭剃りをしています。そのそばでは三人座に藁草履を作っています。書洩らしましたが受刑者の履物は特殊の作業以外は全部この草履です。軍手のこちら担当台の方は印刷工で四台の活版印刷機がガチャンベツタンと動き

活字ケースの中では文撰工が多勢活字を拾い製本部は一生懸命に仕上げをやっています。植字の連中は原稿を睨んでは組版に夢中です。立派な町工場以上の印刷所でした。

鍵の手の反対側は四十人程が机の前で向い合せてマツチ箱を貼っている紙箱工と、私の行く紙管工とです。全部で百三十人程が五工場で働いている訳で私達二人も今日からその仲間入りをする事になったのです。小野寺と私はもう一度顔を見合せてニツと笑いました。しかし何も知らない笑いであったことは神ならぬ身の知る由もなかったのです。

若い看守が敬礼をして帰ってゆくと台の上から担当看守がじっと二人を見下してニヤツと笑いました。私は一寸面喰ってニヤツとしました。若い看守が帰って行って私達は騒然とした五工場に取残されてしまったような不安な感じでいた所に、思いも掛けず看守からニヤツと笑顔を向けられてどぎまぎしてしまつたのです。見上げると三十才を一寸越えたと思われる此の看守の顔は丸々としていて童顔と云うのでしうか何となく親しみを感じさせるのです。後で分つた此の看守の諱名は「ボタ餅」と云うのでした。少年達にも割に評判も良く工場を受持つ担当看守なのです。

「オイ、二〇七番こゝは辛いかな？ どうだい」私は眩しい思いで「ボタ餅」を見上げて「クリとうなづきました。そしてあわて、ハイッ」と大声で答えました。今迄ひどい目にばかり逢わされてきた私には、此の看守の態度は一寸意外とも思えるのでした。

「お前は どうして火なんか放けたんだ、馬鹿だナア、面白いのでやつたのか？」

「いえ、面白いなんてそんなこと違います、とっても腹が立ったから火をつけたんです。」「腹が立ってやつたのか、困った奴だナア、此処から出たら又火放けするんじゃないのか、それとも懲りてもうやらないか」

「イヤ、もうやらない、もうしないます。」

私は力んで答えました。罪に対する罰の恐ろしさと云うことを十二分に思い知らされている私だったので。『ボタ餅』はニコニコとして私をじっとみつめていました。

「マア、やってしまった事は仕方がないからナ、真面目にやって早く外へ出して貰うようにするんだ、先生の云うことを守って、しっかり作業や勉強をやって身体をきたえて成績を良くするんだよ、お前、先生の云う通りに守れるか、ちゃんとやれるか、どうだい。」「ええ、僕守れます、一生懸命にやります」

本当にその時の私は、頬を赤くしながら真剣な気持で答えました。又、心でもそう誓いました。

「じゃお前達二人とも未だ小さいからよく注意せんといかん事があるからよく聞いておけよ、それはネ、先輩の者が若しもお前達に仲良くしようと云ってきても、決して仲良くしてはいけない、そんな時には先生の所へ相談にくるんだ、いゝか、分ったか」

「ハイ。分りました、先生へ相談します」

そうは答えはしましたが、私も小野寺にも一寸合点のゆかぬことでした。どうして仲良くしてはいけないのでしょうか、学校でも家でも心ず教えられてきた仲良くしなければいけないという私達の常識と全然反対の看守の言葉、不可解な此の言葉、仲良くすると云うことの意味を悟ったのは、それから幾日もたないことでした。仲良くと云う意味は世間で云う仲良くすることゝは、大分意味が異なっていたのです。仲良くするお話は後程語ることにして、ペンを私共二人の上に戻すことにしましょう。

やがて、色々と工場での注意や心得を云いきかされた私達は、作業の責任者に連れられて、自分の今日から生活する作業場に行きま

した。小野寺は紙箱貼りの雑役につれられて私と別れました。もっとも別れたと云っても只場所が七・八メートル離れただけで、顔の見える場所でお互いに仕事をしているのですから、心強いような気がしていました。私は一番端しの西隅の紙管作業場へ雑役の少年の後についてゆきました。五・六台の機械がブルンブルンと動いております。その前に座った少年達は忙し気に手を動かして働いています。全部で十四・五人でしょうか、彼等は好奇の眼で新人の私を迎えました。小柄な色の黒い雑役の少年は皆に私の名を告げて紹介しました。私も「よろしくお願いします」と頭を下げて挨拶しました。雑役の少年は私に作業の内容を説明して、仕事のやり方を教えて呉れました。此の紙管と云うのは紡績の糸を巻き取る芯棒で赤、黄、青などの煙草パイプのような紙製のもので機械でそれに筋をつけ一定の数に差込む作業なのです。機械の前に一人宛腰をかけて筋付作業をやっています。クルクル廻っている機械の芯棒に紙管を突込み足でボタンを踏むとクルツと筋がつけられ手早い動作でポイポイと傍らの箱の中に投げ込まれてゆきます。それは板敷へ空けられてその前に座っている少年達に依って二十本ず

つの束に作られてゆくのです。私も教えられた通り二十本ずつの棒を作るのに熱中しました。こうして私は工場生活での第一歩を踏み出した訳です。眼を紙箱工の方へ向けると小野寺も慣れない手付きでマッチ箱を貼っている姿が見えました。私の視線に気がついたのか、顔を上げてニッコリと笑顔を見せます。私もニツとほゝえみ返しました。工場の窓は居房と違って太い木の格子です。看守の監視の届く所なので鉄棒ではないのでしょうか。人に見えない居房生活とは異なり多勢の目がある工場では逃走を図ることは先ず不可能でもあるのです。逃走と云えば姫路での二年余の生活で約十五・六回もあったやうで、之も後程書きましょう。私共は便所にゆく場合自分の席で手を挙げて大声で担当看守に許可を求め、その許可があつてから担当台の前に掛けられた「大便」「小便」と書いてある木札を持って便所に行き、用便中は便所の前に此の札を掛けて置き、終ると又担当台へ札を返してくる事になっています。私は大声で教えられた通りに手を挙げて許可を求めました。「ボタ餅」は「よし」と担当台の上から答えてから担当台を降りて軍手作りの方へ行きました。私は担当台の前を通過して便所へ入り

告白と手記と体験

懸賞募集

★賞

佳作 金★

規

定

一、枚数は一篇十枚から三十枚程度まで
 一、必ず未発表のものたること。
 一、原稿第一頁に懸賞告白と朱記のこと、原稿の返却は
 一、締切は定めませんが、入選作品は最近号に発表します
 一、賞金は入賞作品発表と同時に御送りします。

一篇に付き 三千円 若干篇
 一篇に付き 二千円 若干篇
 一篇に付き 一千円 若干篇

◇告白記の募集◇

一、上記の懸賞とは別に月例通り皆様の真実あふれた告白記を募集しております。ご希望の方は、お寄せ下さい。
 一、文章の巧拙や長短、用紙、書き方等一切御自由です。
 一、投稿者の本名やその他の一切の個人的秘密に關する事は厳重に秘匿いたします。誌上への発表は匿名で結構です。
 一、誌上へ掲載した分は掲載後相当謝礼を差し上げます。
 一、原稿は御返戻申し上げかねますが、係よりの連絡は差し上げます。
 一、原稿の御送付には開封の上第五種郵便(百五迄八円)にて御願います。

(編集部)

小便をしていると、後から入ってきたカーキ色の服を着た二級の長身の少年が並んで用を足しながら小声で話かけてきました。

「君、どこから来たの、名は何て云うの」

「ハイ京都からです、三根って云うんです」

私は二級者である彼に敬意を表して丁寧に答えました。ニキビをブツブツ吹出させた彼は十九才位でしたでしょうか、顔を赤くしながら一寸躊躇していましたが、決心したように、

「僕は軍手をやっている白川って云うんだけど、これからは僕と仲良くしてくれないか」

私はドキツとしました。さっきポタ餅から云いきかされた仲良くするな、と云う言葉を思い出したのです。それに余りに早くそのことがやってきたのですから、すぐには返事が

出来ないのです。彼は私のその様子にあわて、

「君はまだ十六だそうだから、僕が面倒見てやるよ、いゝだろう、仲良くしてくれネ」

私はまだ何も知らないのです、そう云われると此の二級の人に可愛がってもらうことは新入りである私にとっては、どんなに心強いかも知れないのです。それに先生はあんな事を云ったけれど、仲良くして悪い筈はないではないかと、私のまだ稚い判断力は考えるのです。

「えゝ、それじゃア仲良くしましょう、よろしくお願いします」

私はこうして何も知らずに重大な返事をしました。のです。彼は如何にもうれしそうに手を出して握手を求めてしっかりと握ると

汗をブツ／＼と流しながら、

「じゃア、又後でいろいろ話をしようネ」

と云うと躍り上る様な足どりで自席に帰ってゆきました。私は何だか割切れぬ氣持で自席へ帰りました。所がその日、私が二・三度便所に行きますと、後から入ってくる二・三級者の者から同じように仲良くしてくれと云う申込なのです、何も知らない私は之は一種の仁義のようなものかとも思い、又一人に承諾を与えて他の者に「否」と云えないと思つてそれに同様の返事をしたのです。さあ、此の為に後程大変な騒ぎになってしまったのです、つまり仲良くすると云う事は大変重大な意味を持っていたのです。それは次号に書きましょう。

(つづく)



私のマゾヒズム

断片

河真田子路

尿

相手の女性の協力を得ての場合のことである。野外でなら別段の準備もいるまいが室内では、何しろ直接口の中に放尿してもらうことを本願とするだけに、万一口を溢れた液体が床や畳を汚しては相手もいやがるし、後始

末が大変である。そこで次の仕度をする。

道具は透明なナイロンの、なるべく大巾の布地、それと古着若干（たとえば女の肌着とか腰巻の廃物などが理想的。）それだけあればよい。ナイロンを下にひろげて敷き、その上に古着類を適宜に配しておく。男は裸にな

ってそこに仰臥する。こうして実行すれば少々ぐらい溢れても、全然心配はいらない。ナイロンの上に溜った液体も、古布に吸収した分も場合によってはことごとく集めて飲むことも出来る。

私の空想は、このナイロン製の大きな袋を

作って、その中に裸のまま手足をエビのように縛って押しこまることである。そして多数の女性がその中に放尿する。不自由な恰好の私の頭から遠慮会釈もなくふりかゝって来る生温い液体が、もちろん口の中にも容赦なく流れこみ、否応なく飲まなければならぬだろう。夜店の屋台に吊った金魚の容器のように、私は袋ごと空間にぶら下げられ、透明なナイロンを通して多勢の女性達の好奇の視線に見守られている。何と素敵な構想だろう。

犬

マゾヒストの夢は彼女の飼い犬になりきることである。彼女が私を完全に家畜視した時、私をよろこびの絶頂におく時だろう。私も出来るだけ犬らしく振舞い、犬らしく生活する。私は番犬や猟犬ではなく、愛玩用として飼われているから、いろ／＼と芸当を覚えておかねばならない。自分では口を利く能力がない筈であるが、御主人様の言葉はよく理解し、時として手の振り方や身のこなし、又瞳の動きなどを見て敏感に御主人様の意志をさとるようでなければならぬ。厳しい訓練の結果、私は理想的な犬になりつつあるのだ。然し御主人様は少しも訓練の鞭をゆるめない。

犬は四つ足で歩く、当然のことである。私は先ず歩くことから仕込まれるのだ。四つ這いと云えば、両膝で歩いたのでは膝が痛んで到底長つゞきしない。だから私は両膝を立て歩く。すると頭の位置がぐっと低くなり、反対にお尻が高々とそびえ立つ。そんな姿を後から見るとあけすけに尻の模様を読むことが出来るし、そういうみごとな恰好は、ついちょっと叩いて見たくなる誘惑を感じるだろう。だから私はそういう姿勢で歩かなければならないのだ。より犬らしくするために私の肛門には尻尾のような物体が押しこまることもあるだろう。嬉しい時は尾を振って見せるのが犬の習慣であるから、餌を投げ与えられた時、愛撫を受ける時、私はそれを忘れずにして見せるのだ。部厚い革製の首輪が、何時も私の首にはめられている。銀色の細い鎖が冷たく私を立木につないでおく。やがて私の飼い主である女主人の手によって、この鎖がほどかれるだろう。彼女は私のあらゆる部分を点検し、自分の必要を充たすことの出来る状態に私を強制する。又、時として彼女は私をひきつれて庭を散歩する。楽しそうな歌のリズムを口笛にのせて。

縛り

人を縛るといふことは、相手の自由を奪うのが目的であることはいうまでもない。肉体的な束縛を感じることは、同時に精神的にも意志の制圧を受け、心身共に屈服状態に陥らざるを得ない。これはマゾヒストの立場からは求めてやまぬ境地であるが、といって単に自由を奪うことのみが唯一の目的で、それこそ雁字がらめにひきしばって、棒のように、どこかへ固定してしまうのでは一寸私の希望を外れる。私はマゾヒストだから勿論、縛られる方であるが、縛り手である女性の立場で云えば、相手の男の自由は奪って置くが、責め手が必要とする形に何時でも自由に動かすことの出来る状態にして置かねばならない。つまり、私は自分の身体でありながら、自分自身の意思ではどうすることも出来ないのに、彼女は何時でも自分の求める形に私の身体をやつることが出来る——というのでなければならぬ。

棒や柱に緊縛してしまつては、晒しの効果は求められるにしてもそれでは単純すぎて物足りない。だから、曾ってKK通信に飛田良二氏が書いた罪の椅子などが考えられやすい道具となつて来る。

私は緊縛ということ自体にはあまり興味がない。実際の所、縛るのでなくて「繋ぐ」という方法を用いてもらいたいのだ。犬のように馬のように。

つながれている状態では、縄や鎖などの長さの許す半径内では起臥行動することが出来るけれども出来るのはたゞそれだけだ。それ以上の事は絶対に望むべくもない。この意識の中にいることは肝心なことである。制限された自由、この僅かな自由も、事實は私の支配者の必要によって特に与えられているにすぎない。彼女の要求する、或る行為を私が忠実に果すためには、これだけの身体的自由が必要なのである。

彼女は、思いつくまゝの行為を私に命令する。私が服従しなければ、鎖を引き絞って、僅かな自由を更に抑圧し、無力化した私に、適当な刑罰を加えて懲しめることが出来る。だから、限られた自由を剝奪されていると云ってよいのである。

打たれる希望

鞭、折檻などという文字を見るだけで刺戟を受けるのは私ばかりではないと思う。言葉や文字というものは、無意味に成り立っているものでないことは当然だとしても、マゾヒ

ストにとってはこんな文字から特殊なアソシエーションを呼び、たのしい興奮を味うものだ。鞭といえ、私の眼には無力な男が犬のように這いつくばっている傍で冷たくそれを見下している女の片手に握られた懲戒鞭が浮び上る。折檻といえ、女にお尻を打擲される男の哀れな姿を連想しないではいられない。私がマゾヒストとして、そんな仕打ちにあうことを憶れているからであって、そういう連想を伴わせる言葉に一入魅力を感じるのも止むを得ないのだ。

然し実際に私は肌から血を流すような厳しい鞭に堪えられないだろう。空想する限りでは魅力ある刑種には違いないが実際の経験では、やはり苦痛がはげしくてやりきれない。私はむしろ器具を用いなくて直接平手で打ちたゞかれないと念願する。柔らかく、しなやかな彼女の掌で思い切り力まかせに打たれた。打たれる箇所は、私の場合は勿論お尻である。臀部、そして肛門の上など、狙い打ちにしてほしい。掌の温い肉感もたまらないが平手打ちというものは如何にも無力な相手に加える仕置といった感じがしないだろうか。私は五、六才位の幼児が母親の片腕に抱えこまれて、片手でピンピンと容赦もなくお尻を

打たれている光景を思い浮べている。そしてそんな風な折檻を受けたいと、本当に夢見るのだ。

幼女羨望

十二、三才位からせいゝ十五才位までの少女を見ると、私は異状に気を惹かれる。年上の割に身体が発達して、やゝ太り肉のようなのは全く素晴らしい。といって私はそんな少女を自分の思ひのまゝにしようという考えは毛頭ない。むしろその反対にそういう小さな、いわばまだ幼なさの失われていない少女達の手によって、私自身が思ひのまゝに扱われて見たいと念願するのだ。例えば、この少女の手によって私は毎朝服を着せられる。私は大人であって、然もれっきとした男でありながら、幼女の幻想にとらわれるのだ。着せられる服は真赤なビロードの吊りスカートである。五、六才位の幼女が着るものであるが、腰廻りにゴム紐が縫いこんであって、多少窮屈はあるが一杯にひろげると大人の身体も入れることが出来る。たゞ背丈が短いからたすきを肩に通すとスカートの裾はやっとお臍の上に来る程度である。お腹もお尻も丸出しにしていなければならぬ。ズロースは汚すからという理由で穿かされな

い。お便所に行く時はお姉さま（その十二、三才の少女）に連れて行って貰って、一から一〇まで手をとってさせて貰う。最後は勿論、拭いて貰うのである。私は幼児だから何一つ自分で始末する能力がない。板の間に四つ這いとなり、お尻を高々とかゝげ、相手の少女にすっかり拭いて貰わなければならぬ。私は何時も幼女として振舞い、甘え、泣き、しゃべり、歌うのである。叱られ、ほめられ、さとされ、叩かれ、いじめられながら……。屈辱と露出の願望がそんな夢を私に見させる。

改作する楽しみ

作者には悪いが、私はよく本誌に載った作品の改作をやって楽しんでる。勿論、その作品内容は私の性向に合ったもので、人物の性格や筋の展開が私を刺戟するものに限るわけだが、こゝ一年半程の間に五編ばかり改作している。まだ好きな作品がたくさんあるので暇を見て続けたいと思う。改作してどうし

ようというのでもない。私の一人の楽しみだから、個人的にも誰にも見せたことはない。おそらく永久に死蔵するか、やがて厭気がくれば簡単に破棄される運命にあるものと思っている。いうまでもないが公表の限界を超えた内容に改変してあるし、思い切った表現方法で、私自身の性向をむき出しにしており、猥褻で不潔で厚顔無恥な言葉の羅列である。はずかしくて人になど見せられたものではない。原作者を冒瀆するようなことにもなるが、もとより何処にも発表するわけでもなしこんな事をする私の気持はおそらく諒解して貰えるかと思っている。

作者自身も随分表現上の苦勞をしている事がわかる。誰だって実際に自分の真実の姿を披瀝し、訴えて多数の理解を求めたいし、出来れば希望を達成するための協力者を得たいのだ。もっと大胆に書きたい、赤裸々に発表したい。それが出来ないということへの焦燥感、それは単にその執筆者ばかりでなく、雑誌の編

集者も、又読者も一様に味わい尽くしている。そこで私の改作慾が起って来る。セーブされた表現を超えて、描写の裏側へ、マゾヒストの豊富な空想力を彷彿かせてゆく。本誌に毎号執筆しておられる沼正三氏の「手帖」を拝見しても、随所にこの手法が用いられている。勿論、私など沼氏の精練されたマゾヒズムの境域に及ぶべくもないが、私が私なりに楽しむ限りは、この差が何の不幸も感じさせないから助かる。そこでひそかに、いや大胆に私は筆をとる。誰も見ていない所で、たった一人の秘技に似て、私はも早や願慮することなく、原作者が、或は編集者が心ならずも省略したかと思われる箇所を遠慮なく復元し、補足する。生々しい言葉を容赦なく駆使して、枝を張り、蔓を伸し、思いのままに筋書を発展、拡張し、私だけの好みにすっかり変貌するまでは筆を置くことが出来ない。

（終）



女腹切

雪模様鮎川おせん

瀬川 泰子

慶安四年（一六五一）十一月四日、会津藩主保科正之の六女風姫が、三歳で病歿した。三代將軍家光の異腹の弟として特異の存在であった正之が、出羽国山形から会津四県二十三万石の城主として、若松城に入ったのが寛永二十年（一六四三）八月八日―東北諸藩への大目付役として、將軍連枝の重責を全うすべき立場に立ったのである。

が、新任後二年にして、正之は一身一家の上に、重なる不運を見舞われることとなった。それは外でもない――二男將監（一歳）、三女菊姫（三歳）、二女中姫（七歳）、七女龜姫（二歳）、と相次いで病死し、今また六女風姫の急逝に逢い、平均一年に一人ずつの子女を病魔に奪われたことである。

特に、七女龜姫が死去した慶安四年四月四日は、將軍家光の永の間の病氣もとみに進み、いつ命終の時が迫るかはかり知れないとい

う危急の折であった。

家光は、最も信頼する正之を臥中に召し、幼主家綱を四代將軍として十分に輔佐してくれるよう最後の頼みを遺すと遂に息を引き取った――時に四月二十日。

今や正之の責務は、会津一藩の治政だけではない。幕府の政務を執掌すべき重任が倍加されたのである。

そこで正之は、会津藩内の政務を城代北原采女光次、老職田中三郎兵衛正玄、小原五郎右衛門光俊、成瀬主計重次らにゆだね、藩士一同、これに服従協力するよう厳重な示達を下した。

ところが、それから三ヶ月とはたたぬ内に、例の由井正雪の謀叛露顕の一件が起り、天下に散在する牢人（浪人）どもの動向に対し、幕府は監視と圧迫の度を強める態勢をとらなければならなかった。関ヶ原、大阪の陣以来の不平の徒の行動が、幕府の死命を制しかね

ぬほどに結集され盛り上げられたなら……—これこそ幕府主腦の心痛であつた。正之は最も強力な後楯として、幼主家綱を支えなければならぬ。

領主として、会津一藩の治政は勿論ゆるがせには出来ないが、正之の立場と関心は、より広く天下国家、徳川宗家の浮沈にかかつて来たのである。

「お国元の御政道は、不肖われら上役を以て存分に切り切りまする故、殿には何卒お心安う思召されますよう」

という城代北原采女の誓詞を力に、正之はほとんど江戸暮らしをづけていた。

そこへ又六女風姫の急逝である—正之は度重なる父子恩愛の縁の薄さに、しみじみと嘆声を洩さざるを得なかった。どの子もみな頑固でない年齢で、いたいたしく死んで行く。権勢も富も、すべてのものが何の役にもたない絶対の非運が、自分に宿命づけられていると思ひあきらめなければならなかった。こうした傷心の領主を目のあたりに見、また遠く御心中をお察し申し上げる藩士たちにとつて、殿をお慰めする唯一つの道は、藩内平隠無事に心がけるほかはなかった。それこそが、せめてもの弔意の表示であり、敬慕の至誠を捧げる形であると考えた。

城代北原采女は、そのことを特に藩士一同に伝え、一層の自覚と精進を促したのである。中でも、先年（正保四年三月十二日）殿より特に要望せられた「廉恥の風」を、この際新たに興し、私怨私闘の如き振舞いなく、全員一致して御心を安んじ奉るべしと厳命を下したのである。

越えて承応元年の正月は、三代將軍御他界、領主喪中と重なる悲

しみの中で、歌舞音曲は勿論停止され、廻礼も遠慮して、ものさびしい新年であつた。

十二月の半ばに降つた大雪が、そのまま寝雪になって、町々には真っ白な雪を積み上げ、その間に、踏みかためられた道が地上二尺の高さにつけられていた。大晦日は、夜に入ってからまた牡丹雪が会津盆地を一面に降りこめた。

藁笠をつけ、ゲンベ（雪沓）の下にギツチギツチと雪を踏みしめて行く寒々とした人影が、町筋のあちらこちらに見られる会津特有の雪景色であつた。

どんよりと低く垂れた雲の下に、会津の町は暗鬱であるが、何事もなくおだやかに新しい年を迎えたかの如くであつた。

ところが、九日の戌の刻（午後十時）、城南にあたる赤井町と当麻町の交叉するものさびしい辻の雪の中に、中年の侍が惨殺死体となつて発見されるといふ事件が突発した。

一刀はまともに脇腹を貫き、二刀は背後から左袈裟掛けに肋を斬り下げていた。見事な手練であつた。噴き出したおびただしい血が雪を染めて、その真紅の飛沫の中に埋もれるようにもがき倒れている姿は、一層の酸鼻を感じさせた。

被害者は、家士の阿武太郎左衛門であることはすぐに知れた。翌朝、早速に妻女はお呼び出しとなり口書きを取られたが、太郎左衛門はこの日、昼から妹の婚家先きに招かれてしたたかに酒を振舞われ、元気に帰路についたという。妹のもとを辞してから間もなく、太郎左衛門の口ずさむ宝生流の謡の聲が静かな雪の夜気を伝わって来たのを聞いたと、これは妹の口書きに述べられた。

太郎左衛門は、藩内きつての居合いの名手であつた。それが、刀

身をわずかに五、六寸くつろげただけで、もろくも斬り倒されたということは、相手がよほどの遣い手であることを物語っていたし、前後二ヶ所の致命傷から見ても、加害者はあるいは一人ではあるまいと思われた。

怨恨か、私闘か——いずれにしても仲間討ちに相違なかった。しかし、加害者の証拠物件はなに一つ残されてはいない。

御目付所は、太郎左衛門の素行を調べあげた。評判はまことに悪い。酒の上での敵が沢山あった。腕を自慢の乱酔粗野、特に足軽連からの悪評は大したものである。遊廓堀江町通いの習癖も噂にのぼっていた。太郎左衛門の横死は、ただ時間の問題であったと言う者さえいる。今まで何事もなかったのは、太郎左衛門のずば抜けた剣業のためだという声も聞えた。

だが御目付所としては、それだからと言って太郎左衛門殺しの下手人を追求しないわけにはゆかない。太平無事であるべき世に、殺人という大罪は許されるはずもなかったからである。

嚴重な探索も、何の効果を挙げ得ずに空しく月日が流れた。城代北原采女は、江戸表にあって日夜天下の政務に腐心する藩主正之公に対し、取締り不届きの責めを痛感して、御目付所を督励しつづけたが、下手人



の手がかりは依然としてつかめなかった。

五月二日——供番宮本四郎右衛門の妹八重が、原因不明の自害を遂げた。納屋の片隅でひそかに咽喉を掻き切って果てたのである。

それから半月後、宮本四郎右衛門は、御目付所に対して、阿武太郎左衛門殺しの下手人は自分であると名告り出た。四郎右衛門は、ただちに牢囚として捕えられ、峻厳な取調べを受けることとなった。「かねてより阿武太郎左衛門の言動には、心に含むところはござりましたなれど、討ち果そうとまでは思い及びませんでした。然るところ旧冬のさる日、妹八重、所用あつての帰り途、酒気をおびたる太郎左衛門めに強いられ、諒訪神社境内にて手籠めにあい、死にま

さる辱めを受けし由を聞き及び、怨念やみ難く討ち果しましたる次第。

妹はこの秋、芦沢藤十郎がもとへ奥入れと定まりおりましたる者、それがしより事の次第を藤十郎に相伝えましたところ、藤十郎もその折の八重の如何とも為しがたき仕儀を勘考いたしくれ、かえって八重を慰め励まし、狂い犬に噛まれたとはこの事よ、その傷手はそれがしのこの胸の底にて癒しくれようとまで申し、われら兄妹異常の感銘にひたりましたる次第にござります。されど、兄として妹の無念黙視するに忍びず、太郎左衛門とは俱に天を戴くべから

ずと思量仕りました。太郎左衛門殺害の意志は、誓ってそれがし一人に発するところにござりまする。しかしながら、妹はすでに、之れがしが下手人なることを逸早く察し、兄を罪人に陥したも所詮はみずからの失態ゆえと深く思い入り、且つは夫たるべき藤十郎の寛容の性に縋りておめおめ生きのび、妻の座にすわることの空恐しさに打ちひしがれ、御存じの如く、われとわが命を断ちましてござりまする。妹亡き今と相成りましては、われら兄妹の恥を忍び、闇討ち殺人の大罪をありていに言上の上、何分の御説お待ち申したく自訴に及びましたる次第にござりまする」と四郎右衛門は、涙みなく自供した。

ところが翌々日、供番鋤柄嘉兵衛、浅井三平治、組付鮎川市左衛門

芦沢藤十郎の四人が連署の上、太郎左衛門殺しの下手人は宮本四郎右衛門一人にてはこれ無く、われら五名同心して討ち果したる者に、左袈裟掛けの一刀は、鮎川市左衛門に御座候と届け出た。この五人は、常々劔の道をもって相許していた硬骨の仲間で、中でも鮎川市左衛門は、江戸勤番の折、道場破りの偉名をとどろかした真影



使

流の遣い手である。

取調べは一転して「徒党」としての扱いとなった。その動機は、一片の同情に値いするとは言え、形の上からは飽くまでも私怨私闘であり、徒党を組んで一人の同輩に闇討ちをかけたと見なされなければならぬ。しかも五ヶ月近い間、御目付所の苦心をよそに恬然として日を過していたという行動が「廉恥」を尊ぶべき士風としては非難追求の対象になった。

同輩、下士の同情は翕然としてこの五人に集ったが、老職成瀬主計重次は、藩主正之公の御心中を推察し奉って、特に謹慎精進の挙に出ずべき時機に、この騒動をひき起した責任は極刑に値すると主張して譲らなかった。城代以下、老職の一部には死一等を減ずる処置をとという温情主義の傾向もあったが、遂に極刑論が勝ちを制した。この場合、極刑論の方が、いかにも筋が通っているという強味が感じられて、一気に押し切った形となった。

「切腹」の申渡しは五月二十日に行われ、翌二十一日の執行と決ったが、家族、近親と最後の別離を交す恩典さえ与えられなかった。

老職成瀬主計は、この度の峻厳な措置によって、藩士一同の戒心と反省を助長すべきであると説いたのである。

二十一日申下刻（午後五時）、五人は白装束姿で、西出丸にしろえられた土壇の上に端坐した。五人は、三人と二人に分れてカギ型に並んだ。直接刀を下した宮本四郎左衛門と鮎川市左衛門は並んで正面に位置させられた。丑い屏風を施された見通しの刑場で、二人はおたがいの最期を見届けることが出来る恰好になった。

一の太鼓が鳴るのを合図に、鋤柄、浅井、芦沢の三人が一齊に三宝の上の腹切り刀を取り上げた。芦沢藤十郎の面上には、ほかの二人とはちがった異様な感情がみなぎって抑えがたい無念さがその複雑な想念を色濃く盛り上げているように見受けられた。介錯役は一歩右足を開いて高く構えた。

袴を押し下げるようにして左腹を撫でおろしていた切腹人は、一声とも呻きともつかぬ双声と同時に切尖きを腹に突き立てた。肌着の上から突きささった刀身のあたりに真赤な血が滲んだと見えた一瞬、刀を右に引き廻すゆとりもなく首は土壇の上に落ちた。ガバツという音がして頸部の切り口から物凄い血が噴き出し、三人とも同じような形で上体が前に倒れ崩れた。宮本四郎右衛門は、端坐しながら思わず目をつぶった。

二の太鼓が鳴った。

「市左。済まぬ」

と、四郎右衛門は右隣の鮎川市左衛門に呼びかけた。声がふるえているようであった。——この期に及んでなにを言う、天なり、命なり、せめて死に態を立派にすること以外に道はないという思いをこめて、市左衛門は無言のまま四郎右衛門の目を強く見返した。

市左衛門は、この弱気な妹思いの友の最期を見届けてやりたいという気になった。四郎右衛門が襟をはねて両袖を抜きにかかっても、市左衛門は一点を見つめたまま静かに身じろぎもしなかった。

四郎右衛門は、左脇腹に突き立てると、一気に引き廻して臍の上まで切り、あえぎながら斜右上に刀を引き上げた。血の氣が一遍に引いて、唇がワナワナとふるえた。崩れかける体をやっと持ちこたえ、血にまみれた刀身を握ったままの右手を膝に支えた時、苦悶は絶頂に達したと見受けられた。市左衛門は、この友の呻吟の声を耳にしながらなお前方を見つめ、網膜の片隅に友の断末魔のしぐさを非情な冷たさで感じ取っていた。バサツという音がして、赤い光がいきなり市左衛門の目の中に飛びこんで来たように思った。それっきりであった。

市左衛門の横と斜向いに四つの友の死骸が倒れていた。それらは、血の海に漬かるような恰好で崩れ伏しているのである。検視役の面上にも、さすがにこの凄惨を直視しがたい焦ら立ちと悪感がありありと現れていた。

市左衛門は、先刻の一の太鼓を耳にした時の、五体を突き抜けて行くようなあの昂奮が、不思議といつの間にか消え失せてしまっているのに気がついた。心はあくまでも澄みかえっているという気がする。無残、凄愴、酸鼻……そのようなさまざまな衝撃は、もはや何物でもないという気さえする。

これで二十五歳の生涯が終りになるという感慨も、別段の悲しみをそそりそうにもなかった。鮎川家の断絶も、宿命の流れの上に必然的にやって来る単なる現象にすぎない。それはうたかたのように、人々の関心の表皮を擦過して行くだけのことであろう、四つの

命は、すでに眼前で断たれてしまった。間近かに見える小田山の松の緑は、この悲劇的終末には何のかかわりもなく滴るように色づいている。人間の生き死にということは、巨大な自然の風物の中で、わずかな時間の上に演じられるはかない営みにすぎない。自分の死もまた、それ以外の何物でもない——どのような死に態であろうとも、「死」とはおのれにとって一切の消滅であり、一切の忘却である。それは「無」に帰することだ。あわてず恐れずその「無」の中に入りこんで行かなければならない。潔いということはその「無」を見つめ、勇気をもって一步を踏み出すことにちがいない——市左衛門はそう思い定めると、むしろすがすがしいものを探り当てた落着きの上に端坐していた。

——出来ることなら、この気持をせんに伝えたい。せんの悲嘆を少しでも薄らげる力になるであろうに——と、市左衛門はその時ふと若い妻の面輪を描いた。切ないという気持が腹の底からこみ上げて来た。

自訴に及んでから四日の間、牢内の眠れぬ夜毎に、市左衛門は妻のことをしきりに思いつづけていた。十六歳の若さで嫁いで来てから今日の日まで、わずか一年と三ヶ月の月日しかなかった。昨日切腹の御説を拝してより、市左衛門の心を去来した一大事はこの妻のことであった。二十日月が牢内にさしこんで、想い出はひそかにくりひろげられた。命をかけてかきずいて来てくれた妻が、唯一の支えを失って、頼り少い寡婦に追い落された後、いったいどうして生きのびて行くであろうか——最後に一目、はげましのことをば残してやりたいと、そればかりを一途に思った。しかしそれは空しい念願にすぎなかった。二人の心と肉体を賭けて、夫婦の哀歓を尽す

には、過ぎ去った一年あまりの月日はあまりにも短くあっけなかった。黒髪の匂い、肌の感触、なおくくと崩れかかるあの肢体……市左衛門はこの切なさには打ちのめされた。

しかし刑場に引き出された瞬間から、この想いは心の中から払拭されていた。もののしい警衛の場に、打ち揃って出て行くという緊張のために、一切の雑念が消え失せてしまったのかもしれない。それがやはり、生死の煩惱を超克したと自認した刹那に、あざやかにまた浮びあがって来たのである。

——女々しいのか？——とひそかに自問してみる暇を自分に与えることが恐ろしいという感じがした。この一角から「死の覚悟」が崩れ落ちることを否定し去る自信がなかった。市左衛門は軽く一礼すると両袖をはずした。四郎右衛門のあの苦しみ様は見苦しいと思う。いずれにしてもわずかな時間ではないか——

「生きている人間」としての最後の動作が、この一瞬に凝集されているのだ。真影流必殺劔の修練は、われとわが身を斬り裂く今日の日のためにあったのかもしれない——市左衛門は袴をグンと押し下げ、十分に下腹に力を入れた。切突き三寸を現した短刀を左脇にさしつけて構えた。目をかすかにつぶって一呼吸、二息めを吸いおわるとハタと止めた。瞬間、切突きは吸いこまれるように没し、純白の肌着に見る見る血の色が広がった。市左衛門はカツと目を見開き、唇を固く結んだ。コメカミのあたりがビクツと動いた。歯を食いしばったためである。

三寸の深さに斬りこんで刀身を肌着の上から引き廻すのは並大抵の力ではなかった。市左衛門は渾身の力を右手にこめて臍に斬り進み、そのまま右脇腹一杯に掻き終った。上体はビクとも動かなかっ

た。呻きも息も洩れなかった。切尖きは斜左上に向ってカギ型に引き上げられ、そこで念を押すようにグツと一刺し深く突っこまれた。血は袴の上縁を横一文字に染め、それは白一色の死装束に映え、凛として動ぜぬ市左衛門の雄々しさに支えられて、むしろはなばなしい壮観とさえ感じられた。検視役の数十の瞳は、この一挙一動に吸いつけられたように動かなかった。

市左衛門は刀身を抜くと、切尖きを外側にして右手の握りを右膝の上に置いた。

「いざ」

首をシヤンと立て直すように、ひとときわ背筋を伸ばしながら介錯役に声をかけた。灼熱の痛みを耐えている人間の声ではなかった。力に満ち、相手の肺臓に迫り——それは地獄の声ではなく、白刃を青眼に構えて立ち向う裂帛の声であった。

大刀がサツと斜めに流れた。元結いが切れ、ザンバラ髪ざんぱらかみのすさまじさで、首は膝もとに落ちた。

その夜の内に、断罪の様子はそれぞれの家族に知らされたが、特に鮎川市左衛門宅には、同役の長井藤兵衛がおとすれ、ひととき立派な切腹ぶりを仔細に伝えた。

「ただ今のお話にて安堵いたしました。どのような最期やらと、そればかりが気がかりでなりませなんだゆえ」

と、市左衛門の母は悲しみを面に表わさず、同役長井の好意を謝した。

間もなく母とせんは、市左衛門の義弟香坂覚兵衛方に身を寄せることになった。



鮎川家はもと上杉家の家臣として武功特にすぐれ、市左衛門の祖父義元は上杉景勝に仕え、御馬前を守って流れ矢にあたり、左足は跛となっていた。後に鳥井左京亮忠政、忠恒の二代に侍し、忠恒が世を捨てた後しばらくは職を失い山形の最上に遁塞していた。この時保科正之が、信濃国高遠から転封されて山形に入り、義元の武功を聞召されて、特に二百石をもって召抱えられ、更に従って会津に来たのである。

義元には二人の男子があり、兄は四郎兵衛、弟は弥五兵衛と称した。四郎兵衛には一男一女があり、男は金弥といふ、女は香坂覚兵衛に嫁したが、祖父義元の死後、金弥は名を市左衛門と改めたのである。父四郎兵衛は病弱で、三十代で歿していた。市左衛門の妻せんの父は弥五兵衛で、つまり従兄妹同士縁組みであったわけである。

夫と呼び、妻といたわられた月日こそ、一年あまりの短さではあったが、せんにとっては、夫市左衛門は世の常の契りとは事変り、あどけない頃からの一途な親愛の対象であった。想い想われるという下地の上に、正式の媒介を立てて結び合わされた二人は、まるで夢のような月日の流れに身をまかせていた。若くして相別れるなどという最大の不幸が、こんな間近かにポツカリと悪魔の洞穴のように待ちかまえていようななどは想像もつかぬことであった。

せんは、与えられた香坂家の離れに引きこもりがちに、夫とのさまざまな想い出にふけては、遣り場のない憂いを抑えるよりほかはなかった。

断絶になった鮎川家の若い寡婦として、これから先きこの嫁女をどう扱ったらよからうか——これが母の心痛であった。親同士縁つ

づきの心安さで、せんの実家にも相談してはみるが、せん自身が今のところ亡夫の位牌の前を離れようとせぬかぎり、別に名案も浮ばなかった。

飯盛山の茸狩り、芋煮の季節も過ぎ、東山の紅葉も色づき、やがて散った。十一月の声を聞けば、会津はもう雪のおとずれである。初雪は案外に早く来た。音もなく降りしきる白い綿つづれを見てみると、この雪の魔性にさそわれてもしたように、阿武太郎左衛門殺害を決行した亡夫のことが、ひとしおしのぼれた。

十一月半ばのある日——信濃国高遠に住む郷士伊藤八兵衛のもとから、せんの実家にあてて飛脚便が届いた。この八兵衛はせんにとっては母方の伯父にあたる人物であった。

翌日、香坂覚兵衛はせんの実家に招かれて、折入っての用談に時をすごした。覚兵衛は話を聞きおわると、

「それはもっけの幸いと申すもの。是非そういうことにお願ひしたいものですな。あのままではせん殿もお可哀そう。若い年盛りをあたら仏仕えでもござりませぬからのう」

と、はればれしい面持ちで言った。

「貴男様より、何卒せん様の胸中、母御様のお心組みなどお聞きあそばして下さりませ。妾より申し出ますは、ちと筋もちがうかと存じられまするので」

と、せんの実母は覚兵衛に改めて頭を下げた。

「委細承知仕りました。事が事ゆえ、二つ返事でというわけにも参りますまいが、時をかけてジツクリと考えてもらえば、よい結果も得られようと申すもの。万事おまかせ下され」

覚兵衛は自信ありげに辞して行った。

その夜覚兵衛は、離れの間에선、と母をたずねた。

「実は本日、せん殿、お里方に呼ばれましたのお話に、高遠の伊藤八兵衛殿より不意のおたよりにて、この際せん殿を養女に迎え、折あらば良縁を求めて再嫁の道を講じたく、本人にもまた市左衛門殿母御にも、早急に御承引の意向を承りたいとの事で、内々の御相談を受けて参りました。それがしも常々せん殿のことを心にかけておりました折からにて、思いがけぬ天恵と喜びおります。鮎川家断絶の今日、母御はそれがし方にてお心安うお暮しあそばさるるは至当なれど、将来あるせん殿の身の振り方は、一時の昂奮や世間態にかまわず、熟慮なさらねばなりません。八兵衛殿の御厚情、よくよく心にしめて御勘考下され。御返事も、いまずぐにとは申しませぬ。十分にお練り下され」

覚兵衛は諄々として説くように話を進めた。母には一種の安堵に似た軽やかな表情が見えた。

「せん殿、よいな。周囲の人々が、いま何を気遣い、何を望んでいるかを、よくお考え下され。事はせん殿の胸三寸にかかりおることですぞ」

「はい」

せんは深く頭を垂れた。

「高遠に行かれるとしても、雪国の冬をおかしてお運びもなるまいから、所詮は来春ということに相成ろうが、八兵衛殿への御返事は一日も早いに越したことはないと存ぜられますので、その辺もお心して下され。頼みましたぞ」

覚兵衛は、自分の意向は十分にせん殿の胸の底にしみこんだにちがいないと思った。暫くの時を待ちさえすれば……覚兵衛は好結果の

来るのを疑わなかった。

十二月に入って雪晴れの一日——せんは亡夫の同役であった長井藤兵衛宅をおとずれて、切腹の日の有様を、もう一度詳しく聞き出した。

「それにしても、もうあれから半年になりますな。早いものだ。しかし市左殿の切腹の態は、永く会津藩の語り草でござりまするわ」と、長井藤兵衛は付け加えた。

二十日には、久方ぶりで実家の母をたずねた。

「決心がおつきかえ」

と、心待ちにしているらしい母に、

「明二十一日は月命日にあたりますゆえ、御霊前でよく考えをまとめたいと存じております」

とせんは返事した。母は、尤もだという面持ちでうなずいて見せた。水入らずの母子になり、ゆっくり母の手作りの御馳走を振舞われて帰ったのは夕刻であった。その夜せんは終い風呂に、いつもより時間をかけて入った。雪がまた降り出したらしい。

母は隣室でもう寝についていた。せんは灯をかき立てると巻紙の上に筆を走らせた。文面は、もう何度か胸の中に練りなおされていた。筆は、意志そのもののよう紙の上を滑って行った。

「武士の家に生れて、忠臣と称せらるるは終始心を一にして二君に仕えずと聞き及び候。貞女は一志にして両夫に見えずとの世上の言も有之候えは、妾、恵まれずして別離の悲しみに沈みしといえども、亡夫早世を口実として貞女の道を破るは、妾が志にては無之、いま信州に行き両夫に見ゆるの機を得なば、奔女の譏りを免れざることを火を見るよりも明らかに候。親類縁者ござりて妾が身を憂い給

わるは心苦しきことなれど、貞女の義を失いて生を貪るは禽獸に齊し。希くは地下に告げて、この身を辱しめざる事を。
手枕の透き間の風もいとう夜にさぞや卒都婆の寒くやあるらん」
書きおえたのは、もう丑の刻をかなり過ぎていた。



神

明けて二十一日——市左衛門の第七回目の月命日であった。せんはいつものように、市左衛門の好物の品々を盛って高足膳をしつらえると、牌前に香華を手向け、膳を安置して永い間読経三昧にふけていた。母もその側で合掌した。

「母上様。かねての伯父上よりのお話の件、本日の命日を機に亡夫の霊前にて心を決めたいと存じます。心を澄まして御返事申し上げたく存じますゆえ、暫時、妾ひとりにさせて下さりますまいか」
せんは穏やかに母の意を叩いた。母はいたわるような眼差しで見返すと、静かに部屋を出て行った。母屋への廊下を遠く去って行く足摺りの音に、せんは耳を傾けていたが、立ち上ると手宮の中から昨夜書き認めた封書を取り出し、仏壇の前の間のあたりに経机を据え、その上にその封書を置いた。下手の櫛の中に用意しておいた白無垢に着換えるのに、さほどの時はかからなかった。経机の手前に三宝を置き、その上に帯の間から抜き取った黒鞘の短刀を横たえた。

せんは袈裟の裾を払って三宝の前に正坐すると、白襦子の帯を解き、それを畳んで左後方に押しやった。ついで腰紐をほどき、代りに細腰のあたりに芯を入れた三寸幅の紐帯を二重にキツチリと巻き、左側で結び止めた。

せんの覚悟は、夫市左衛門切腹の日すでに決っていたと言ってもよかった。ただ出来れば、一周忌の勤めを終えて、同じ日同じ時

刻に夫の下に馳せ参じたいと考えていたのである。伯父八兵衛の配慮が、この初志を翻えさせた。年明ければ高遠に引き取られるであろう——自分がもし生きのびるとすれば、周囲の情勢は、結局のところ自分をそうした形に持って行くにちがいない。そうなる前にかねての志を成し遂げてしまわなければならないとせんは思った。せめて亡夫の月命日に、夫と同じ死に態が出来れば本望としなければならぬであろう。せんはすでに、おのれの「死」を喜び迎える心の準備が出来あがっていた。

せんは両手を襟にかけて、上衣と肌着を重ねたまま押し開いた。ふくよかな乳房が、その間からあふれるようにこぼれ出て、白く光って盛りあがる乳房の先きに、色づいた乳首が、ポツツリ弾みを見せて立っている。せんはそれを見下しながら、更に押し開くと、乳房のすぐ下あたりから、下腹部一带に巻きつけた白木綿の腹巻が現われた。固く巻きつけた腹巻の上からも、臍の位置がそれと知れるほどに、そこだけはかすかな凹みを感じられる。開き終るとせんは、張り切った乳房を両手の中に抱き上げるように支えて強くおさえた。はげしい動悸が、その乳房の中からドキドキと響いて来た。——恐怖ではない。おののきでもない。それは不思議と夫市左衛門の体臭をかぎあてた時のような、頬赤らむほどの甘美さで高鳴っているのである。

せんは、乳房を抱きしめたおのれの仕草の中に、夫のあの筋骨たくましい迫力をふと想い、われとわが手にまさぐっている孤独のわびしさに打ちひしがれるような気がした。

「妾は、貴男様あつての妾。一人では何としても生きては行けませんぬ。お側近う参ります。よう来たと固く抱きしめて下さりませ」

——せんは短力の鞘を払うと、切尖き三寸あまりを残して白木綿を巻きつけ、右手に執って、右膝の上に一旦支ええると、正面仏壇の位牌を見上げた。

体中に、自分以外の何かか潜みこみ、未だかつて味わったことのない昂揚された気持が太腿から腹にかけ、更に乳房にのし上って溢れて来るような気がする。

せんは頭の中には、もはや自分と夫と二つのものしかなかった。しかも、たがいに薄光の中で手まさぐり、相抱き、唇を相接しようとする時のあの期待と昂奮とが、そのまゝ自分を襲っているとさえ思える。

せんはその時、仏壇の台座の黒漆の面に、胸から下がうっすらと映っているのに気づいた。もちろん、はっきりした輪郭の線が見られるわけではない。しかし、乳房の位置も、腹巻の白さも、押し開いた肌の色と白装束のけじめは鮮かに感じとれた。せんは、それに気づくと、急にカッと上気した。そして思わず左手を伸して、経机を少し横にずらした。下腹部も正坐した膝のあたりも、膝に支えた短力の影も、今度は残すところなく映って見えた。

せんは、おのれの影に見入りながら、左手で再び乳房を抱き上げ、その手を更に腹巻の上から左脇腹におろし、ムックリと持ちあげ、映っている下腹部全体を一度、二度、三度と撫でた。映っているその手は、おのれの手とは思えぬ異様な情感をかきたてて、あらわな肌の上を滑っているという感じである。せんは欲情の罠の中に陥ちこんでうっとりとしはじめている自分を発見する。冷たい刃物が、柔肌を無残に切り裂いて行くなどという恐れも、気負いも、悲愴さも感じない。刃が突き刺さる一瞬の、この情感の最高潮へ、刻々と迫

って行く息づまるような時の刻みが全身に伝わって来るのだ。

せんは、右手を揚げて、撫で終った左脇腹に切尖きをつけた。左手は、強く左下腹部に当てがい、思い切って一閃刃を深く突き立てようと身構えた——が、その時、せんは急に腹巻の上から切り裂くもどかしさを感じた。

「素腹を切ろう。夫のあの肌を知りつくし、歡樂の宴に波打ち汗にぬれたこの素腹を、じかに切るのだ。見届けるのだ。この腹が、どんなに美しく血ぬられるか、それを見届けるのだ——」と思いつくとせんは左手を後に廻して、腹巻のよしこみの端をはずし、グルグルと三巻きの長さをほどいた。

改めて見下す乳房の谷間から、素腹は弾力を秘めて盛り上っている。臍は深くかくれて、臍窩の周囲は弱を作っている。

せんは素腹の肌を何遍も撫でさすり、グツと腰を伸ばすように下腹に力を入れた一殺那、切尖きをブツリと突き立てた。シーンと全身を貫く灼熱のような衝激——市左様……市左様……市左様——と、せんは囁言のように口走りながら、目は台座に映るおのが影を見つめ、キリキリと臍下一寸に引廻した。

痛い——という感じではない。冷く、熱く、引きむしるように五体の真ん中に熱風が吹き荒れている。せんは一瞬ハッと見下した。すでに、血は左下腹半分を真紅に染め、臍の真下に血にまみれた短刀が突き刺さっている。

「お、切腹……切腹……市左様……市左様——」せんは、苦痛を越えて狂おしく光りそのまゝ右脇腹に一文字に切り進んだ。さすがに女の力——額には脂汗がにじみ、下腹一面に襲って来た得体の知れぬ痛みに、思わず左手を畳に支え、フーツと食いしばっ

た歯の間から一呼吸……また一呼吸。

せんは、二息めに漸く上体を起すと、抜いた刃を臍に擬し、弱になつた奥深く力まかせて刺しこんだ。

「見届ける……妾の最期を妾が見届ける——」腹の奥にグツと響き伝わった衝激は「完璧」の想いをかき立てた。

と、急に目の前がスーッと薄明の暗さに蔽われて行くような気がした。持ちこたえていた体の中心が、右に左に揺すぶられるような不安定な波が、せんの朦朧とかすんで行く意識の中に現われては消えた——しかし、それは極くわずかな時間であった。

「せんは、市左様に恥じぬ立派な最期を……せんは市左様の妻でござりますゆえ……」もう声にはならなかったが、崩れかける気力の中で、せんはそれを思いつづけた。

臍から抜き取った短刀の切尖きを左手につかみ、乳房の下に当てがうのがやつとであった。

「死ぬる——」と思った瞬間、せんはそのまゝ前にのめった。血の上に左頬をつけ、唇を固く結び、想いを遂げた安らぎの中にせんは横たわった。

行年十七歳——外は、昨夜から降りつづけた雪が森々と音もなく、寸と積もり尺と積もっていた。
(おわり)

○告知板○ 本誌の寄稿家並に投稿者に対して寄せられる読者

の方々のお便りは、支障なき限り編集部に於てつとめて転送の勞をとっております。但し中には、執筆者の住所氏名の照会が少なからずありますが、編集部としましては、御本人の御許しがない限り絶対にお知らせ致しかねます故、左様御承知願ひ上げます。

変
の
字
夜
ば
な
し



浮 家 鷹 三

(一)

「いや全く、私という人間程、世の中に困った厄介なシロモノは、先ず有りますまいて……と申したただけでは、何の事やら一向に、お判りになりますまいが……、まアぼつととお話いたしましたよう……。」

そう云って、この病院に住込みで、掃除夫に雇われて居る老人は、これから筆者に次のような、珍らしい変った話を、訥々として語り聞かせて呉れるのでした。

以下「私」とありますのは、即ちこの老人自身の事を申しますので、読者は、よろしく

左様御承知を願います。

× × ×

「私は当年、五十二歳に成りますが、未だに——いや、恐らくは是からの、残り少い一生をかけても、私のこの……、何といふますか一風変った趣味を満足させる事は、先ず以て難しかろうと存じます……。と申しますのは——私は若い頃から、とんでもない妙なものが好きで堪らなかったのでした——いえ、只今の時世では、左様さして珍らしいとは申せぬかも知れないのですが？……まア余り勿体ぶって、氣を持たせる様に思われても何んですから、一つ思い切って申し上げることにします。

私が、この齡になりましたも、未だに諦め切れずに、煩惱を続けております其の年来の宿願と申しますか——若い美しい肉体の、健康な処女の香りがムツと立ち昇る様な、そんな美人を、一度でもいい。——雁字搦目に縛り上げて見度い。——そしてその時の美女の表情なり姿態が、自体どんなふうに、性的魅力が発散させるのが、これが知り度くて堪らなかったのです。

——別に大して珍らし話でも無いではないか……。

と、そう申されるのでしよう？いえ、知っております。近頃世上でやかましく云われる「風俗雑誌」——あれ等には、お互い夫婦や恋人同志で、そういった遊戯を実行して、愉悦感に浸っている、そんな小説や、又、種々な「縛られた女の構図」での絵画や写真も沢山出ておりますから、昔と違った現今の世の中では何んとかしてそういうグループとでも連絡をとれば、ひよつとして——縛られたい——というそんな相手に巡り会わないものでもない。——とそんな氣持も致しますが……、然し何れにしましても、こう金も暇もない現在の境遇では、それすらも思う様にはなりません。

では一体その歳迄、どうして居たんだ……。まさか童貞で過ごして来たわけでもあるまい？とそう思いになるかも知れませんが——御尤もです。——私はこれでどうして、中々の女好きなんですか——、ところがそれが、どうしたものか一向に、若い時分から恋人が出来たためしもなく、従って誰しもある一番手っ取り早い方法——つまり売笑婦を金で買う事に依って、青春の本能をはかしていたのでしたが、それとても私の心からの欲求にピッタリと当てはまった相手には、ついぞ

一度も出会わさなかったのをごさいます。

尤もこの私の欲求を、商売女に依って満たそうなんて考えは、たしかに間違いでした。

では一体、私の求めて止まないものは、何であつたかという事からお話するのが、ものゝ順序でございましょう……。

——いえ、女を実地に縛って見たい——という願望を立てたのは、未だ／＼ズツト後の事でございまして——どうも話が大変や／＼しくなつて御聞き苦しいでしようが、まア追々とお話致します……。」

老人は腰に手を廻して、凡そ近頃の人には縁のなさそうな古風な蓑入れを抜き取ると、此方の出してやった光には見向きもせず、律義そうにキザミを煙管につめ込んで、さて一服ふーッとうまそうに吹かし、そして話を続けるのでした。

(二)

「一体私という人間は、生来からが少しアブの方でして、——ま、お笑い下さいませ……、私だとしてこの位の新語は存じて居ります……。」

尤も自分という者が、そうした異常性格者だ、——という事を判然自覚致しましたのは、さすがに若い頃ではなく、中年……左

様、三十歳も近づいてからでございまして、それ迄は唯もう本能の趣く儘に行動を致して居りました。

偕——私は申し遅れて居りましたが、只今ではこうして病院の掃除夫で甘んじて居りますが、これでも元は歴きとした職人でございました。——洋裁——それが私の若い頃から身につけた「職」でございました。

で、その頃——と申しますと、大正の末期から、昭和の初年にかけての事を申すのですが、その頃の奉公人というものは、何かこう滅茶苦茶にコキ使われて、それで又結構奉公人達は「一人前の人間になる迄は」等と、寧ろその辛い辛抱を自慢の様にして、唯もう一途に励んだものでした。

で、私が洋裁職の見習として奉公しました宅が、これが又おッそろしく、封建制の権化の様な思想の主人達夫婦でございまして、取り分けお内儀さんの方が猛烈なサディスト（いえ、それも只今だから申せる事で、その時分にそんな心理を理解出来得る様な「知識」等持合せて居よう筈がありません。）

私はこのお内儀さんに、もう散々に虐められました……、と云っても決して肉体に暴力を加えられたという訳ではありませんので

——つまりは「精神的苦痛」——それでございます。——朝の掃除の仕具合から、御飯の炊き方。使い走りのその要する時間。炭火アイロンに使用する木炭の必要量。子守、それから未だまだもっというんなこまごました事の責任を、全部年端のいかぬ私に背負わせまして、それこそ私は明けても暮れてもキリキリ舞の忙しさでした。——でも、何とかその背負わされた責任を、上手に果さなければ、——肝腎の洋裁を習う時間が出てきませんので……、ですから、私は絶えずこのお内儀さんの顔色を、眼の動きを瞬時も見逃さず、迅速に行動する事に、自ずと馴れて参りましたのも、さして不思議でもなければ。又、当然愉快で等あり得る筈がないのでしたが——アそのところからが、私という人間の体内に潜んでおりました、かの異常性が、頭をもたげ始めたものと見えます。

何せこのお内儀さんが、それが又、何とも云えない別嬪さんなのでして、その上その頃は髪を日本髪「丸髷」に結っていたもので——私はこのお内儀さんが、美しい顔の眉に八の字を寄せて怒るその様が、不思議と好きで堪らなくなって来るのでした。

（叱られる事は辛い……。けれども又その叱

られる時には、ア—好きなお内儀さんの表情が見られる……。）そう云った奇妙な気持ちで居る私自身の肉体の奥では、同時に異性恋しやの青春の血も、沸々として湧き上っているのでした。

やがてそうしたものがゴツチャになったのでしうか？——私はこの内儀さんに、絶えず叱られ度い、マゾヒズムな気持ちと、その反面、この美しい高慢ちきな顔の女を、思いッ切り虐めてウンと苦しめてやったら、どんな顔になるだろうか？……、という様な事も考える様になりました。

勿論——主人を虐める——そんな大それた事が殊にその時代、出来よう筈がありません。勢い私の妄念の赴くところ、それは前者のマゾヒズムに依るしか他はなく、後者のサディズム的な妄想は、時として見る夜半の艶夢にそれも極く僅かの部分的なイメージを後に残して消え去るのみで、果される事はなかったものでした。……」

(三)

「そうした私は或る日、実に素晴らしいものを見つけて、狂気致しました。

それは夜店で買って来た、極く有りふれたその頃の月刊雑誌でしたが、——その雑誌に

左様御承知を願います。

× × ×

「私は当年、五十二歳に成りますが、未だに——いや、恐らくは是からの、残り少い一生をかけても、私のこの……、何といふますか一風変わった趣味を満足させる事は、先ず以て難しかろうと存じます……。と申しますのは——私は若い頃から、とんでもない妙なものが好きで堪らなかったのでした——いえ、只今の時世では、左様さして珍らしいとは申せぬかも知れないのですが？……まア余り勿体ぶって、気を持たせる様に思われても何んですから、一つ思い切って申し上げることにします。

私が、この齢になりましたも、未だに諦め切れずに、煩惱を続けております其の年来の宿願と申しますか——若い美しい肉体の、健康な処女の香りがムツと立ち昇る様な、そんな美人を、一度でもいい。——雁字搦目に縛り上げて見度い。——そしてその時の美女の表情なり姿態が、自体どんなふうに、性的魅力を発散させるのが、これが知り度くて堪らなかったのです。

——別に大して珍らし話でも無いではないか……。

と、そう申されるのでしよう？いえ、知っております。近頃世上でやかましく云われる「風俗雑誌」——あれ等には、お互い夫婦や恋人同志で、そういった遊戯を実行して、愉悦感に浸っている、そんな小説や、又、種々な「縛られた女の構図」での絵画や写真も沢山出ておりますから、昔と違った現今の世の中では何んとかしてそういうグループとでも連絡をとれば、ひよつとして——縛られたい——というそんな相手に巡り会わないものでもない。——とそんな気持も致しますが……、然し何れにしましても、こう金も暇もない現在の境遇では、それすらも思う様にはなりません。

では一体その歳迄、どうして居たんだ……。まさか童貞で過ごして来たわけでもあるまい？とそう思いになるかも知れませんが——御尤もです。——私はこれでどうして、中々の女好きなんですか——、ところがそれが、どうしたものか一向に、若い時分から恋人が出来たためしもなく、従って誰しもある一番手っ取り早い方法——つまり売笑婦を金で買う事に依って、青春の本能をはかしていたのでしたが、それとても私の心からの欲求にピッタリと当てはまった相手には、ついぞ

一度も出会わさなかったのをごさいます。

尤もこの私の欲求を、商売女に依って満たそうなんて考えは、たしかに間違いでした。

では一体、私の求めて止まないものは、何であつたかという事からお話するのが、ものゝ順序でございましょう……。

——いえ、女を実地に縛って見たい——という願望を立てたのは、未だくズツ後の事でございまして——どうも話が大変やゝこしくなつて御聞き苦しいでしょうが、まア追々とお話致します……。」

老人は腰に手を廻して、凡そ近頃の人には縁のなさそうな古風な蓑入れを抜き取ると、此方を出してやった光には見向きもせず、律義そうにキザミを煙管につめ込んで、さて一服ふーっとうまそうに吹かし、そして話を続けるのでした。

(二)

「一体私という人間は、生来からが少しアブの方でして、——ま、お笑い下さいませナ……、私だとしてこの位の新語は存じて居ります……。」

尤も自分という者が、そうした異常性格者だ、——という事を判然自覚致しましたのは、さすがに若い頃ではなく、中年……左

様、三十歳も近づいてからでございまして、それ迄は唯もう本能の趣く儘に行動を致して居りました。

偕——私は申し遅れて居りましたが、只今ではこうして病院の掃除夫で甘んじて居りますが、これでも元は歴きとした職人でございました。——洋裁——それが私の若い頃から身につけた「職」でございました。

で、その頃——と申しますと、大正の末期から、昭和の初年にかけての事を申すのですが、その頃の奉公人というものは、何かこう滅茶苦茶にコキ使われて、それで又結構奉公人達は「一人前の人間になる迄は」等と、寧ろその辛い辛抱を自慢の様にして、唯もう一途に励んだものでした。

で、私が洋裁職の見習として奉公しました宅が、これが又おッそろしく、封建制の権化の様な思想の主人達夫婦でございまして、取り分けお内儀さんの方が猛烈なサディスト（いえ、それも只今だから申せる事で、その時分にそんな心理を理解出来得る様な「知識」等持合せて居よう筈がありません。）

私はこのお内儀さんに、もう散々に虐められまして……、と云っても決して肉体に暴力を加えられたという訳ではありませんので

——つまりは「精神的苦痛」——それでございいます。——朝の掃除の仕具合から、御飯の炊き方。使い走りのその要する時間。炭火アイロンに使用する木炭の必要量。子守、それ

から未だまだもっというんなこまごました事の責任を、全部年端のいかぬ私に背負わせまして、それこそ私は明けても暮れてもキリキリ舞の忙しさでした。——でも、何とかその背負わされた責任を、上手に果さなければ、

——肝腎の洋裁を習う時間が出てきませんので……、ですから、私は絶えずこのお内儀さんの顔色を、眼の動きを瞬時も見逃さず、迅速に行動する事に、自ずと馴れて参りましたのも、さして不思議でもなければ。又、当然愉快で等あり得る筈がないのでしたが——さアそのところからが、私という人間の体内に潜んでおりました、かの異常性が、頭をもたげ始めたものと見えます。

何せこのお内儀さんが、それが又、何とも云えない別嬪さんなのでして、その上その頃は髪を日本髪の「丸髻」に結っていたもので——私はこのお内儀さんが、美しい顔の眉に八の字を寄せて怒るその様が、不思議と好きで堪らなくなって来るのでした。

（叱られる事は辛い……。けれども又その叱

られる時には、ア—好きなお内儀さんの表情が見られる……。）そう云った奇妙な気持で居る私自身の肉体の奥では、同時に異性恋しやの青春の血も、沸々として湧き上っているのでした。

やがてそうしたものがゴツチャになったのでしうか？——私はこの内儀さんに、絶えず叱られ度い、マゾヒズムな気持と、その反面、この美しい高慢ちきな顔の女を、思いッ切り虐めてウンと苦しめてやったら、どんな顔になるだろうか？……、という様な事も考える様になりました。

勿論——主人を虐める——そんな大それた事が殊にその時代、出来よう筈がありません。勢い私の妄念の赴くところ、それは前者のマゾヒズムに依るしか他はなく、後者のサディズム的な妄想は、時として見る夜半の艶夢にそれも極く僅かの部分的なイメージを後に残して消え去るのみで、果される事はなかったものでした。……」

(三)

「そうした私は或る日、実に素晴らしいものを見つけて、狂気致しました。

それは夜店で買って来た、極く有りふれたその頃の月刊雑誌でしたが、——その雑誌に

載っていた「鼠小僧次郎吉」と題した読物の中で皆さん御存知かも知りませんが、彼の悪旗本の宅の土蔵に、寒夜長襦袢一枚に剥がれた「文字花」という美しい女が、酒樽の化粧縄でグル／＼巻に縛られて、そうして監禁されて居る場面が出て参ります。——無論、件の女は、次郎吉に救い出される訳なのですが、私が素晴らしいもの——と申しましたのは、その時その場面の挿画——でございました。

その「文字花」という女の縛られて居るその顔が、それがまア何と宅のお内儀さんの顔に、ソツクリなものでした。たしか「近藤紫雲画伯の筆だったと、今も覚えて居ります。——近頃の雑誌ではもう時稀にしか、此の人の挿画にはお眼にかゝりませんが——彼のナヨ／＼とした、何とも云えない柳腰の美女の絵。……取り分けその顔が又、私には大の魅力なので……と云いますのが先程も申しました、それ——宅のお内儀さんに非常によく似た顔なものでした。

で、私はその絵を見たとき、何かこう鳩尾のあたりがムズ／＼とする様な気持ちに襲われまして、恥しい話ですが、思わず……という事になってしまいました。

私はそれを、もうまるで「虎の子」の様に

大切に蔵い込んでおきまして、そして何かのハズミで独りぼっちなれた時、つまり種あかしを致しますと、便所の中——もそうですが私はよく独りぼっちで留守番をさせられますので、そんな時、秘かに例の縛り絵を、お内儀さんを虐めて居る妄想の下に、人知れず楽しむのでした。——

(こゝで一寸申し上げておきますが、近藤紫雲画伯の描かれる美女の姿態。——それは何とも云えない私には好ましいもので、殊に彼の眉に八の字を寄せた、何といゝますか苦悶の表情に至っては、それこそ天下一品——と左様、私は現在この蔵になりまして、信じて



おります。(……)

借、又この頃から私のアブノーマルが、次第にその度を加えて参りまして、それと同時に一方では、正常な状態に於ける異性の肉体への憧れも、日一日と強まって行くのでした。

けれども奉公人の私が、殊には封建制の唯中に絶えず自由を、あらゆる角度から抑制されたその時代の事です。修業中の身で、異性との交渉なんてそれこそ思いもよらぬ事でした。

大人達がどんなに、卑猥な話に花を咲かせて居ても、私は絶対にそんな事には、関心を持たない風を装って、たゞ黙々として修業の道にいそしまねばなりませんでした。

洵に辛い事でした。

誰しも覚えがお有りでしょうが……人間、性に目覚めるアノ頃は、人一倍そんな話に好奇心を持つものです……。だのに?……」

四

「私は、何時、何処で、どんなきツかけからか覚えませんが、女体への嗅覚が、最も鋭敏に働くのでした。アノ何とも云えない「ブーン」と鼻を打つ女体の香り——一度その嗅いのムン／＼とする美女の肌を、思いッ

切り抱き締め度い。——せめて売笑婦でも買えたら?

だが、飛んでもない。

私の貰う一ヶ月の給金は、僅かにその頃の「円——」。「円タク」と云って、その頃の遊廓では、ハイヤーの賃金になぞらえて、一円で一時間遊べるそんな事も、大人達の猥談の中から聞き知っては居ましたが、私には到底その遊廓に行つて見る、勇気が出ませんでした。

何故なら私はそんな事したら、それこそ紺尾高尾の久造程ではないが、一度遊んだその次は?——それと私は、両親に早く死別れた孤児なのでしたから、万一修業中の身で「女郎買」等した事がバレたら、恐らくそれこそ、どんな結果を招来するかは、思つてみるも恐い事でした。

——自然私の快樂は、アブノーマルな方向に急速に傾いて、それに惑溺する様になりました。

私は暇さえあれば「美女の縛られ画」それを求める様になりました。無論当初の程は、かの「近藤紫雲筆に成る雑誌小説の挿画でした。——然し次第に他の画伯の作品にも、魅力を感じる様になり、遂に私は凡ゆる雑誌小説

本の中から、女の縛られた絵ばかりを落帖してスクラップする事を始めました。

何せその頃は、大衆小説が巷にヤンヤの喝采を拍している頃でしたし、従つて又それ等小説とマッチした挿画陣も、大活躍の時代でした。私は、さまざまな画伯のものを、蒐めました。——近藤紫雲。岩田専太郎。井川洗崖。小田富弥。鴨下晁湖。鈴木朱雀。清水三重三。伊藤晴雨。小林秀恒。中一弥。伊藤彦造。高島華宵。山口将吉郎。伊藤幾久造。大橋月咬。——以上其他。まだ／＼数え切れぬ程ありましたが、みんな彼の太平洋戦争の折焼けてなくしてしまいました。——がまあそれはずっと後の話でして、もとの青春時代の変態行動に綴を戻します。

老人はこゝ迄を語ってから、一寸時間が氣になったのか、懷中からは昔の物と見える至極古風な時計を取り出して、それを耳に当てセコンドの音を確かめてから、その指針の行方を眺め(まだ／＼大丈夫)という風に、にっこりとしてそして、話のアトを續けて行くのでした。

五

「徴兵検査を契機と致しまして、兎も角も私は一応この家を巣立つ事になりました。——

え？ 検査の結果ですか？ // 丙種合格です。
——変な言い方ですが、当時の検査官がそう
言っただけの肩を、ボンと叩いたものでした。
——勿論 // 丙種 // というのは、その頃でいう国
民兵役の事で、先ず / 有名無実といえます
か、入営の必要もなく、無論戦争にとられる
様な心配ありません。

私は欣び勉んで、他家の同じ洋裁職の門を
叩き、一人前の職人として就職致しました。
——自然そこには、先輩諸兄弟が居りまして
お互いに腕の競い合いをするのでした。

腕が良ければ収入もよい。……素より腕自
慢の者が何彼につけて、人一番に幸福を掴む
率の多い事を知る私に何の否やがありましたよ
う？……然し私はガツカリ致しました。——
何と私のそれ迄に身につけた技の、拙いもの
であつた事よ。……あんなに威張り散らして
// 腕自慢 // を自称して居た主人に習った技が
此処ではテンデ小供扱いにしか、して呉れま
せん。

他の諸兄弟のそれに比して、私の技が絶対
に劣っている事を知った時、憤怒と落胆。絶
望と厭世感がゴツチャになって、或夜、私は
カルモチンを可成多量に嚥下致しました。

——自殺？——そうです // 明日の朝には、もう再

び眼を醒す事はない—— // そう思って寝床に潜
り込んだのでしたが、——然しこれは一体どう
したというのでしよう？

矢張り私は、翌朝皆と一緒に眼が醒め
たのです。どうして私の体に、カルモチンが
利かなかつたのか今もって、その理由が判り
ませんが、人間というものは妙なもので、一
度自殺を仕損うと、何だか馬鹿々々しくなっ
て、もう死ぬのが嫌になります。——で私もそ
うでした。

でも往生しましたです。何せ眼は醒めまし
たものゝ、満更何ともない筈はありません。
と云ってまさか // 私はカルモチンを嚥しま
した // 等と云えるものでもありませんし、そ
の処置をどう執ったかに就きましては、まア
御想像に委せると致しまして、大切な話の先
を急ぎまじよう。

私は死を断念致しまして、それからは何と
かして // 腕を磨こう……技を磨こう // の一念
に燃え立ち、朝は人一倍早く起床し、夜は又
人々が寝鎮ってから、独り洋裁技術の研究
に没頭し余念がなかつたのでしたが、こゝに
又々私の身に思わぬ不幸が襲いかゝりまして
聴てその事自体が、私を今日に至らしめた一
つの // 間接的な原因 // を醸し出すのでござい

ました。」

六

「そうこうしているうちに私はメキ——と腕
が上達して参りました。最早先輩諸兄弟に
も、さして醜い敗けをとろうは思えず、否、
時には素晴らしい傑作をものして、問屋の主人
から褒められ、人々の羨望を買う事さえあり
ました。——

誰しも覚えがある事でしょうが、心身にゆ
とりが出来ると、自然、本能は歡樂を求めま
す。——それに、時候も陽春の候でした。技
術も磨く為に、暫く鳴を鎮めて居た私の青春
の血が、漸く又異性恋しやの熱い血潮を湧き
立たせ始めました。それは四月半ばの公休日
の事でした。

大阪道頓堀の歓楽街は、春に浮かれた嫖客
で、ゴツタ返していました。

この日、私は千日前停留所前の // 楽天地——
（現歌舞伎座）で、いみじくも // 鼠小僧次
郎吉 // の芝居を、しかも彼の // 文字花監禁 //
の場面に接しました。赤い長襦袢には、薄水
色の巾広帯。——黄色い縄で犂々と胸から背へ
かけて、雁子堀目に縛られて身悶えするその
姿態。——

美しい富士額の、それは——震い付き度い

様な女振りでしたが、中でも私を性的興奮に導いたその最大の魅力は、この時の文字花役者演ずるその「表情」にあったのでした。

「あッ……」——私は危うくも、声に出して叫ぶところでした。似ている似ている。——余りにも似た、彼の紫雲画伯描くところの——それと過ぎし日のお内儀さんの八の字眉を連想させます。

ナヨ／＼と、美しい姿態が虐しい縄の緊縛に喘ぐ様は、私をして無限の恍惚境に導くのでした。

楽天地を出た私の脳裡には、つい今し方の美女緊縛のイメージが、まぎ／＼と走馬燈の様に消えては浮ぶのでした。——宛ら悩ましい美女の体臭迄が、鼻先に匂う様な幻覚に襲われながら。

私はまるで物に憑かれた様に、フラ／＼と千日前の通りを、金比羅宮の前迄歩いて行きました。と其処から日本橋二丁目の電停へ向って、曲って行くその曲り



角で、何か知らん人集りがして居るのです。近寄って、見るともなく、その人達の人垣の後から覗き込もうとしました時、不意に四辺には恐ろしい喧噪の渦が捲き起りまして、私は突飛ばされてしまいました。

喧嘩？——その様にも思いましたが、あり様は、私には何が何んだか薩張りわかりませんで、まるで狐につま／＼れた様に、そのまゝ其処にボカンと立って居りますと、突然私の手

首に縄がかゝりました。と同時に、横ッ面をイヤという程ドヤされまして、「いや、もう一体何が何やら夢心地で連れられて行った先が、何と警察のブタ箱でした。

私は素より警察の、そんなブタ箱になんぞ這入るのは、それこそ生れて始めての事です、只もう恐ろしさが先に立って、自分が何故、捕縄をかけられて、そんな事になったのか、その理由を訊く勇氣も出ませんでした。

（後でわかった事でしたが、是も一寸申上げてみますと、私が覗きかけた人集りというのは——当時関西方面の盛り場に、一日ホンの僅かな時間出沒して、通行人の金品を捲き上げる「オツチヨコチヨイ」と称する、現今で言えば「伝助賭博」のそれだったのです。——でついまる処、私はその「オツチヨコチヨイ」賭博の一味と見做された訳なのです。——その当時の街頭インチキ賭博には、必ず相当数の輩下の者を各要所々々に見張りに立てまして、万一賭博開帳中に、警察官がそれを察知して検挙に向って来る気配があるかどうかを警戒させたのです。でその警戒に立ちます者の中にも甲乙がありまして、重要な個処にくる者は、それ丈一味の中での兄貴株であり、もう何度も方々の警察の御厄介になって、從

て、変相している刑事達の顔でも、この男達にはチャンとわかるのです。——それで見張りに立った男達は、万一怪しい警察の者（彼等に執っては）を認めますと、直ぐに彼等独特の手振り身振り〃に依って、リレー式にその賭博開帳の現場に、信号を送ります。——例令ば、〃今、巡査がそちらへ歩いて行くぞ〃とか又或は〃変相の刑事が通る気をつける〃とか〃駄目だ早く逃げろ〃——とか色んな手筈を決めてあるのです。——

ところで、警察は又警察で、それら賭博者達の中心人物を捕えるべく、彼等見張りの眼を他に誘導して錯覚を起させ、——つまり策略を施して以て中心人物の逮捕を計るのです。——然し彼等とて左様容易く警察の策略には乗りません。万一どうしても危険信号が間に合わず、賭博の現場が襲われた時は、その時は安全に中心人物を逃亡さす為、他の者は一丸となって検挙陣を妨害します。何故なれば、当時このオッコ賭博と云いますのは表面歴



Kazu

然と商品？を持っていたのです。小さなトランプの中に指環か何か、無論テンブラですが……彼等はそれをいかにも高価な純金の様に見せています。一寸四角位の小さな紙片に〇とか一とか△等の印のついた一枚と、何にもついていない一枚と、都合二枚をどちらも丸めて、掌に載せます。お客がその印のついた方を見当てたら、即ち金指環が貰えるのですが、現在眼前で開いて見せた、タッタ二つのその紙片の中の 하나가、つまり印のついた方が、絶対にお客に掴めません。一回十銭の表面謂わば〃当て物商売〃と見せかけてのイン

チキなのでしたから、警察はこのインチキの現場を押えなければなりません。ま、このお話を詳しく致しますとまだく長くありますのでこの辺で省略させて頂きますが、結局私の捕えられましたのは、つまり彼等はドサクサ紛れに皆逃亡を致しまして、その腹癒せか、それとも実際の誤解であつたか、そこ迄は知りませんけれども、私は乾分の一人として捕縛されたのでした。——大変話が横道に外れましたが、では、先程の私が放り込まれたブタ箱でのそれからの経緯に移りましょう。

七

日の光さえ、高い窓から僅かにしか差込まぬそのブタ箱に、いつか夜のトバリが訪れました。——鈍い五燭光の電灯も、高く隣りの監房との取り合いに一つあるだけ。——それに私の入れられた監房には、他に誰も同房者が居ないのでした。——

淋しさと恐ろしさに私は差入れられた夕食等元より、到底咽喉を通る筈ありません。やがて九時近くその事で、私は監房から出されて、廊下の突当りの便所に行き、その帰るさに、同じ廊下の片隅にある押入れから自らの手で、薄汚い脂くさい嫌な臭いのする毛布を一枚貰いました。（この毛布を被って寝るの

だ……)——そんな事がわかる筈もないこうした社会には始めての私は、何となく愚図々々していますと、——

馬鹿野郎ッ、ぼや／＼するなッ怒鳴りつける声と共に、又もや横ッ面をイヤという程、張り飛ばされました。

(大変な事になってしまった。私は監獄へ行くのだろうか？。でも……わからない。何も悪いことをした覚えもないのに……)——

監房へ戻ってから私は、種々なあらぬ妄想に襲われるのでした。

とても眠るどころの騒ぎではありません。

私は地獄の鬼共に針の山へ追いやられてイボ／＼のついた金棒でベシヤンコに押えつけられて苦しんでいる。そんなパノラマの見世物のあった事を、思い出していました。今に自分も雁字搦目に縛られて、拷問に合うのでは無かるうか？——

夜は次第に更けて来たらしく、コンタリ——

質問

私の希望する先生のお答えに含んで頂きたいことは、

1、一体何という病名なのか、(色情倒錯症であることは分って

トの廊下を歩む監守の靴音も、何時の間にかピタリと止って四辺は死のような静寂が漂っていました。

私はこんな処に一人で入って居るのが、もう堪らなくなつて、何かワツと大声を挙げて泣き出し度くなりました。(どうしてこんな処に、私を一人放り込んだのだろうか？——隣りの監房には尠くとも六、七人は、一緒に這入っているらしいのに……)

と、この時でした。——

夜の静寂を破って、コツコツという靴音とベタベタと何か草履でも履いて歩くらしい音とがゴツチャになって、私の監房の前迄来て止まりました。——

——ガチャン——何という大きな、そして嫌な響を立てる留置場の扉でした。

その扉が乱暴に開いたのです。

「まあ今晚一晩、此処でゆっくり泊って行け——今晚は特別室や。——フ、フ、そやけど

お前、変なことしたら、又明日になつても帰られへんど……わかったかッ？——」

そういう男の聲がしましたが、無論私にはそれが何の事を意味しているのやら、一向にわかる筈ありません。只然し、誰か——一人私の処に入つて来るのだという事は、直感する事が出来ました。

私は本能的に、誰が入つて来るかを見定めようとして、入口の方をみつめました。

そして入つて来た人の、その姿を顔を見た途端。——思わず「あッ——」と叫ぼうとして慌て、己が掌で己が口を、塞ぎました。

あ、それは昼間、あの楽天地で見た、鼠小僧次郎吉の芝居での文字花役者その人でした(女だ女だ——男一人の監房に女が入つて来た。一体これは、これは一体どうすればよいのか？)私は意気地なくも監房の隅っこに小さくなって、じっと身を寄せました。

女は、そんな私の前に、行儀よくピタリと座ると、——「今晚は……御厄介になります。どうぞよろしく……」そう挨拶致しました。(続く)

います(が)何と解釈してよいのか ち私と同じ憧憬をです。

2、私のこの性慾は先天的と思 意見。(先生はきつと普通一般の

うけれど、遺伝によるものか、又 リーダーの様に修養書を読めとか

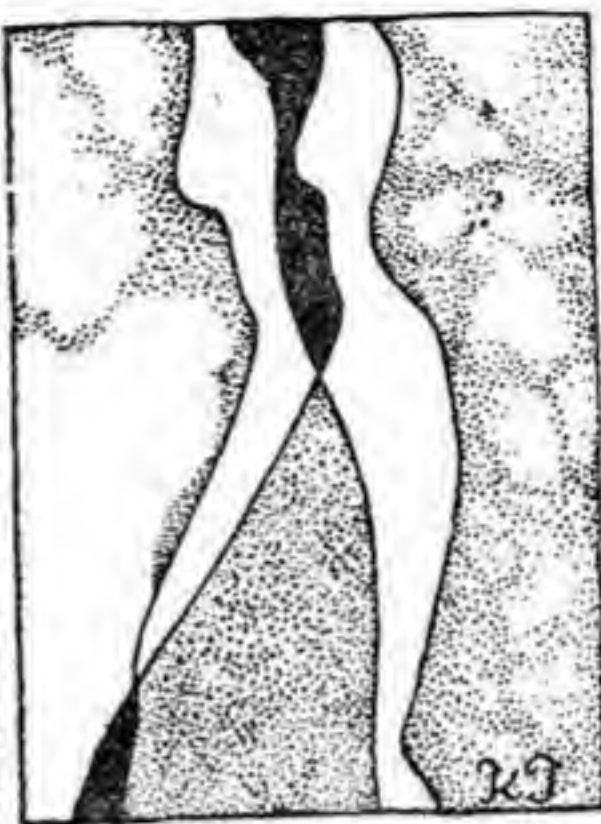
我が子に遺伝するかどうか、 宗教その他に没頭せよとか、なる

抱いている人があるかどうか、即 てつまらない御説教めいた事を言

われなと信じて)

私は勿論、先生の膝下へと訪ねて、先生の研究の糧となるならば何十日、何ヶ月かゝつてあらゆる私の思想と私の肉体、私の性慾と

歡義先生性愛相談欄



—質問歡迎—

(解答者)

歡義先生

心理をあらゆる方法で御診察になり、半ば弄ばれてもどの様な検査でも受けられれば、この上ない最上の幸福と思うのですが……、儘にならぬは浮世の常、せめてもの私のはかない満足の為に丸裸となり、あらゆる角度から眺めた自分を報告して先生の御指導を仰ぎたいと思います。

(A) 家庭の中に於ける私

1、大正十三年、紀州の田舎紀の川の畔に農夫の子として生れました。

2、父は節々の高いがっしりとしていましたが大して男らしいタイプでもなく、無髭でお人善しで気が小さく、無口で平凡……

即ち、この世には容れられない無能力者のタイプ。

3、母はやせぎすで小柄、貞淑で温和……、道徳心極めて高く、無教育だが頗る善人。

4、祖父、祖母共知らず、何と云うこともなかった模様。

5、兄が三人弟が一人、男ばかりの家庭……、三人の兄は次々と他界。

6、長兄は極めて謹厳。然し、日記に手淫に悩むらしい記事を読む、戦死。

7、次兄……身体弱く女性的、軍隊時代の告白らしき一文に、美少年にひかれるの一文を見る。病死。

8、三兄……情熱家。手記に創作的サジスチックな記事あり(若い美女を裸にして縛る等)、戦死。

9、弟……別に今の処普通。変わったことなし、現在二十三才。

10、近所は農家やその他普通の風景にて、別段取立て、言うことなし。

11、妻、矢張り農家出身。肥り気味だがこの方面に就いて何のイットも示さず、妻であるからか……(岡田圭介氏の「妻は縛らず」の手記に同感)。彼女自身何も知らず。

12、長男、満三才……。親戚にも変った人を見当らず、多少好色的な人もいるけれど普通。

(B) この方面に於ける私の経歴

1、詳しくは、奇々昨年の四月号の「肥満体への郷愁」の原稿、又その後の私の拙文を御覧下さい。

2、十二才頃、雑誌で肥った力士が後手に縛られているのを見て昂奮する。勿論、この昂奮の意味は全然知らず、但快感を覚える。これが最初なり。

3、十四才より orange を始める。初めは射精はなく唯快感のみ。然し、ある日畑で立派な中年紳士が健康帯という輝きたいものの

宣伝写真に仁王立ちになっているのを見て……し、初めて……し吃驚する。その精液の何かを知らず時に十六才……。

4、性交により子を得ることは十七、八まで知らずに過す。

5、中学校時代、肥満したる紳士に憧れを感じる。まるで恋人でも求める如く。

6、女学生なんか見向きもせず唯、友達に申し訳に相槌をうつけれど、全然興味なし。

7、中年の紳士の裸体を見て昂奮し快感を覚え、その紳士を拷問する図に想像を逞くする。

8、本、映画、その他にそれを求めるも満足することなし、唯、江戸川乱歩の地獄風景に海水着一枚の肥満紳士が出てくるのが印象深く、「盲獣」その他の殺される女の恐怖の場面や猟奇的な場面を好む。

9、異性に於ても年増の肥え太った人を好み、雑誌に出てくる美女の縛られたる図や場面も大いに興味はそゝられたが、唯縛られているのみでは多少不満であった。

10、学校の先生の裸体を見ることも喜ばしかったが、やはり肥っていないければ駄目。中学校では柔道の先生が二十二、三貫もある巨

体で、私はひそかにそのあとを追
い廻したのだが……。

11、卒業してすぐ軍隊。初年兵
時代のあの浅間しいリンチの毎日
も別に、私のこの方面には影響し
なかった。

12、O兵長の思い出は濃厚……
(後述)

13、除隊後、大したことなく常
に胸の中にモヤ／＼とこの気持ちを
かくし持ってさまよいつゝも、表
面は何事もなく過しているように
みえた。

14、奇クを得て、私の胸にモヤ
／＼と腐臭を放ちかけていた身と
心は俄然、水を得た魚の如く活き
／＼と目覚めた。

15、二十五で結婚、現在に至る
が、私は結婚を好まなかった。

(私のこの変態性慾が大いにその
気持ちを占めていたが)周囲の環境
により結婚はしたけれど、矢張り
私はこの道に於ける失望と、又隆
路にはまり、詰らない偽善的な気
持で毎日を送って来た。

16、私は女(世にいう美人又は
若い女)には興味は別にない故か
結婚迄いわゆる童貞であった。

17、他人を縛った事は全然ない
妻に二三度試みたが何か気が進ま
ず、それ以後やろうともしない。

他人の肉体を弄んだ事もない。他
の友達がやられていたのを見たこ
とがあるが、何も感ぜず。

18、勿論、他人に縛られたこと
もない。中学校時代から軍隊で撲
られたりしたが面白くない。映画
館で前の少年にいたずらされた時
のみ少々興味があった。

19、満員電車の中で肥った中年
紳士の傍でわざとよるけて、その
臀部の感触を楽しんだことが、さ
／＼やかな欲望であった。

(C) 過去に於ける印象深き人々

1、T氏。柔道範士、背五尺七
八寸位、二十三、四貫あるうか、
遅しく肥り、八字髭をつけている
この人に対し字頂天になったのは

T氏は河へ鮎を釣りにくるのが好
きでよく紀の川で見かけたが、そ
の時、氏は全裸又はきんかくし一
枚をつけたのみであった。赤黒く
陽焼けしたその遅しい巨軀を、私
はT氏の家の附近でもよく揮一本
でノツシ／＼と歩いて見ているのを見
た。

2、O氏。軍隊時代の兵長、で
っぱりと肥り、短い口髭、そして
白い柔かそうな肉体であった。私
のベッドの隣りで起居した為、私
は進んで兵長の身まわりの世話を

し肌着、襦、靴下等を備ましている
持で洗濯した。

3、Y氏。中学校の柔道の先生
少々バランスがとれていない肉体
であったが巨大で、髭がもう一つ
はつきりしなかったが、浴場や更
衣室で私は先生の巨大な肉体に見
とれた。

4、K夫人。でっぱり肥り、い
つも妊娠六ヶ月位の腹をもち、ノ
ソ／＼と歩く彼女の白い柔い餅肌
をかいま見てより、その肉体が忘
れられず、実に見事な臀部で、年
令は三十七、八か、元学校の先生
であったという教育者的な物腰も
魅力的だ。

(D) 男色的の私の対象となる
人々と、その他

1、肥満体であること。遅しく
肥っている、酒肥り、脂肪肥り
でも何でもいゝ、二十貫以上あれ
ば嬉しいが、これはあくまで比体
重の大ききであり、六尺以上もあ
る人は案外つまらない。

2、美髭をたくわえている事。
濃い密な美しい髭は不可欠。チャ
ップリン髭、ヒットラー髭のみは
案外頂けないが、八字髭、カイゼ
ル髭等々いずれでも可。但し泥鰌
のしつぽの下ったのはだらしなく
て厭である。顎髭はない方がいゝ

3、その他の体毛。勿論、ある
べき処に毛のない人は困るが、毛
深さは問題とせず。

4、薄汚いのや、あんまり下品
なのや、短気なのや、成り上りの
な高慢さや、あまり冷い謹厳な紳
士スタイルも近寄りたがたい。清濁
あわせのむの豪快型が最良。勿論
この道に理解があつてマゾにもサ
ドにも精通し、趣味をもっている
様な人がいれば、私はもうその人
の命令ならどんなことでも……。

5、年令は三十五才以上五十五
六位までか、しかし条件として肥
満している以上、張切った筋肉、
艶々した肌の持主でありたい。頭
が禿げていようが、白髪がまじっ
ている様な人でも私は満足。

6、私は男色というものを知ら
ないが、私がその様な人に出くわ
しても、女性的な言辭や行動なん
てとりたくない。女装なんてのも
ゾットする(勿論、私自身がし
りしていて醜男なんだから仕方が
ないが)。男性対男性で結構であ
るのだ。それは男色と言えないの
か。

7、私自身少年時代より青年時
代をとり越して中年男になればい
／＼と思つた。二十の恋愛は心であ
り、四十の恋愛は肉であるという

誰かの言葉に喜び、四十の恋愛を是と思い、四十の肉の恋愛を礼讃して級友に笑われたことがあった

8、さて愈々となつてそういう人が出現した場合は、その時だが余程気に入ったタイプの人でない限り、鶏姦は少々敬遠、相互に行う手淫か、フェラチオがいゝと思われがそうなる夢中になつてしまふことは必定、飢えてゐるから。

(E) サジストとしての私

1、対象となるのは前述の如き中年紳士、又は三十過ぎの豊満すぎる程肥り肉の持主の異性。

2、血みどろの惨虐は少々敬遠も被害や不具にすることも反対、最も希望とするのは、凌辱を主とした責苦、永続的に苦しめる拷問がいゝ。例えば、美しい花畑の中なんかで丸裸にした紳士夫婦を晒しておき、鞭うったりしてじわじわとゆっくり／＼長時間もて遊び苦しめる様な方法がいゝ。しかも周囲があくまでも静寂で、どこかできれいな音楽が流れてくるなんて風景は、もっとも素晴らしいと思う。

3、縛り方やその他は別に条件はないが、縛るのはあくまで前手錠なんかは排する。なぜならば、



私は肥満した男女の胸や大鼓腹にも執着があるから。

4、私の特に注目するのは肥満した人の口髭、乳房、便々たる大鼓腹、盛り上った臀部、大股、房々とした………である。

5、未婚の処女や美少年が縛られてゐるのは痛々しい気持がする

6、道具その他のアクセサリは何でも結構。あるに越したことはない。

7、私がその方面に於て最も印象に残つたのは、少々大きい声では言えないかも知れないが、潮書房発行の「虐待の記録」の一部、

果して私は非国民であろうか。

イ、神酒沢司政官。全裸にされて両手を左右水平にあげて、藤のステッキで横腹を叩かれ氣を失いビンタをとられ、小便をかけられた。

ロ、陸軍刑務所長小林氏は、全裸のまま現地人受刑者の前に曝され、両掌に煉瓦を握られ左右水平に支えさせられる。夜に入り全裸のまま狭い鉄の階段を腹這いに昇降させ、頭から水を浴びせられる。

ハ、グアム、ウェーキ島の宮崎少佐の報告によると、下級の兵、下士官に上級の将校の頬を殴打せ

しめたり、更にひどいのは番兵の陰部をなめさせ……、総員に一時間起立を命じた後、鉄条網の針に各自の鼻孔を挿入し、中腰で一時間その儘の姿勢でいさせた。

ニ、古木少佐の手記。私のハッチの者全員が扉の前へ不動の姿勢をとられ、口を扉の網につけて開いてゐる様に要求され、唾をはきこまれた。

ホ、T陸軍中将は、或る番兵が勤務につくと、真裸のまま礫の上へ柔道の背負投をくって、前方と横に倒れる方法を数十回やらされることが常であつた。

ヘ、I大佐は理由なしに裸で無帽のまま、直射日光の下で不動の姿勢をとられた云々。

以上、私のこれを讀んで想像する浅間しき図は、司政官も刑務所長も少佐も大佐も中将も、すべてでっぶり肥った立派な、かつて威厳を誇つてゐた美髯をたくわえてゐることを願ひ……。

8、肥満したる夫人に対する性的拷問も凌辱も、その他の責苦も大歓迎。

(F) マゾヒストとしての私

1、青年時代より露出的傾向あり。

2、私はでっぶり肥った中年男

又肥った婦人に責められることを願う心が強いが、マゾヒストとしての私はその相手にはさしてむづかしい条件や選り好みはない様である。即ち、どういふ傾向の人でも結構だし、老若男女肥っているに越したことはないが、やせていても又悪くもない、等その他。

3、年令の増すに従って、即ち自分自身中年男になって行くに従い、益々マゾ的傾向の強くなつて行く心地がする。

4、あんまりひどい苦痛は少々怖しいなんて弱虫のマゾヒストです。凌辱を主とした苦痛がいふなと思う。しかし、前述の理想タイプの人なら、少々苦痛は辛抱出来る筈。

5、将来は、日々何につけてもマゾ的心理を伴い快感を伴う機会を得たく今より期待するが、そうなるかと相手がいるのかいな……、目下、どうしたら肥満体となれるか研究中。

6、奇巧の作家中、沼正三氏に最も敬意を表するものです。氏の文にあらわれたロマンな心理は、私のサド、マゾ両方に通じて嬉しい限りです。

7、経験はないので偉そうなことは言えないが、軽いマゾヒスト

でしようか、現実になんか目にあうとギャフンと参ってしまいうな気もするのですが。(高浜豚六)

肥満体への郷愁を 悩む人へ

解

答

貴男の訴えをよく玩味してみますと貴男は性格的にも肉体的にもやせた女性的小児的な所があつて自分より勝れたもの偉大なものに憧憬を感じる如き心理状態が強いと思われまふ。又それらのものに負ける事の嫌いな性格があつてそれが肥満体へのサジズムともなり反転してマゾヒズムともなりして性的な一面を刺戟するのであります。

その性格の原因は育つて来た家庭に在るのか、母の胎内に在る時に生じたるものか、又記憶にない幼年時代に発生したるものであるかは解り難い所であります。先祖の血液を云々する事は今此所では意味のない事でありまして、勿論子孫に遺伝する事など考えられませんが、そんな事よりも貴男が今陥つて居られる錯誤について申してみたいと思ひます。

と空想の世界とを混同しようとして居られる事、

第二に御自分の性格を一風変わった病的ないまわしいものとして悩んで居られる事の二つであります。

第一の錯誤は此の種性的苦惱を訴える人によくみられる点でありまして、貴男は通常の家庭に育ち妻も子もあり人からみて何ら劣る事のない仕事にはげんで居られるらしいのに妻に対して普通の人々が感じられる様な性慾を持ち得ないといふ決めてしまつて居られる。特別に性慾の或る方面に目覚めて居られる貴男に取つては御不満に思われるのであります。貴男が妻に感じられる性慾が普通一般の男子たる者の感ずるものと違ひないものであると思ひます。

人間が懐く空想の世界は無限であり此の世界に於ては何一つ不可能な事はありません。色々な肥満体への郷愁は全て想像の世界であり之と現実の生活とは切り離して考えねばならぬのであります。同じ様な苦惱を有する人々が如何に多いかをまず考えて下さい。空想の世界を現実の生活に味わう為に努力する結果が若し人の世に益するものであればそれが成功し

た曉には「ノーベル賞」ともなりましようし、又大金儲けともなりましようが性慾の世界では一つ間違えば刑法にふれる危険性を含んで居ります。此の解決方法としましては「奇巧」の如き雑誌を讀んで独りで悦に入るのが最上策であります。即ち性的苦惱の昇華を小説やら写真やら絵やら他人の経験発表やらで慰められるのです。又自分から筆を取つて書いてみるのも良いであります。(賢明なる貴男は既に実行して居られる)

第二の病的なものであるとして苦惱して居られる点であります。貴男の想像の世界が現実の生活に迄踏み込んで来て悪い影響をもたらす様であります。ならばよく考えなければなりません。そうでないのならば決して独り悩む事もありませんし、病癡に陥入る事もないのであります。それと同程度の苦惱は敢て苦惱とは申せないかも知れません。之を性慾の一面にばかり注意して居られる故に視野が狭くなつて参ります。広く世の人々の性慾以外の方面に眼を向けて御覧なさい。物慾に、金銭慾に、名誉慾に、その他娯楽趣味と称せられる範囲にも沢山の人が貴男と同程度の苦惱を持つて居る事を知

られるでありましょう。私達の育
って来た時代が性慾に関する限り
いまわしいもの、口や筆にするに

も限られた時代でありましたもの
が、終戦後急に開放的になった為
に苦惱感が取れないのではないか

とも考えられます。大いに此の方
面への開拓者として肥満体への郷
愁を空想の世界に楽しむ、又現実

の生活に於て許さるべき範囲を造
り出す事を貴男の残されたる進む
可き路であると考えます。

新設女相撲部屋で矢筈山順子は唄う

女 相 撲 音 頭

加 茂 三 千 彦

(一) ハア

組んだ 組んだよ 土俵の上でヨ

張った乳房は 四ツ相撲

吊るか 吊らすか

乱れた黒髪 ぬれ羽色 ソレ

土俵際 負けるなよ

繰返し
文句

負けりや 殿御が ソーレ

恋敵の ものになる

(二) ハア

揉んだ 揉んだよ 土俵の上でヨ

うねる締込 燃ゆる肌

取るか 取らすか

王手 極手の本勝負 ソレ

土俵ぎわ 負けるなよ

負けりや 殿御が ソーレ

恋敵の ものになる

(三) ハア

吊った 吊ったよ 土俵の上でヨ

憎い相手の 太鼓腹

出すか 出さすか

意恨相撲の 関ヶ原 ソレ

土俵ぎわ 負けるなよ

負けりや 殿御が ソーレ

恋敵の ものになる

(四) ハア

引いた 引いたよ 土俵の上でヨ

怒る 電髪デンパの 獅子頭

切るか 切らすか

砂に 恋敵を 埋めるまで ソレ

土俵ぎわ 負けるなよ

負けりや 殿御が ソーレ

恋敵の ものになる

(五) ハア

吸うた 吸うたよ 土俵の上でヨ

玉の汗散る 双ヶ丘

泣くか 泣かすか

あかい歯形が 入るまで ソレ

土俵ぎわ 負けるなよ

負けりや 殿御が ソーレ

恋敵の ものになる

(六) ハア

詰めた 詰めたよ 土俵の上でヨ

つもる怨の 咽喉輪攻め

折るか 折らすか

あがる地獄の うめき声 ソレ

土俵ぎわ 負けるなよ

負けりや 殿御が ソーレ

恋敵の ものになる

(註)

この音頭はキングレコードの「か
っぱれ音頭」でうたえます。振付
もそのまゝでよろしい。

奇譚クラブ旧号総目次

昭和二十九年 〇九月号〇

口絵	図解「相責め」	龍 陽子・画
野分(のわき)	伊藤晴雨・画	
龍陽子画集	新妻初秋姿 二態	
牧場物語	吾妻新作時数久画	
組写真	お姉様いじめないでネ春日ルミ嬢	
写真	お姉様に締め上げる 春日ルミ嬢	
後手に締め上げる	春日ルミ嬢	
こうして吊られたら	伊吹・杉嬢	
緊縛アルバム	観念(村田那美子) 後手	
しほり(中富綾子) 片足吊り(坂		
口利子) 海老しほり(萩千恵子)		
まぞひすちつく・ふおと ワン公に對す		
るお仕置・嘲笑・春日ルミ嬢構成		
幻想曲 ヒロポン禍の幻想 杉原虹児画		
戯画「どうしよう」 群亭 数久		
文獻 (アメリカ雑誌の一部より)		
私は訴える 吾妻 新		
現代文芸に現れた責め 村山 誠一		
デパート人形 白金 紅次		
機殺願望 青葉 慎一		
赤札囚(続半公刑) 藤原 咲恵		
残酷なる女性達 森本愛造・訳		
私という女 春日ルミ		
身を灼く女 松井 正三		
あるマゾヒストの手帖から 沼 正三		
自刃 (日本軍人の切腹) 大島 忠一		
現代マゾヒズム芸術時評 須藤 幸一		
随筆 奇ク随想 須藤 幸一		
美少年の秘密(三) 山口 幸一		
被虐哀歌 真金銀次郎		
感情教育(最終回) 吾妻 新		
読者通信から見たアブ種々相 編集部編		
サジズムの女性 才 昭吾		
草双紙より見た切腹 川合伊都子		
非小説 性液 伊藤 晴雨		
女体美と特に臀部に就て 狩井 麗作		

切腹研究夜話(六) 中康 弘通

野外縛りの記録(責め撮影行) 辻村隆

車中汚辱(満洲敗戦の体験) 九鬼麻里

雄花の微笑(我闘われ記) 幹 蘭次郎

女装して責めの実験 岸本 青柳

ゆみおんな(弓女) 佐次 浩介

アクロバットの憧れる 王子 多郎

露出願望の少女の告白 柴崎 芳子

アブノーマル・ドリーム 岡田 芳子

嫉妬の操り責め 角 芳子

昭和二十九年 〇八月号〇

口絵 三又洲の惨劇 伊藤晴雨・画

戯文・戯画 水着 群亭数久・画

群亭数久アブノーマル画集 キロ

ツチン・鉄の処女・釜うで・管刑

龍陽子画集 新妻遊戯夏姿、著物

海外サディズム雑誌 吾妻 新

読切小説 蒼朽ちて 松井 麗子

女性愛慾面の断片 林 弓志雄

切腹研究夜話(五) 中康 弘通

創作 私刑(リンチ) 中康 弘通

サド女性の顔面 山田 正実

青色の螢光燈 山田 正実

感情教育(十) 吾妻 新

美少年の秘密(二) 山田 幸一

非小説 性液 須藤 幸一

国際スパイ団監房 野中 愛三

コンピネーション 随想に答えて 吾妻 新

女性服従譚 佐次 浩介

浜辺の唄 三村 春夫

マゾ男の秘密イター 青柳 謙次

腹帯の秘に寄せて 川端 多奈子

してとる鞭(春日ルミ嬢) 伊藤晴雨撮影 乱れ髪・つぶし島田

辻村隆実演 写真図解・縛り終るまで

扉 桶伏 (刑事博物館図録より)

股裂き散華 多山 皓

眼帯とマスク 狩井 麗作

あるマゾ男の告白 才 昭吾

美少年の秘密(一) 山口 幸一

夫から妻から 久留木 栄

悦楽回想録(入選作品) 魔園 吉年

華々しき後辱(入選作品) 小山 矮男

私の切腹遊戯 川合伊都子

アブニストの記 痴迷 伊藤 晴雨

非小説 性液 伊藤 晴雨

あるマゾヒストの手帖から 沼 正三

実説 白木屋お駒 森本愛造・訳

残酷なる女性達 森本愛造・訳

私の求めた男 松井 麗子

海外サディズム雑誌(四) 吾妻 新

鼻は花なり 北谷 英二

現代マゾヒズム芸術時評 須藤 幸一

血染めの舞台 須藤 幸一

感情教育(九) 吾妻 新

切腹通信(戯曲) 回転 川合伊都子

若い女の足に狂う 佐津 真帆

義母への追想 山岡 紫郎

コルセット・マニア 一柳真砂子

責めに憑かれた秘密日記 青柳謙次

フレンチ・カンカン 沼田扶二

炎責懲業 春山 鮎三

白への憧憬 兵頭 庫一

コンピネーション随想 長谷川 洋

腹帯愛好癖 村松時一郎

昭和二十九年 〇六月号〇

口絵 良弁龍の犯女 伊藤晴雨・画

椅子を用いた縛り 龍 陽子・画

写真

アメリカンスタイルの責め(3)
 戯文戯曲 細について 畔亭数久
 龍圖子画集―倉庫―地下室―畔亭
 数久画集―斬首―間諜銃殺―火焔
 二題―縛り首―

欧米の縛りと猿ぐつわ、ボニー、
 等をかまされる恐怖、足の下にう
 こめく、犬奴、さあ早く立たない
 か！女レスリング二題、切腹擬
 態写真、男性美、ストッキング、
 白衣の女、細の四十八手。

罪 水瓜盗人の晒(刑事博物館より)
 緊縛の構成と責めのアイデア辻村
 悪の部屋(最終回)……………一俣志津子

わが心の記……………古川 裕子
 私のモデル……………飛田 良二
 美しい暴君……………馬族 新保
 海外サディズム雑誌(三)……………吾妻 新
 アニストの記 痴迷……………鬼山 絢雨
 非小説 性液……………伊藤 晴子
 私の求めた男……………松井 鐘子

白 奇術の魔術と絞首刑……………沼田扶二
 私の新婚旅行……………植村 幾久
 孤児院の折檻……………富永 一雄
 変性男子の告白……………野々村由紀夫
 洗腸願望……………篠原 幸雄
 責めの自画像……………山田 芳枝
 暗黒への省察(一)……………越野 義夫
 女性の手紙の美に就て……………須藤 律夫
 龍圖子画集……………真鍋 四十六
 稚児兵士幹部候補生……………龍田 信二

特 尻夫人……………木村美智子
 感情教育(八)……………吾妻 新
 あるマゾヒストの手帖から……………沼 正三
 残酷なる女性達……………森本愛造・沢
 夫から妻から……………久留木 栄
 私の好きな縛られ方……………川端多奈子
 稀世婚姻の儀……………瀬川 泰子

昭和二十九年 〇五月号〇

口絵 棒杭を用いた縛り方 龍圖子・画
 安房の北向き地蔵 伊藤晴雨・画
 女性の切腹幻想四態 畔亭数久・画
 アメリカンスタイルの責め(2)
 戯文 黒髪……………畔亭数久・画
 都築降子画集 奈落の戯夢
 畔亭数久画集 通り魔
 車を轢くボニー 外国誌より
 後手足首縛りと一本縄・床柱・後
 手縛りの二題、足舐め・犬奴早く
 歩かないか！人間馬・靴の裏・他
 外国の縛り写真・椅子責め其の他
 罪 鶏盗人の野晒(刑事博物館より)

写真 少年囚獄記……………三根 耕二
 悪の部屋……………二俣志津子
 女性切腹の夢……………溝口 龍夫
 感情教育(七)……………吾妻 新
 あるマゾヒストの手帖から……………沼 正三
 奴隷加虐……………小田 雅春
 変性男子の告白……………鬼山 絢雨
 二百子集……………真砂 十四郎
 童貞作家……………淡美 一郎
 海外サディズム雑誌(二)……………吾妻 新
 海外サディズム雑誌……………吾妻 新

白 海外サディズム雑誌……………吾妻 新
 海外サディズム雑誌……………吾妻 新
 海外サディズム雑誌……………吾妻 新
 海外サディズム雑誌……………吾妻 新
 海外サディズム雑誌……………吾妻 新
 海外サディズム雑誌……………吾妻 新
 海外サディズム雑誌……………吾妻 新
 海外サディズム雑誌……………吾妻 新
 海外サディズム雑誌……………吾妻 新
 海外サディズム雑誌……………吾妻 新

特 尻夫人……………木村美智子
 感情教育(八)……………吾妻 新
 あるマゾヒストの手帖から……………沼 正三
 残酷なる女性達……………森本愛造・沢
 夫から妻から……………久留木 栄
 私の好きな縛られ方……………川端多奈子
 稀世婚姻の儀……………瀬川 泰子

昭和二十九年 〇四月号〇

口絵 サークス責め……………龍圖子・画
 新吉原さし……………伊藤晴雨・画
 美しい小馬の鞭売り 外国誌より
 鞭殺(れきさつ)……………畔亭数久・画
 龍圖子画集 美容体操・饅頭責め・
 松葉責め
 都築降子画集 奇妙なる曲芸師
 外国の縛り写真・腰を下す女・こ
 れでいいの？鞭打つ女と馬にな
 る男・高小手・二題・ささくつわ
 の掛け方・柱しほり・引廻し・残
 虐なる女性達・捕物の舞台写真・

写真 罪 巴里監獄に於ける拷問の図
 論稿 縄をめぐる随想……………久留木 栄
 被虐少年期……………三根 耕二
 慟哭の記……………古川 裕子
 私に切腹した……………小田 雅春
 海外サディズム雑誌(一)……………吾妻 新
 海外サディズム雑誌……………吾妻 新
 海外サディズム雑誌……………吾妻 新
 海外サディズム雑誌……………吾妻 新
 海外サディズム雑誌……………吾妻 新

白 海外サディズム雑誌……………吾妻 新
 海外サディズム雑誌……………吾妻 新
 海外サディズム雑誌……………吾妻 新
 海外サディズム雑誌……………吾妻 新
 海外サディズム雑誌……………吾妻 新
 海外サディズム雑誌……………吾妻 新
 海外サディズム雑誌……………吾妻 新
 海外サディズム雑誌……………吾妻 新
 海外サディズム雑誌……………吾妻 新
 海外サディズム雑誌……………吾妻 新

特 尻夫人……………木村美智子
 感情教育(八)……………吾妻 新
 あるマゾヒストの手帖から……………沼 正三
 残酷なる女性達……………森本愛造・沢
 夫から妻から……………久留木 栄
 私の好きな縛られ方……………川端多奈子
 稀世婚姻の儀……………瀬川 泰子

昭和二十九年 〇三月号〇

口絵 図解 変形海老責五態……………龍圖子・画
 明治の元勳……………伊藤晴雨・画
 巧みな調教師……………ギヤツク六
 種・敗戦の悲劇……………折檻・電気コン
 ロ・導火線・女王様……………股間の感覚
 を刺戟する縛り方
 不思議な覗き居……………都築降子・画
 海老縛り・逆さ吊り……………両手吊り・
 凄絶・股間縛り三題……………腰巻・
 半吊り二題……………辻村 隆指導

写真 罪 駿河問に於ける女
 私を愛して下さった皆様へ……………古川 裕子
 悪の部屋……………二俣志津子
 あるマゾヒストの手帖から……………沼 正三
 切腹研究夜話(二)……………中康 弘通
 切腹と蝶々……………飛田 良二
 蜘蛛と蝶々……………川合伊都子
 凌辱花……………松井 鐘子
 私に求めた男(三)……………巴鳥 訓子
 女性体論……………鬼山 絢雨
 変性男子の告白……………岡田 咲子
 謎の女と私……………吉田 一太郎
 解剖物語……………吾妻 新
 感情教育(五)……………伊藤 晴雨
 非小説 性液……………直木 不二夫
 魔性の姉妹……………篠井 英一
 女看守と囚人……………川野 京輔
 惨劇秘録……………鬼山 絢雨
 アニストの記……………須藤 忠正
 現代マゾヒズム芸術時評……………魚岡 七郎
 星は濡れている……………森本愛造・沢
 残酷なる女性達……………河内 幸雄
 無敵絵マニア……………岸本 茂雄
 手記 我が少年時代の犯罪……………森野 茂

白 海外サディズム雑誌……………吾妻 新
 海外サディズム雑誌……………吾妻 新
 海外サディズム雑誌……………吾妻 新
 海外サディズム雑誌……………吾妻 新
 海外サディズム雑誌……………吾妻 新
 海外サディズム雑誌……………吾妻 新
 海外サディズム雑誌……………吾妻 新
 海外サディズム雑誌……………吾妻 新
 海外サディズム雑誌……………吾妻 新
 海外サディズム雑誌……………吾妻 新

特 尻夫人……………木村美智子
 感情教育(八)……………吾妻 新
 あるマゾヒストの手帖から……………沼 正三
 残酷なる女性達……………森本愛造・沢
 夫から妻から……………久留木 栄
 私の好きな縛られ方……………川端多奈子
 稀世婚姻の儀……………瀬川 泰子

口絵 棒と柱を用いた縛り方 龍麗子画
龍麗子画集 蛇男の幻想 杉原虹児・画
風俗面報私刑五態 都築峰子・画
繪物語 拷問部屋
写真 天然色写真 砂にまみれて
組写真 溪流に縛られて
 女が縛られるまで
 フォト・セクシオン 男性被縛写
 真、女の切腹、男性ヌード、緊縛
 美のオンパレード(五)
 アブノーマル・フェアリー……三島 俊夫
 に記 白へのノスタルジャ……河村 哲夫
 まの手 自虐鬼の独白……河真田子路
 ・の 倒錯艶書……二富 浩生
 あや 蜘蛛と蝶々……飛田 良二
 蜘蛛と蝶々……松井香代子
 實めの作家と誤られて……前島 芳雄
 虐待の記録……金丸 壯吉
 女の足の魅力……緑 猛比古
 木鼠吉五郎の半生……伊藤 晴雨
 責め場の舞台装置法(一)……松井 籟子
 淫火(みだらび)……天泥 盛栄
 或る被虐性愛者の手記より……岡 真史郎
 両棲動物(男色夜話)……辻村 隆
 呪縛(じゆばく)……吾妻 新
 感情教育(一)……村田 誠一
 現代文芸に現れた責め……青山三枝吉
 悦虐の旅役者……富田 陽夫
 まぞひすと・さしすと……寒川 緑・訳
 甘美なるアリスの降伏……鬼山 絢策
 らぶ・すれいぶ(十一)……亀岡絃七郎
 女腹切八景 美姫情史……あるマゾヒストの手帖から 沼 正三
 女を縛つた経験を語る 読者座談会
 女のズボン(最後の回答)……吾妻 先生
 欲義先生性愛相談欄……欲義 先生
昭和二十八年 ○十月号○
口絵 魚刷 安達ヶ原一つ家の図 南川和子・画
 針に刺された女

甘美なるアリスの降伏(1)	寒川緑・沢村
女腹切の考察と女の切腹例	田谷敬生
夫婦愛表現と裸女緊縛に就て	西沢芳造
片耳伝奇(一)	澤村弘
手記 妻は縛らず(二)	獄山収一
らぶ・すれいぶ(第八回)	岡山正三
あるマゾヒストの手帖から	沼妻新
女のズボンについて	吾妻須十
古川裕子さんへ与える	佐治川端多奈子
羽村京子さんへ	天泥盛栄
或る被害性愛者の手記より	松井繭子
淫火(みだらび)	
○七月号	
口絵 百鬼夜行の凶	
口絵写真 猿ぐつわ五態	
罪 誘惑	(キリアンの銅版画)
辻番附	伊藤新・雨
クリスチーナの受難(一)	岡田佳介
手記 妻は縛らず	魚岡絃七郎
女腹切八景 切腹本願	羽村京子保
川端多奈子さんへ	馬族
祭壇に君臨する脚	松井
淫火(みだらび)	鬼山
らぶ・すれいぶ(第七回)	千葉三郎
片耳伝奇(一)	澤村弘
女体緊縛美について	獄山収一
囚獄の思い出	宮内義雄
歌舞伎とサジズム	高取辰治
暴帝イワン罪悪史(三)	沼正三
あるマゾヒストの手帖から	伊藤晴雨
辻番附の話(其頃を語る二)	水内武郎
或る体験より 切腹願望	羽村京子
信太蓉子さんへ	浮家鷹三
変の字問答(第三話)	毛利綾子
磯になつたお姫様	姫宮四郎
四馬路界限	須藤律夫
我が告白の断章(一)	山本百合枝
くすねられるよろこび	小坂多美枝
女囚私刑体験記(三)	

私の主題……………岡田 咲子
一清教徒の日記(二)……………粟島 洋
曇後雨……………川端多奈子
新しいサディズム……………吾妻 新
映画「暴帝イワン」……………泉 辰之助

○六月号 緊縛の一表情
○五月号 男性マゾ特集
○四月号 倒錯の告白特集
○三月号 東西拷問くらべ
○二月号 責め小説特集号
○新年号 縛つた女を描く
昭和二十七年

○十二月号 惑溺の愉悅特集
○十一月号 宗教刑罰戦慄画譜
○十月号 切支丹迫害特集

○本誌 昭和二十七年の分は一冊送料共九十円、昭和二十八年以降の分は一冊送料共百円にて急送申し上げます。六冊以上まとめて御申込みの方へは景品を贈呈いたします。

○KK通信 アブノーマルに関する記事、写真、絵画等を満載した小粒でもビリリと辛い読みごたえのあるKK通信、創刊号より第九号迄は品切れですが第十号から第二十二号迄、各号在庫しています。どうぞ、今のうちにお求め下さい。

(二部送共二十円、六回分送共百円)

Sur // STIEFELFETISM //

長靴愛好癖について

— 靴フエティストの趣味 —

天 泥 盛 英

私は自分自身の持つマゾヒスティクなフエティシズムを時に分析して見る事がある。在来、我が国に靴の渡来したのは最近世に属するのであって、勿論履物フエティストの中でも靴フエティストの歴史は極めて新らしいものと考えなければならない。西欧諸国の中で特に西班牙や伊太利の如き気候風土に於ては靴に対する特別な愛好は余り記録されて居ない様である。むしろ、種々の文献上の探索の結果は脚及足に対する従属と、脚及足への愛撫に



Boots for Stage (2)

"Universal picture" "Against all flogs"
(Maureen O'Hara.)

ついては種々の文学的作品が認められるのである。レティーフ・ド・ラ・ブレトンヌ、の奇矯な趣味はフランスの古典的な靴愛好の有名な典型である。即ち、彼の愛好した靴は特に、可愛らしく、即ちヒールの高い、女性用の靴であって、その心理はマゾヒスティクというよりもむしろロマンティックに感じられる。特に後世、靴愛好者達に特殊の偏愛を示された革製婦人用長靴について、レティーフは余り関心を持って居なかった。次に世界



W (1925 style. Boots for Lady,)

1952年度 Sears' 百貨店カタログより

的に著名な同好者は、第一次大戦後、その類唐と、耽溺との異様な雰囲気画面に漂わせたルドルフ・シュリヒテルを看過する事は出来ない。彼の脳中に昇華された典雅なマゾヒズムの精神は同時に婦人用長靴の中に秘む限りない脅威、峻厳にして強烈なる愛情、怪奇的な要素、そうして、断片的な美を展開し又具象化したのであった。彼の描き、製作したおびただしい(と考えられている。)数に上る表紙画、挿絵、芸術写真、水彩画、デッサン其の他の商業美術品は特異な考慮によって婦人用長靴、の持つ美的要素を散布して居たと

思われる。(私の知る作品に関する限りでは)勿論此の他に多くの西欧人が長靴若しくは婦人用靴に対する愛好を示して居る事は幾多の資料、特に絵入新聞等に掲載された広告、及び現代に於ける仏国等のヌード雑誌等の挿絵によって証明されて居る。

我国に於て、谷崎潤一郎、或は江戸川乱歩、等の諸作家は時折り、マゾヒスティックな作品を示して居るが、其の対象が、靴に集中されては居ない。私は、恐らく、日本の何処かに同様の性向を有する同好者が存在するに違いないと考え、同時に、私自身、見聞を広

める為に過去半年に涉って全ゆる努力を傾けてみたのであったが——勿論、其の中には新聞広告、同上英文、投稿、質問欄への投書、知名人士の紹介等が含まれて居る。——そ

の最も喜ばしき報いとして、昨年十月号奇譚クラブに、二種の投書を発見したのであった。

第一に、KK通信にビロード(ヴェルヴェットならん。)に対する愛好を併記して下さった某氏、一人は奇ク本誌にスケート用婦人編上靴を併記して下さった某氏の二人である。欧州に於て最も多くの愛好者を持つ、加虐性鞭打、及被虐性鞭打について多くの愛好者を持つ、シュティーフエル・フエティッシュ(Schiefel fetesch.) はこゝに明かに表面に芽を出し始めたのである。

私は多くの被虐性愛男性の諸氏に一度よくこの拙なる投稿を閲読の上、長靴なるものゝ有する烈しく、濃厚なサディスティックな要素に注目して頂きたいと思う。

第一、形状に対して

革製品である事は、言を俟たないのであるが、脚部を上まで包む事よりする連想は、強度の労働、乗馬等の特殊な行為、動物調教等に対する脚部保護等であり、更に之等は、男性的動作、積極的な行為を示唆する。積極的な行為の中、当然、動物又は奴隷に対する拷問叱責、懲戒、等が考えられる。殊に脚の甲部に於ける特殊な縫方、踵部に於ける拍車止めの装置、等は不気味な雰囲気

氣を与える。

即ち是が、特

殊な加虐用の

目的の時にの

み用いられる

事を暗示し、

甲部に於て、

その潜在的な

脅迫が感じら

れる。更に踵

の高い点につ

いては、之が

婦女の使用の

為に作られた事を示し、優雅なる婦女が、自

らを美化する為に考えた、ハイ・ヒールが此

の特殊な目的に対してすら用いられて居る事

に対する奇妙な調和 (Ricordata Armonia.)

を形成するのである。

第二、使用の場合について

こゝで、最も代表的に考えられる事は、乗

馬、動物の馴致、奴隸制下に於ける見廻り、

等である。乗馬に於ては勿論、その踵部には

苦痛を与えて支配する為にのみ考案された拍

車を付し、鞍の上に跨り、脚を以って圧迫し

蹴り、締める、為に用いられる。動物の馴致



英国風乗馬長靴、女性用、中硬革
手に持てるは狐狩り用、犬及馬兼用鞭

1932年版

English Vogue より

に於ては、馴致せざる時に振う鞭、或は他の

責道具が、被馴致者に苦痛を与える前に、彼

等が、抵抗した場合、最も近い脚に喰付かん

としても、革を以って掩われて居る為めに責

道具が、抵抗に常に先行して、馴致者の意思

を確実に伝える事が特に考慮されて居る。

奴隸制下に於ける見廻りの場合や之に準ずる

場合、女性が男性的な勇氣と支配慾を持つ

為、及、前掲二点の目的の為に使用される故

に連想される苛責を好む心が全体に現れ、特

に不従順、且つ力強い逞しい奴隸に心理的圧

迫を与える為である。

猶之等三つの場合に常に鞭が重要な持ち物となつて居る事が、閨房に於ける女の支配に対する重大な点であると考えられる。

第三、其の種類について

(A) 英国風乗馬長靴、

第一、軟革、軟かい革にて、美しく華車に

作られている。多く狐狩の時の女性

用、踵高いものが多い。惨忍さ。

第二、硬革、硬くした革で出来、軍隊殊に

プロイセン風の長靴、厳正さと同時に

惨酷さを有す。大部分低踵なるも

踵の上部に拍車を付す。



1929年版 Das Leben誌より

第三、中硬革、右二つの中位のもの、踵下部に拍車をつけ、色気ある高踵が多い。(挿絵3)

第四、編上型、ボタン型、後者は前記シリヒテルの愛好せるもの、長所として女の脚線を表わす点。(挿絵4)

(B) 西部風乗馬靴

半長靴が多いその材質は硬質革、特に拍車止めはないが、拍車は常に、形破りに大きく、鋭い。挿絵2参照の事、模様入りなる事は特長、女性用は、多く、赤、白、等が用いられる。

(C) 舞台用長靴、(女性用)

踵高く、半長靴風にて軟革製のもの踵高く、股まで達する軟革製のもの右の中、前者は屢々用いられる。後者のよき実例は「すべての旗に背いて」のモウリン・オハラに着用せるもの。(挿絵1参照)

結び

大変不十分ではあるが、概要はお判りになると思う。即ち、形状に於て男性的、目的に於て、加虐的である事からする連想、の魅力である。私達は、実際に馬となって彼女の乗馬靴で容赦なく蹴って貰いたいし、犬となっ

て彼女の振り上げた犬鞭の下に這い伏して、軟かい長靴の底をなめたいのである。

同時に、奴隷として、彼女に、獣の様に鞭で追い立てられ、懲らしめの為に、長靴で踏みつけられて見たいのである。常に、斯くの如く、シュタイフェル・フエティスト(長靴愛好者)はマゾヒスティクであると同時に空想力を伴って居る。高貴なる種族、マゾヒスト達は、常に生活を空想によって美化し、現実的な世界に、彼等にとって天上的な世界をよび呼べる。ゲエターはいみじくも、望の花にその心を唄い上げモウツアルトは又、この美しい小品にロココ風の装飾を施した。私は人間の一部に与えられたこの、或る意味では禁じられた愉悅が、我々と共に、次の世代にまで、天國的な永続をつづけてゆく事を、確信し、又、期待して居る。

□お願い□ 十月号は特別増大号として増頁の上、特に定価を百四十円に値上げを致しましたが、次号十一月号も多数皆さまの要望により、引続き特大号として、定価百四十円と致します。従って十一月号にて前金切れの直接購読者の方々は、封筒に(次号にて前金切)の捺印をいたしておきますから何卒継続会費の御払込みをお願いします。

モデル女のまぞひずむ

辻

村

隆

アベノ銀座の「ドン」という喫茶店の奥まった部屋で、アルバイトに喫茶店のウェイтрレスをしているという女子短大生に逢った時は、相手が、「普通のモデル料の半分でもいいから是非使ってほしい」と切実な眼差しを向けていても、さして食指を動かされることもなかった。逢ってすぐ、金の話など持ち出す所は、男ずれがしているか、世間ずれしているかのどちらかだと思った。それに第一、もう流行おくれらしい花模様のワンピースに包まれた身体は、お世辞にも立派だとは、私の眼に映ってこなかった。

どうせ、仲に立った男（私の飲友達のA）も、ヌードモデルとは云ってあっても、「縛られる」というような条件は話していかないに違いない。これから、その事を納得させる、という面倒さ臭さを考えるとうんざりして益々興味が失せてしまった。じっとしていても

汗のにじみ出そうな梅雨特有の蒸し暑さのせいで、たかもしれない。「何れ御返事は差し上げましょう」と、ていのよい、断りがわりに名刺を一枚テーブルの上へ置いて、すがりつくような目をふりきって、カウンターへ立っていった。

三人のモデルを駆使しての野外撮影や浴場での三人群像の入浴ポーズをとったりして、（その写真は「新春湯浴」として、二十七年の新年号の口絵にのったが、実際は前年の七月に撮影したものだった。）いつしか、その立花郁子（仮名）という娘さんの事も忘れてしまっていた。

八月も末になると、朝晩思わぬ涼しい風が吹いて生きのびる思いのする頃だった。私は一人の娘さんの訪問を受けた。昼の休みに電話を呉れたらしいのだが、丁度私が外出していて話すことが出来なかったというのだ。一

日の勤めが終ってから来たらしく、もうすでに薄暮れがかった私の家の玄関に白く浮かび上った女の顔には覚えはなかった。一年以上の時間的な隔たりは、私からすっかり彼女に対する記憶を忘却の彼方へ追いやってしまっていたのだ。

彼女は、「立花郁子さん」だった。今年の四月、学校を卒業してもよい勤め口がないので英文タイプを習いに行っているとか、身の上話や世間話の末、今晚、訪ねてきた用件の「モデルに使ってほしい」という事に話が移った。「あの頃と違って、私も大分肥りましたのヨ」といってにっこりと笑った。丁度、その頃は、縛りフオトの変ったのを種々要求されていた折なので、渡りに舟と単刀直入「ヌードだけではなく、縛りのモデルでもいいのか」と念を押してみた。「それも承知の上だ」というので、明日を約して別れた。

立花郁子をヌードにして驚いた。着細りするタチというものもあるが、洋服を着ていた時の貧弱さはハダカになってみると、いささかも見られない。一年の間にいくらか肥ったとはいえ、この乳房のふくらみを何故、もっと早く発見しなかったかと悔やんだ。昨年の六月、初めて逢ったときモデルに使って仕込



郊外の丘の上で松の木に後手に縛りつけた時の立花嬢のポーズ。直射日光の下でその裸身は目にまぶしい位白く輝いていた。

んでおいたら、今度は——と残念に思った位均整のとれた身体つきであった。

然し、最初から「縛られる事」を承知している立花嬢だけに、私の心配は杞憂にすぎなかった。高手小手に縛り上げても、足首にも縄を掛けた方がいいとか、どこで知ったのか、「エビ責め」という言葉で、アグラをかいた恰好で後手首と足首とを締めつけることを要求した。若い女を全裸に縛って写真を撮ると

いう、うしろめたさも彼女に接しているときは何にか、楽しい学校の遊戯の練習でもしている気楽さであった。だが、それも最初は、モデルになりたさの熱心さ、とばかり思っていたが、やがて、それが野外撮影に行っただけは、そうとばかり思えぬようになった。

吊り下げる設備のない日本間で、一度吊ってほしいといった時、手と足を麻縄で縛って持ち上げてみた事があった。勿論、それを写真にとろうなんて事は考えていなかったのだが、彼女は十三貫の体重を如何にして軽くしようかと必死の努力をするのだった。結局三十秒と吊り下げていられず、彼女の背中は床についてしまうのだった。

朝から昼食の休憩を除いて、ぶっ続けに撮影した日だった。西陽がさし込んで暑く、いささか私もグロッキーで、本日はもうこれ位

で終わるか、思っている時だった。彼女は手首についた縄のあとを手で押えながら、

「まだ、フィルムあるの？」と尋ねる。「まだ二本は残っている」と答えると、「私、変った事を思いついたから、とりましよう」と云う。この時、私は、彼女が縛られる事が好きなのではないか、と思った。一度、二年程前、ヌードになって男に見られると亢奮するという女をモデルに使って困った事があったが、立花郁子は露出癖とマゾの傾向はたしかに持っているように思った。バスタオルを渡しておいても、休憩の間でも決して物を肌にならせないモデルもあった。十八才というアルバイトのお嬢さんであったが、休憩中に素裸で、アトリエの中をうろくするようでは色気のあるものとはとれない、余りにも純真で天真爛漫なため、羞恥を殊更に感じないのかもしれないが、こんなのは仕末がわるい。

立花郁子の露出癖は又それらと一風変っていた。彼女は約束の時間の前には、必ずきていて、一度も遅れた事はなかった。時間にルーズな今の若い女にしては珍しかった。郊外に薄の穂が風になびき、晴の日が続いた。歩けばまだ暑かったが、私は毎日のように彼女を呼び出して、郊外電車の沿線で、こゝはと

思うところを狙っては野外撮影に行った。松の木で首を吊って自殺しても、半年も一年も発見されぬところが、都会のターミナルからほんの一時間ばかりの行程の所にある位だから、探せば、絶対に人も来ず、安心してヌードになれる場所はいくらでもあった。

小高い丘の上で、道筋からも遠く離れていたし、手頃な松の木が短い篠の所々に生えた赤土の上に、まばらに植っていた。第一、人の来る用のない所だし、若し、かりに気まぐれな者が登ってきたとしても、丘の上からは遙か数百米先の麓まで見通しなのだから、ひょっくり突然あらわれるという事はなかった。

私はこの丘の数本の松の木を中心にして、立花郁子をいろいろに縛り上げてみようと思った。先ず、雑誌の口絵に使用するため、松の木の根本に後手に縛られているポーズを数枚撮りたいと試みた。裸のお尻をじかに土の上へ下すことは流石にためらわれたので（彼女は一向に嫌がる風もなかったが）中膝で腰を少し浮かすような恰好をさせた。ポーズを指示してから三脚に据えたカメラのファインダーをのぞいてシャッターを切ろうとして驚いた。いつの間にやら彼女は股を開いているのである。「これでは口絵にならない」とい

うので慌て、シャッターを切るのを中止して股をびったりと合せて再びカメラの所へ戻ってファインダーを覗いてみると、又以前のよう股を開いているではないか、（仕方なくシャッターを切った）とは切ったが、これが、あとで二十七年八月号の口絵に使うとき修整に困って、ホワイトで消して草の葉を書き入れて、カムフラージュしたりしたものだ。（縛られた女―緊縛美の断片）

「エビ責」の縛り方をしてほしいという希望で縛ったのだが、さすがに足首が頭につく位迄引き締められなかった。彼女はそこ迄要求したのかもしれないが。



近く迄来たからといって訪ねてきたりした。その頃は、私も女体の縛りについては、やり初めであつたし、積極的な彼女の態度には大いに啓発されるところがあつた。彼女が訪ねてきたりすると、余程の忙しい時でない限り、綿のローブをポケットに忍ばせて一緒に出掛けた。回数は多かったがフィルムに印することは少く、しかも、その少いネガも殆ど使い物にならなかった。どちらかといえば、

その頃になって初めてモデル陣に参加した川端多奈子嬢の初期の作品が誌上を賑わしたようである。(二十七年十月号の「腰のエロス」以下、縛られた女「手の表情、足の表情」「肉体的疼痛」等は皆川端多奈子嬢の第二回目か第三回目かの撮影時のものである)

立花郁子嬢のものとしては僅かに同年八月号の「緊縛美の断片」の松の木に縛られたもの(前記)の外、その右頁のアグラをかいて股をひろげて縛られているもの、それに真下にある、テーブルの上に仰向けに大の字に縛られているものがあるに過ぎない。(当時の分譲写真、第一集の中には、少しは含んでいたかもしれないが、今、どれだけあったか記憶にはない)

昭和二十七年十二月号に川端多奈子嬢が吊りをはじめとした豊富な写真集で奇ク誌上に姿を現わして以来、揺籃期の縛りモデルとして陰の活躍をした立花郁子嬢も姿を消してしまった。それは彼女の家庭の事情の変化による一身上の都合であったが、彼女がもう二度とモデルになることが出来ないと通知してき



て最後の会食を共にした日、私は彼女の求めによって名刺判に焼付けた縛りのフォート三枚を手渡した。彼女は食堂のテーブルの下でそのフォートを繰り返し見た上、ハンドバッグの中へおさめた。私は時折、彼女が今でもそのフォートを持っているだろうかと思ったりすることがある。その頃のネガは、もうどこへ行ったやら、今では探すあてもないが、どこかで彼女が此の記事を見るような事があれば、きっとその頃の事を思い出してくれるだろう。先日、川端多奈子嬢と、或る喫茶店でお茶を飲んだ時、冗談に「縄を持っているヨ」と

きようと思ふ、座らないかと、痛くないかと、彼女が、へ、肌、山、た、え、生、の、筐、と、の、だ、が、案、外、平、気、で、あ、つ、た。

手提鞆のフタを開けたら(鞆の上には赤と白のまんだらの綿紐が入っていた。)チラリと視線を走らせた川端嬢の真白な顔が、瞬間、紅を散らしたように真赤になった。ヌードになっても別に恥しがらない彼女が、「縄」に対して、このように強い反応を示すことに、私の方が驚いた位だ。奇クの誌上で豊麗な縛られた姿態を以て、デビューしたその頃の川端嬢は、立花嬢なんかと比較したら、大変内気な大人しいお嬢さんで、電車の中でも並んで腰かける事もしない位の初々しさであったが次第に、「縛られる」という事についてだけ積極的になってくるのには、却って私達の方が引き廻される恰好だった。その頃から読者より送って来る夥しい、女性の縛りについての注文や希望は、大いに私達を啓発した。そして「縛られる」という事については如何なる事にも嫌とは云わない「モデル嬢を相手として、火花を散らすような緊縛の実地研究が行われた。「お前はマゾヒストだ」と云われて、「そうかしら?」と首をかしげるモデル嬢が現れてきても一向不思議ではなかった。

新 連 載

夜 光

島 【一】

吾 妻 新

栗 原 伸・画

さいはての海

速見健次郎が妻の郷里の佐渡をおとずれたのは二度ある。はじめは結婚した年の夏で、すでに同棲してから三カ月になるから、新婚旅行というシャレたものではない。妻の母親に会いに行くのが主な目的だった。

ふたりは東京で恋愛結婚した。結婚式もろくにあげず、親戚もよばなかった。親が反対しようとしまいと一緒になる気持は変らなかつたから、はるばる佐渡から上京してもらふ必要もあるまいと思つて、恵子から母親に手紙で了解を求める手紙を出したのだが、けっきょくは事後承諾みたいなものである。善良で、やさしくて、老いては子に従うことを信条としていた母親は、未来の夫の性格をこと細かにつらねた娘の手紙をすっかりのみこんで、承諾の旨を毛筆で送つてよこしたが、ただ一度お前の夫というひとを連れてきて会わ

せてほしいと付け加えることをわすれなかった。

「こんな分りのいいお母さまっていいわよ」と、恵子はその返事をみせながら言った。

「なんとかして、一度、行つてくださらない？ ううん、固苦しく考えなくとも、遊びにゆくつもりでいいじゃないの。佐渡はともいいところよ」

「そうだな、君のお国自慢ばかり聞かされているのも辛いから、一度実物拝見といこうか。それに、お母さんにお会いするのは、これはたしかに礼儀だからね」

こうして、新婚旅行ならぬ佐渡行きが実現した。

二度めはずっと離れて、結婚四年めの秋。あれほど彼を歓迎してくれたやさしい母親の亡くなったときであった。

島の人情の厚いのは、はじめての旅行のときから知っていたが、こんどまた思い知らされたわけだ。家は相川町から鉾山にのぼる途中の坂道にあったが、夜になるとかなり遠くの人々までが提灯をぶ

らさげて集まってきて、家じゅう足の踏み場もなくなった。そして夜おそくまで念仏を唱えるのである。この法事がなんと、一週間もつづいた。必然的に、恵子の涙も乾くひまがない。

「親切もありがたいが、これじゃあ君のからだもまいってしまう。お母さんはもう輝られたのだ。ね、このへんで法事は切り上げることにしようじゃないか」

健次郎はじっさい妻の健康を気づかったのだ。彼はすべてを済ませてからも、すぐ東京の生活に戻るのをやめて、妻の気を晴らしてゆこうと思った。

夏の佐渡は観光客の世界である。日に二回の連絡船から吐き出された人々はこの小さな町にあふれんばかりである。かれらは宿屋で酒をのみ立浪会の踊りを見物し、土産物屋の前をぶらつき、遊覧バスにのって島を半週し、運転手



と女車掌のおけさに送られて、両津の港から吐き出されるといいうりすをとる。健次郎はそういう俗悪な気分がたまらなくいやだったから、毎日恵子をつれて泳ぎに通った。海岸には海水浴の設備もなにもなく、地元の河童連が駆けまわっているだけだから気持がいい。それに、黄色いびったりした海水着をつけた恵子のスマートな姿が現われると悪童連が鳴りをしずめて見守るのも、子供っぽい健次郎には愉快だった。

だが、いまは秋だ。観光客の影はまばらで、佐渡は北国の孤島の静けさを取り戻している。触れれば色のつきそうな日本海の紺碧はますます深くなり、さわやかな微風は肌に沁みるばかりである。「すこし出歩いて、自然を楽しもうよ。君にひとつ案内を頼もうかな」

「ええいいわ。どこへゆく？」と、恵子も元気づいた。

「海岸線をずっと東へ廻ってみる？ 千畳敷だの尖閣湾があるわ。」

すごい絶壁がならんでね、モーターボートでその間を縫うの。東京から来た人たちはみんなびっくりするんですって」

「反対側に歩いていったら何がある？」

「そりゃあ、春日崎なんかあるけど、寂しくってダメよ」

「じゃあ、そっちへいこう。」

「尖閣湾？」

「いや、西だ」

「あなたって、アマノジャクねえ」

あきれて、恵子は笑いだした。しかし夫の名所嫌いは知っているから、争う気持はない。

春日崎はおけさの文句で知っていたが、来たのは、もちろん始めてだった。象の鼻のような岩壁が海中深く突き出していて、その上は一面の草原である。ふたりはその突端まで歩いていった。みおろす三方は海で、風ははるか水平線のかなたから足元まで、浩浩として鳴りひびいた。たしかに絶景だ。

「ひどい風。吹きとばされそうね」

と言いながら、恵子はしがみついた。もちろん、あたりに人のいないのを計算に入れている。

「茨城県の五浦にある岡倉天心の家を知ってる？」

「いいえ」

「そこにね、六角堂という離れ座敷があるんだよ。天心がそこで瞑想に耽ったというんだが、六角形の部屋で、四方がガラス張りなんだ。それも海に突き出た岩の上に建っているの、まるで海のなかに浮んでいるような気持になるらしい。だが壮大さではここと比較にならないね」

「そういう家は佐渡にだってあるのよ。あたしはまだ見たことないけど、小木の山本梯二郎の別荘が有名だわ。……どうしてみんな、そんなものをつくりたいんでしょうね」

「自然のなかで孤独をかんじたいのさ」

「あなたはどうか？」

「僕もそういう傾向が多分にある」

「じゃ、いざとなれば、あたしなんか邪魔なのね」

わざとものがいて離れようとするのを、健次郎は抱きしめ、キスした。豪快な日本海を背景にこんなことをするのは彼の趣味にかなっている。

「僕は孤独も感じ、同時に君という人間も感じたいんだ」

「そんな、ゼイタクよ」

「もちろん。僕の夢はなかなかゼイタクだよ。まあききたまえ。僕の理想を言うと、海の上に突きだした家も結構だが、ほんとは島に住んでみたいのさ」

「それなら、ここに住めばいいわ。佐渡はあたしの故郷だし、知っている人もたくさんいるから」

「佐渡は大きすぎるよ。第一、君の知人だの有象無象のいるところ

じゃ厭なんだ。もっと小さな離れ小島かなにかでね、君とふたりっきりで住んでみたいんだよ」

「いやあよ、こわいわ」

「だって、僕がいるじゃないか」

「だから怖いよ」

笑いながら、恵子はやっと身体をはなして言った。

「わかるでしょ、あたしの言ってること」

「縛ったりするからかい？」

「そうよ」と答えて、恵子の頬は紅くなった。

「そんな島に二人きりでいたら、あなたって言うひとは、何を考え出すかわかりやしないわ。おお怖い！」

「バカ言うんじゃないよ。かりにも、こんなに愛している僕がだね……」

「ダメダメ、前科があるから。その、愛しているが、くせものよ。だれもいないとこで何されたって、離れ小島じゃ逃げ出すこともできやしないし……」

「まるで鬼ヶ島だね」

眩しそうな視線をかわして二人は笑いだしたが、恵子はじぶんの言葉に刺戟されてますます紅くなった。「逃げ出すこともできやしない」ということが、ある種の実感を伴って、彼女の羞恥心に触れたのかもしれない。

ふたりはもとの道に引き返して、さらに西へ海岸伝いに歩いていった。たしかに恵子の言ったように、人家はますます疎らになり、風景はさらに荒涼となった。それは観光客をよるこぼす奇岩絶壁でない代りに、「革衣かわころもまとえる子らを引具ひきぐして」とカインの逃亡をう

たったユーゴーの詩を想わせるような、暗さ、寂しさ、壮大さにたえずむ地の果ての姿なのである。心なしか海の色まで灰色を帯びた。速見健次郎はここに来て、はじめて佐渡の秋色を見た心地がした。

「どこまで歩くの？」と、恵子が音をあげた。

「もう一里以上よ。あたし、疲れちゃった」

「よし、じゃここを終点にして、昼飯を食べて戻るとしよう」

乗物がないのだから、帰りを計算に入れなければならない。それに、休むならここより適当な場所はない。砂浜は美しいし、大きな岩が風当りを防いでくれる。二人はその岩蔭にすわって、持参の弁当をひらいた。

真正面の沖に、島と呼ぶには小さすぎる感じの島が浮かんでいた。黒ずんだ緑色は明らかに樹木らしく、目測したところでは一里とはなれていない。全体がお供えの餅をつぶしたような恰好で、ひどくユーモラスにみえた。

「あれ、なんていう島？」

「夜光島」

妻は即座に答えた。

「変った名前でしょう。夜来たことはないから知らないけど、土地の人の話だと、夜光虫であのあたり一帯が青く光るんですって。だからそんな名がついたのね」

「夜光虫なんて、もっと南にいるものとはばかり思っていたが、そいつはすばらしいね。人が住んでるの？」

「だれがあんなところに住むもんですか。でも、ちっぽけな島のくせに、ふしぎと真水が湧くのよ。いつか町の青年団で舟遊びしたと

き、あそこに上陸して休んだそうよ」

「どのくらい広いんだろうね」

「ここから見ると奥行があって、縦に細長いだよ。それでも周囲がせいぜい十町ぐらいなものでしょう。……どうしてそんなこと訊くの？」

「いや、住めるかどうかと思ってね」

「そらそら、またへんな空想がはじまった。バカねえ。あんな薄気味わるいところに住むなんて考える人はいやしくってよ。第一、買物なんかどうするのよ？ 飢え死んじゃうじゃないの」

「ボートがあればいい」

と、健次郎はいつしか夢中になっていた。

「一週間か十日に一度、米とか味噌醤油を、ボートで買い出しに出る、ね。それだけでいいんだ。野菜は買ってもいいし、じぶんで食べる位なら畠をつくって十分足りる。魚が食いたかったら釣るさ。肉はカンヅメでもいいが、僕の理想から云えば、鶏や兎を飼いたいね。ちいさな島なら放し飼いにして、空気で獲る楽しみもある。だから、不自由なのはそんな食糧じゃなくて、毎日の新聞がよめない位のものだろう。だが、それだってラジオで間に合うじゃないか。……どうだい君、こいつはすごい生活になるぜ」

「まあ、なんとでも空想なさいよ。家を建てて、鶏や兎を飼って、ボートをそなえつけて、……ちっとやそっとのお金じゃ出来っこないから、あたし、安心してゐるわ」

恵子はからからと笑い声を立てた。

孤独の夢

それから十年が流れている。何もかもが思い出となった。世の中も変ったが、速見健次郎の生活はもっと変った。愛する妻を亡くしてから、彼はずっと孤独を守りつづけているのである。

表面的には、彼の生活はほとんど変らなかつたと云つていい。地味な文筆生活は十年一日のようにつづいていた。その間に著書も幾冊が出たし、一部では彼の名も知られてきた。しかし彼はいぜんとして文壇づきあいをせず、金になる原稿をこたわるような時代おくれの頑固さを改めようとしなかつた。それでもなんとか暮しなから少しづつ余裕ができてきたのは、家族を持たず、ハデな遊びもしないせいだ。永井荷風などちがって、もともと彼は金銭に頓着しない人間なのに、カフエやキヤバレエにもゆかず、ましてや女遊びに手を出さないというのは、やはり妻を亡くしたのが原因となつて厭人癖にとりつかれたのであろう。

ある雑誌が彼の写真と感想を口絵にのせたとき、その風変りな感想は人々の注意をひいた。

「私は昔から都会がきらいだったが、いまでは田舎も好かない。なぜなら、人間がいるからだ。ではどこに住んだらいいか。無人島しかない。私のいまの夢はそういう島をさがしたことです」

すると、ある読者が雑誌社気付でながい手紙をよこして、瀬戸内海にそういう小島があることを知らせてくれた。ただその手紙の終りには、尤も至極な忠告がついていた。

——ただ憂うことは、もしそれがあなたの売名でなければ、ロマンティックな空想に終るだろうということです。私は孤独好きだと称する人間が真の孤独に耐えた例を知りません。かれらは大

抵、孤独の観念を愛するので、実際にひとりぼっちになると、自炊することさえ厭になってしまうのです。だから私はここに地図を添えてお知らせしますけど、費用と手間をかけて瀬戸内海までいらっしやる前に、もっと手近かなところで甘い孤独をお味わいになったほうが得策かどうか、検討あらんことをおすすしめします。すでに石川啄木の先例がありますから。浅草の夜の眠いにまぎれ入りまぎれ出でさしきびしき心……

その夜、浅草ならぬ銀座のバーで、速見健次郎は親友のAにこの手紙を見せた。Aはもとより未知の読者の意見に賛成だった。

「都会に生れて都会に育った君が、島なんかに住めっこないよ。まあ、夢だね。ひと月もたたないうちに幻滅をかんずるだろう」

「君たちには僕の性格がわからないんだよ」

と、健次郎は反駁した。

「なるほど僕は東京に生れたよ。だが、どこで生れるかなんてことは偶然だからね。むしろ東京で生れた僕が終始一貫、都会生活に反感を抱いているという事実のほうが重要じゃないかね。僕は高等学校のところから、わざわざ好きこのんで信州まで出かけ、一夏、百姓仕事をした人間だ」

「それは君がほんとうの百姓じゃないからだよ」と、Aも負けていなかった。「百姓で食わなくてもすむから、それが楽しいんだ」

「といって、僕が生れつきの百姓になれないかぎり、そんなギロンの無意味さ」

「しかし、離れ小島で暮すのは問題がべつだぜ」

「ああ、だから云ってるんじゃないか」と、健次郎は激しい口調に

なった。「百姓は食うためだから辛いだろうさ。が、島でくらすのは食うためじゃない。ゼイタクな希望だ。だから実現できさえすれば永つづきはするだろうと思うんだ」

「そうはいかないよ」

「まあ待ちたまえ。僕は子供のころから妙な放浪癖がある。小学生のころにブラジルへ渡ろうと思ったことさえあるんだ。もちろん、これは他愛のない夢だったがね。……その後、青年時代になっていちばん愛読した本はどんなものだったと思う？ 旅行記だよ。それもアメリカやヨーロッパの旅じゃない。文明とかけはなれた荒涼たる自然なんだ。スヴェン・ヘーデンの『ゴビ沙漠横断記』、ジイドの『コンゴ紀行』、タイクマンの『トルキスタンへの旅』、フレミングの『鞭鞭通信』、……まだたくさんあるよ。ボンサン『カプルーナ』、ロウエル・トマス『ハイバル峠を越ゆ』、シーブルック『アラビア奥地行』、ナンセンの『コーカサス紀行』やナジロフの『新疆省から印度へ』、ニルス・アンボルトの『カラヴァン』、それから……」

「ああ、分った分った」とAは笑って手をふった。

「君の夢は大したものだよ。ひとつ、いい方法を教えてやろうか。地球儀と世界地図を買ってくるんだ。そうして朝晩たのしむのさ。それがいちばん無事で、現実的だぜ」

「それもやってみた」

相手は大真面目で答えた。

「こんど僕の家に来てみたまえ。地図は壁に、地球儀は机の上にある。だが君が嘲笑するように僕はじぶんを嘲笑した。いくら空想をたくましくしても僕は中央アジアの土を踏まず、エスキモーと暮す

ことなく、沙漠の地平線に沈む血のような夕日を見ることもない。これからもその可能性もない。愚劣な、ゴミゴミした都会のちっぽけな建物のなかで、くだらぬ人間との交渉に神経をすり減らしてゆくんだ。そんなバカなことが君、耐えられるかね。僕みたい、山の中か地の果にでも生れればふさわしいような野性的な男が、一生のあいだ大自然を夢みながら、電車に乗って銀座へ酒をのみに出る



ようなことで満足できると思うのかね?……断じて否だ! 僕はもう、世間とおつきあいに飽き果てたよ。といって、大した財産もなければチャンスもない人間がアジア大陸を旅行できる望みはないんだから、可能の範囲内で自然をさがすしかない。それには、海しかないんだ。海ならともかく水平線というものがあるからねえ」

「そこで、無人島をさがして、ロビンソン・クルーソーの生活をやるうというのか。体裁のいい逃避だね」

「なんとでも批評は甘受するよ」

「で、なにをして暮らすんだ? まさかクロス・ワードでも解いてるわけじやなからう」

「原稿もかくし、勉強もする。本はうんと持ってゆくからね」

「書いた原稿はどうして発表するんだ?」

「君に送るから、たのむよ」

Aは笑いだした。酔がまわっていた。

「しかし、本当に君はそれをやる気なのか? 実際にひとりで暮す気かね?」

「ああ」

「ほんとうに一人で?」

しつこい質問だ。速見健次郎は顔をしかめた。Aは穴があくほど意地わるくその表情を見守りながら云いつづけた。

「寂しかあないか」

「そりやあ、賑やかとはお世辞にも云えまいね」

「僕の訊いてるのはセックスの問題だ。それをどう

解決するね？」

「そんなことは愚問だよ。恵子が死んでからこのかた、僕はひとりぼっちなんだ」

「都会ではね」と、すかさずAは切り返した。「君のきらいな都会には無数の刺戟がある。ごまかすには工合のいいところだ。ところが島ではそういえない。しかも君は、だれもない島にわざわざ行こうというんだ。ゴーガンだって、タヒチに女がいなかったら、行かなかったにそういないよ」

「……いいことを云え」

健次郎はいそいでグラスを口に運んだが、指が震えて、ワインは膝にこぼれた。

Aはあたりを見まわしていたが、急に顔を近づけた。

「白状しろよ、速見。君が仕事も生活もすててそんなところに落ちつくなんて、どうも僕には信じられない。なにかあるんだろう。―――」



僕は非難したり軽蔑したりしやしないよ」

「僕みたいな酔狂な男についてくる女があるかい。あったら、紹介してほしいな」

吐き出すように言って、健次郎はそっぽをむいた。

陰 謀

ぼつと明るくなると、あたりはざわついて、館のなかは急に人いさがしがした。健次郎は二つ折りにしたプログラムを開いた。まだあとに、「語らざる男」と、短編「どたばた二挺拳銃」がある。第一回の最初が終わったばかりだからほとんど立つものではなく、客は通路にひしめいている。彼はゆっくり立ち上り、あわてて寄ってくる男の肩を突いて、「あわてるな」と怒鳴った。

そとに出ると、ショーウィンドの前に立って、タバコに火をつけた。たしかにそのスタイルには、デニムのズボンを穿いたヴァージニア・メイヨが、カーク・ダグラス扮するところの保安官に抱きついた恰好で、両手に手錠をはめられている。その可愛い顔と、びったりしたズボンの腰のあたりと、手錠とが、永い間彼の眼を捕えて放さなかった。

「こしはいわゆるステイルか」

苦笑がうかんだ。俺はこの写真に惹かれて、新聞原稿を一つてわざわざ足を運んだのだ。さもないければ「死の砂塵」なという西部劇まがいの映画など眼もくれなかったにそういない。

篇を通じて手錠をかけられるのは男ばかり、ヴァージニアは一度もそんな眼に会わない。しかも最初はズボンを穿いていたのが、生命がけで沙漠を横切る冒険の旅に出るとたんに、こ

丁寧にもスカートに穿きかえている。これでは一杯食わせられたも同然で、貴重な時間をむだにしたと思うと、大人気もなく腹が立ってくるのである。

だが次の瞬間に耐えがたい寂しさ、苦しさが胸をおそってきた。それはあまりに突然だったので、ほとんど抑えようがなかった。眼の裏が熱くなって、いまにも涙がこみあげそうである。彼はあわててその場をはなれ、足早に秋の陽のきらきら輝く電車道に出た。

とてもそのまま家に戻る気がしなかった。こんなときには酒でも飲むしかない。だが、時刻はまだ昼すぎだ。彼は飯田橋のなじみの店を思いだした。そこなら、大抵の無理は通せるのである。

店ではまだ細君が若い女の子を相手に、エビの皮をむいていた。

「あら、いらっしやい。ずいぶんお早いですね」

「うん、急に一杯、のみたくなってね」

「でもごらんのとおりで、まだなんにも用意が出来てないんですよ」

「サカナは新香でもなんでも、有り合せでいいよ。とにかく、つけてくれ」

そこで彼はみこしを据えた。ほんの二本ですますつもりだったのが、出たときはすっかり暗くなり、神楽坂の灯が帯のように美しく流れていた。

タクシイをとばして郊外の家にとどろくと、門燈の下でよろめく足を踏みしめ、ベルを押した。

急ぎ足で婆やが走り出てきた。

「おかりなさいまし。ご飯は？」

「要らない。……だれも来なかったね」

「はい。郵便だけで」

「じゃあ、いいから今日は早く寝てくれ」
だれが来ることがあろう！　じぶんから交際を絶っているのではないか。

洋間の書斎に入ると、どっかと椅子に腰をおろした。それから立ち上って、棚からウイスキーの角瓶をおろし、グラスになみなみと注いだ。が、一口のむと、そのまま頭をかかえて椅子に沈みこんでしまった。

ときどき夜になると襲ってくる、名づけがたい発作を、いまでも感ずるのである。手当り次第のものをぶちこわし、大声で叫びたいあの衝動だ。

わかいころが懐しい。あの時分にはそれがなんのためかよくわからなかった。ろくに酒も飲めず、鬱積したエネルギーは外部に荒々しく流れたすほかはなかった。徹夜で勉強してもごまかすことができず、不穏な眼つきで街を歩きまわり、わずかなことで不良とケンカしたり、巡査に食ってかかったりした。やがて恵子と知りあい、結婚生活に入ってから、ふしぎにその焰はしずまった。彼はおだやかな、物わりのいい夫となり、郊外にふたりきりの巣をつくってほとんど外出もしなかった。トルストイの晩年を知るものは、彼がソフィアと結婚して「こんなに幸福でもいいものだろうか」と述懐したくたりをよむと苦笑するのだが、速見健次郎の場合にもそういう瞬間があった。あまりに幸福すぎて、これが永つづきするだろうかと思ひかた疑いたくなるのだ。しかし、若いトルストイ夫人は秘密の日記をつけていたが、恵子は文字どおり夫を愛していた。だから彼の疑いはなんの根拠もないものだった——ただ、恵子さえ生きていてくれればである。

妻を失った健次郎は、また青春時代の野性的な人間に戻った。ちがう点といえば、ケンカのかわりに酒をのみ、多少名が出て金銭的に楽になった位のものだ。だが、酒場などで酔っ払いが絡んだりすると、たちまち眼の色が変わった。

「ふるい友人はお節介なものだと観念したまえ。君は結婚しなくちゃいけない」

Aは心配して、よく忠告したものだ。

「君はね、とてもひとり生きてゆける人間じゃないんだよ。やさしい奥さんが要るんだ。たとえば、恵子さんのような……」

「女房のことは言わんでくれ」

腹を立てて、彼はどなった。

愛する妻の思い出がまだ苦しめてるんだ。と誰しも思うにそういない。おそらくAもそうだろう。——卑怯にも健次郎はそれを意識しながら怒鳴ったのだ。

恵子の哀惜が胸をしめつけるのは事実だ。が、それにはだれも知らない事情が加わっている。愛することと、縛ったり猿ぐつわをはめたりすることとの関係がうまく説明できない以上、健次郎には再婚をこぼむ理由も説明できないのだ。妻を失った男が再婚する場合にふつう感ずる危惧——はたしてこんどの女は、どの程度じぶんを満足させてくれるかといったようなものは問題にならなかった。彼はじぶんの性能力に自信があった。問題なのは愛しかただ。特殊な服装をしたり、特殊な「遊戯」を享樂することに、恵子は馴れていた。それは恵子が子供のように純真で彼を信じ切っていたのと、彼が常識的な男でないのを最初から知っていたのだが、そんな条件はだれにでも求められるものではない。とくに戦後は女の自意識が

発達しているから、たとえそれが愛情の遊戯だと言ってみたところで、もっとも誤解されやすいこの種の行為の第一歩で逃げだしてしまうだろう。それだけならまだいいが、もししたら彼の態度を世間にぶちまけたり、家庭裁判所に提訴したりするかもしれない。そうなれば哀れな被告は一言も弁解できず、弁解しても採り上げられず、書くことと私生活の矛盾を指弾され、嘲笑と痛罵の雨をあびて葬り去られるだろう。

だから、彼は独身なのだ。はげしい欲情に苛まれつつ、この数年間、余儀ない空閑に耐えてきた。だが、この不自然な状態はいつまでつづくだろうか。健次郎がいちばん忌むのは抑圧のゴマカシなのだ。彼はわかいときから、思ったことはなんでもやってきた人間だ。その実行力は、マイナスの面もあったが、プラスにもなった筈だ。それが酒をのみ、ステイルにだまされて映画を見たりしている。みじめな、去勢されたマスターベーションにすぎない。ヴァーシニア・メイヨがスクリーンの上で手錠をかけられたところで、それは恵子との強烈な思い出の百分の一の迫力もないのだ。むしろ、忘れかけていた彼女の肉体をこの腕に感じ、二度と取り戻せない幸福を失ったことを身に泌みて思い知らされるだけである。

(やっぱり、島に渡ろうか)

いつのまにかグラスは空になっていた。彼は角瓶を傾けた。眠れぬ夜。こうなればまた奇怪な空想に耽りながら、椅子の上で朝を迎えるしかあるまい。

島の生活が頭にうかんだのは一年ほど前からだった。それは愛読者が手紙でひやかしたような、瀬戸内海のどこかの島ではなかつ

た。小説でさえ、真実の核がなければ書けない彼は、生活の設計となればもちろん現実の足がかりをもっている。夜光島だ。無縁の小島ならいくらでもあるが、彼はこの眼で眺め、気に入る、妻に移住の夢を語った思い出の土地はここだけだ。しかもそれは海岸から一里しかなく、絶景の地で、淡水が湧くのである。

経済的にも、いまなら不可能ではない。銀行預金は僅かだが、この家を売って合せば百万ちかくにはなるだろう。足りなければ出版社から前借の手も考えられるが、ゼイタクを必要としないから十分な筈だ。健次郎は疎開地で、ひとりで小舎を建てた経験があるから、材料さえ舟で運べばバラックぐらいは建てられる。大工にたのんでも、佐渡で刻んでおけば運んで建てるのに三日とかかるまい。

残るのは、なぜ島に住むかという理由だけだ。速見健次郎は友人や世間の好奇心を防ぐために、あらかじめ雑誌にあのような感想を発表しておいた。意識的な伏線だった。人々はよもやと思って本気にしないだろう——あの嘲笑的な読者のように。だから、彼が実行したらあッとおどろくだろう。だが、彼らは雑誌の感想をよみかえして、そこに風変わりな人間の動機をみいだすだろう。

自然のなかに溺れこみたい気持はウソではない。健次郎の性格のなかには、なにかさういった突飛なものがあるのだ。しかし、Aが鋭い眼つきで疑ったようにそれだけであろうか？——こう自問すると、彼の落ちつきはなくなって、胸が妖しく騒ぐのである。それからさきは、もうリアリストの速見健次郎ではない。ぼかした願望の虹色の夢を描いて、かれの心にのしかゝってくる。しかもいけないのは、もしかしたらその夢が孤島に住む最大の理

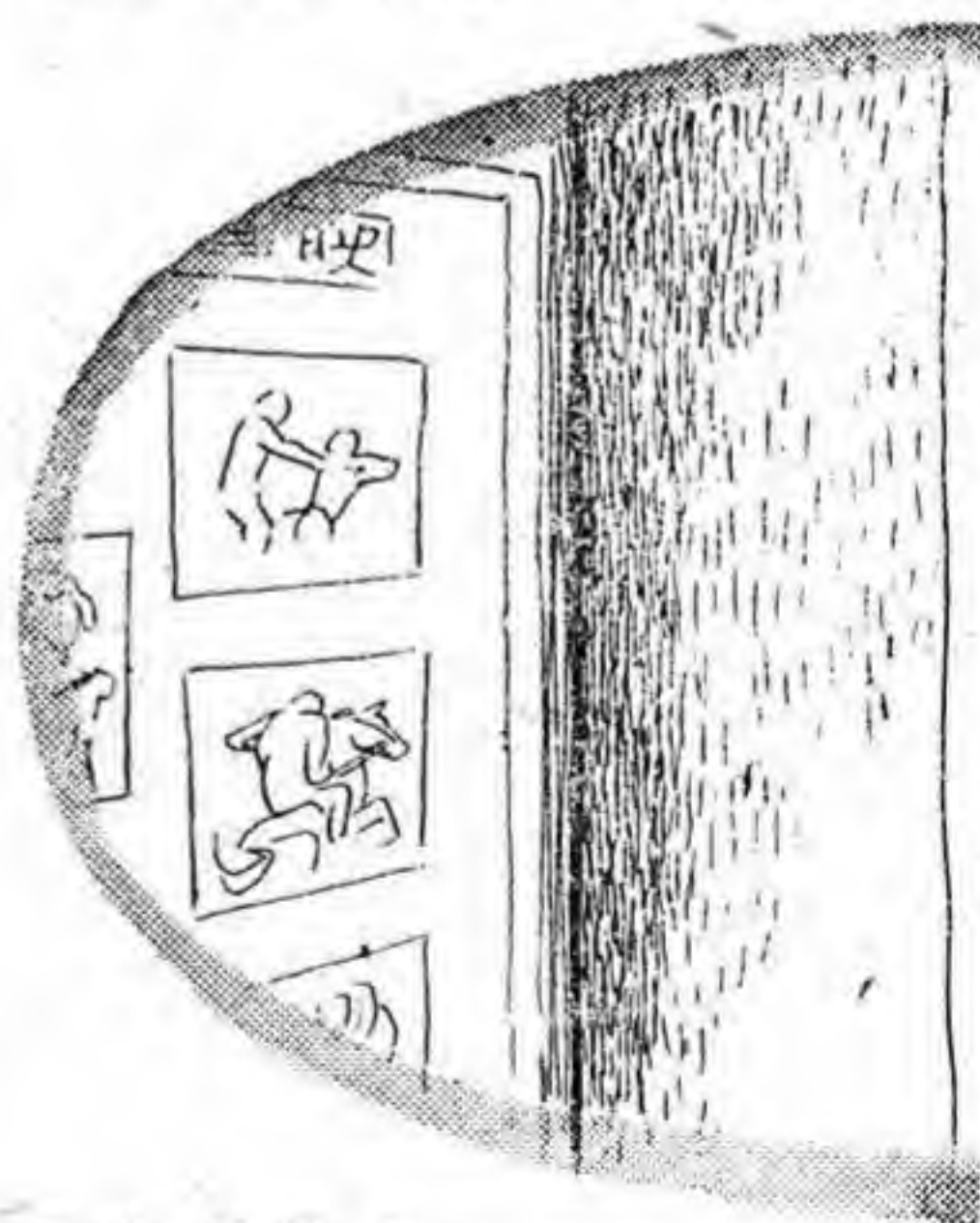


由かもしれないことに、彼自身気づいていることだ。もっと露骨に言ってしまうえば、彼はひとりで朽ち果てようとは毛頭考えていないのである。異性の対象が欲しいのだ。無人島が絶対

条件なのはそのためである。外界から隔絶された土地ではじめて彼はあるとあらゆる抑圧を発散させることができる。なぜなら、いかなる人間も彼を監視したり批評したりできないからだ。そこには法律も、因習も、社会の輿論もない。いざとなればどんなことでも可能である。相手は逃げだすことができず、彼の要求がどんなものだろうと、もはや抗らうことも、争うこともできない。

しかし、紳士の仮面をかむってある女をだまし、小舟にのせて島に連れこみ、檻禁することはどう考えても非現実的に思われた。第一、そのような詐術は彼の性格として出来そうにない。第二に、永遠の檻禁などということが夢物語りだとしたら、いずれ犯罪者として告発されねばならない。第三に、これがいちばん重要なことなのだが、純粹な暴力から愛情が生れる筈はない。ところが彼の目的は、たれ憚ることのない平和で自由な幸福を享受することにあるのだ。たとえば逃げ出せないことで相手が強制を感じても、それは内気や臆病をくじき、世間の慣習がここでは無力なのだというのを呑み込ませる手段でなければならぬ。「死んでもあなたは厭だ」と叫んだり、ひざまずいて助けてくれと哀訴されたりしたら、だまって舟にのせて送り帰すしかない。なぜなら、相手の不幸は彼に感染し、愛されないという意識で彼にみじめな敗北感をあたえるばかりだから。

では、どこに対象を求めたらいいか。ハッキリした対象もなく、なぜ大真面目に島の生活などを計画し、実行するつもりなのか。健次郎は幾杯めかのグラスを乾した。それから机に手をのぼして、郵便物を引きよせた。ハガキや手紙などに見向きもせず、大形の封筒をつかみ上げ、封を切った。そして、バラバラと雑誌の頁をひら



いた。——やっぱりそうだ。今月も彼女はかいている。重苦しい熱っぽい筆致で理解されがたい星の下に生れつき、努力も反省も医しがたい欲情の苦悩をおどろくほど卒直にさらけだしている。おそらくそれはフイクションではない。だから語ることは自己の心境だけで、悲鳴にも似た語調は一樣の暗さをもっているのだ。

健次郎はすでに一年以上も前から、最初の投稿から、この唐沢登枝の異常な告白に注目していた。そこには、実際に体験しなければ表現しえない多くの——そして彼のような人間には本能的に嗅ぎ分けられるところの——真実があった。いかにそれが強い印象をあたえたかは、健次郎自身、はじめて自分の性癖を告白する気持をもつようになったことでわかる。だが、勇気の点でははるかに及ばなかった。彼が第三者の形でそれを述べはじめたのに対し、彼女の体当りの告白はますます痛烈なものとなり、はてはただひとつの絶叫——私はどう生きてゆけばいいのか、あるがまゝの私を受け容れるものはないのかという言葉に凝結してしまった。もはや手記でもな

く、ましてや作品ではない。活字を通した願望の手紙だ。それがぶちつけの投稿ではなく、一年以上の永きにわたって、漸強音で高まりつづけた叫びであるところに、この女の特異性があり、この雑誌の文献的価値がある。これにくらべれば小倉清三郎の相対会研究報告などは——関係者の良心は別としても——色褪せた記録にすぎない。

ただ健次郎の感じたことは、この種の訴えは孤独な人間の飢餓感から衝動的に流れてたものではあるまいかということだった。多くの反響が彼女の手元にあつまった。が、いまだに彼女はひとりである。熟した柿はどの手の上へも落ちようとしないのである。おそろく彼女は、天に向けて矢を放ったのだ。あるいは悲しいブーメランを投げたのだ——虚空はるかに舞って投げた手に戻ることを予期しながら。

「いや、それは許されない。」と彼は誰にともなく言ってきた。

「彼女はその衝動の酬いを受けなければならない。なぜなら、活字は黒く紙にしみついていくからだ。代償なしにこの呪文は消えないのだ。ベートーヴェンが『私は千度も愛する』と書いたとき、私たちは千度という形容詞は無視しても愛するということだけは信ぜざるをえない。衝動にふくまれる真実はこのようなやりかたで最小限の責任を負う。彼女が『さあ、なんでも好きなようにするがいい』ということを書きおろしているに違いないだろう。それは言葉だ。しかし『私が満足する方法で』満足させるとしたら『誰でもいい』ということだけは、負わねばならない最小限の真実であろう」

速見健次郎はグラスを伏せ、机にむかってレターペーパーをとった。それから、考えつづけた……

「俺はあの叫びの反響のなかに入っていない。俺は傍観者として眺めていたにすぎない。たぶん唐沢登枝と自分との間には、なまじそれだけの過去と体験があるだけに、趣味の調整に時間がかかるであろうし、それを都会の住宅や安ホテルでうまく果せるとは思えないからだ。また彼女の訴えに応じた多くの人々のなかには、俺よりはるかに適したものがいるにそういない。しかし、いまは違う。俺には島がある！」

「たとえ俺が人間としてどんなに粗野で欠点だらけだろうと、無人島に住むという条件だけは、だれも持っていないのだ。そこには社会もない、法律もない、因習もない。輿論もない。日光の輝く青空の下、どこで何をしようと他人の眼を感じる必要がない。道德という言葉が無意味なように、そこでは破廉恥という言葉も存在しない。あるものはただ自由だけである。この一点だけで、彼女は来るに価しないか？」

「いや、彼女は来るべきだ。あれだけのことを書いた以上、どこかで代償を払わねばならない。ひとりの男が家売り、都会を棄ててまで島に渡るのはそのためだと誇張してもいいだろう。それは彼女に好奇心を起させるだろう。もしそれでも応じなければ、彼女の叫びは本物でないということになるから、不安とおそれを抱きながら無下に拒むことは出来ないだろう。なんでもいい、来ればこっちのものだ……」

あらゆる尤もらしい口実が渦巻き、押しよせ、ためらう心を鞭打った。弱味につけこむ悪党のような後ろめたさを感じながら、四十の坂を越して速見健次郎は、うまれてはじめて女を誘惑する手紙をかきはじめた。

(以下次号)



心のわたつみ

私は思いきってこの手記を書こうと決心致しました。夫に捨てられてから、私は今年五歳になる紀美子連れて、惨めなドン底の生活に転落しました。私は貧しさや、生活の苦しみにかけて歎くのはありません。しかし、私たち母子をこの悲惨な境涯に突き落していささかの反省もない非人間的な前夫、晃の、憎んでも飽き足りないふてぶてしさに、抑え切れない悲憤の情がこみ上げてまいるのです。

今こうしてペンを執りながらも、はらはらと斑らな涙の染が紙の上の文字をにじませるのでございます。振り返って見れば晃との五年間の夫婦生活は、暗い底知れぬ洞穴でも覗き見るような、思い

本誌創刊七周年記念 懸賞入選作品〔一席〕

被虐の果て

——被虐願望の女の手記——

細川美也子

出してもぞつとする妖気に満ちたものでした。

残忍と言いましようか、冷酷と申しましようか、暴虐の限りをつくして晃は私の肉体を責め苛んだばかりか、私の心にも一生忘れることのできない傷痕を残しました。そのために幾度びか私は死の寸前の危地にまで追い込まれ、或る時は、自ら自分の手で自分の命を縮めようと計ったこともございました。本当に毎日毎日の生活が地獄の谷底のように、戦慄と恐怖に明け暮れたのでございます。その上、晃は情婦をつくり、その情婦と共謀で散々私を自分たちの嗜虐趣味の犠牲にして弄んだ揚句、あらゆる罠を仕掛けて追い出してしまったのです。

被虐の果にうけた私の恥辱と苦悶は、忘れることのできない怨みでございます。晃に対する復讐の心が、めらめらと心の中で青白い

焰を立てて燃え立ちました。去年の十二月の末に晃から悪意で遺棄され離別して以来、夢寝にも忘れることの出来ない私の呪いは、晃を生かしておけないという殺気をさえ咬るのでした。

私は、たとえ忌むらしい殺人犯の汚名を着ようとも、復讐を仕遂げずに居れない衝動に駆られました。

思えば、それは私にとっても、又、たった一人のいとし児紀美子の将来にとっても、希望と幸福の夢を破壊する重大な人生の危機でした。もし私があの時、奇譚クラブ三月号を手になかったら、恐らく未練のあまり前夫を殺した女という新聞記事となって、世の人の物笑いになったことでしょう。

今こうして私は手記を書いております。いつしか心の友に訴えるような慰めが傷ついた心を温かく慰めてくれるのです。私の心からは、霧の齊れるように復讐の呪いが——と消されてゆきました。

そして——別の新たな涙が、じいんと滲み出てまいったのでございます。こうして憎しみと呪いと復讐に塗り固められた私の心の片隅に、あの被虐の日の郷愁が秘められてあったと言え、それを誰が理解してくれるでしょうか。

あゝ、私の心には、人知れずいつの間にか、谷間の苔に水の浸るように被虐を恋慕う心が広がりを見せていたのでしょうか。

悪魔のような晃の嗜虐が、さながら深海の岩塩が潮の肌にじわりじわりと溶け込むような微妙さで、私を被虐を願う女に染め上げていったのに違いないのです。でも、この悲憤と懐旧の矛盾した心に独り悩み抜いた私の哀れさを読者の皆様ならば、きっと深い同情で肯いて下さると思うのです。

ヒ ロ ボ ン 禍

晃の、あの嗜虐癖は生れつきの性格であつたのでしょうか、それとも彼が嗜癖症的に用いたヒロボンの中毒のためなのでしょう。私にははっきりと分らないのでございますが、晃と私の恋愛時代から、結婚後二年まで、その間三年半ほどの間は、ちっともそれらしい怪しい気配は見かけませんでした。

晃は性格的には、劣等感が身にしみ込んだような、消極的な男でした。それが紀美子の生れた頃から、俄かに粗暴になったのですから、或はヒロボンの中毒のためではなかったろうかとも思われます。晃がヒロボンを注射したのは、血腥い戦場の空気に圧迫されて、神経症に罹った時かららしいのでございます。晃は復員後製薬会社を経営していましたが、多少は薬のことに関する智識も、人様よりは詳しかったようです。私が折をみてはヒロボンの中毒になったら恐ろしいからやめて下さいと諫めますと、晃は私の言葉を封じるためにくどくどとヒロボン無害説を、彼らしい一方的な考え方で私に押しつけるのでした。

晃に言わせますと——ヒロボンやゼドリンは日本の薬学者長井長義という人が今から七十年前に漢方薬の麻黄の成分であるエフェドリンの研究中に合成に成功したもので、学界ではそう重用視されなかったのが、アメリカや、ドイツで覚醒剤として臨床上に応用するようになって、はじめて日本でもプロパミン、メチールプロパミンとして製剤されるようになったさうでして、ヒロボンは中枢神経を興奮させるに役立ち、平たく言えばコーヒを飲むようなもので医学的には間脳に作用するのだらうと推測されているが、どのよう

に薬理作用があるのか、まだはっきりとしないそうです。薬としては副作用も殆どなく、麻薬に見るような禁断症状のないところからみて、有害であるという理論的根拠がないと申すのでございます。

世界中でなぜ日本人だけがヒロポンをこのように用いるのかと言うと、それには深い理由があるのだと晃は、変に興奮した口調で申すのです。つまり、原因は洋娼にあるのだそうで、肉食人種のあちらの若い兵隊相手では、ヒロポンを注射して無理に体を酷使しないと商売にならないと言うことが、そもそもヒロポン流行のさきがけをつくったので、その後の世の中の不景気や、生活の乱れ、貧困などが、人間をやけにしているために、みんな瞬間的な神経の興奮を求めてヒロポン注射をやるのだと、かように申しまして、それだから何もヒロポンが犯罪や、狂人や、タイハイの原因じゃないと怒ったように否定いたします。

「それでは、あなたのように事業家として、指導的地位にある方が何もヒロポンなんか注射なさらくとも……」と私が言いますと、晃は余計に苛立って

「僕は親父に強要されて、自分の性格に合わない雰囲気の中にいるのだ、この心の苦しみがお前には解らないのか、僕の神経はそのために疲労しきっているんだ」と言って、少しもヒロポンをやめようといったしません。むしろ益々頻りに数多くアンプルを空にしてゆくのでした。

晃が私に押しつけるヒロポン無害説は、もとより見えすいた晃の自分を庇い立てるための暴論だと私にも分っているのですが、晃が「心の苦しみを神経が疲労するのだ」という言い訳には、晃の生活の無理を知っているだけに、ほろりとした感傷に誘われてし

まうのでございました。

晃は、先程も申し上げましたように劣等感が強いのでございますがこれは晃の環境がつくりあげた特異な性格でした。晃は今時めく業界屈指の雄と言われるT製薬会社々長田崎吉蔵氏を父にもって世間的には何不自由のない新興ブルジョワの御曹子なのですが、その実は、実利一逼倒の吉蔵氏とは性格が合わず、生来が線の繊細な芸術家肌の晃は、ことごとくに父親と氷炭相容れないものがありました。日頃、晃はよく父親や弟のことについて、

「親父は僕の人間を認めようとしな。親父にとっては子供もまた自分の利益を産み出す機械のようになんか思っていないのだ。僕が絵を描いて生活を立てたいと望んでも一笑にふしてしま。そして無理矢理にこんな製薬工場の工場長に据えてしまったのだ。僕が実業家的な才能には恵れていないため、ヘマをやると、お前は僕の後継者になれぬ、と言つて人前も憚らずとなりつけるんだ。弟の吉春の奴は、口癖のように兄貴なんか貧乏絵描が性に合っているんだ、兄貴にはこけた第一本立てる力もないのだと言つて嘲笑しやがる。」

と言つて晃が鬱憤を吐き出すことがありました。そんなことから、自分を劣等視する卑屈さが生れたのだらうと思ひますと、私は晃が哀れに思えてきて、ひりひりとするような心の疼きを感じるのでした。

これが私の晃に抱く恋の本体であつたのでしようが、晃のヒロポンも、それを嗜んだ理由がそうであるだけに、ついこれ以上に責め立てる気になれなかつたのでございます。

だが、災はそこに悪魔のように潜んでいたのでございます。

毒牙

紀美子が生まれましてから、晃が急に私から遠のいたように感じました。晃が私の前では白々しい態度を見せはじめたのです。それまでは柔和だった晃が、時々、癇癪を起しては私を殴りつけたりするようになりました。

妙なことに、夫婦の肉体的な絆も、ぶつんと切れたままで、晃は情れない、冷さで愛情を忘れたような顔付きでおりました。そっけない晃を見ると、ふと私は自分の体に不安を持つようになったのです。

私は思いきって、お産のときにお世話になった和歌山の老婦人科医を訪れて、ありのままを告げて診察を受けました。親切な老医はていねいに私の臍を診察して

「奥さん、大丈夫です。どこにも欠点がないどころか、完全無欠です。あなたは自信を失っているからいけないのです、自信をもって御主人にサービスするんですな」

と、冗談のように笑いながらも、諄々と教示して下さいましたので、そのお話は遠廻しすぎて経験の浅い私には、肝心の自信をどう使いこなせばよいのか、ちよつと雲を掴むような具合で困惑するばかりでした。

浅間しいことに、私はこの時、自分の能力に疑をはさみました。女としての魅力が欠けているのではないだろうかと思ってみたり、特別な、たとえばさる好色文学の大家が書いていたような『閨房のカーマ・ストラ的秘戯』のようなテクニクに欠けているのではないだろうか、と思ってみたりしました。その癖そんな秘戯がどんな

ものかはてんで知らない私なのでした。

いつの間にか季節は、春となっていましたが、私は懶いばかりで少しも心が浮き立ちませんでした。

ある夜のことです。廊下を隔てた晃の部屋から、私を呼ぶ声が聞えました。私はその声に思わずハツとして、胸が躍るように感じました。

深更に、晃が私を寢室に呼ぶようなことはこのところ絶えてなかったことでも、牀中に妖しい動悸がうちました。別に意識的ではなかったのですが、寝巻のままの、少し乱れた姿で晃の寢室に行きますと、晃が床の上に座っていて、こちらを熱っぽい眸で凝視しながら貰をくゆらしておりました。

「御用なの……」と私がにじり寄りますと、晃がほんのすこし微笑して

「急に話したくなってね、……外でもないのだが、僕の病氣のことだが」と言いました。

「え、病氣ですって？」私は訝って問い返しますと、

「早く話しておこうと思ったのだが、どうも戦地でやった神経衰弱が再発したらしいんでね、それですっかりインポテンスになったらしいのだ。君もさぞかし心痛していたことと思うんだがこれも病氣の故だね」

と、低い声で、淡々と話すのでしたが、聞いている私は、何かこう、私の心の奥にスポットライトでもあてられたように、気恥しくなって面が火照るのでした。

「実は、この僕のインポテンスを何とか治したいと思ってお前に何もかも打ち明けるんだが、この病氣には強烈な刺激を与えるのがも

「……」
 つとも合理的な療法なんだ。そこでお前に手伝ってもらいたいのだ
 が……」

そう言われて私は、まったく心で狼狽してしまいました。強烈な
 刺戟って何を意味するんだか、分らないままに不安のようでもあり
 心の底を掻き立てるようでもありました。



「具体的に言うと、たとえばお前の身体を、縛ってみたり、鞭で叩
 いてみたり、そんな一見暴力的な幻像を実演することなんだが、む
 ろん、本気でやるのじゃない、実はね、今日まで僕はそのことを空
 想していたのだが、たしかに心優しいもので、ある程度の興奮は感
 じるのだが、やはり実演でないと、僕の病気は治せないと思うんだ。

どうだろう、美也子、僕の言う通りになっ
 てくれないかね、それとも、お前は僕を異
 常性慾だと軽蔑する？」

私は、晃の話にすっかり上気してしまっ
 て変に唾が絡むように言葉をかすらせなが
 ら

「私はあなたの妻ですもの、そんなことお
 聞きにならなくとも……」と、やっと答え
 ました。晃は私の返事に、ちょっと硬ばっ
 た表情を解いて

「今夜から始めるよ」と、にたりと笑いま
 した。晃は強いてそんな仕草をする風に、
 私の軽い抵抗を押しきって、寝巻きを剥ぎ
 とりました。

そして私を抱き寄せると耳元で

「僕は以前、物の本で読んだのだが、徳川
 の初期に力足と言う按摩術があって、その
 頃の若い女が逞しい男の足で踏みつけられ
 て心地よさそうに眼を細めている図は想像
 しただけでも、ゾクツとするよ、それを実

演してみようよ」

と言って、私の両手と両足を解けないように軽く縛ると、俯伏に寝かせました。どうなることかと、私は手術台にのせられた患者のように不安な胸騒ぎを感じておりましたが、ぐい、ぐいと背中に晃の踵の圧迫を感じて、足で按摩するなんて、およそ野蛮なことだけれども、直達的で快いものだと思ってみたりしましたが、それはほんの束の間で、痛いような、押し潰されそうな重量感に、呼吸が止るほど苦しくなってきました。

「うーん」と私は呻き声をあげて、気が遠くなりそうでした。晃はそれでもまだ力足の責めをやめようとはいたしませんでした。今度は俯向きに私のからだを変えると、ぐいぐいとふとももを、にじるように踏みつけました。筋肉がばらばらになって骨が砕けるのではないだろうかと思うほどの痛さに



「もうかんにんして」私が逃れようと身をものがききますと、晃は獣のような笑い方で

「まだまだよ、まだまだよ」そう言いながら、粘ッこく執拗に責め苛むのでした。この日が晃の責めに執着しはじめた最初の日だったので

狂態乱舞

愚にも、そうです、ほんとうに愚かしくも私は晃の言葉をうのみに信じてしまっていたのです。神経衰弱の再発、インポテンス、ヒロポンそれが一連して晃を病気にしているのだと思い込んで、私はどんなにそれが恥しいことであり、苦しいことであっても耐え忍んで、一日も早く晃を元の健康体にしようと思っていたのでございます。

あの力足の責めのことがあったから数日経って、陽炎の立つ、のどかな日曜の午さがりでした。朝から友人のところへ行くと言って出かけた晃が戻ってきました、出迎えた私の手をとって私の寝室にあてている六帖の間に入ると

「さあ、裸になるんだ」と命じました。

「裸になれて、この真っ昼間に」

私は、ちよっとためらいました。昼の光日はきらめき過ぎて夜の構図のように甘く匂う情緒的な雰囲気がございます。

だが晃は裸になれと強要して怒るように命じました。私をもじもじしている、晃は矢庭に乱暴な仕草で普段着を着たまの私を、この間の時よりも強く手足を縛りました。

「どうするの？」と不安な色を浮べて問う私に



「今日は松葉責めと擦り責めだ」と申します。

「誰か来たら困るじゃないの」と詰りますと

「表戸はちゃんと錠をおろしてきたから、誰も入って来ないよ、存分に愉しめるさ」にやにやと気味悪く笑いながら、庭において黒松の枝から松葉を截りとしてきて、縛られている私の姿態を眺めながらピースを取り出して一服つけると、また、にんまりと笑うのです。

「松葉でどうするの、この間のようなひどいことをしないでね、お願いだから」と哀願する私に

「あれでも僕にとってはまだ不足なんだよ」と無情に答えて、蔑を

揉み消すと、私の着物の裾をゆっくり上げました。

チクチクチクと、皮膚の薄い、肉の柔らかな脛から内股を松葉の束のトンがった葉先で刺しはじめました。ピリピリとする末梢の、知覚神経の痛みは脳天をキークーと突き刺すように感じます。晃は、なるべく葉先の痛みがこたえるように松葉を立てて刺してゆきました。内股から脇腹へーそして乳房から乳頭へと、私の肌が血を滲ませるまで刺し続けました。

「痛い、痛い」呻きながら、私は眼をすえて肌を松葉の先で傷つけている晃が、なにか怪奇小説に出てくる妖氣じみた刺青師のように思えて、ぞつといたしました。

やがて松葉責めに飽いたのでしょうか、ぼいと松葉をすてると、今度は私の足の裏を両手で擦りはじめました。私ははッとしてあわてて両足をすくめると、思わず叫び声を上げました。

「駄目よ、駄目よ、擦っちゃ駄目」

私は、人間は擦りつづけられると心臓麻痺で死ぬものだということを、いつか本で読んだことがありました。

晃は、そんな私の必死の声にはかまわず、足の拇指を握って、私があばれると、拇指が折れるばかりにねじ曲げて、動けぬようにしてしまふのです。つぎには腋の下に手を差し込んできました。

「死ぬ、死ぬ、やめてーやめて」

私はもがきながら、身を燃って防ごうとしましたが、晃は指の先を腋の下から離さず擦りつづけました。

イヒヒ、イヒヒ、と泣いているのか、笑っているのか、悶えているのかわけのわからない叫びがつき上げてまいります。私はもう何もかも見えなくなってしまうました、ただもう苦しくて、心臓がき

ゆっーと締められたように窒息しました。ああ、何という残忍なことでしよう、こんな苦しみは、後にも先にも私の経験にはございません。

それから晃の狂態がだんだんひどくなりました。ある時は裸の肌を竹鞭をうけて倒れたこともあります、後手に縛られたまゝ、お臍のまわりや脇腹を噛みきられるように噛まれたこともあります。捻り責めだと言って爪あとを軀中につけられたこともございます、地獄の責苦といいますが、これが煉獄の火に烙れる現実の責苦と言うのでございましょう。

こんな責苦に耐えている私は、ただ一途に晃を思慕する熱情に駆られていたのです。そうであればこそ、私はよく忍べたのでございます。蒼白く頬骨のところがった晃の憑かれたような顔を見るだけで、責められていながら、哀れさが先に立って、思わず知らず泣けてくる私でした。

私にとって晃は人生のただ一つの太陽だったのです。

理 不 尽

信じる者に裏切られることが、どの位い悲痛なことであるかを私は間もなくいやという程味わされたのでございます。あれほどの晃の暴虐に耐えてきたこの心が無残にも晃の放らつと兇暴性のために蹴られたのでございます。晃には、深く契つた情婦があつたのです。それを知ったときの、私の悲歎と絶望と、こみあげてくる憤りは、嫉妬を交えて我身を灼いてしまうのではないかと思ひました。性的不能と偽って私を遠ざけ、あまつさえ病氣だからと言って私に嗜虐を恣まました晃——その実は、情婦をもって淫逸な生活を

享樂していた晃——それが私の世界で唯一人信賴している心の太陽であつたとは、なんということでしょう。

私は晃の情婦を直接、自分の眼で見たのです。それは高く澄み切つた秋空に赤蜻蛉が飛び交っているある日のことです。私は、紀美子が生れたとき乳汁が不足しましたので、伝を求めて大和の西大寺にある農家の主婦に預けてありました。

その日、私は昼頃に和歌山市のぶらくり町の商店街で紀美子に送るものを買ひとのえて築地の劇場前まできたときに、人混みの中を歩いてくる晃を見たのです。その時、晃は三十近い年増女と一緒にいたのです。幸い、晃は私のいることに気づかなかつたようでしたので、そつと二人のあとをつけますと、横丁の「酔月」と言う小料理屋に入りました。

その時は、私はまだ晃が情婦をもっていることも知りませんし、その女が情婦だとは思わなかつたのですから、夜になって、晃が帰ってきた時は、軽いひやかしかつ気分です。

「昼間から会社をサボッてぶらくり町なんかをアベックで歩いていると社員のみせしめがつきませんよ」

と笑いながら申しますと、えッと言つた顔付きで私を見返して「お前見たのか？」と言いますから

「そうよ、たしかに見せていただきましたわ、大変仲よさそうに、酔月という小料理へ入ってゆくところまで」私は努めて、平静を粧い軽快に冗談めいて言いました。このとき晃はふいと苦りきつて「あれは近子と言って酔月の女将なのだが、一年ばかり前から」私が予期しなかつた告白を、しかも平気なままで、私に聞かせたのです。私は、しばらく呆然としていましたが、思わず口惜し涙が

先に立って泣きじゃくりました。

いくら責め立ててみしても、こうなると男の我儘が、女の手におえるものでないことを思い知らされるだけでした。

いやそれだけではありません。晃は

「近子も酔月の方がうまく行かないので、近く店を閉めるというのだ、そうなると忽ち家がなくては困るんだが、僕は、この家も広すぎてお前と二人きりじゃ淋しいし、不用心でもあるんで、近子も一緒に住んだらどうだろうかと思うのだがね」

何という恥知らずなことを言うものでしょう。私はあまりのことにカッとなり血が頭の中を荒々しく駆け廻って、くらくらといたしました。

もう晃は、完全に私を無視しているのです。私の人格を、妻としての誇りを、愛情を、いっさいがっさい、にべもなく破棄してしまつたのです。私はかろうじて

「三人で暮すなんて……そんな畜生のような真似はできません。何といういやらしい、ひどいことをお考えになるのです。もしあなたがそんなことを無理になさるなら、私は死をもってお断りします」と申しました。死を以て……と私はじつと自分の言葉を噛みしめながら、これだけは一步も譲れない屈辱だと決心したのでございます。晃は

「ふふん、死をもって断る。強いことを言ったな、まあ覚悟しているかよい、僕はきつとお前を屈服させてやる」と、放言して嘲けるように笑って乱暴に盃を手にしました。

拷問

時間と言うものは不思議なものでございます。あれほど悲しい怒

りに身を慄せた私が、——ただ一度の晃の過失を宥せずしてこの夫婦生活を破綻させることは、あまりにも狭量ではないだろうか。——という風に、自ら慰め、自ら理解の心を宏めようとしていたのでした。私達の夫婦生活を守るために、紀美子の幸福を守るために、妻として母として、私はここを耐え忍んで通り越さなければならぬと思ひ至つたのでした。

秋も終りに近づいて、生き帰った虫が庭の草むらで、細い哀れな声で鳴いていました。そんな日の夜、月が淡くぼつとした薄明りを漂せておりました。傷心に泣きたいようなこの頃の私は、ひとり庭先に出て月の光りに濡れたまゝ、もの想いに沈んでいたのです。ふと背後に足音がして晃がそこに立っていました。晃は

「美也子、この間の近子の話、承知だろうな」と言いました。私は振り返って、はっきりと

「いやよ」と答えました。すると、晃がはだしのまま庭に下りてきて、私を抱えるようにすると、ずるずると台所へ引っ張って行きました。

「何をなさるんです！」

私は声を励まして咎めましたが、晃は無言で私の帯を解こうといひました。私は晃に情婦近子があると知らされてからは、晃の気儘な玩具になることは、もう私の心が許しませんでした。

私はそこで、はじめてありつたけの力を振り絞って抗つたのでございます。さすがに晃も手古摺つたようでしたが、それでもやはり男の力には勝てません。

私はズロース一枚の裸にされると、台所の柱に、ちようと柱に抱きついた恰好で縛りつけられたのでございます。

「どうしようとおっしやるのです。止して下さい、あなたは……畜生です、獣です、私をこんな目にばかり合わせて……」

泣きながら私は晁を罵りましたが、晁はふふんと鼻の先で笑って「お前がうんと承知する迄、拷問にかけてやるんだ」と睨みつけながら言い返しました。

「拷問にかけられるような悪いことを、いつ私がいたしましたか……口惜しい」

私は声をあげて泣きました。だが、晁は私の言葉に耳も藉さずに、私の両手を柱にくくりつけ、左足をも柱に結えてしまいました。私の自由なのは、わずかに右足だけだったのです。その右足の足首をぐツと手に持って吊り上げると、ヒロポンのために黒ずんだ病的な顔を変に歪めて、そげ落ちた頬に薄気味悪い笑いを浮かべながら

「昔、西洋じや股裂きの刑と言うのがあってね、裸の女囚の両足を別々に荒れ馬にくくりつけて、刑吏が馬の尻を叩くと馬がさッと思ひ思いの方へ駆け出す、女囚の股が引き裂かれて無残な死をとげる……いや、僕はお前を股裂きにしようとは思わない。どこまでも拷問だからな」

そう言いつつ、じりじりと私の右足を吊上げていくのです。ふとももの附根の

関節が、ごくんと鳴りました。

骨の外れるような痛みをずきんと感じました。肉ばなれのするとの燃じるような痛みが、ぐいぐいと吊上げられるたびに抉ってくのでした。

「痛いッ、やめて、やめて」

私は吊上げられる苦痛に、もう耐えられなくなって思わず叫びました。すると晁はちよっと力を緩めて



Kota.

「じゃ、うんと言うか」

憎々しげに意地悪く追求するのでした。私はその時、近子の厚化粧をした顔を思いうかべました。

「死んでもいやです」と言いきったのです。

「何ッ」と、眼を怒らした晃は、またじわじわと右足を吊上げました。あゝ、身を投げて、いっきに死んでしまいたい——と私は夫の心を悲しみました

「殺して！ 殺して！」私は大声で喚いたのでございます。がらんとした旧家のすすけた天井に、私の叫び声がうつろに響いて、あたりは死んだように静まり返っていました。

魂の屍

拷問は手をかえ品をかえ、私の肉体を苛みました、それでも私は歯を食いしばって、それに耐えました。最後のただ一つの私の望みは、いつかはきつと晃が人間性を取り戻してくれるにちがいないという願いを——というよりはひたむきな信仰に近いものを持って居たからでございます。秋もゆき、冬も去り、やがて又、流れてくる陽ざしの影がしつとりと心を浮き立たせる春がめぐってまいりました。

悪夢のような日が過ぎていきましたが、晃のヒロポン中毒は眼に見えて増悪してきました。怒っていると思うと笑ったり、急にはしやいでいるかと思うと沈み込んだり、精神の錯乱しているさまが、まざまざと分るのでございました。

晃の心には、だんだん敗残の痛ましい影がまつわっていききました。こうして荒廃した晃を見る私は自分の眼を掩いたくなるのでございました。

ある日の朝のことでした。晃がぶつぶつと何かしきりは機嫌悪く小言を並べていました、が、朝餉に向うと朝っぱらから、また近子のことでした、執念深く晃は近子を家に引き入れようとしているのでした。情婦の前で妻に暴虐を加えて愉しもうとする晃の妄想は、私に死を覚悟した反対で、辛うじてその実現が阻まれていたのでございました。

晃は私のいつもの通りの、反対に業を煮やした風に、いらいらとした暗い表情で、突然泣き声で喚き出しました。

「お前は、僕のただ一つの楽しみすら奪う考えだろう。お前は僕の妻でありながら……」

それから先の晃の言葉は、支離滅裂で理路のない滅茶苦茶の怒声でした。私は

「おや」と訝りました。背筋に水を浴びせられたような恐ろしい予感でした。これは今迄になかった晃の異常さでしたから、直ぐ精神に異常を来たしたのじやないかと思ったのでした。

その時はもう晃が、卓袱台を蹴倒して私に向って襲いかゝってきたのです。身をおわすいとまもありません。私は捻じ伏せられてさんざん殴りつけられました。

私もこの時ばかりは無我夢中の力がでたのでしよう。晃を突きつけて立ち上りました。晃の形相は醜くひきつったあの狂人特有の不気味さに変わっていました。ツツツと晃が走ったかと思うと、長押にかけてあった田崎家伝来の槍をとり外して、ぱつと槍先の鞘を払いました。

キラリと槍の穂先が光ってそれがぴたりと私の方に狙いつけられたのです。咄嗟に私は身を翻がえして転げるように庭先に下りて立

っていました。どこをどう掻いくぐって逃げたのか今は思い出せませんが、私は表街路に飛び出して道行く人に救いを求めたのです。

警察官が駆けつけてくれた時は、建具も襖もタタミも、槍先で突きさされて座敷中が玩具箱をひっくりかえしたような惨状でした。晃は、警官を見ると吠えるように怒号してなおも暴れましたが、やっと近所の人達にも手伝って貰って取押えられたのでございます。

警察では危険だから強制収容の必要があるとの見解でS脳病院に連絡し、私と警官が付き添って、檻車のような保護車で入院させたのでございます。晃は昂奮して独房に収容されてからも、鉄格子につかまって

「俺を精神病院に入れるなんて、人権侵害だぞ、俺は狂人じゃないんだ、正常人だ、こらヤブ医者、出てこい、あー俺は父や弟や女房の奸計におちた、あいつらは俺を葬ろうとしているんだ」

と号泣しながら喚きつづけました。医者の話では、原因がヒロボンなら数ヶ月の入院で全治するだろうとのことでした。精神の錯乱した晃のこうも変り果てた姿に、私は今までの被虐の苦しみを忘れて痛ましくなって泣けて泣けてしようがございませんでした。急報で大阪から晃の父や弟が駆けつけてきましたが、

「晃が精神病者になった以上は禁治産者の法的な申請手續をとって工場も接收しなくちやいかん」

と吉蔵氏が来る早々に晃自身の病氣のことよりも、事業体のことを心配して話された時には私も心の底から、この父、この弟の肉身の情を疑いたくもなりました。私は、

「主人の病氣は決して真性の精神病ではないと信じます、これはヒロボンのための一時的のものだと思いますから、医者の言葉通り数

ヶ月経過を見てから、会社のことや晃の法的処置はそれからのことにして頂きとう存じます」

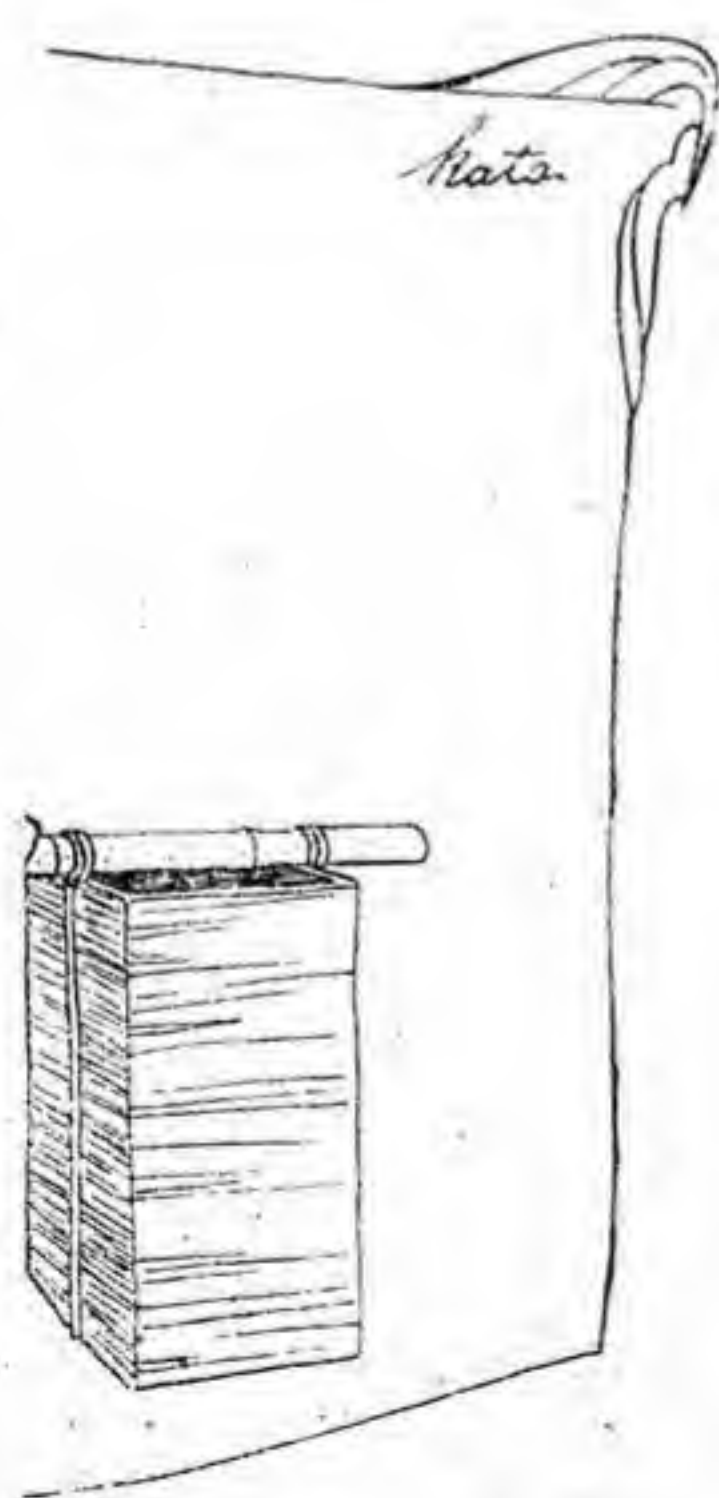
夫を思う一念で、私は強く反対しましたので、洩々ではありましたが、当分は工場の管理を弟の吉春が引き受けることで話がまとまりました。

痴夢は再び

「大した週末慰安だった。あすこは閑静で精神修養にはもってこいさ、だが、あの電気のショック療法はこたえたな」

と、皮肉な言葉を私に浴せて晃は秋のはじめに、肉づきもよく見違えるように健康そうになって退院してきました。やっぱりヒロボンだったのだ、と私は心の中で軽い安堵を覚えました。

このまま、ヒロボンをすっかりやめてくれたら、私の最後の望も生きるのではないかと思いました。光明らしい前途の輝きを見たような喜びが心のうちに溢れてきて、ひとりで愁眉をひらいていたのでございます。



しかし、このかすかな喜びも、はかない束の間の、練習びに過ぎませんでした。晃は退院して一週間目の夜に、突然近子を連れて家に戻ってまいったのです。

まさか、と思っていた私の心の油断を、晃は奇襲的に突いて出たのです。事実、私はあわてもしました。うろたえもいたしました。カッとお怒りして分別を失いそうにもなりました。晃は、私に妙な猫撫で声で

「近子を連れてきて、お前の気分を害したことと思うが、決して近子をこのまま家に入れようという話じやないのだ、僕も三角関係のわずらわしさに懲りたので、この際、三人が肚を打ち割って妥当な解決をしたい—と思うので、そんな意味だから気を取り直して三人で話そう」と申すのです。正直な私は、ふいとこの晃の甘言に乗ぜられてしまいました。そうだ、晃さえその気なら、この機会にむしろこちらから積極的に働きかける方がいいのじやないかと思ひ込みました。

奥の座敷で、待っている二人のところへ、私は心を引き締めながら入って行きました。この時、はじめて私は近子をゆっくり見たのですが、瘦過ぎの体の線から何やら妖艶な色香があたりにぼつとこぼれているように感じられました。

近子が水商売の女だからでしょう。それにヒステリックな、あらわに勝気な気性を、その眉宇にまざまざと見せているのが、印象的でした。私が座敷に落ちつくと、近子が

「これは奥様、はじめまして、わたし近子でございます」

と、澁みもなくしやしやとして挨拶しました。私は、ただ軽く、会釈だけ返しました。すると晃が横合いから、



「美也子、お前に訊きたいことがあるんだ、お前は僕の入院中に、親父が僕を禁治産者に申請すると言った時、賛成したそうだな」とだしぬけに、挑むように詰問しました。ハッと私は晃の言葉の背後にある、冷酷な残忍なものにぐわんと突き当たったように思いました。

「藪から棒に、あなただったら、何を仰有るんです。いつ私がそんな

ことに賛成しました、そんな襦衣をかけるなんて卑怯ですわ」私もつい弁解じみた物の言い方になりました。晃は、ぐいと膝を乗り出しますと、もう入院以前のあの険しい眼付きを見せて

「弁解したって駄目だゾ、じゃ僕を禁治産者にしようといった時のみんなの話の内容を具体的に言ってみろ」と畳みかけてきたのです。私ははたと困りました、それを言えば、それでなくてさえ父や弟のことを快からず思っている晃のことですから一層不仲になってしまふだろうと思うと、みだりに口外もできなかったのです。

「美也子、なぜ黙っている、お前は僕の親父を色仕掛けでたらし込んだそうだな、白状しろ」ぎろり眼を怒らせてにじり寄ってきました。この晃の暴言は何を意味しているのでしょうか。そのときになって、晃が企んでいた恐ろしい罠が何であるかに気付いたのでございます。私は思わず

「何と言いう言いがかりでしょう、やめて下さい、あなたは、近子さんの前で、私をどのような目に合わせようと言うんですの。あまりなことです、あまりなことです」

私はそのとき、女の意地を見せて、涙こそ見せませんでした、が、心の中では、血の涙をこぼしました。ふと見ると、傍の近子の眼が蛇のように冷く笑っていました。

あゝ、鬼畜

ああ、それはあさましいとか酷たらしいとかの表現を超えた比類のない惨虐図でした。家が宏壮なばかりにこの騒ぎも外には届かなかったのです。晃もそれを計算にいれてそれこそ鬼畜のような兇悪さで私を近子の前で雁字搦目に後手に縛りあげてしまいました。

「殺して下さい、殺して下さい」

今はもう私は心からそう叫びました。この恥辱にどうして身をも

ちこたえることができるでしょうか。情婦の眼の前で夫から折檻を受ける妻の姿。晃は、すでに前々からの計画だったのでしよう、血の氣を失った真ッ蒼な私の、必死の抵抗にもかかわらず

「白状するまで拷問にかけてやるんだ、いいか、これが僕を裏切つて姦通したお前への復讐だぞ」

そう言いながら、私を一本の太いゴマ竹の上に馬乗りにさせると竹の両端は物置きから持ち出してきた木箱の上で固定しました。竹の上に股がった私の両足は畳の上にほんの爪先きが届いている程度でした。そして、次には私の縛りあげた後手に別の麻縄をかけて鴨居にかけ、私の軀を宙ぶらんに吊上げたのです。用意が成ったのでしよう。晃は竹鞭をびゅーんと私の眼前で鳴らしながら

「美也子、白状すりや許してやる、縄も解いてやる、どうだ」

と言いました。私は自分の唇を、血が流れるほどきつと噛んで、ともすれば嗚咽しそうになるのをこらえておりましたが、

「白状なんか、することは何一つありません、殺しなさい、殺して下さい」と、ただそれだけを願って晃と近子の顔を怨みをこめて睨めつけました。その時まで黙って様子を眺めていた近子が、

「ねエ奥さんあたし困るわ、こんことになろうとは夢にも思わなかったもんで、ただ、お二人の話し合いの立合をしてってくれて御主人が仰有るもんだから出かけてきたのに、ほんとわたし困ってしまいましたわ、ね、奥さん、御主人はね、奥さんが精神病院に入院させたり、警察を呼んだりされたことを怒ってらしやるのよ。まあそれはいいとして……世間じゃね、そら、あなたがかってはR製薬の女事務員で、うまくやって社長をたらしめて社長夫人になった程の女だから、旦那さまを社会的に葬って、あとの財産を掠め取るんだらうって口の悪いのがありましたね。いいえ、それにもう、お義父うさんともちやんと紐を繋いでしまっているんだと、世間の口ってうるさ

いものよ。どう、下手な弁解をなさったり、頭ごなしに知らぬ存じませぬだけでは御主人も心がおさまるまいと思えますわ、このところはあっさりと、すみませんでしたと謝られた方が賢明よ。わたしだってお詫びの叶うことなら御一緒に口添えをしてもいいのよ、どう、奥さん」

近子のこの言葉は、みんな晃と二人で私を責めるための合作のトリックだということは、分りすぎるほど分りきったことでした。詫びれば詫びたで、第二のトリックが待ち構えていることでしよう。私はもう覚悟をきめました。そうするとリン然としたものが、私の心をゆすって俄に燃え上ってきたのです。

「あなたなんかと話したくありません」

キッパリ、私ははねつけるように申しました、近子が、ちよつとたじろいた風でしたが、すぐちつと舌打ちをして

「はい、はい、じや存分に責められなすつたらいいでしよう」と言ってそっぽを向きました。ビシリ、ビシリ、晃が竹鞭を私の肩先に食い込ませるように叩きつけました。痛くなんかあるものか、痛くなんかあるものか、と私は心で叫びました。泣くナ、泣くナと自分を叱りつけて唇を噛んでいました。

「白状しろ、白状しろ」

脂汗をいっばい額に滲せた晃が狂気のように竹鞭をふるいました。そのたびに私の上体がよろめきました。よろめくと鴨居に私の躰がぐいと吊下げられるのです。食い込むような痛みを肩先に感じました、こくん、こくんと肩の骨が軋みました。

でも、私は眼を血走らせながら、泣きはいたしませんでした。そのとき近子が、この凄惨なリンチの切迫した空気にたえられなくなつたのか

「あー」と叫びに近い呻きをあげて、晃にしがみついたのを見まし

た。が、それは近子の自責の叫びではなかったのです、それは血に狂った獣の叫びだったのです。私ははつと両眼を思わず閉じていました。

破局

被虐の果に敗れた私でございます。しよんぼりと失意の私は田崎の家を出ました。広野に漂う旅人のように、はかなく佗しい運命の私は西大寺に預けてある紀美子を連れに行きました。この世の中でたった一人の血を分けた肉身、紀美子だけは、紀美子だけは離すまいと、しっかり抱きしめて大阪に出てまいりました。一度はアドルムを飲んで、この世におさらばしようとした私、でも、これからの私は強く生きたいと思います。そう思いながらも誰一人知るべのない私、人生の再出発の門出でありながら、余りの無力な自分の姿に涙するのでございます。

珍しい暖冬の一月でございます。私はこの手記をどうやら書き終りました。このみすばらしい長屋の低い天井の垂れ下るような二階で、徹夜してしまいました。紀美子は母親の心の苦しみを知らぬげに、すや／＼と傍で眠っております。可愛い、いとし児の寝顔を眺めながら、ほつと救われたような安堵に、軽い疲労がしびれるように襲ってまいります。

鬼畜のような晃から解放されて、忘れていた私の青春の血が春ともまごう暖い冬の夜に妖しく騒ぎ立てます。過ぎし日の苦しみの画面が、まるで記憶の底の窓のように、そしてその窓ガラスに、薄っすらと映るのは、私の被虐を願う心の影でございます。

ああ、この心の影を抱いて、私はいつまで孤独な愛を失った生活をつづけてゆくことございましょうか。

(おわり)



【読者通信】

(投稿歓迎)

九月号の奇ク、吾妻氏の巻頭の一文は大変興味深く拝見致しました。共感する点の少くなかった事を申し上げ、筆者及び御誌に厚く感謝の意を表する次第です。責めのアイデアについて少し書かせて頂きます。私は絵が不得手でありまですし、又それはどうもすぐれたアイデアではないと思いますので、唯先生方の御参考にでもなればと悪筆を走らせます。何卒御笑読下さい。私が責めと申しますか、サジズムに興味を持つ様になった一つの原因に、或る絵がございます。それは聖セバスチャンの死——殉教を描いたものです。同一題材の絵を二つ知りましたが、私はギドレニ作の——セバスチャンが宙吊りにされ腹部に矢のさゝつた。全

身でないものゝ方が強く印象に残っております。そこで一つ「矢を使ったアブ・フォト」は如何がでしようか？と申し上げたいのです。奇クには切腹を扱ったもの——これはマゾと申せましょうが——は屢々出ておりますが、矢を使ったのは私未だ拝見しておりません。吊された女性の腹部にブスツと突きささった一本の矢、ブルンと震える乳房、仲々魅力に富んだ図ではないでしょうか、如何にして矢がささったように見せるか、これがフォトをとる場合、一番の問題ですが、きつと何かうまい手があると存じます。この矢を使う一つのプレイを考えてみました。実際に弓に矢をつがえて射るのですが勿論、本当の矢は使うべくもありません。そこで先端がゴムで吸いつく様になったものを付けて、パチンと相手の体に接着する様にすめるのです。或る程度の距離でしたらうまくつくくのではないかと思えます。この突きささるゝ安全な矢を弓につがえ、大の字にしばらくた女性を的にしてひようと射るわけです。顔に怪我をしないためと。的にされた女性のどこにささるかかわらないという心理的な効果のために顔面は板か何かで保護

○本誌躍進七十号突破記念○

二十萬円懸賞原稿募集について

別項目次裏に記載の要領により広く皆さまの傑作を募ります。締切は九月三十日です。とつておきの秘稿、秘作をこの際、一挙に放出下さい。これはと思うものは必ず取り上げます。有耶無耶に潰すことは絶対ありません。奇ク編集部の実験的な取扱いに御信頼下さい。

隠蔽致します。的の中心はやはりオヘソが良いでしょう。これと似た様なもので手裏剣があります。が、これはよくありません。然しこれを強制ストリップに使ってはどうかでしょう。紙一重の差で肉を切らずに腰巻の紐を切る。股のつけ根一杯にささった手裏剣が僅かに局部の露出を救っているなどと云うのは如何でしょうか。人間ハソモツク、これは無理でしょうね上に人が乗ったらとてもたまらないのではなないかと思ひますが、次にアブ・フォトに荒唐無稽なトリックを加えては如何が？近頃のアメリカ映画によくあるやつで、化物の様なカニの巨大なハサミに

はさまれている裸女、クモの巣にひっかゝって、生血を吸われるのを待つばかりの乙女。又、蛇を纏にみたてた縛りも考えられましよう。(東京H・I生)

山口様の「美少年の秘密」を読んで、全く私自身の心の秘密を探られた様な氣持でした。私が禪に異常な興味を持ち出したのは中学校に入った頃からでした。今二十五才になります私は、全く雪夫の様な感情にとりつかれて来ましたが、貴誌で、この小説を拝読して、自分と同じようなソドミアンもいるのだと安心致した次第です。私は特にキリリと締められた六尺禪中でも、真赤な木綿の禪を好みます美少年であれば尙のこと、そうで

★ 奇譚クラブ十一月特大号予告 ★ 定価140円

十一月号は再び増大号／又々、更に増頁／

◎アート頁口絵◎

飛田良二画「お仕置百態」
都築峰子画「腰巻地獄」

杉原虹児幻想画集「蟻」

十一月の責絵、伊藤晴雨

画「滝麗子画、新妻遊戯」

浴後姿 新人画家、責画

画集

新趣向まぞ・ふおと集

組写真「壊堤にて」辻村

隆、れい子縛り方教室、

「図解」畔亭数久画集「題

未定」戯文戯画題未定

畔亭数久、組写真「襲撃」

辻村隆、新着、外国あ

ぶ、ふおと、その他、写

真、絵等満載

◎新設カラーセクション

斬新なKKの試みに御期待

下さい

灸点三昧……長谷川 清

脱衣症患者……青葉 稔一

浣腸マニアの手記

花村恵美子

切腹と自害への希求

兵頭 庫一

三つのシークレット

角 皓子

性愛警句哲学……北谷英二

川柳に見るサジズム

女斗美考現……土俵四股平

夜光島(二)……吾妻 新

幽囚十カ月……春田 一郎

皓子抄(妹に)……中川房夫

愛は被虐とともに

真木不二夫

気遣にされた令嬢……飛田 良二

鉄窓の青春……三根 耕二

縛られた八人の女

岸本 青柳

集団心理に現れる

倒錯の考察……成瀬 亮

オセチ天国の夢想家

麻生 和夫

変の字夜ばなし

浮家 鷹三

新聞に現れた

切腹の種々相須藤 律夫

忘年会奇談……白金 紅次

マゾヒストの手帖

沼 正三

残虐なる女性達……森本愛造

性 液……伊藤 晴雨

学童相撲教練……山口 幸一

新織田信長伝……笠置 俊郎

なくとも非常に興奮してしまおうのです。中学の頃は自分でも晒の六尺禪をギョツと締めて通学し、水泳の時間には友人の禪の締め方を注意して見て、その禪が尻の割目にギョツと喰込んでいたもの程、非常な興味をそよられたものでした。六尺禪を締めた若い男の写真や絵を私は机の中にしまっていた。御誌の六月号の絞り首にされ

た小姓の禪美は傑作です。赤い絵具でその部分を着色してそれを眺める時、私はいゝ様のない興奮をおぼえるのです。どうぞ、今後とも禪一本の男性の絵や写真をお載せ下さる様お願いいたします。

(大山貞雄)

【読者通信の中、誌面の都合で本号に掲載出来なかったものは、次号誌上に発表いたします。】

【編集手帖】

本月号は堂々四十頁に亘る豪華な口

絵陣を先頭に、読みごたえのある枚数物を多数取揃えて増頁による本誌の真価を遺憾なく發揮して皆様の御期待にそい得た事と存じます。只、本号では読物を中心としました為、全国の皆様方から寄せられました浣腸通信、切腹通信、そどみや通信等々をはじめとする数々の通信類や、告白手記体験等を犠牲としなければならなかったのは返えず返えず残念でした。

次号は更に増頁の上、読者の皆さまの訴えや声を大幅に掲載、新趣向によるカラーセクションの活用等、文字通り文献研究雑誌の王座としての貫禄を見せたいものだと思います。

最近、細川美也子さんから便りがあり、愛見紀美子さんの病気の為費用がかゝり某基地のハウスへ働きに行かれる由「何の技能も資本もない女が出稼ぎに出ると申しただけで私の行先がわかって頂けるでしょう、云々」とあり、出発間際に出されたものらしく、エンピツの走り書きでしたが、折柄入選作の校正中とて暗然とさせられました。角皓子さんの遺稿は支障のない限り発表したいと思っておりますが、差当り兄さんの書かれた「皓子抄」を次号誌上へ予定しています。

挿絵画家並にモデル嬢の応募を多数頂き誌上で厚く御礼申し上げます。

(編集子)

最寄有名書店へ御予約下さい

本誌は毎月、確実な定日発行を続けておりますが、熱狂的なファンとの激増のため、各地で本誌の入手難を訴えられておりますので是非最寄りの有名書店へ御予約下さい

御願

雑誌や代理部の分譲品の購入或はその他の用件で直接発行所を御訪問下さる方がありますが理由の如何を問わず、右は固くお断り申し上げます。編集者に対する面会等は必ず事前に諒解の上、御訪問下さるようお願いいたします

モデル嬢募集

本誌の口絵写真に出演を希望される婦人

原稿募集

一、創作、告白を問わず生きた人間像を描いたものであれば、如何なる内容形式にても可、世の所謂、アブノーマルと称するものも右の主旨を体したものであれば大いに歓迎する。

一、必ず未発表の作品に限る

一、締切日は特に定めませんが優秀作は即刻発表掲載する

一、枚数は三十枚迄、但し内容によつては五十枚迄可。

一、投稿作品の返却の求めに

の方を募ります。年齢、身長、体重、略歴写真、等同封の上、編集部宛お申込み下さい。詳細につき御返事致します。

編集方針について

読者の皆様の御意向を最も迅速に誌面に反映させたい為、皆様の真面目な編集内容、編集方針一般に亘つての御意見を求めます。編集者は誌上或は直接の回答を行う外、今後の本誌の編集について活かしてゆきたいと思ひます。

挿絵画家を求む

雑誌の挿絵につき自信のある方を求む、作品、略歴、お送り下さい。

は応じられないが、努めて採否、批評等の連絡は出すようにする。

一、誌上の匿名は可、筆者の個人的秘密については厳守を誓う。

一、掲載篇は作品に応じ相当の謝礼を差し上げる外、優秀作者は本誌の寄稿家として優遇する。

一、特異な題材を以つて立つ新人の野心ある作品に期待するや切。

◎直接購読者募集◎

一月分一冊(送料共) 百四十円
三月分三冊(送料共) 四百二十円
半年分六冊(送料共) 八百四十円
一年分十二冊(送料共) 千六百八十円

毎月売切れにて御迷惑をかけておりますが、御買洩れのないよう是非直接購読を御申込下さる様お待ち致します。半年分御申込の方には責められる女の写真二枚一組一年分御申込の方には五枚一組サービスピス品として贈呈申し上げます。

昭和二十五年十月五日 第三種郵便物認可
昭和二十六年一月廿四日 日本国有鉄道特別
扱雑誌承認

奇譚クラブ

第八巻、第十号
毎月一回一日発行

十一月特大号 定価百四十円

昭和二十九年九月二十五日印刷
昭和二十九年十月一日発行

編集人 箕田 京二
印刷人 上田 庄之助
発行人 吉田 稔

大阪府堺局区内菅原通四ノ三〇

発行所 曙書房

振替口座大阪第三四九五六番

◎本誌所載の記事、挿絵、写真、其の他一切の無断上映、上演、転載、脚色等を固くお断り致します。